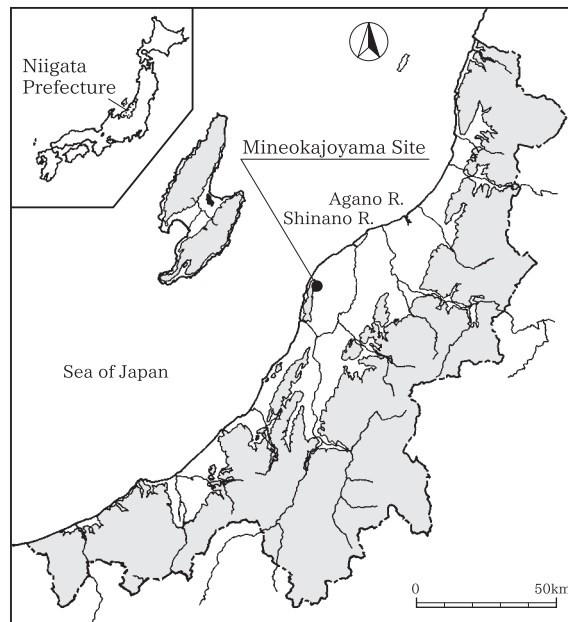


みね おか じょう やま  
峰岡城山遺跡 第2次調査

— 城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山遺跡第2次発掘調査報告書 —



2013

新潟市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は新潟市西蒲区峰岡 611 番地ほかに所在する峰岡城山遺跡第 2 次発掘調査報告書である。第 1 次調査(試掘調査)は平成 23 年 6 月 2 日から 7 月 8 日、第 2 次調査(本発掘調査)は平成 24 年 5 月 21 日から 8 月 20 日に行った。
- 2 調査は城山屋内体育施設造成工事に伴うもので、新潟市西蒲区地域課の依頼に基づき行った。
- 3 調査は新潟市教育委員会(以下、市教委という。)が調査主体となり、新潟市文化観光・スポーツ部新潟市文化財センター(以下、市文化財センターという。)が補助執行した。
- 4 平成 24 年度に本発掘調査・整理作業、平成 25 年度に報告書刊行を行った。
- 5 本書の作成・執筆・編集は立木宏明(市文化財センター)と伊比博和(株式会社シン技術コンサル)が行った。
- 6 執筆は第 I 章、第 II 章第 1・4 節、第 V 章第 1 節 B・2 節 B、第 VII 章第 2 節を立木が、第 II 章 2・3 節、IV 章、第 V 章第 1 節 A・2 節 A・C、第 VII 章第 1 節は伊比が、第 III 章・VII 章第 3 節は立木・伊比が行った。
- 7 第 VI 章自然科学分析については第 VI 章第 1～4 節を株式会社火山灰考古学研究所に分析・執筆を委託した。第 5 節は藁科哲男氏(有限会社遺物材料研究所)に執筆を含めて委託した。
- 8 本書で用いた写真は、遺跡写真は立木・伊比が撮影し、遺物写真は大久保厚(株式会社シン技術コンサル)が撮影した。
- 9 遺構図のトレースと遺物実測図の一部、各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版がデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 10 今回の調査成果について、『平成 24 年度新潟市遺跡発掘調査報告会』[立木 2013]に掲載されている。本報告書に齟齬がある場合は、本報告書をもって正とする。
- 11 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。

(所属・敬称略、五十音順)

阿部泰之 石川智紀 伊藤秀和 小熊博史 古澤妥史

## 凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西編約7度である。掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成年を示した。
- 3 本文中の注は各章の末尾に記した。引用参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 4 遺構番号は現場で付したものをを用いた。番号は遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。
- 5 遺構個別図版には出土遺物をドットで表示した。断面図もしくはエレベーション図での垂直分布のドット表示は投影法によるものである。
- 6 遺物番号は下層・上層遺跡ごと、種別ごとに1からの通し番号を付した。本文及び観察表・図版の番号は同一番号とした。遺構個別図版・挿図等において遺物図を掲載する場合は以下の略称を付した。土器：P 石器：S
- 7 土層の土色観察は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 1967）2005年度版を用いて、その記号を本書に掲載した。
- 8 本文中の挿図に用いた地形図、遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。
- 9 遺物の注記は「峰岡城山」とし、出土年度・出土地点等を付した。

# 目 次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡	5
第3節 歴史的環境	11
第4節 松郷屋焼	13
第Ⅲ章 調査の概要	15
第1節 試掘調査(第1次調査)	15
第2節 発掘調査(第2次調査)	15
A 調査方法	15
B 調査経過	17
C 調査体制	18
第3節 整理作業	19
A 整理方法	19
B 整理経過	19
第Ⅳ章 遺 跡	20
第1節 概 要	20
第2節 基本層序と旧地形の復元	23
A 基本層序	23
第3節 下層(縄文時代)の遺構	23
A 遺構の概要と記述	23
B 遺構各説	24
第4節 上層(古代・中世)の遺構	26
A 遺構の概要	26
B 遺構各説	27
第Ⅴ章 遺 物	29
第1節 下層(縄文時代)の遺物	29
A 縄文土器	29
B 石 器	40

第2節 上層（古代・中世）の遺物	45
A 土器	45
B 石製品	47
C 鍛冶関連遺物	47
第VI章 自然科学分析	48
第1節 植物珪酸体分析	48
A はじめに	48
B 試料	48
C 分析方法	48
D 分析結果	48
E 考察	49
第2節 花粉分析	50
A はじめに	50
B 試料	50
C 分析方法	50
D 結果	50
E 考察	51
第3節 樹種同定	51
A はじめに	51
B 試料	51
C 分析方法	52
D 結果	52
E 考察	52
第4節 放射性炭素（ <sup>14</sup> C）年代測定	52
A 測定試料と測定方法	52
B 測定結果	53
第5節 峰岡城山遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析	54
A はじめに	54
B 産地分析の方法	54
C 黒曜石原石の分析	56
D 結果と考察	60
第VII章 総括	63
第1節 縄文土器について	63
A 編年的位置づけ	63
B 土器胎土について	65
第2節 石器について	67
A 縄文時代草創期の石器	67
B 縄文時代中期の石器	69
第3節 峰岡城山遺跡の性格について	73

引用・参考文献	74
別表	78
報告書抄録・奥付	巻末

## 挿図目次

第 1 図 峰岡城山遺跡周辺の地形分類図 (1/150,000)	3	第 19 図 峰岡城山遺跡縄文土器分類図	31
第 2 図 峰岡城山遺跡周辺地形の変遷 (1/25,000)	4	第 20 図 峰岡城山遺跡縄文時代石器分類図	42
第 3 図 峰岡城山遺跡調査範囲と旧地形 (1/4,000)	4	第 21 図 峰岡城山遺跡古代・中世土器分類図	47
第 4 図 峰岡城山遺跡周辺の旧石器・縄文時代遺跡分布図 (1/100,000)	6	第 22 図 峰岡城山遺跡における植物珪酸体分析結果	49
第 5 図 峰岡城山遺跡周辺の古代遺跡分布図 (1/100,000)	8	第 23 図 峰岡城山遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)	49
第 6 図 峰岡城山遺跡周辺の中世遺跡分布図 (1/100,000)	10	第 24 図 峰岡城山遺跡の花粉・孢子	51
第 7 図 松郷屋焼窯跡位置図 (1/50,000)	13	第 25 図 峰岡城山遺跡の炭化材	52
第 8 図 松郷屋焼出土量分布図 (1/1,000)	13	第 26 図 日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラスカ州における第 16 表使用の石器原材伝播図	54
第 9 図 峰岡城山遺跡出土松郷屋焼	14	第 27 図 黒曜石原産地	56
第 10 図 峰岡城山遺跡 試掘・確認調査位置図	16	第 28 図 旧和田村 (現長和町) 付近地域原石採掘地点と和田峠諸群	59
第 11 図 峰岡城山遺跡本発掘調査の経緯	18	第 29 図 峰岡城山遺跡縄文時代中期前葉土器群編年試案	66
第 12 図 下層遺構・遺物分布状況 (1/800)	20	第 30 図 越後平野周辺の旧石器時代終末～縄文時代草創期の遺跡	67
第 13 図 上層遺構・遺物分布状況 (1/800)	20	第 31 図 新潟県下越地域周辺の縄文時代前期終末～中期前葉の石器組成関係遺跡	69
第 14 図 基本層序図 (1/80)	21	第 32 図 角田山麓における縄文時代中期前葉集落遺跡分布図	73
第 15 図 ピット分布状況図 (1/600)	24		
第 16 図 SX29 水流想定図 (1/80)	26		
第 17 図 焼土坑分類図 (1/60)	27		
第 18 図 谷地形と縄文土器分布状況 (1/800)	29		

## 表目次

第 1 表 峰岡城山遺跡周辺の旧石器・縄文時代遺跡一覧表	5	第 16 表 黒曜石原産地表	57
第 2 表 峰岡城山遺跡周辺の古代遺跡一覧表	7	第 17 表 中信高原地域原石採取地点における各原石群の出現頻度	59
第 3 表 峰岡城山遺跡周辺の中世遺跡一覧表	9	第 18 表 峰岡城山遺跡出土黒曜石製遺物の非破壊不定形塊状分析による化学組成結果	60
第 4 表 縄文時代中期の石器組成と石材組成表	44	第 19 表 峰岡城山遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果	60
第 5 表 縄文時代中期の地区別石器組成表	44	第 20 表 峰岡城山遺跡黒曜石製遺物の産地同定結果	61
第 6 表 縄文時代中期の地区別石材組成表	44	第 21 表 II 群土器口縁部文様別組成比率	63
第 7 表 縄文時代中期の層位別石器組成表	44	第 22 表 土器分類別谷単位出土個体数	65
第 8 表 縄文時代中期の層位別石材組成表	44	第 23 表 角田山麓周辺縄文時代中期前葉編年対比表	65
第 9 表 縄文時代中期の遺構別石器点数組成表	44	第 24 表 土器分類別胎土類別個体数	65
第 10 表 縄文時代中期の遺構別石器重量組成表	44	第 25 表 越後平野周辺の旧石器時代終末～縄文時代草創期の遺跡一覧	68
第 11 表 古代以降の石製品組成と石材組成表	47	第 26 表 新潟県下越地域周辺の縄文時代前期終末～中期前葉主要遺跡石器組成表	70
第 12 表 峰岡城山遺跡における植物珪酸体分析結果	49		
第 13 表 峰岡城山遺跡における花粉分析結果	50		
第 14 表 放射性炭素年代測定の試料と方法	53		
第 15 表 放射性炭素年代測定結果	53		

## 別表目次

別表 1 峰岡城山遺跡下層（縄文時代）遺構計測表…………… 78	別表 5 古代・中世土器観察表…………… 85
別表 2 縄文土器観察表…………… 78	別表 6 古代以降石製品観察表…………… 86
別表 3 縄文時代石器観察表…………… 84	別表 7 鍛冶関連遺物観察表…………… 86
別表 4 峰岡城山遺跡上層（古代・中世）遺構計測表…………… 85	

## 図版目次

図版 1 周辺の旧地形図（1/50,000）	図版 27 下層出土遺物実測図 8 縄文土器（8）谷 3 出土土器包含層、谷外出土土器包含層、土製品包含層
図版 2 峰岡城山遺跡と周辺の遺跡（1/10,000）	図版 28 下層出土遺物実測図 9 石器（1）谷 1 出土石器 SX29・包含層
図版 3 グリッド設定図①（1/4,000）	図版 29 下層出土遺物実測図 10 石器（2）谷 1 出土石器包含層
図版 4 グリッド設定図②（1/1,000）	図版 30 下層出土遺物実測図 11 石器（3）谷 1 出土石器包含層、谷 2 出土石器包含層
図版 5 下層（縄文時代）遺構全体図（1/300）	図版 31 下層出土遺物実測図 12 石器（4）谷 2 出土石器包含層
図版 6 下層小グリッド別縄文土器出土重量分布図（1/400）	図版 32 下層出土遺物実測図 13 石器（5）谷 2 出土石器包含層
図版 7 下層小グリッド別石器出土重量分布図（1/400）	図版 33 下層出土遺物実測図 14 石器（6）谷 2 出土石器包含層
図版 8 下層遺構平面分割図 1（1/150）	図版 34 下層出土遺物実測図 15 石器（7）谷 2 出土石器包含層
図版 9 下層遺構平面分割図 2（1/150）	図版 35 下層出土遺物実測図 16 石器（8）谷 2 出土石器包含層、谷 3 出土石器包含層
図版 10 下層遺構平面分割図 3（1/150）	図版 36 下層出土遺物実測図 17 石器（9）谷外出土石器包含層、出土地点不明石器
図版 11 下層遺構平面分割図 4（1/150）	図版 37 上層（古代以降）遺構全体図（1/300）
図版 12 下層遺構平面分割図 5（1/150）	図版 38 上層小グリッド別古代・中世土器出土重量分布図（1/400）
図版 13 下層遺構個別実測図 1 ピット（1/40）Pit4・5・8～11・14～16・18～21・23・24・28	図版 39 上層小グリッド別鍛冶関連遺物出土重量分布図（1/400）
図版 14 下層遺構個別実測図 2 性格不明遺構（1）（1/40）SX17	図版 40 上層遺構個別実測図 1 焼土坑（1）（1/40）SK1～3・6・7
図版 15 下層遺構個別実測図 3 性格不明遺構（2）（1/40）SX29	図版 41 上層遺構個別実測図 2 焼土坑（2）・土坑（1/40）SK12・13・22・25～27
図版 16 谷 1 縄文土器出土状況	図版 42 上層出土遺物実測図 1 古代土器包含層、中世土器包含層、土製品包含層
図版 17 谷 2 縄文土器出土状況	図版 43 上層出土遺物実測図 2 古代以降石製品 SK26・包含層
図版 18 谷 3 縄文土器出土状況	図版 44 上層出土遺物実測図 3 鍛冶関連遺物 SK2・包含層
図版 19 峰岡城山遺跡石器出土状況	
図版 20 下層出土遺物実測図 1 縄文土器（1）谷 1 出土土器 SX29・包含層、谷 2 出土土器包含層	
図版 21 下層出土遺物実測図 2 縄文土器（2）谷 2 出土土器包含層	
図版 22 下層出土遺物実測図 3 縄文土器（3）谷 2 出土土器包含層	
図版 23 下層出土遺物実測図 4 縄文土器（4）谷 2 出土土器包含層	
図版 24 下層出土遺物実測図 5 縄文土器（5）谷 2 出土土器包含層、谷 3 出土土器 SX17	
図版 25 下層出土遺物実測図 6 縄文土器（6）谷 3 出土土器包含層	
図版 26 下層出土遺物実測図 7 縄文土器（7）谷 3 出土土器包含層	

## 写真図版目次

- 写真図版 1 峰岡城山遺跡周辺空中写真  
写真図版 2 峰岡城山遺跡周辺遠景（角田山麓から）、  
峰岡城山遺跡全景空中写真 1  
写真図版 3 峰岡城山遺跡全景空中写真 2・3  
写真図版 4 谷 1・2・3 完掘全景空中写真  
写真図版 5 調査区西側完掘空中写真、  
谷 1・2・3 完掘全景空中写真  
写真図版 6 谷 1・2 斜面下部完掘全景、  
谷 1・2 斜面上部完掘全景  
写真図版 7 トレンチ層序 (1) 2～4 トレンチ  
写真図版 8 トレンチ層序 (2) 2・9 トレンチ  
写真図版 9 トレンチ層序 (3) 1・4～7・11 トレンチ  
写真図版 10 谷 2・3、谷外遺物出土状況  
写真図版 11 下層遺構 (1) Pit4・5・8・9  
写真図版 12 下層遺構 (2) Pit10・11・14・15  
写真図版 13 下層遺構 (3) Pit16・18～21  
写真図版 14 下層遺構 (4) Pit21・23・24・28、SX17  
写真図版 15 下層遺構 (5) SX17・29  
写真図版 16 峰岡城山遺跡縄文土器集合写真、  
縄文土器口縁部集合写真  
写真図版 17 峰岡城山遺跡出土石器集合写真①・②  
写真図版 18 縄文土器 (1) 谷 1 出土土器 SX29・包含層、  
谷 2 出土土器包含層  
写真図版 19 縄文土器 (2) 谷 2 出土土器包含層  
写真図版 20 縄文土器 (3) 谷 2 出土土器包含層  
写真図版 21 縄文土器 (4) 谷 2 出土土器包含層、  
谷 3 出土土器 SX17・包含層  
写真図版 22 縄文土器 (5) 谷 3 出土土器包含層  
写真図版 23 縄文土器 (6) 谷 3 出土土器包含層、  
谷外出土土器包含層、土製品包含層  
写真図版 24 石器 (1) 谷 1 出土石器 SX29・包含層  
写真図版 25 石器 (2) 谷 1 出土石器包含層、  
谷 2 出土石器包含層  
写真図版 26 石器 (3) 谷 2 出土石器包含層  
写真図版 27 石器 (4) 谷 2 出土石器包含層  
写真図版 28 石器 (5) 谷 2 出土石器包含層、  
谷 3 出土石器包含層、谷外出土石器包含層、  
出土位置不明石器包含層  
写真図版 29 谷裾部Ⅱ層遺物出土状況、  
上層遺構 (1) SK1～3・6  
写真図版 30 上層遺構 (2) SK6・7・12・13・22  
写真図版 31 上層遺構 (3) SK22・25～27  
写真図版 32 古代土器包含層、中世土器包含層、  
土製品包含層  
写真図版 33 古代以降石製品 SK26・包含層、  
鍛冶関連遺物 SK2・包含層



# 第 I 章 序 説

## 第 1 節 遺 跡 概 観

峰岡城山遺跡は、新潟市の西端に近い、新潟市西蒲区峰岡 611 番地ほかに所在する。平成 23 年度に試掘調査（第 1 次調査）を実施し（第 III 章第 1 節参照）、遺構・遺物が確認された。その後に縄文時代～平安時代の遺跡として新潟県埋蔵文化財包蔵地カードに登録（新潟市遺跡番号 No.749）した。試掘調査を行った時点では、昭和 54 年に行われた隣接する城山野球場建設に伴う土取り工事で東西に延びる丘陵の南側が削平されており、遺跡の南側への広がり是不明である。

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

峰岡城山遺跡の発見経緯となった「城山屋内体育館建設事業」は、平成 17 年の新潟市と旧巻町の合併に伴う合併建設計画として策定された。平成 20 年度に西蒲区政策企画課（現地域課）と歴史文化課が協議を行い、遺跡が確認された場合に事業計画の遅れが予想されるため、早めに試掘調査を行うよう依頼された。しかし、歴史文化課では、現時点では広葉樹と針葉樹が繁茂しており、試掘調査の前に伐採が必要であること、さらに計画図面が未完成の状況であることから、当年度の試掘調査を断念した。

平成 23 年度に西蒲区地域課で計画図面の作成が行われ、樹木の伐採も可能となったため、再度協議を行い当該年度中に試掘調査を実施することとした。それを受け、西蒲区地域課から試掘調査の依頼（平成 23 年 5 月 9 日付け新蒲地第 93 号）が出され、平成 23 年 6 月 2 日から 7 月 8 日まで試掘調査（着手届平成 23 年 6 月 2 日付け新歴 F 第 19 号の 2）を実施した（第 1 次調査）。試掘調査の結果（終了報告平成 23 年 9 月 9 日付け新歴 F 第 19 号の 3）、縄文時代土器・石器と平安時代の土師器・須恵器、鉄滓が出土し、性格不明遺構を 3 基検出した。遺物は北面する斜面地に出土するが、特に平坦面に集中しており、南側の平坦面を中心に遺構・遺物の広がりが確認された。発見した遺跡は、小字名を付して「城山遺跡」と命名するのが通例であるが、既に江南区に「城山遺跡」（新潟市遺跡番号 28）が存在するため大字と小字名を組み合わせ「峰岡城山遺跡」（新潟市遺跡番号 749）と命名した（新潟市遺跡の発見通知 平成 23 年 9 月 12 日付け新歴 F 第 19 号の 7）。

平成 23 年 9 月 26 日と平成 24 年 2 月 10 日の 2 回にわたり西蒲区地域課と歴史文化課で協議を行い、平成 24 年度に本発掘調査を行うことを決定した。

平成 24 年 3 月 14 日付け新蒲地第 769 号で、西蒲区地域課長より市歴史文化課長あてに埋蔵文化財包蔵地（遺跡）本発掘調査依頼書が提出された。それを受け、平成 24 年 5 月 21 日付け新歴 F 第 26 号で新潟県教育委員会教育長あてに文化財保護法第 99 条の規定による埋蔵文化財の通知を行い、5 月 21 日から 8 月 10 日までの予定で本発掘調査を実施することとなった（第 2 次調査）。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

新潟市は信濃川と阿賀野川の土砂により形成された越後平野にあり、西に角田・弥彦山塊、南に新津丘陵を控えている。市域の大半を占める越後平野は、長野県から平野を縦断して日本海に至る信濃川と、福島県から平野を南東方向へ走り日本海に至る阿賀野川などの大小の河川によって形成された沖積層と発達した砂丘列およびその内陸側に広がる低湿地帯が特徴である。

遺跡は、角田・弥彦山塊の東麓に所在する。角田山の東麓は越後平野に面し、海拔 30m 程度の小丘陵が南北 4km、東西 1.5km にわたる広がりを持つ。小丘陵間は角田山からの小河川により開析され、標高 5m 前後の低地を形成している。峰岡城山遺跡は小丘陵の南端域に近く、角田山から東西に延びる支丘陵上に位置し、最高標高は 21m である（第 1 図、図版 1・2）。

遺跡は、昭和 54（1979）年に「城山野球場建設」に伴う工事とそれ以前に行われていた土取り工事により、丘陵南半を取り去り北側斜面部が残った。参考までに、第 2 図に昭和 43（1968）年測量〔昭和 45（1970）年発行〕の国土地理院発行の 2 万 5000 分の 1 と平成 21（2009）年測量の同図を掲載した。これによると昭和 43 年の地図では遺跡調査地は松郷屋集落方向か丘陵が東西に 2 方向に延びている北側の尾根上にあたり、尾根上には尾根道がある。尾根道は松郷屋集落から延びており江戸時代からの生活道路として用いられている。この尾根道周辺は、幅 20～30m の平坦面があった可能性がある。取り去られた南半部は平坦面と斜面があり遺跡であった可能性が高い。また、第 3 図に昭和 54（1979）年に作成された総合運動公園用地の平面図に今回の調査区を当てはめてみると南側に幅 20m 前後のやせ尾根の平坦面が確認出来る。尾根最高位の標高も 23～24m あり、現在の最高位の 21m よりも高いことが分かる。また南側にも今回の調査地と同様の斜面が残る。当時、埋蔵文化財に関わる処置が行われた記録はないが、南側については山斜面を切り崩した土を埋設し現在の平坦面を作成した可能性があり、遺跡の遺存の可能性が窺える。さらに、近隣の遺跡である中世城跡である下城跡については現状と変化は無いが、上城跡はこの時点で大幅な改変を受けている。1994 年に出版された「巻町史 資料編 1 考古」の上城跡の報告〔若月・山口 1994〕によると、昭和 38（1963）年の採土工事でほぼ全壊し、さらに運動公園造成中にも多数の中世陶磁器類の出土があったと記載されている。



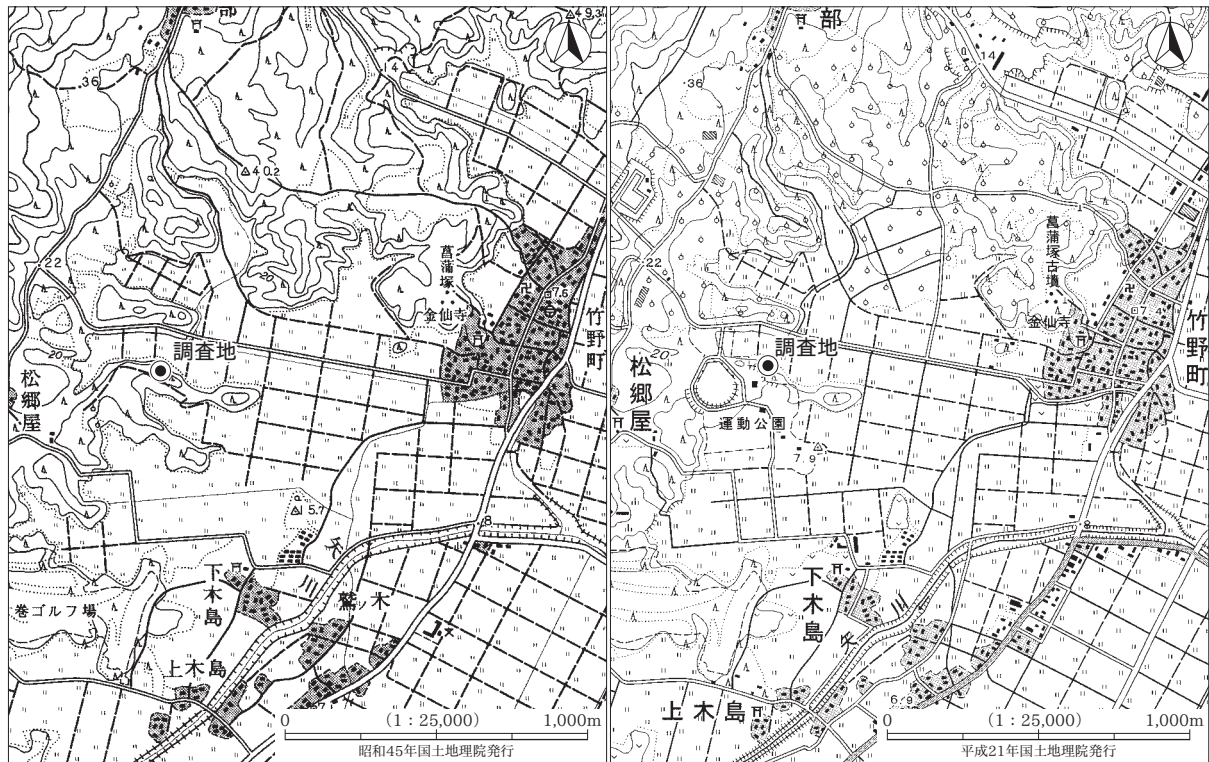
峰岡城山遺跡周辺の現況と角田山（東から）



峰岡城山遺跡南東端から見る角田山



第1図 峰岡城山遺跡周辺の地形分類図



第2図 峰岡城山遺跡周辺地形の変遷 (S=1/25,000)



第3図 峰岡城山遺跡調査範囲と旧地形

## 第2節 周辺の遺跡

角田山麓周辺地域の時代別の遺跡分布は、旧石器時代は丘陵部、縄文時代は丘陵と縁辺の段丘を中心に分布し、沖積平野・砂丘上にも散見される。弥生時代の遺跡は丘陵・段丘上に集中している。古墳時代になると沖積平野・砂丘上に遺跡が進出し始め、奈良・平安時代になると沖積平野部の遺跡が増大する。これは、水田を初めとした開発が広く沖積地に及んだことの表れである。

### 旧石器時代の遺跡（第4図、第1表）

旧石器時代の遺跡は新潟市内では3遺跡確認され、角田山麓では南麓に位置するケカチ堂遺跡（No.50）がある。尖頭器・剥片・石刃が採集されており旧石器時代末の遺跡と考えられている。新潟市外であるが弥彦・角田山塊の遺跡として有馬崎遺跡（燕市：旧分水町）があり、後期旧石器時代のナイフ形石器や剥片が出土している。市内では他2遺跡が秋葉区内の新津丘陵に位置する。丘陵北端部の草水町2丁目窯跡、丘陵西麓の八幡山遺跡〔渡邊朋・立木ほか2001・2004〕でナイフ形石器・石刃など出土している。平野部の遺跡は旧地形が深く埋没しているため未発見であり、現時点では丘陵部に散見されるのみである。

### 縄文時代の遺跡（第4図、第1表）

市内では167遺跡が確認されており、うち弥彦・角田山塊では94遺跡を数え、縄文時代活動領域の中心地であったことが窺える。本遺跡（No.36）の主体時期が縄文時代中期前葉であるため、巻町史〔前山1994a・c〕を参考に角田山麓周辺を概観する。

草創期の遺跡としては遺物の単独出土地にとどまるが、御手洗山遺跡（No.47）や福井遺跡（No.57）、新谷遺跡（No.69）があり、前段階のケカチ堂遺跡が位置する角田山南麓にかけての丘陵上または下位段丘面に集中している。東麓であるが本遺跡においても尖頭器（図版36-64）が出土している。早期の遺跡は市内においても激減しており、角田山麓では豊原遺跡（No.60）で微量の土器が確認されているのみである。

前期になると遺跡数は増加し、角田山麓の前期前半段階では北東麓側の内陸砂丘列上に布目A遺跡（No.24）を代表とする遺跡群が点在し、南麓の低位台地に新谷遺跡（前期前葉後半主体）（No.69）、豊原遺跡（前期前葉後半～中期中葉）（No.60）、東麓に南赤坂遺跡（前期前葉～後期前葉）（No.35）〔前山・相田2002〕等が位置する。前期後半段階では南東麓においては豊原遺跡・南赤坂遺跡などの前段階からの長期継続型遺跡が営まれるが、北東麓低位台地では見られず、前期終末期になると標高48mの高域部に中期中葉まで主体的に営まれる長期継続型の大沢遺跡（No.21）が出現する。一方南東麓では長期継続型遺跡に加え、重稲場遺跡（No.42）のように終末期単純

第1表 峰岡城山遺跡周辺の旧石器・縄文時代遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	木山墓所	縄	29	下田	縄	57	福井	縄	85	八田ヶ入	縄
2	ツル子C	縄・平	30	上ノ原B	縄	58	御井戸	縄・弥・古墳	86	岩ヶ谷	縄
3	神山	縄・弥	31	北赤坂	縄	59	中島	縄	87	南谷地古屋敷	縄
4	ヤマサキ	縄・弥・中世	32	上ノ原C	縄	60	豊原	縄	88	園ノ内	縄・室
5	茶畑	縄・平・中世	33	上ノ原	縄	61	下町	縄	89	善石工門	縄
6	荒所A	縄	34	中田割	縄	62	府戸上田B	縄	90	坊の入り	縄
7	観音原	縄	35	南赤坂	縄・弥・古墳	63	クリヤ湯	縄	91	坂本橋	縄
8	大敷	縄・古墳～室	36	峰岡城山	縄・平・中世	64	堰場A	縄	92	開ノ木平	縄
9	北浦原A	縄・平	37	萱場	縄	65	堰場B	縄	93	高屋	縄・平
10	南浦原	縄・平～江	38	松郷屋	縄	66	平田	縄	94	田ノ浦	縄
11	坊主田	縄	39	釜の口	縄	67	宮ノ前	縄	95	桔梗山	縄
12	向上塚	縄	40	天神B	縄	68	山谷	縄・弥・古墳	96	清見ヶ原	縄
13	タテ	縄・平	41	久保田	縄・古墳	69	新谷	縄・弥	97	駒穴	縄
14	一の沢	縄	42	重稲場	縄	70	干納	縄	98	夷塚A	縄
15	定口	縄・平	43	上田	縄	71	離山	縄	99	中山	縄
16	イタチバラ	縄・平	44	諏訪神社境内	縄	72	高島	縄	100	金堀沢	縄
17	権作	縄・平	45	東中塚	縄	73	桜田	縄	101	上の山	縄
18	山の奥	縄	46	府戸下田	縄	74	水渡	縄	102	川向	縄
19	上環潟湖底	縄	47	御手洗山	縄	75	稲葉	縄	103	猫ヶ沢	縄
20	上環潟B	縄・平	48	山の上	縄	76	猿田	縄	104	桜井神社	縄・古代・中世・近世
21	大沢	縄・弥・鎌	49	片平	縄	77	羽黒社	縄	105	小桜	縄
22	諏訪山	縄・弥・古墳	50	ケカチ堂	旧石器・平	78	雨ヶ谷	縄	106	道上	縄
23	山王	縄	51	峰岡上町	縄・古代	79	岩室神明社	縄	107	桶筒	縄
24	布目A	縄	52	香場	縄	80	一本杉	縄	108	蒲田	縄・弥・古墳
25	中村	縄	53	茶塚	縄	81	石瀬下町	縄	109	一本杉	縄
26	前表	縄	54	大平	縄	82	石瀬岡田東	縄	110	雲出	縄
27	久保	縄	55	山中B	縄	83	新田町	縄			
28	酒の沢B	縄	56	山中	縄	84	青竜寺	縄			



第4図 峰岡城山遺跡周辺の旧石器・縄文時代遺跡分布図

遺跡が出現する。このように角田山麓においては前期終末段階より北東麓と南東麓の2地域において長期継続型の拠点的性格を有する遺跡と短期間の衛星的な遺跡という構造が形成されるようである。

中期には県内全体で遺跡数が増加する。角田山麓では中期前葉が増加傾向のピークとなり、以降減少傾向となる。中期中葉後半に遺跡数がピークとなる信濃川流域部とは対照的な動きを見せる〔前山 1994a〕。

中期前葉の分布は前期段階を踏襲し、遺跡数が増加する。北東麓側では拠点規模を有する大沢遺跡 (No.21) が高域部に立地しており、低位台地には前期前葉から継続する前表遺跡 (No.26)、隣接する単純遺跡の久保遺跡 (No.27)、内陸砂丘上に布目 A 遺跡 (No.24)・定口遺跡 (No.15)・イタチバラ遺跡 (No.16) などの小規模な遺跡が点在する。南東麓では長期継続型の南赤坂遺跡 (No.35)〔前山・相田前掲〕周辺に、後期前葉までの遺物が分布

する中田割遺跡 (No.34)、単純遺跡の峰岡城山遺跡 (No.36)、後期後葉まで継続する松郷屋遺跡 (No.38) が出現し、やや南方に長期継続型の豊原遺跡 (No.60) が位置する。本遺跡と同時存在したと考えられる遺跡のうち集落跡とみられる遺跡は本遺跡を含め、大沢・久保・松郷屋・豊原の5か所である〔前山前掲〕。

角田山麓では中期中葉以降遺跡の減少化が進むが、後期前葉に入り一時的に増加する。上ノ原遺跡 (No.33)、御井戸遺跡 (No.58)〔前山・相田 2003・2004〕などの新規集落が南東麓に出現する。その後再び減少傾向となり、晩期では代表的な遺跡は上ノ原遺跡、御井戸遺跡のみとなる。角田・弥彦山塊としては弥彦村蒲田遺跡 (No.108) があるが、当該期において内陸側の沖積平野に突如出現する。晩期へと至る著しい減少傾向はこうした沖積平野への集落立地の変化による可能性が高く、現在でも埋没した状態で未発見の遺跡が多数存在する可能性がある。

### 弥生時代の遺跡

市内で64遺跡が確認されている。角田山麓では6遺跡と少なく、丘陵端部か沖積平野に位置しており、変形工字文土器が出土した弥生前期の御井戸遺跡〔前山・相田 2003・2004〕を除き中期後半～後期の遺跡となる。中期後半の遺跡としては東北系山草荷式の土器片が御井戸遺跡〔前山・相田前掲〕、山谷遺跡 (山谷古墳下層)〔甘粕・小野<sup>ほか</sup> 1993〕で散見されるのみであり詳細は不明である。後期になると北東麓の大沢遺跡〔甘粕・古川<sup>ほか</sup> 1981、小野<sup>ほか</sup> 1982〕と南麓の山谷遺跡 (山谷古墳下層)〔甘粕・小野<sup>ほか</sup>前掲〕で北陸系土器を主体とし、東北系天王山式土器が混在する高地性集落が発展する。北東麓側の砂丘上には同時期の土器が採集されているさかしの遺跡、南麓では新谷遺跡・御井戸遺跡などの低位域部の遺跡がそれぞれの高地性集落と有機的な関連にあった可能性が考えられる。

### 古墳時代の遺跡

市内で85遺跡が確認され、角田山麓では14遺跡を数える。前期の古墳としては南麓の矢川流域に前方後方墳である山谷古墳〔甘粕・小野<sup>ほか</sup>前掲〕、東麓に菖蒲塚古墳〔相田・前山 2003・2005〕が位置する。これらの古墳と隣接する同時期の遺跡として山谷古墳周辺の御井戸遺跡〔前山・相田 2003・2004〕、菖蒲塚古墳周辺の南赤坂遺跡〔前山・相田 2002〕などがあり関連性が指摘されている〔甘粕 1994、前山・滝沢 2000〕。中期以降の古墳・群集墳は確認されておらず、集落の動向も不明確な状況である。

第2表 峰岡城山遺跡周辺の古代遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	赤曾根	平	42	赤坂	平	83	林付	平・中世・近世
2	四石	古墳・平	43	五ヶ浜	平	84	堤	平
3	木山	平・鎌	44	前平野窯跡	平	85	高六	平・鎌
4	ツル子C	縄・平	45	峰岡城山	縄・平・中世	86	茶院	平～江
5	茶畑	弥・平	46	伏部道下	平	87	羽黒西	平
6	屋敷添	平・鎌	47	南赤坂	縄・弥・古墳・平	88	姥島	平・江
7	前田	縄・古墳・平～室・江	48	越上	古墳・平	89	天神	平・鎌
8	屋敷浦	弥・古代	49	菖蒲塚古墳経塚	平	90	浦田乙	平・鎌
9	ツル子A	平	50	天神C	平	91	居畑	平
10	ツル子B	縄・平	51	重福場窯跡	奈・平	92	浦田川東	平・鎌
11	吹荒地	平	52	ヤチ	奈・鎌	93	西横	平
12	荒所B	平	53	大間潟	古代	94	助次郎	平・中世
13	赤塚神明社	平	54	ケカチ堂	旧石器・平	95	川辻	平
14	病院脇	平	55	桜本	古墳・平	96	横地	平
15	上谷内B	平	56	舟山神社B	平	97	川下B	平
16	上谷内A	平	57	番場西	平	98	川下A	平
17	沼	平	58	峰岡上町	縄・古代	99	野神屋敷	平・室・江
18	大敷	縄・古墳・古代・中世	59	七十九	平	100	中組	平
19	北浦原B	平	60	豊原	縄・平	101	川上	平
20	北浦原A	縄・平	61	桜田	平	102	香語田	平
21	南浦原	縄・平～江	62	猿田今山官	平	103	上徳	平・鎌
22	原付	平	63	本村	平	104	桑橋	平・鎌
23	清水上	平	64	高屋	縄・平	105	諏訪ノ木	平・鎌
24	銭原	奈・平・室	65	番羽入	古代	106	ヤケ屋敷	平・鎌・南・室
25	定口	縄・平	66	寛越	平	107	万福寺	平・鎌・南・室
26	長道	平	67	郷屋	平	108	松橋	平
27	イタチバラ	縄・平	68	大縄	平	109	斎藤屋敷	平・鎌
28	権作	縄・平	69	狐塚	平	110	長渡	平
29	代官屋敷	平	70	長島天神	平	111	三角田	奈・平
30	下福場	平	71	岩室曾根	平	112	稲葉	平
31	山田屋敷	平・鎌	72	ハガヤバ	平	113	大橋	古墳・平・中世
32	大原	平	73	おおやさま屋敷	平	114	庚塚E	古代
33	坂田	平・中世	74	住吉神社脇	平	115	銭淵	平・中世
34	三町歩	平	75	荒田	平	116	庚塚A	平
35	中才	平	76	地蔵腰	平	117	小諏訪前B	平～中世・近世
36	浦田	古墳・平	77	高畑	平	118	小諏訪前	平
37	漕上り	平	78	なえびき橋	平	119	花立	平
38	さかしの	平	79	大島橋	奈	120	北小脇	平～中世・近世
39	夕子	縄・平	80	四ッ割	平	121	江添E	平～中世・近世
40	上堰潟B	縄・平	81	沼下	平	122	江添D	平～中世・近世
41	上堰潟A	平	82	鳥瀬瀬	古墳・奈・平	123	十二田	平・中世
						124	江添C	平～中世・近世
						125	小川	平
						126	五人割	平～中世・近世
						127	七嶋	平
						128	堅割	平
						129	本町カジ田	平
						130	池田	平
						131	弥五郎屋敷A	平・室
						132	熊ノ田	平
						133	西ノ神	平
						134	鴻ノ巣大坪	平・中世
						135	三方口	平
						136	江添F	平～中世・近世
						137	新保A	平
						138	大保	平
						139	新保境	平・中世
						140	松田	平
						141	仲沖	平
						142	野沖	平・中世
						143	花見	平
						144	金蔵屋敷	古代・中世
						145	中沢屋敷	平～室
						146	前畑	平～室
						147	野沖田	平
						148	谷内A	平
						149	下町	平
						150	中築地	平・中世
						151	平野	平
						152	田中新田	平
						153	夷塚B	平
						154	桶の浦	平
						155	矢作	平
						156	中築地	平
						157	清石工門新田	古代
						158	中人溝	平・中世
						159	上段	平・中世
						160	登生寺	古代
						161	御天山	古代
						162	川向	縄・平
						163	桜井神社	縄・古代・中世・近世



第5図 峰岡城山遺跡周辺の古代遺跡分布図

古代の遺跡（第5図、第2表）

古代の遺跡は市内で343遺跡確認され、角田山麓周辺（第5図市内範囲）では85遺跡を数える。角田山麓丘陵上には須恵器窯跡等の生産遺跡が立地するのみとなり、集落遺跡は丘陵縁辺下の沖積低地にかけてと内陸の沖積平野部に立地している。7世紀代の遺跡は大通川左岸の沖積微高地上に位置する高畑遺跡（No.77）、3.5kmほど北に離れた釜淵西岸に位置する大島橋遺跡（No.79）〔山口1984〕があり、これらは内陸沖積平野へ進出した先駆的な遺跡であろう。大島橋遺跡からは7世紀後半から8世紀前半の遺物が出土している〔山口1994a〕。同時期の遺跡としては角田山北麓側の日本海に面した砂丘上に位置する銭原遺跡（No.24）がある。8世紀前半の遺跡としては角田山南麓の峰岡丘陵下低地にヤチ遺跡（No.52）がある。現水田下に埋没しており規模は不明である。



角田山麓では生産遺跡として8世紀後半から重稲場窯跡(No.51)、東麓では8世紀末には前平野窯跡(No.44)が操業を開始し、9世紀前半までは操業されていたようであるが9世紀中頃からは一郡一窯体制崩壊により越後における須恵器生産は衰退し、代わりに小泊窯跡群を中心とした佐渡産須恵器の流通が広がる。

その9世紀から10世紀にかけては本遺跡も含め遺跡数が著しく増加する。砂丘地・潟周辺微高地・沖積平野自然堤防上へ多くの遺跡が進出し、角田山北麓側の砂丘上に位置する下稲場遺跡(No.30)や山田屋敷遺跡(No.31)などのように大規模かつ有力と推測され得る遺跡が出現するようになる〔前山・相田2002〕。角田山麓からはやや離れるが四十石遺跡(No.2)〔渡邊・奈良2012〕・的場遺跡〔小池・藤塚1993〕・緒立遺跡〔渡邊ま1993・1994〕などの砂丘上の遺跡もそうした例である。そしてこれらの中核遺跡の周辺に小規模集落が点在する。沖積平野では大通川左岸の自然堤防上に位置する高畑遺跡(No.77)、地蔵腰遺跡(No.76)、西川右岸自然堤防上には住吉神社脇遺跡(No.74)などの遺跡群が分布する。いずれも詳細な規模等は不明であるが、近年調査された林付遺跡(No.83)〔相田ほか2012〕の上層遺跡からは石帯や権状錘、「川井荘」・「館」などの墨書土器、2間×6間で2面廂をもつ大規模な掘立柱建物跡が見つかっており、潟周縁の中核遺跡の一つであることが判明している。このような平野部への進出、集落数の増加は律令体制の弛緩・変質を背景とした地域有力者層の積極的な低湿地開発の顕れと考えられる〔山口前掲〕。これに対し角田山東麓では赤坂遺跡(No.42)・南赤坂遺跡(No.47)・豊原遺跡(No.60)などで当該期の資料が出土しているが、いずれも小規模である可能性が指摘されている〔前山・相田前掲〕。これは角田山麓の集団を核とした様々な生産・流通体制が解体し、代わりに沖積地の集団がそれらの多くを分掌するようになった結果と考察されている〔春日2000〕。本遺跡(No.45)はこれらの遺跡と同じ領域に位置している。遺物の出土状況からは丘陵裾から現水田下にかけて埋没している可能性が考えられる。角田山麓の様相解明のために今後の成果が期待される。

中世の遺跡(第6図、第3表)

市内で212遺跡が確認され、角田山麓周辺(第6図市内範囲)では77遺跡を数える。中世の当該地域は蒲原郡内の弥彦荘に属し、南北朝から室町時代には石瀬(旧岩室村)に本拠を置く小国氏の影響下にあり、戦国時代末期には上杉氏の支配下に置かれる〔山口1994c〕。集落跡は山麓の台地、砂丘上、沖積平野の微高地に分布しており、発掘調査された事例として西麓の海浜集落である沙山遺跡(No.47)〔前山・山口1985〕がある。13～15

第3表 峰岡城山遺跡周辺の中世遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	伝念野毛	鎌・室	38	二ノ沢	弥・中世	75	城内内城跡	室	112	館屋敷	中世
2	木山	平・鎌	39	大沢	縄・鎌	76	助次郎	平・中世	113	小瀧前B	平～中世・近世
3	木山水田中古銭出土地	中世	40	上の原	中世	77	天神	平・鎌	114	銭溜	平・中世
4	ヤマサキ	縄・弥・中世	41	馬塚(観音塚)	室	78	浦田乙	平・鎌	115	天神堂城跡	中世
5	茶畑	縄・平・中世	42	石塔島	鎌	79	長所	室	116	札	中世
6	前田	弥・古墳・平～室・江	43	下城跡	室	80	浦田川東	平・鎌	117	福蔵寺	室
7	山崎水田中古銭出土地	中世	44	峰岡城山	縄・平・中世	81	僕田	室	118	鴻ノ巣城跡	室
8	大敷	縄・古墳・古代・中世	45	上城跡	室	82	長所館跡	室	119	鴻ノ巣大坪	平・中世
9	藤蔵新田	南・室	46	ヤチ	平・鎌	83	上徳	平・鎌	120	江添F	平～中世・近世
10	坂田	平・中世	47	沙山	室	84	桑橋	平・鎌	121	新保C	中世・近世
11	南浦原	縄・平～江	48	ハザマ	南	85	善性寺跡	室	122	新保B	室
12	山田屋敷	平・鎌	49	下和納	室	86	藏訪ノ木	平・鎌	123	新保境	平・中世
13	西川大園館跡	中世	50	下和納寺跡	鎌	87	アヤマ塚	室	124	弥五郎屋敷A	平・室
14	太田	中世	51	金丸	室	88	下郷屋	鎌・南・室	125	木町城跡	室
15	長湯	中世	52	高橋	室	89	ヤケ屋敷	平・鎌・南・室	126	西洋雲	室
16	松崎屋敷	中世	53	三田・新谷	室	90	開内	南・室	127	上湯	室
17	元宮	中世	54	開ノ内	縄・室	91	君之塚	室	128	野沖	平・中世
18	興業古塚	室	55	上町	室	92	亀田	室	129	一本杉	中世～近世
19	兵衛塚	室	56	和納八幡前	室	93	斉藤屋敷	平・鎌	130	中築地	平・中世
20	浦稲場1号塚	室	57	和納館跡	室	94	ニインドン屋敷	南・室	131	前畑	平～室
21	浦稲場2号塚	室	58	童子	室	95	万福寺	平・鎌・南・室	132	中沢屋敷	平～室
22	浦稲場3号塚	室	59	原館跡	室	96	大野	鎌・南・室	133	湯ノ内B	室
23	浦稲場4号塚	室	60	天神	室	97	万福寺跡	室	134	湯ノ内A	室
24	浦稲場5号塚	室	61	寺屋敷石塔	室	98	鎌井	南・室	135	門光寺跡遺跡	中世
25	布目館跡	室	62	長島館跡	室	99	題目塚	室	136	筒内	室
26	真田	中世	63	泉性寺跡	安	100	柚木館跡	室	137	金蔵屋敷	古代・中世
27	巻城跡	室・安	64	夏井焼窯跡	中世・江	101	野神屋敷	平・室・江	138	札木A	中世
28	河井前	鎌	65	夏井経塚	室～江	102	佐渡山城跡	室	139	札木B	中世
29	館ノ腰	鎌	66	矢根五郎屋敷跡	室	103	雀森	中世	140	大戸	中世・近世
30	林付	平・中世・近世	67	御羽黒塚	室	104	大橋	古墳・平・中世	141	中人溝	平・中世
31	打越館跡	室	68	松嵩山城跡	室	105	江添B	中世・近世	142	上段	平・中世
32	高六	平・鎌	69	天神山城跡	室	106	十二田	平・中世	143	弥彦神宮寺跡	中世
33	モスの塚	平・鎌	70	石瀬跡屋跡	中世・江	107	五人割	平～中世・近世	144	桂根城跡	中世
34	茶院	平～江	71	石瀬岡田	室	108	江添C	平～中世・近世	145	観音寺跡	中世
35	宇智古志神社	室	72	城平	室	109	江添D	平～中世・近世	146	桜井神社	縄・古代・中世・近世
36	茶碗B	南・室	73	田ノ平遺跡	室	110	江添E	平～中世・近世	147	浦の原	中世
37	銭原	平・室	74	十宝塚	室	111	北小脇	平～中世・近世	148	黒瀧城跡	中世



第6図 峰岡城山遺跡周辺の中世遺跡分布図

世紀の遺物が多量に出土し、中でも多量の鉄製釣針が特徴的である。城館跡では山城が角田山東麓支丘陵端部に上城跡 (No.45) と下城跡 (No.43) がある。下城跡は本遺跡と同一丘陵上にあり、本遺跡からも同時期の遺物が微量であるが出土している。市内地域の弥彦・角田山塊の山城としては松嵩山城跡 (No.68) (旧岩室村)、小国氏の拠点であった天神山城跡 (No.69) (旧岩室町) がある。館跡は沖積平野の自然堤防上に立地し、巻館跡 (No.27)・館ノ腰遺跡 (No.29)・和納館跡 (No.57) [川上 1997] 等があり、上述の山城と連携していたものと思われる。

### 第3節 歴史的環境

律令以前、日本海側の地域は広く越国と称されていた。大化三（647）年に淳足柵、翌年に磐舟柵が相次いで設置され、漸次北方の整備が図られていたと考えられる。越後国は、当初これら二柵の位置する阿賀野川以北の沼垂郡・岩船郡より北を指していたようである。越後国の領域の確定は、大宝二（702）年に越中国4郡（頸城・古志・魚沼・蒲原）を割いて越後国に編入『続日本紀』し、和銅五（712）年にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。その後、天平十五（743）年に佐渡国を越後国に合併し、ほぼ現在の新潟県と同一の領域となった。しかし、天平勝宝四（752）年には、渤海朝貢使節の来島により、朝廷による直接把握を目的として佐渡国は復置されている。佐渡国3代国司穴人朝臣和麿の天平宝字五（761）年に造営が始まった佐渡国分寺には、小泊窯で製作された瓦が大量に運ばれており、古代越後国に膨大な須恵器の供給をもたらす小泊窯操業の契機としてとらえられよう。

角田山麓を含む地域は、古代の蒲原郡に属していた。現在の北蒲原郡を除いた三条市から阿賀野川までの範囲に比定される古代の蒲原郡には、承平年間（931～938）に撰進された『和名類聚抄』に桜井・勇礼・青海・小伏・日置の5郷が見られる。このうちの桜井郷が弥彦山麓の桜井神社との関係性が推測されており、角田山麓は日置郷と推定されている説がある〔桑原1994〕。

古代の蒲原郡には、宝亀十一（780）年の『西大寺資財流記帳』によって、鶉橋荘・槐田荘という荘園が施入されていた事が知られている。これらの西大寺領荘園は、神護景雲三（769）年の『越後国水田并墾田地帳』などから、8世紀中葉以降には確実に成立していたと考えられる。西大寺領荘園は早くに衰退したと推定されており、その理由として東大寺領荘園に比べ野地の確保が遅れたために、開発や経営が困難な地域に占地せざるをえず、さらには支援者であった道鏡が失脚したためとの指摘がある〔桑原前掲〕。

角田山東麓の低台地上では須恵器生産が行われていた。重稲場窯跡と前平野窯跡があり、両窯跡とも鎧濁干拓に伴う採土工事により壊滅している。採集された遺物から操業期間は8世紀後半から9世紀前半であり、窯の規模も小規模であったと考えられている〔春日2000〕。そのため生産量が少なく西蒲原全域に多くは供給されず、代わりに同じ蒲原郡に属する新津丘陵窯跡群と古志郡に属する西古志窯跡群からの流通が凌駕していたようである。しかしながらこれらの窯は佐渡小泊窯からの供給量の激増により生産が衰退していく。

前述の初期荘園は10世紀中頃には衰退し、中世においては、角田山麓一帯は寄進地系荘園である弥彦荘に含まれていたようである。弥彦荘の成立時期は、明確ではないが、11世紀後半～12世紀後半に至る院政期であり、その期間内において初見資料の『大方広仏華嚴経』の奥書巻16と巻19に「大治四年」・「弥彦御庄下条」と記されており、弥彦荘が1129年（大治四年）以前に成立していた可能性が指摘されている。さらに「下条」が旧巻町付近との考察がなされている〔桑原前掲〕。

南北朝時代では刈羽郡小国保から天神山城（旧岩室村）に本拠を移していた南朝方の小国政光の支配下にあり、東麓の支丘陵先端部に位置する下城は出土遺物から隣接する上城とともに南北朝期の戦の砦であった可能性が高く、小国氏との関連性も示唆されているが〔桑原前掲〕、詳細は不明である。

14世紀前半の南北朝の動乱に際しては、弥彦荘付近での動向は不明であるが、蒲原津を軍事的に占拠し中・下越地方を制圧しようとした南朝軍と、阿賀野川を挟んで対峙した北朝軍との蒲原津から新津丘陵周辺での攻防が『羽黒義成軍忠状写』に記されており、小国氏の活躍もみられる。この動乱を経て、越後国は守護上杉氏・守護代長尾氏により室町幕府の統治下によって領国支配が推進されることとなる。

15世紀の弥彦荘についてはいくつかの史料が残る。『毛利安田氏文書』では応永三三（1426）年守護上杉房朝より長尾性景に対し、弥彦荘の下条（旧巻町）と船越条（旧岩室村）を栗田の替地として、刈羽郡安田（柏崎市）を本拠とする毛利道元に打渡すことが命じられている。また『蛭川家古文書』の長禄三（1459）年12月の「高

師長本領注文案」には弥彦荘は高氏の本領であったが、実際は二本松（福島県）の畠山氏が支配していたとの記載がある。当時の蒲原郡代は山吉氏であり、さらに地元の小国氏の勢力下の可能性も考えられ、弥彦荘は様々な支配下に置かれていたと考えられる〔桑原前掲、吉田町2000〕。

16世紀になると、守護上杉氏と守護代長尾氏の対立が激化し、越後国内での内乱が勃発するようになる。永正の乱では、永正四（1507）年9月7日に猿ヶ馬場（弥彦村）にて、また永正六（1509）年6月2日に黒滝城（弥彦村）にて戦があり、弥彦・角田山塊周辺も戦場と化したようである〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

享禄・天文の乱（1530～1551）期の当地の様相は明確でない。天文十九（1550）年には、蒲原郡などの国人たちを帰順させていた長尾景虎（上杉謙信）が越後国主となったが、天正六（1578）年3月、上杉謙信が急逝すると、養子である景勝・景虎の間で後継地位をめぐる「御館の乱」がおこり、国内領主層の分裂をもたらした。

弥彦・角田山塊周辺は景勝の阿賀野川以南制圧にとって重要な地となっていたようである。黒滝城（弥彦村）の山岸氏・天神山城（旧岩室村）の小国氏・木場城（旧黒崎町）の山吉氏らが景勝方につき、和納館（旧岩室村）等の景虎方の砦を落とし、天正八（1580）年三条城神余氏の落城を最後として景勝方が勝利した。この際、上城・下城（竹野町）が落城したという伝説が残っており、両城が当期まで存続し、しかも景虎方の砦であった可能性を示唆しているが詳細は不明である〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

御館の乱鎮定後、新発田重家が織田氏と組んで景勝と対抗する新発田の乱が起き、その際三条城主甘糟長重が景勝の側近である泉沢久秀にあてた書状（天正十二年3月16日）の中に「真木之地」として旧巻町の地名が登場し、小国氏の支配下であったことが記されている〔『越佐史料』巻六〕。寛政元（1789）年5月の『御巡見様御案内手控帳』にも巻館は小国氏家臣の西山庄左衛門が城主として居住していたという記載がある。慶長五（1600）年の『巻村内検地帳』によれば館に接して町場が形成されており、館を中心として発展していたようである。天正十五（1587）年には羽柴氏と手を結んだ景勝は重家を討ち滅ぼした。新発田の乱平定後、景勝の命により小国実頼は大国と改め、『文禄三（1594）年定納員数目録』によれば、景勝家臣団の最上士層である「侍中」に大国氏と黒滝城の山岸氏の名が見られ、その功績が窺える。しかし、慶長三（1598）年に豊臣秀吉の命により越後国主上杉景勝が会津へ国替えさせられることとなり、譜代の家臣から地下の土豪まで随従し、故郷の地を離れることとなった〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

景勝の移封に伴い、堀秀治と配下の村上勝頼・溝口秀勝が入封し、秀治自身は春日山城を居城とし、村上頼勝を岩船郡本庄（村上市）・溝口秀勝を新発田に置き下越後を統治させた。旧巻町周辺の統治は、上述の『巻村内検地帳』の検地が、三条城に置かれた堀監物直政の配下の者により行われており堀氏の統治下にあったことが分かる。関ヶ原の戦いの際に会津国境付近より起きた「越後一揆」が画期となり、堀氏は支配を確立し、兵農分離が推進されることとなった〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

その後、旧巻町周辺は長岡藩に編入される。牧野忠成から明治廃藩まで存続する牧野氏長岡藩体制下においては、中世まで遅れていた治水事業・新田開発に力が注がれ藩領の開発が進められた。特に鰐淵・田潟・大潟の治水による新川掘割工事は領内の庄屋等の力により推進され〔桑原前掲〕、現在でもその恩恵を授かっている。遺跡周辺の現景観の基礎はこの時期に固まったものと推察できるが、治水が推進されても洪水などの水害は繰り返されており、その後の度重なる復旧を経て現景観が形成されたと考察されよう。

寛永十一（1634）年にはこれらの新墾田6千石を四男定成に分与して分家させ、三根山領として長らく存続し、幕末の文久三（1863）年に十一代忠泰が三根山藩として立藩したのが、本遺跡の所在する現峰岡地域周辺である。戊辰戦争終結後の明治三（1870）年に峯岡藩と改めさせられ、翌年の廃藩置県により峯岡県となり、新潟県併合後、現在の西蒲区峰岡に至る。

## 第4節 松郷屋焼

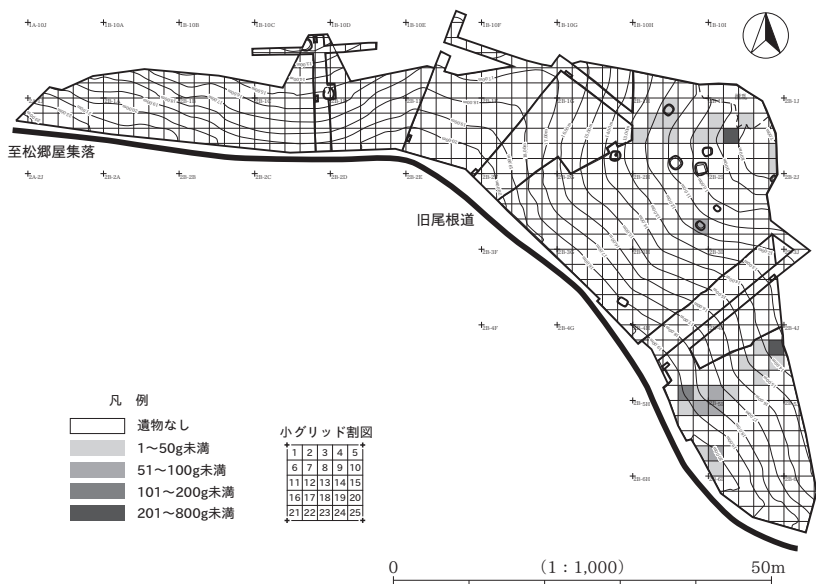
角田山の東側麓の丘陵上には、江戸時代末期から築かれた近世～近・現代陶器窯が数多く存在する。今回調査を行った遺跡が所在する地名は峰岡であるが、西側に隣接して松郷屋集落がある。その集落周辺に窯跡が多数あり、焼酎徳利や日用雑器から土管・瓦・煉瓦など多量の製陶を行っていた。これらの製品は「松郷屋焼」と総称されており、石川秀雄氏・山口栄一氏によって詳しく解説されている〔石川 1976、山口 1983〕。以下に概略をふれ、参考資料として峰岡城山遺跡出土の「松郷屋焼」を紹介する。

角田山麓で近世窯が展開したのは丸山窯（第7図1）である。江戸時代末期の弘化2（1845）年に開窯し、三根山藩立藩後は藩窯として操業された。陶工は大堀相馬焼窯（現福島県浪江町）で修業した、漆山村（現西蒲区漆山）出身の二村為八である。為八は藩のお抱え陶工として働く中で、近隣の若者などを陶工として育成した。その後この窯で製法を覚えた若者が周辺に窯を築いて独立していく。窯の終焉は明確では無いが、幕末には廃絶している。「松郷屋焼」は安政四（1857）年以前に松郷屋の里長の阿部勘九郎によって阿部窯（第7図2）が始められ、昭和20年代まで生産が継続する。勘九郎はその後万延元（1860）年頃に焼酎徳利を発明し、北海道向けの焼酎徳利として、最盛期の明治十三（1880）年には年間約24～25万本を「松郷屋焼」窯元全体で生産している。窯は9窯確認されている（第7図2～9）。稲島集落に1窯、松郷屋集落に7窯、平沢集落に1窯である。その他に周辺では明治時代末期からの瓦窯跡が3基確認（第7図10～12）されている〔山口 1983〕。「松郷屋焼」の窯は連房式（12～20室）の登窯を採用している。



第7図 松郷屋焼窯跡位置図

峰岡城山遺跡でI・II層の表土中より出土している「松郷屋焼」は、総点数は148点、総重量は2199.99gである。「松郷屋焼」以外の近・現代陶磁器は出土していない。出土分布は第8図に示したが、調査区北東と南東側に集中している。出土遺物のうち代表的な資料を提示する（第9図）。1～5は徳利である。「焼酎徳利」として使用されるものである。1は素地で、2～5は施釉されている。「松郷屋焼」は例外なく素焼された後に施釉され本焼成される〔山口 1983〕ことから、1はその素地段階である。2・4・5は、外面が灰から灰白色、内面は茶褐色から黒褐色である。3は内面に口縁部が沈みこんだ、焼歪みのある廃棄品である。外面は黒茶褐色、内面は茶褐色を呈する。



第8図 松郷屋焼出土量分布図

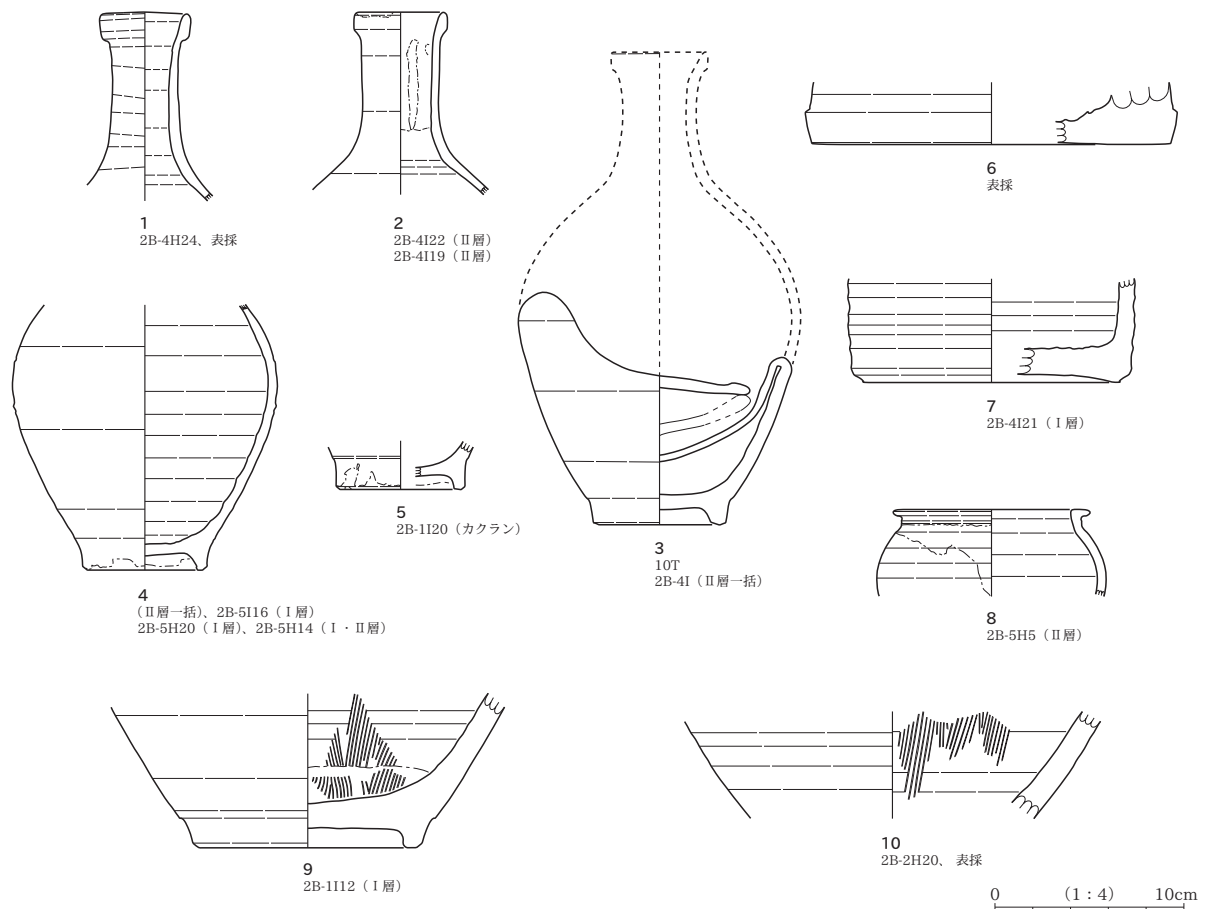
「松郷屋焼」の「焼酎徳利」は外面には藁灰・木灰を用い、内面には漏水を防ぐために鉄分を含む灰釉を施している〔山口1983〕。また、底部にも施釉がある。全体形の分かる資料は今回見いだせなかったが、3の資料で復元実測したように、器高20～25cm前後、口縁部径は4～6cmで口縁が肥大し、器高中心近くあるいは上半に最大径が来る。底部には高台が付き、高台端は削りによって2～3の稜を持つなどの特徴がある。また、各窯元に特有の窯印が体部下半に刻印される場合が多く、10種類程度の窯印が確認されている〔石川1976、山口1983〕。3には下半に窯印が無く、最後まで残った窯元である石沢窯の資料の可能性がある。6・7は筒型の甕で、6は粗雑な内外面であることから窯道具の可能性がある。7は底部糸切で、内外面に茶色の釉薬が残る。8は口径9.2cmの小形壺である。内外面に茶色の釉薬がのる。9・10は内外面に茶色から黒褐色を呈する釉が施釉され、8条前後のすり目が内面にある。胎土は全て砂粒が多く含まれる。

これらの製品は完形品が1点も無く、且つ不完全品が多いことから全て窯で廃棄された破損品と考える。調査地から一番近い窯跡まで西に約300mの距離がある。調査地の尾根は明治時代には松郷屋集落からの生活道路（尾根道）として用いられており、その行来の途中で、何等かの理由により運ばれ廃棄されたものであろう<sup>注1</sup>。年代的には前述の窯印の無い「焼酎徳利」の存在や生活雑器が多いことから、「焼酎徳利」生産が下火となった明治時代後半～大正時代と考えられる。

今回、遺跡出土の「松郷屋焼」資料を紹介したが、考古学の対象として扱われた論考としては、北前船で運ばれた「焼酎徳利」の北海道域での動向〔松下ほか1978〕、消費地での遺物の掲載〔前山・山口1985〕、海上がりの「焼酎徳利」の紹介〔青森県2003、佐々木ほか2010〕などがある。今後、「松郷屋焼」窯跡資料は北前船での他地域との交易資料として重要な位置を占めると考える。

注

注1) 城山運動公園内に所存した伝川又蔵氏の窯製品の可能性もある〔山口1983〕。



第9図 峰岡城山遺跡出土松郷屋焼

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 試掘調査(第1次調査)

試掘調査(第1次調査)は平成23年6月2日から7月8日の実質16日間行った。城山屋内体育施設造成工事に伴う対象面積は4,400m<sup>2</sup>で、幅2m前後のトレンチ状の試掘坑を8か所設定した(第10図)。調査対象地が斜面であるため試掘調査は全て人力で行い、表土から徐々に掘削した後、精査を行いながら遺構・遺物の有無、土層堆積状況を記録した。試掘対象面積は219.49m<sup>2</sup>(1T 36.25m<sup>2</sup>、2T 36.85m<sup>2</sup>、3T 21.82m<sup>2</sup>、4T 33.96m<sup>2</sup>、5T 28.49m<sup>2</sup>、6T 19.48m<sup>2</sup>、7T 26.56m<sup>2</sup>、8T 16.08m<sup>2</sup>)である。

調査対象地は北側に延びる斜面の傾斜が急なことから、比較的傾斜が緩やかな北東側に延びる斜面、特に斜面裾部に古代の生産遺跡あるいは縄文時代の小集落の存在を予想し、北東側斜面を中心に試掘坑を設定した。北東側斜面は小規模の尾根と谷が繰り返す地形であり、遺構の存在を考慮して小尾根上に1T・2T・5T・7Tを設定し、これらの試掘坑と直交するかたちで3T・4T・6Tを設定した。さらに北側に延びる斜面の、傾斜が緩やかに変換する地点に8Tを設定した。

調査の結果、2Tと3Tの交点付近で遺物がまとまって出土し、Ⅱ層から古代の遺物、Ⅲ・Ⅳ層から縄文時代中期前葉の遺物が出土した。古代の遺物は平安時代(9～10世紀)と考えられる土師器の無台椀の破片を主体とし、須恵器の長頸壺の破片が1点出土した。これらと共に鉄滓も確認された。古代の遺物の出土状況は2Tの斜面裾部方向へ延びている。縄文時代の遺物は3Tの谷地形部分に集中している傾向があり、また6Tの表土からは珪質頁岩製の尖頭器(図版36-64)が出土した。

遺構は2Tと4Tの交点付近の傾斜が緩斜面化する部分にⅡ層中にて焼土坑(第Ⅳ章第4節参照)を検出した。縄文時代の遺構は検出されなかった。

今回の調査対象地は、昭和45年作図の国土地理院発行1/25,000地形図によると、本来は東西に伸びた丘陵の北斜面地にあたり、尾根および南斜面は昭和50年代以前に行われた城山運動公園造成の際に削平され壊滅している。地形図では掘削された尾根上に若干の平坦地が確認でき、上記の調査結果とあわせると平坦地に遺跡が広がっていた可能性が考慮される。そこで残丘全体を遺跡範囲とし、城山屋内体育施設造成工事の開発予定をふまえて約2,180m<sup>2</sup>の範囲の本発掘調査を行うこととなった。

### 第2節 発掘調査(第2次調査)

#### A 調査方法

##### 1) 現況

調査地は角田山麓の東西に延びる丘陵上に位置している。丘陵南側斜面は昭和50年代以前の土取り工事や城山野球場建設工事により、尾根頂部付近から法面が形成された状況となっている。北側斜面は自然地形が残り、現況は山林である。丘陵の北側には水田が広がり、丘陵斜面は田面に向かって傾斜している。

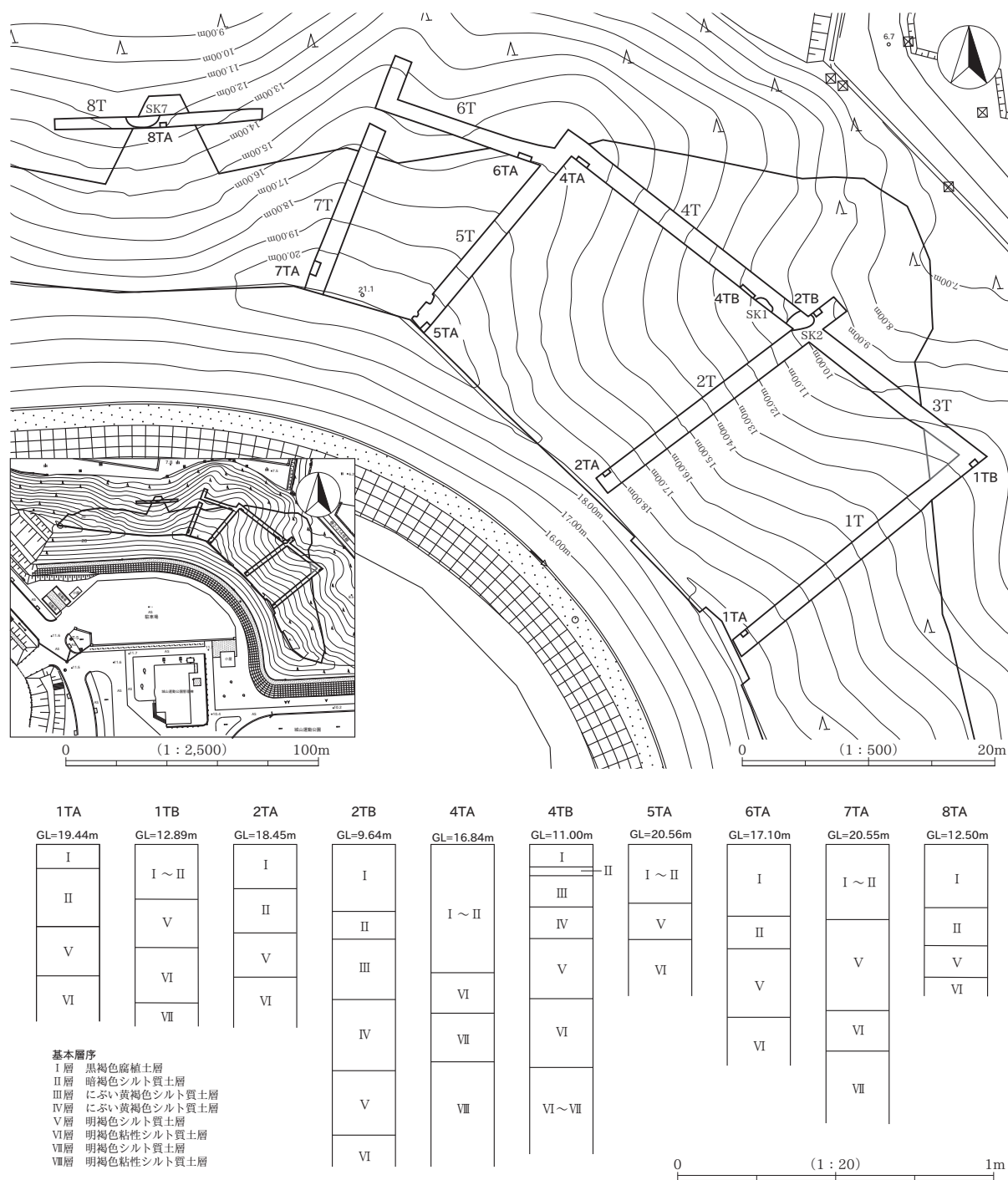
##### 2) グリッドの設定(図版3・4)

グリッドは、X座標196000.000、Y座標31100.000(世界測地系平面直角座標第8系)、緯度37°45′56.8939″、経度138°51′10.7943″を基点として「1A」杭とした。通常は基点に対し10mの方眼を組みそれを大グリッドとしてきたが対象面積が広大であるため、100m方眼の大大グリッドを設定した。大大グリッド

第2節 発掘調査

の名称は1A杭を基点として東西方向をA～Fのアルファベット、南北方向を1～4のアラビア数字で表し、10m方眼の大グリッドは「1B-10C」、「2B-1B」のように枝番を付して標記した。これをさらに2m方眼の25の小グリッドに分割し、「2B-1B1」のように呼称した。グリッドの名称については図版3・4に示すとおりである。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区内における任意のグリッド杭4点の座標は、2B-1B杭(X座標:195900.000、Y座標:31210.000、緯度37°45′53.6367″、経度138°51′15.2735″)、2B-1H杭(X座標:195900.000、Y座標:31270.000、緯度37°45′53.6367″、経度138°51′17.7252″)、2B-3I杭(X座標:195880.000、Y座標:31280.000、緯度37°45′52.9794″、経度138°51′18.1183″)、2B-5I杭(X座標:195860.000、Y座標:31280.000、緯度37°45′50.3844″、



第10図 峰岡城山遺跡 試掘・確認調査位置図



経度 138° 51′ 18.1183″) であり、2B-1H 杭の座標北は真北に対し 0 度 13 分 02 秒東偏し、磁北は真北に対し 7 度 55 分西偏する。

### 3) 調査方法

#### ① 表土除去

調査対象範囲が斜面地であるため重機（バックホウ）の進入が困難な箇所が多く、大部分を人力にて除去した。斜面裾部付近で重機が進入可能な箇所については、遺物の出土に注意しながら重機を用いて除去した。

#### ② 包含層調査

試掘確認調査の結果、古代・中世の遺物包含層（Ⅱ層）と縄文時代の包含層（Ⅲ・Ⅳ層）が確認された。表土除去の結果、試掘確認トレンチを入れていなかった調査区西側斜面についてはⅡ層が薄く存在するのみであり、Ⅲ・Ⅳ層が存在せずに地山に達する状況が認められた。あわせて西側斜面は傾斜があまりに急であり危険を伴うため、安全を第一に考慮し、包含層掘削は調査区北側・北東側斜面を中心に行うこととなった。掘削は手作業にて行い、遺物の検出に努めた。

排土は基本的にベルトコンベアーにより調査区外へ搬出したが、斜面上部の土捨てが困難なため斜面裾部を先行調査し完掘・計測等の調査終了後に土捨て場とした。

#### ③ 遺構検出・調査

包含層掘削部分を全面ジョレン等により平面精査を行い、遺構の検出にあたった。その際斜面の旧地形の復元に努めた。

#### ④ 遺構断面図・遺物微細図の作成

遺構断面図は縮尺 20 分の 1 で作成し、平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて取得したデータを基に CAD で作成した。遺物微細図は手取りと測量業者による写真測量を併用して作成した原図を、調査員が修正・加筆した。

#### ⑤ 写真撮影

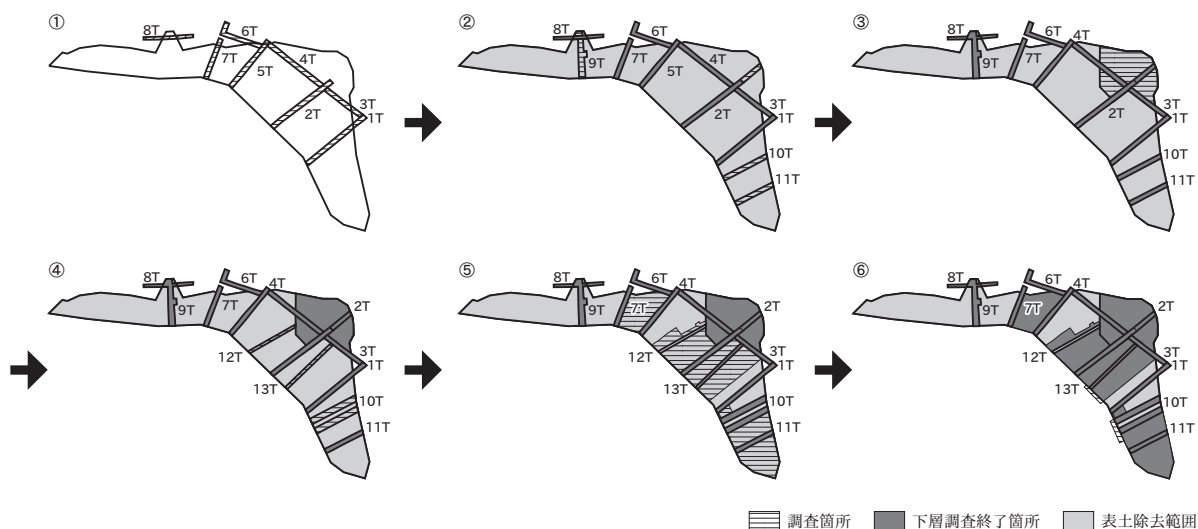
層序・遺構・遺物出土状況などの写真撮影にあたっては、35mm リバーサルフィルム・35mm モノクロフィルム・6×7 版リバーサルフィルム・デジタルカメラを使用し、必要に応じて 6×7 版モノクロフィルムも使用して俯瞰撮影を行った。

#### ⑥ 遺物の取り上げ

基本的にトータルステーションを用いて取り上げた。本書ではこれらの位置情報に基づき出土状況を復元している。

## B 調査経過

本調査の経緯概略を述べる（第 11 図）。まず表土除去作業と伴に、試掘確認調査の結果から遺物が集中していた斜面裾部に 2T を延長して設定し、さらに西側と東側斜面にも幅 2m ほどのトレンチを設定し（9T・10T・11T）、遺物・遺構検出範囲の確定に努めた（②）。その結果、斜面裾部（2T 延長部）と谷地形部に設けた 10T から遺物の出土が認められたため、まず最も傾斜の緩い斜面裾部を先行して調査した（③）。試掘確認調査の状況から最も遺物・遺構の分布が濃いと予想していたが、散在する程度の出土状況であった。10T の状況から斜面上部の谷地形からの出土も予想されたため、さらに 12T・13T を設け、10T 自体も拡張しながら遺物・遺構の検出を行った（④）。結果として 10T・12T・13T の斜面上部から多量の縄文土器が出土し、さらに 10T・13T からはピット・土坑が検出された。そこで包含層が残存する谷地形部について全面調査を行うに至り（⑤）、最も縄文土器の出土が集中するのが 10T・13T を設定した谷地形（谷 2・谷 3：第 IV 章第 12 図参照）の斜面中腹から尾根頂部にかけてであり、土取りにて削平された尾根平坦面上に縄文時代の集落が存在していた可能性が高くなった。そこで最終調査として斜面頂部の尾根平坦面が一部残る箇所を拡張して調査を行い、縄文土器・遺構の



第11図 峰岡城山遺跡本発掘調査の経緯

検出に努めた(⑥)。遺構は検出できなかったが、斜面谷部へ続く遺物の分布が認められた。

以下調査経過を記す。平成24年5月21日に資材を搬入し、5月22日から試掘確認調査の試掘坑の復元と表土除去を開始した。6月4日より本格的に作業員を投入し、全て人力にて作業を行った。同月7日より2Tを延長、9Tの調査に入る。同月12日より斜面裾部の調査に入り、並行して10T・11Tの設定・調査を行った。同月18日にはこれらの調査箇所の基本層序の記録を行い、7月4日に土層断面確認用ベルトの除去を行い、同月10日に斜面裾部の完掘写真撮影を行った。翌日より12T・13Tを設定して調査に入り、10Tの両側を拡張して調査を行った。これらの調査終了後、11T・12T・13Tを設定した谷地形の全面調査を行い、同月30日から完掘全景空中写真用の調査区全面の清掃に入った。8月8日に空中写真撮影を行い、撮影終了後より斜面頂部の調査区範囲を拡張して最終調査を行った。同月20日に全ての調査・撤収作業を終了した。発掘調査総面積は上端2,183.500m<sup>2</sup>、下端2151.170m<sup>2</sup>である。

### C 調査体制

#### 【平成23年度：第1次調査（試掘調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：鈴木廣志）
所管課	新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課 （課長：倉地一則 課長補佐：佐藤正昭 埋蔵文化財係長：廣野耕造）
事務局	新潟市文化財センター（所長：高橋 保）
調査担当	立木宏明（新潟市文化財センター 主査）

#### 【平成24年度：第2次調査（本発掘調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：阿部愛子）
所管課・事務局	新潟市文化財センター （所長：高橋 保 所長補佐：丸山徳幸 主任：渡邊朋和）
調査担当	立木宏明（新潟市文化財センター 主査）
調査員	伊比博和（株式会社シン技術コンサル）

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### 1) 遺物

##### 遺物の洗浄・注記・接合・復元

整理補助員が作業にあたった。遺物の注記方法としては、発掘調査年度である2012の「12」・遺跡名「峰岡城山」・取り上げナンバー・遺構出土遺物の場合は遺構名・出土層位、の順に記入した。

接合・復元については接着剤による接合だけでは不十分な場合は、原則的にQ テックスを補填剤として使用し、撮影条件を考慮して補填箇所の着色を行った。

##### 遺物の実測・トレース・写真撮影

縄文土器、石器、古代・中世の土器の素図作成は主として整理補助員が行った。トレースは業者に委託し、デジタルトレースで行った。遺物の撮影は株式会社シン技術コンサルが行った。

#### 2) 遺構

##### 遺構の整理・図面の作成

平面図の作成はトータルステーションを用いて取得したデータをCADにより作成した遺構平面図と、縮尺20分の1の手取りによる断面図との整合作業を行った。各図面およびトレース図の作成は、校正した図面をもとにデジタル処理を行った。

### B 整理経過

平成24年度の発掘調査と平行して遺物の洗浄・注記、記録類の基礎整理および土器の接合を行った。

同年8月21日より本格的な報告書作成作業に入り、土器・石器類の実測作業と土器の復元、遺構・遺物の図版作成、原稿執筆・編集作業を新潟市および株式会社シン技術コンサルが行った。遺物の写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。各種図版のデジタルトレース等図版作成・編集作業は有限会社不二出版に委託した。自然科学分析については株式会社火山灰考古学研究所と藁科哲男氏（有限会社遺物材料研究所）に依頼した。

平成24年度の調査終了後の整理体制については、第2節の調査体制を継続した。

平成25年度は報告書刊行のみを行った。

#### 【報告書刊行 平成25年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：阿部愛子）
所管課・事務局	新潟市文化財センター （所長：中野俊一 所長補佐：丸山徳幸 主任：渡邊朋和 遠藤恭雄 本間敏則）
調査担当	立木宏明（新潟市文化財センター 主査）

# 第IV章 遺 跡

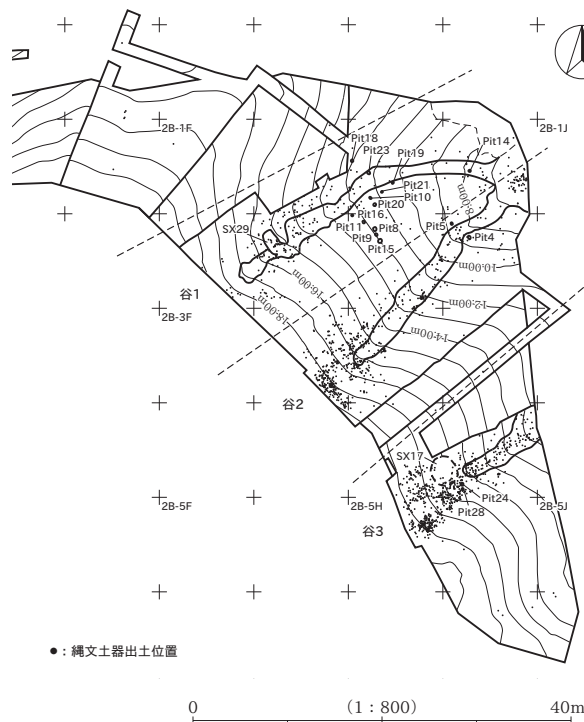
## 第1節 概 要

峰岡城山遺跡は角田山東麓の東西に延びる丘陵上に位置する。昭和50年代以前に行われた土取り工事や54年の「城山野球場建設」に伴う工事により丘陵の尾根および南斜面は削平され、現況では北斜面と尾根頂部の一部のみが残丘となっている。今回の調査対象地は、この残丘の北斜面部であり、尾根頂部の標高が約20.4m、斜面裾の低域部は標高が約7.0mと比高差がある。

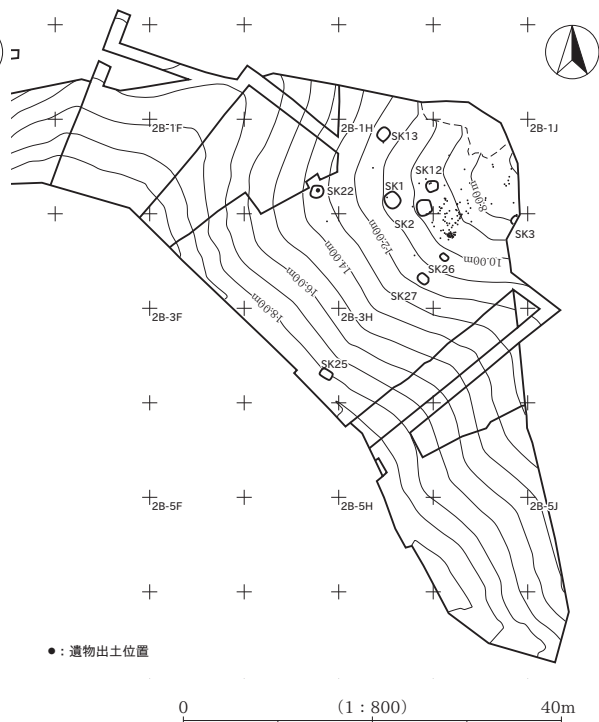
峰岡城山遺跡では古代（平安時代）・中世の遺物がⅡ層の斜面裾側から出土しており、本遺跡北側に広がる水田下にこれらの時代の遺跡が埋没している可能性を示唆する分布状況である。Ⅱ層検出の遺構は土坑が1基と、その他に10基の焼土坑を確認した。これらの詳細な所属時期は不明である。

Ⅲ・Ⅳ層からは縄文時代中期前葉の土器群が出土した。尾根頂部から斜面中腹にかけての分布密度が高く、現在では壊滅している尾根頂部の平坦面に当該期の集落が存在していたことがほぼ確実な状況である。また、遺物の分布は3条の谷に集中しているため、便宜的に北側の谷から「谷1・谷2・谷3」と呼称する（第12図・図版5）。以下、本文中の記載ではこの名称を用いる。これらの谷底面にはミネラル分が沈着して変色している箇所が帯状に確認され、沢が存在したようである（図版5トーン部分）。遺構は、谷1沢跡の上部に土坑状の掘り込みが見られ（SX29）、斜面中腹には沢跡をはさみ両岸にピット群が認められた（第12・15図）。

遺物量は遺物収納コンテナ（内法54.5×33.6×10.0cm）で100箱である。内訳は縄文土器が73箱、石器が15箱、古代・中世の土器が8箱、石製品が1箱、鍛冶関連遺物が3箱である。



第12図 下層遺構・遺物分布状況



第13図 上層遺構・遺物分布状況

## 第2節 基本層序と旧地形の復元

### A 基本層序

峰岡城山遺跡の基本層序の堆積状況は調査面が斜面地のため一律ではない。現況が山林であったため根による攪乱をうけ、表土であるⅠ層と古代・中世の包含層であるⅡ層の界線が明瞭でない箇所も見受けられた。縄文時代の包含層であるⅢ・Ⅳ層は急勾配の調査区西側と尾根地形部分には存在せず、谷地形部分のみに残存していた。そのため出土遺物については経年に伴う自然の営力による原位置からの移動を考慮しなければならない状況である。

本遺跡の基本層序はⅠ～Ⅷ層に大別される。基本層序の位置・断面図については第14図に示し、写真は写真図版7～9に掲載した。

#### Ⅰ層 表土

黒褐色腐植土層 (10YR2/3) 粘性ややあり、しまりややあり。

#### Ⅱ層 古代から中世遺物包含層

暗褐色シルト質土層 (10YR3/4) 粘性ややあり、しまりややあり。

#### Ⅲ層 縄文時代遺物包含層①

にぶい黄褐色シルト質土層 (10YR5/4) 粘性ややあり、しまりややあり。径1cmほどの炭化物を少量含む。

斜面裾部は水の影響による腐植分の溶脱化現象が認められ、青灰色粘性シルト (5BG6/1) に変質している (Ⅲ'層)。

#### Ⅳ層 縄文時代遺物包含層②

にぶい黄褐色シルト質土層 (10YR4/3) 粘性ややあり、しまりあり。径1cmほどの炭化物を少量含む。斜面裾部は溶脱化により青灰色粘性シルト (5BG6/1) に変質している (Ⅳ'層)。部分的に褐灰色のマンガン質が斑状に沈着する (Ⅳ"層：沢跡)。

#### Ⅴ層 明褐色シルト質土層 (10YR5/8)

浅黄色 (2.5Y7/3) の基盤層ブロック (径1～5cm) が中量混じる。粘性ややあり、しまりあり。径0.5cmほどの炭化物粒を少量含む。

#### Ⅵ層 明褐色粘性シルト質土層 (10YR5/6)

基盤層ブロックが多量に混じる。粘性あり、しまりあり。径0.5cmほどの炭化物粒を少量含む。

#### Ⅶ層 明褐色シルト質土層 (10YR6/6)

風化した基盤層ブロックが層状または斑状に混じる。粘性ややあり、しまりあり。

#### Ⅷ層 明黄褐色粘性シルト質土層 (10YR7/6)

明褐色シルト質土が層状または斑状に混じる。粘性あり。しまりあり。

## 第3節 下層（縄文時代）の遺構

### A 遺構の概要と記述

縄文時代に帰属するⅢ層中もしくはⅣ層にて検出された遺構は、ピット (Pit) が16基、性格不明遺構 (SX) が2基の計18基のみである。

遺構の説明はPit、SXの順に遺構番号順で記す。遺構番号は種別に関係なく検出順に付したものである。記

述は遺構個別実測図版の掲載順と対応させている。

遺構の形態分類・覆土の堆積状況については和泉 A 遺跡での分類〔加藤・荒川 1999〕を参考にしている。

遺構図には出土遺物をドットで表示した。断面図もしくはエレベーション図での垂直分布のドット表示は投影法によるものである。

## B 遺 構 各 説

### 1) ピ ッ ト (Pit)

ピット群は標高 8m から 12m の斜面中腹の谷地形に集中し、特に谷 1 に分布がまとまる（第 15 図）。さらに沢跡の兩岸に対峙する傾向が見受けられ（谷 1 では Pit10・19～21 と Pit18・23、谷 2 では Pit4 と Pit5）、また標高 12m 付近の谷 1 では Pit8・9・11・15・16 が等高線に沿って並んでいる。このような配置を見る限りでは当時の沢に関する何らかの機能を有するものと推測するが、具体的な機能・用途については不明である。

**Pit4**（図版 10・13、写真図版 11） 谷 2 の沢跡の東岸、2B-2I7 に位置し、Pit5 と対峙している。標高 8.7m の比較的緩い斜面に構築されている。IV層検出である。平面形は楕円形、断面形は階段状であり、沢跡に向かって N-23° -W 方向に鉛直から 19° 傾いている。規模は長軸 0.39m、短軸 0.29m、検出面からの深さは 0.34m を測る。覆土は 2 層の斜位堆積である。出土遺物はない。

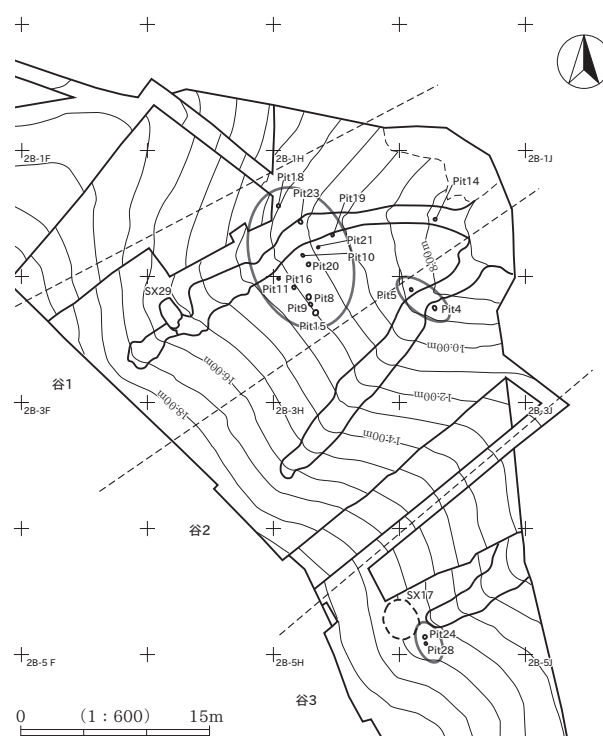
**Pit5**（図版 10・13、写真図版 11） 谷 2 の沢跡の西岸、2B-2I1 に位置し、Pit4 と対峙している。標高 8.8m の比較的緩い斜面に構築されている。IV層検出である。平面形は楕円形、断面形は U 字状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は長軸 0.24m、短軸 0.21m、検出面からの深さは 0.25m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

**Pit8**（図版 10・13、写真図版 11） 谷 1 の南側斜面、Pit9・11・15・16 とともに標高 12m 付近に並ぶ。2B-2H2 に位置する。IV層検出である。平面形は楕円形、断面形は台形状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は長軸 0.40m、短軸 0.32m、検出面からの深さは 0.20m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

**Pit9**（図版 10・13、写真図版 11） 谷 1 の南側斜面、Pit8・11・15・16 とともに標高 12m 付近に並ぶ。2B-2H7 に位置する。IV層検出である。平面形は楕円形、断面形は半円形状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は長軸 0.33m、短軸 0.23m、検出面からの深さは 0.18m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

**Pit10**（図版 10・13、写真図版 12） 谷 1 の沢跡の南岸、2B-1H22 に位置する。IV層中の検出である。平面形は楕円形、断面形は U 字状であり、底面は谷側に傾斜する。規模は長軸 0.26m、短軸 0.20m、検出面からの深さは 0.20m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

**Pit11**（図版 10・13、写真図版 12） 谷 1 の南側斜面、Pit8・9・15・16 とともに標高 12m 付近に並ぶ。2B-2H1 に位置する。IV層検出である。平面形は円形、断面形は底面が平坦な台形状である。規模は直径約 0.26m、検出面からの深さは 0.20m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。



第 15 図 ピット分布状況図

Pit14 (図版 10・13、写真図版 12) 谷 1 の低域部 2B-1I12 に位置し、標高 8.2m を測る。沢跡中に構築されている。IV層検出である。平面形は円形、断面形は底面の狭い U 字状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は直径約 0.24m、検出面からの深さは 0.37m を測る。覆土は単層。出土遺物はない。

Pit15 (図版 10・13、写真図版 12) 谷 1 の南側斜面、Pit8・9・11・16 とともに標高 12m 付近に並ぶ。2B-2H7 に位置する。IV層検出である。平面形は円形で、断面形は底面が狭い階段状であり、斜面谷側 N-45° -E 方向に鉛直から 16° 傾いている。規模は直径約 0.40m、検出面からの深さは 0.40m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

Pit16 (図版 10・13、写真図版 13) 谷 1 の沢跡の南岸、Pit8・9・11・15 とともに標高 12m 付近に並ぶ。2B-2H1 に位置する。IV層検出である。平面形は円形、断面形は U 字状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は直径約 0.20m、検出面からの深さは 0.20m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

Pit18 (図版 10・13、写真図版 13) 谷 1 の沢跡の北岸、Pit23 近くの 2B-1H11 に位置する。IV層検出である。平面形は円形、断面形は U 字状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は直径約 0.26m、検出面からの深さは 0.36m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

Pit19 (図版 10・13、写真図版 13) 谷 1 の沢跡の南岸、2B-1H18 に位置する。IV層検出である。平面形は円形、断面形は台形状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は直径約 0.22m、検出面からの深さは 0.20m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

Pit20 (図版 10・13、写真図版 13) 谷 1 の沢跡南岸、Pit10 近くの 2B-1H22 に位置する。IV層検出である。平面形は円形で、断面形は U 字状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は直径約 0.31m、検出面からの深さは 0.23m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

Pit21 (図版 10・13、写真図版 13・14) 谷 1 の沢跡南岸、2B-1H17 に位置する。IV層検出である。平面形は円形で、断面形は U 字状、斜面谷側 N-35° -E 方向に鉛直から約 15° 傾いている。規模は直径約 0.20m、検出面からの深さは 0.23m を測る。覆土は単層である。出土遺物はない。

Pit23 (図版 10・13、写真図版 14) 谷 1 の沢跡北岸、2B-1H11・12 に位置する。Pit10・21 と対峙する。IV層検出である。平面形は円形、断面形は階段状であり、ほぼ鉛直に掘り込まれている。規模は直径約 0.32m、検出面からの深さは 0.23m を測る。覆土は 2 層の斜位堆積である。出土遺物はない。

Pit24 (図版 11～13、写真図版 14) 谷 3 の沢跡の上端部、2B-4I21・22 に位置する。III層下面検出である。平面形は円形で、断面形は U 字状である。規模は直径約 0.34m、検出面からの深さは 0.64m を測る。斜面谷側 N-60° -E 方向に、鉛直から約 13° 傾いている。覆土は単層である。覆土中と底面から縄文土器の小破片が 2 点出土しているが、器面が磨滅しているため実測できなかった。

Pit28 (図版 11～13、写真図版 14) 谷 3 の沢跡の上端部、2B-4I21・22 に位置し、Pit24 と並ぶ。III層下面検出である。平面形は円形で、断面形は U 字状である。規模は直径約 0.20m、検出面からの深さは 0.43m を測り、ほぼ鉛直に掘り込まれている。覆土は単層である。出土遺物はない。

## 2) 性格不明遺構 (SX)

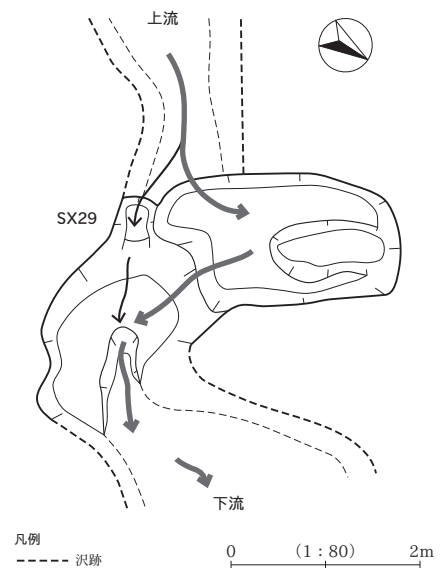
機能・用途等の性格が明確でない一群である。SX17 と SX29 の 2 基がある。

SX17 (図版 11・12・14、写真図版 14・15) 谷 3 の斜面上部、2B-4H15・20・25、4I11・16・21 に位置する。覆土堆積状況から倒木痕と考える。III層下面検出である。平面形はやや不整な楕円形、断面形は弧状で、底面には凹凸が見られる。規模は長軸 3.08m、短軸 2.68m、検出面からの深さは 0.88m を測る。覆土は 8 層に分けられ、斜位のレンズ状堆積となっている。堆積状況を観察すると、2 層には地山土のブロックが多量に混ざっており、その上下層には包含層である III層土が斜面上方向から流入している。この状況から 2 層は斜面下方向に倒れた倒木の根により持ち上げられた地山土であり、その隙間に III層土 (3・6 層) が流入し、その倒木痕が埋没後にさらに III層土 (1 層) によりパックされた堆積状況が復元された。斜面地のため、比較的短時間による埋没が想定

され、出土遺物も流入によるものではあるが短い時間幅のものであると考えられる。

出土遺物は覆土中から縄文土器片 13 点出土しており、うち深鉢 4 点（図版 24-119～122）を図示した。

SX29（図版 9・10・15、写真図版 15）谷 1 の斜面上部、沢跡の上端から 4m ほど下流にあたる 2B-2G1・2・6～8・11～13 に位置する。標高は 15.5m ほどであり、比較的急な斜面に構築されている。Ⅲ層下面検出である。沢筋の一部を掘り下げ、さらに沢と L 字になる直角方向に主軸をもつ土坑を掘り込んでいる。図版 15 の c セクションを見ると沢の筋と土坑の両方に水が流れるよう二股に分岐しており、この部分が取水部にあたる。土坑側の取水部が広いいため、土坑側優先に取水ができる構造となっている。そして沢を階段状に掘り込んだ部分(aセクション)が土坑より低いレベルとなっているため、土坑部分が満水となった場合は再び沢筋に流れ込む構造となっていると想定する（第 16 図）。このような構造と構築場所から推測して、沢の湧水を貯水するための簡易な水場と考える。



第 16 図 SX29 水流想定図

規模については、L 字方向の土坑部分の長軸は 2.60m、短軸 1.44m、検出面からの深さは 0.40m を測り、底面レベルは 15.00m である。一部深くなっている箇所は底面レベルは 14.92m となる。沢を階段状に掘り込んだ部分の取水側の底面レベルは 15.64m、掘り込み部分の底面レベルは 14.84m、出水側の底面レベルは 14.68m である。出土遺物は縄文土器（図版 20-1・2）、ほか縄文土器片 10 点、台石・凹石（図版 28-1・2）が出土している。

## 第 4 節 上層（古代・中世）の遺構

### A 遺構の概要

縄文時代の包含層より上位のⅡ層で検出された遺構を一括した。覆土に炭化物や焼土・焼成粘土塊を多量に含み、底面から炭化材が検出され、さらに壁面や底面が被熱により酸化・硬化している土坑が大半であり、計 10 基を確認した。このような遺構は居村遺跡 C 地点・E 地点〔渡邊朋・小田ほか 1997〕で確認されており、状況はほぼ同じである。居村遺跡ではこのような土坑を「焼土坑」と称しており、伏せ焼き技法による簡易的な木炭窯と推測されている。状況から同様な機能が推測されるため、本遺跡においてもこの呼称を用いる。

これらの焼土坑からは時期判別可能な遺物の出土が皆無なため、詳細な所属時期は不明であるが、放射性炭素年代測定によると 9 世紀後半の値が算出されている（第三章第 4 節参照）。検出層位はⅡ層中～下面である。

焼土坑は平面形から以下のように分類した（第 17 図）。

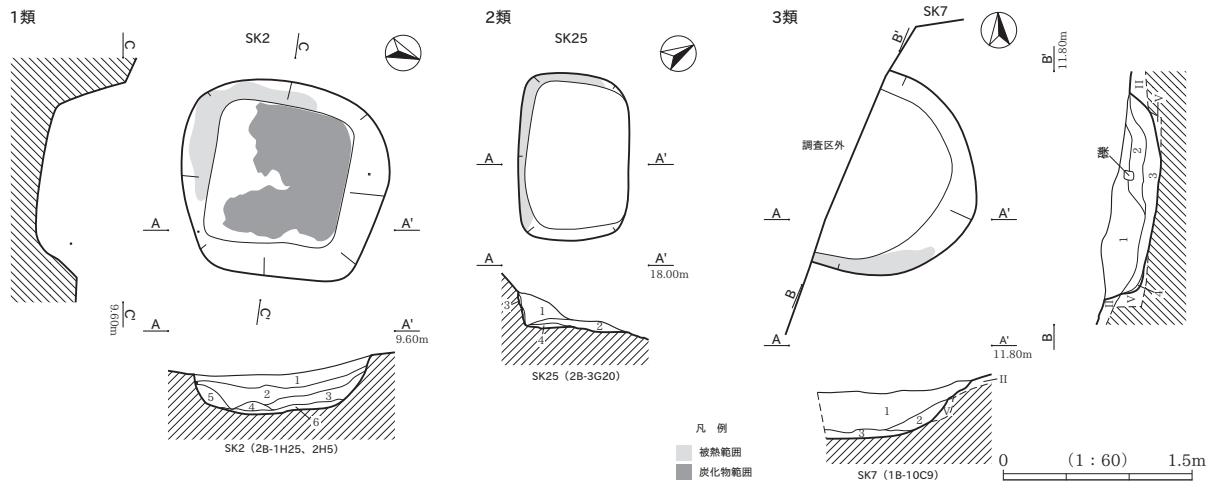
1 類 平面形が隅丸方形のもの。軸が等高線の方角と、斜面の傾斜方向となるように構築されている。壁面は山側・谷側ともにしっかりと掘り込まれている。

2 類 平面形が隅丸長方形のもの。長軸が等高線の方角と一致し、短軸が斜面の傾斜方向となるように構築されている。谷側の壁面が非常に浅く、開放しているのが特徴である。

3 類 平面形が円形のもの。壁面はしっかりと掘り込まれている。

その他の遺構としては焼土ブロックを含む浅い土坑を 1 基確認した（SK12）。遺構底面から土師器片が出土しているが細片のため所属時期は不明である。





第 17 図 焼土坑分類図

## B 遺 構 各 説

### 1) 焼 土 坑 (SK)

**SK1** (図版 37・40、写真図版 29) 2B-1H18・19・23・24 に位置し、標高 10.5m の比較的緩やかな斜面に構築されている。平面形は隅丸方形で、底面はほぼ平坦で水平である。規模は一辺が約 1.60m、検出面からの深さは山側が 0.50m、谷側が 0.30m を測り、軸は斜面の傾斜方向と同じである。山側の壁面が被熱して酸化しており、底面南東側に炭化物の広がりを確認した。炭化物下の底面は被熱硬化している。覆土は 5 層の斜位堆積であり、自然埋没の状況を示している。下位の層は炭化物を多量に含み、焼成粘土塊も混ざる。焼成粘土塊は被熱した壁面が覆土流入とともに崩落して混ざり込んだものと推測する。出土遺物はない。1 類。

**SK2** (図版 37・40、写真図版 29) 2B-1H25、2H5 に位置し、SK1 から 1.5m ほど東方向の標高 9.8m の緩斜面に構築されている。平面形・規模は SK1 に近似し、隅丸方形で一辺が約 1.60m である。検出面からの深さは山側が 0.52m、谷側が 0.32m を測る。軸は斜面の傾斜方向と同じである。覆土は 6 層のレンズ状堆積であり、底面全体に炭化物が広がる。木炭状の炭化物を多く含んでいた。壁面は山側と南東側が被熱しているが酸化は弱く、底面の硬化も顕著でない。覆土上部から 122.7g の鉄滓 (図版 44-1) が出土しており、流入によるものと思われる。1 類。

**SK3** (図版 37・40、写真図版 29) 2B-2I5 に位置し、標高 8.0m の緩斜面に構築されている。調査区境に位置するため一部のみの検出であり、全体形・規模の詳細は不明である。検出部位から平面形は隅丸方形、もしくは隅丸長方形と推測する。検出面からの深さは山側が 0.40m、谷側が 0.24m を測り、覆土は 3 層の斜位堆積である。覆土下位層は炭化物を多量に含む。壁面・底面の被熱酸化は認められなかった。出土遺物はない。谷側の壁面掘り込み状況から 1 類と推定する。

**SK6** (図版 37・40、写真図版 29・30) 1B-10C25、10D21、2B-1C5、1D1 に位置し、標高 15.5m の若干テラス状になった斜面に構築されている。平面形は隅丸方形、底面はほぼ平坦で水平である。規模は一辺が約 1.40m、検出面からの深さは全体的に浅く、山側が 0.28m、谷側が 0.16m を測る。軸は斜面の傾斜方向となっている。覆土は 4 層のレンズ状堆積で、最下層に炭化物を多量に含む。山側壁面の被熱が顕著であり良く酸化している。底面中央も硬化しており、その硬化部分に木炭の広がりを確認した。出土遺物はない。1 類。

**SK7** (図版 37・40、写真図版 30) 1B-10C9 に位置し、標高 11.8m の比較的緩い斜面に構築されている。調査区境に位置するため全体形は不明であるが、検出部位から平面形はほぼ円形と推測する。規模は直径約 1.60m、検出面からの深さは 0.40m を測る。覆土は 4 層の斜位堆積であり、底面直上層は炭化物を多量に含むが木炭の

広がり確認されなかった。底面の被熱痕も認められない。山側の壁面は一部被熱していた。出土遺物はない。3類。

SK13（図版37・41、写真図版30） 2B-1H3・8に位置し、標高11.5mの比較的緩い斜面に構築されている。平面形は隅丸長方形、底面はほぼ平坦で水平に構築されている。長軸1.40m、短軸1.16m、検出面からの深さは山側が0.50mを測り、谷側が0.06mと浅く、開放型である。長軸が等高線と平行し、短軸が斜面の傾斜方向を向く。覆土は4層の斜位堆積であり、底面直上層は炭化物を多く含むが底面に木炭の広がり確認されなかった。山側の壁面下半が被熱して酸化している。出土遺物はない。2類。

SK22（図版37・41、写真図版30・31） 2B-1G19・20・24・25に位置し、標高13.5mの比較的緩やかな斜面に構築されている。平面形は隅丸方形で、底面は若干斜面谷側に傾斜している。規模は一辺が約1.30m、検出面からの深さは山側が0.60m、谷側が0.30mを測り、軸は斜面の傾斜方向と同じである。北～西側の山側壁面の被熱が顕著であり、良く酸化している。覆土は3層のレンズ状堆積であり、底面直上層は多量の炭化物を含んでいる。底面の被熱、木炭の出土は確認されなかったが、直径約0.20mのピットを検出した。掘り込みは浅く0.12mほどであり、覆土には炭化物と焼土、焼成粘土塊を少量含んでいた。出土遺物はない。1類。

SK25（図版37・41、写真図版31） 2B-3G20に位置し、標高18.0mの急な斜面に構築されている。平面形は隅丸長方形、底面はほぼ平坦で水平に構築されている。長軸1.32m、短軸0.88m、検出面からの深さは山側が0.26mを測り、谷側は開放している。長軸が等高線と平行し、短軸が斜面の傾斜方向を向く。覆土は4層の斜位堆積であり、底面直上層には被熱した壁面の崩落土が堆積し、その上に炭化物を多く含む層が堆積している。山側の壁面が顕著に酸化している。出土遺物はない。2類。

SK26（図版37・41、写真図版31） 2B-2I11に位置し、標高10.4mの比較的緩い斜面に構築されている。平面形は隅丸長方形、底面はほぼ平坦で若干谷側に傾斜して構築されている。長軸0.88m、短軸0.64mとやや小型であり、検出面からの深さは山側が0.22mを測り、谷側は開放している。長軸が等高線と平行し、短軸が斜面の傾斜方向を向く。覆土は3層の斜位堆積であり、底面直上層は炭化物を多く含む。山側の壁面の被熱が顕著で良く酸化している。底面直上層より磨石（図版43-1）が出土している。2類。

SK27（図版37・41、写真図版31） 2B-2H20に位置し、標高11.8mのやや急な斜面に構築されている。平面形は隅丸長方形、底面はほぼ平坦で若干谷側に傾斜して構築されている。長軸1.24m、短軸0.92m、検出面からの深さは山側が0.43mを測り、谷側は開放している。長軸が等高線と平行し、短軸が斜面の傾斜方向を向く。覆土は3層の斜位堆積であり、底面直上層に炭化物を含むが少量であった。山側の壁面の被熱が顕著で良く酸化している。出土遺物はない。2類。

## 2) 土 坑 (SK)

SK12（図版37・41、写真図版30） 2B-1H20、1I16に位置し、標高9.50mの比較的緩い斜面に構築されている。平面形はやや不整な隅丸方形、断面形は弧状である。底面は若干谷側に傾斜して構築されている。長軸1.28m、短軸1.16m、検出面からの深さは0.20mを測る。長軸が斜面の傾斜方向を向いて構築されている。覆土は単層であり、焼土ブロックが覆土中央付近にややまとまって混ざり、全体的に炭化物を少量含んでいる。壁面・底面の被熱は確認されず、焼土・炭化物等が廃棄されたものとする。遺構底面から土器器片2点出土している。

# 第V章 遺 物

今回の調査によって出土した遺物量は、コンテナ（内寸 54.3 × 33.6 × 10.0cm）換算で示すと、下層（縄文時代）出土の土器が 73 箱、石器が 15 箱、上層（古代・中世）出土の土器が 8 箱、石製品が 1 箱、鍛冶関連遺物が 3 箱となる。下層では縄文時代中期前葉の土器群が主体であり、上層では土師器無台碗を中心とする平安時代の土器群が中心であり、中世の遺物は僅かである。鍛冶関連遺物は分布状況から古代に属するものと思われる。

## 第 1 節 下層（縄文時代）の遺物

### A 縄 文 土 器

#### 1) 概 要

本発掘調査で出土した土器は、縄文時代中期前葉前半段階に属する土器群が主体である。取り上げた土器片はコンテナ（内寸 54.3 × 33.6 × 10.0cm）換算で示すと 73 箱、総重量は 29kg を計る。分類可能な資料は極力抽出し、接合・復元の結果 229 点を掲載した。うち、口縁部残存個体は 116 点を数える。

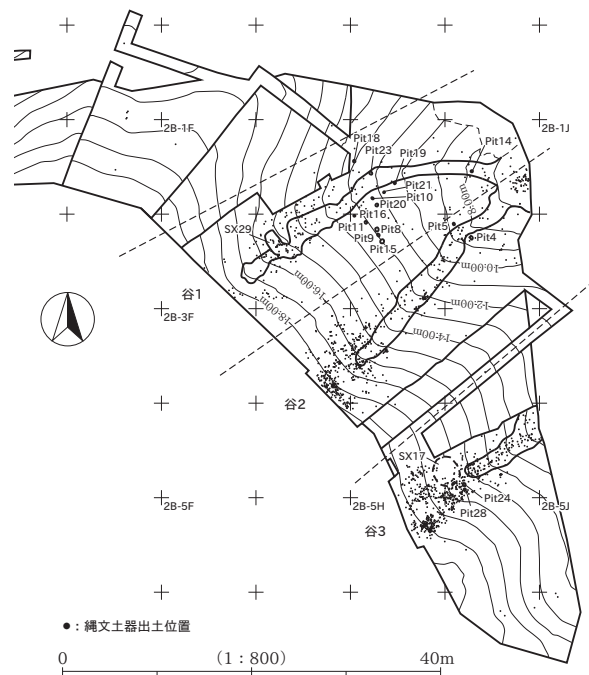
土器の出土状況は、調査区北東側斜面に形成された 3 条の小規模な谷を中心として出土しており、中でも「谷 2」「谷 3」と称した 2 条に集中している（第 18 図・図版 6 重量分布）。（なお、谷 1・谷 2 の合流部については土器の分布状況から便宜的に分離した。）特に斜面上部からの出土が多く認められるため、出土状況からは削平以前の尾根平坦面に、ある程度の規模を有する集落が存在したと推測される。今回の調査により出土した遺物は集落側から廃棄されたものと考えられる。

出土層位としてはⅢ層を中心に、少数であるがⅣ層上部からも出土が認められた。出土位置が急斜面地のため土器片廃棄後の自然の営力による原位置移動が考慮され、層位による土器様相の分析は困難な状況である。ただし廃棄のまとまりとしての谷単位での分析には何等かの傾向が認められる可能性がのこる。まず、本節においては土器群の型式学的分類を行う。

#### 2) 記述の方法と観察表

資料の掲載については、上述の出土状況に基づき「谷」単位で提示する。そのうえで遺構出土の土器を提示し、次いで包含層資料を提示する。包含層資料は下記の分類ごとに提示する。詳細な出土位置については図版 16～18 に示している。谷地形からはずれた位置で出土しているものは大グリッド単位でグリッドの若い方から掲載している。掲載資料の提示方法は実測図・写真で行い、個体の詳細な諸属性については観察表に記載した。

観察表の観察項目は、次のとおりである。報告 No. は、実測図番号で通し番号を付けた。本文中の番号、実測図番号、観察表報告 No.、写真図版の遺物番号は一致する。出土地点は、小グリッドまで記入した。遺構出土遺物は遺構名・層位の順に、遺構外出土の遺物は層位を記入した。器種・分類については以下に記す。法量は器形の外寸を計測し、口径・体部最大径・底径・器高を cm 単位



第 18 図 谷地形と縄文土器分布状況

で記入した。欠損しているものについては、図上復元により法量が復元できる資料についてはその数値を（ ）内に記入した。残存率は口径全体に対する残存部の割合である。

胎土・混和材の分類は以下のとおりとした。

観察は3倍および6倍のルーペを使用して行った。概観すると素地としての粘土の色調は3種に大別され、赤～褐色系統、黄色系統、灰色系統がある。素地中に海綿状骨針が微量認められるものが数点であるが確認された。混和材としては砂粒類（チャート）、破碎鉱物（石英・長石）、雲母・角閃石があり、特に土器や焼土塊の破碎粒の可能性も考えうる橙色土粒、破碎凝灰岩と考えられる白色岩粒が主体的に認められた。これらの粘土・混和材の組成と規模・量により以下のように分類した。

I類 橙色土粒・白色岩粒を主体的に含むグループ。

I a類 やや粒径の大きい橙色土粒・白色岩粒を含み、他の混和材が目立たないもの。赤色系統の粘土に含まれる。

I b類 粒径の小さい橙色土粒・白色岩粒を含み、他の鉱物・チャート・白色粒子等が微量混じるもの。

II類 石英・長石等の破碎鉱物を主体的に含むグループ。雲母の有無により2細分した。

II a類 雲母を含むもの。

II b類 雲母を含まないもの。

III類 小粒の砂粒（チャートを含むもの）が主体となるもの。灰色系統に認められる。

IV類 角閃石がやや目立つもの。少数であるが認められた。

V類 混和材が目立たないもの。

色調はコゲ・ススなどの付着物を避け、一次焼成による胎土色の観察に努め、『新版標準土色帖』（2005年度版）に基づいて記載した。

付着物については、器面内外両面について観察した。主に炭化物・赤色顔料等である。

地文の施文方法については原体の横位回転施文が大半のため、その場合は施文方向の記載は省き、それ以外の場合は地文原体の後に（縦位）・（斜位）などの施文方向を記載した。

### 3) 分類（第19図）

出土した土器は大半が破片資料であり、全体の器形・文様帯構成が判明するものは非常に僅かである。そのため本分類においては施文に重点を置いて分類を行う。文様名称については県内の先学研究・報告書〔小野・前山1988、前山1994a、高橋保1999、寺崎2009、縄文セミナーの会2009、品田ほか2011〕、縄文原体については山内清男氏の研究〔山内1979〕に倣った。

#### I群 縄文前期後葉の土器

1類 櫛歯状工具による弧状条線が施されるもの。前期後葉の諸磯a式に比定されるものである。221の1点のみである。

#### II群 縄文中期前葉前半の北陸の影響を受けた土器

1類 口縁部に集合沈線文が施されるもの。口縁端部には縦位の縄側面圧痕文が施される。

2類 口縁部等に縦位沈線文が施されるもの。

2a類 施される文様帯幅が区画半隆起線2条分ほどのやや幅広のもの。

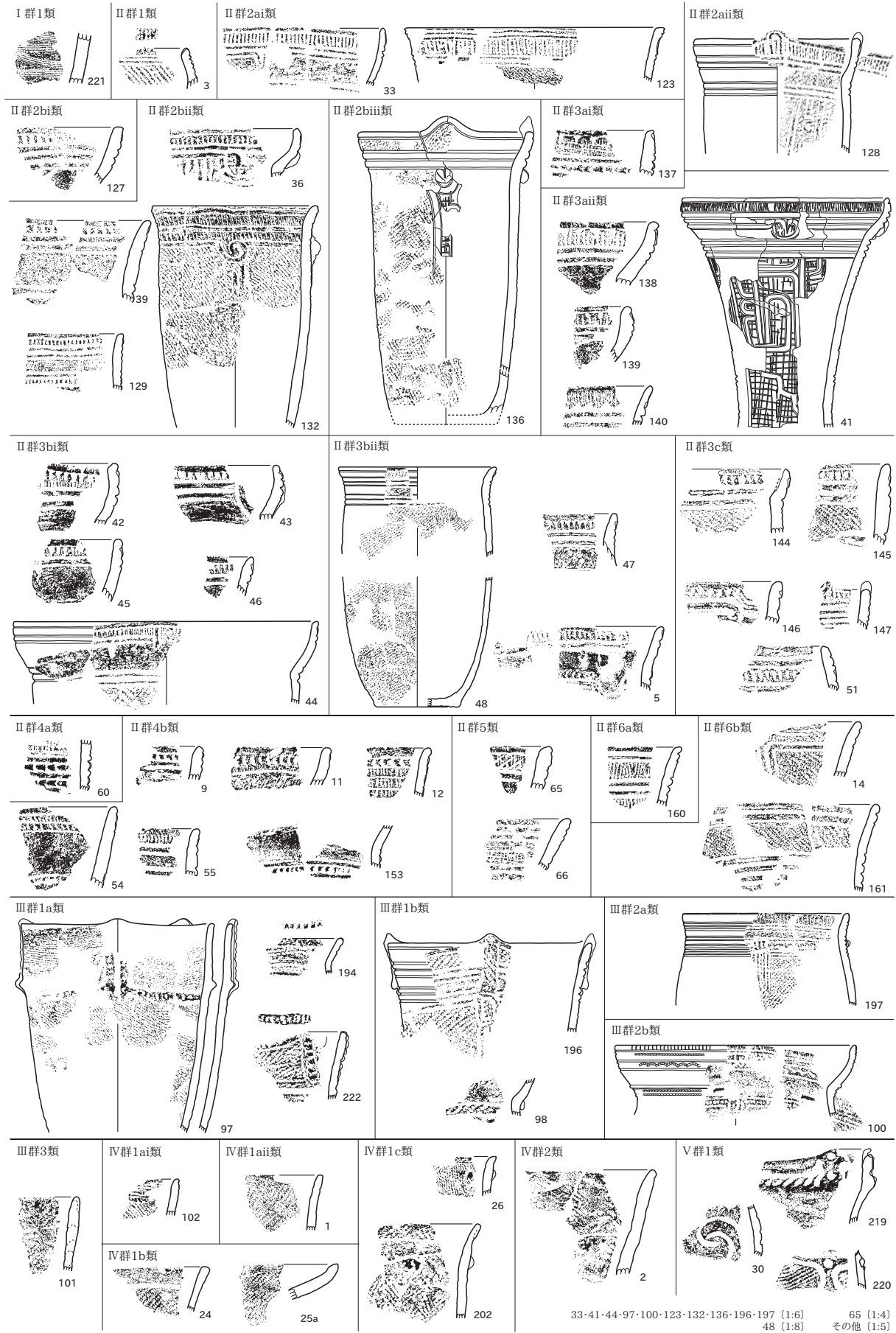
2b類 施される文様帯幅が区画半隆起線1条分ほどの狭いもの。

上記2分類は施文方法により3細分される。

i種 半隆起線文によるもの。

ii種 深く明瞭な沈線文によるもの。

iii種 細く浅い細線文によるもの。



第19図 峰岡城山遺跡縄文土器分類図

3類 蓮華文が施されるもの。本遺跡出土土器の蓮華文はすべて彫去・印刻による彫刻蓮華文である。

3a類 蓮弁の幅が広く、大柄な蓮華文のもの。施文される文様帯幅が区画半隆起線2条分ほどのものである。

三角形印刻文が施され、印刻文間の充填文様には格子目文（3a i類）と縦位沈線文（3a ii類）がある。

3b類 蓮弁の幅が狭く、小柄な蓮華文のもの。施文される文様帯幅は区画半隆起線1条分ほどのものが目

立つ。楔形印刻文〔品田ほか2011〕、またはスリット状の沈線文により密に施される。印刻・沈線文間に細線文が充填されるもの（3b i類）とされないもの（3b ii類）がある。

3c類 やや粗い、または刺突状の楔形印刻文が施され、明瞭な蓮弁が形成されていないもの。施文幅は区画半隆起線1条分ほどである。

4類 爪形文が施されるもの。口縁部上位もしくは頸部に施される。

4a類 工具を器面に対しねかせた押し引きにより間隔をあけて連続施文された爪形文。

4b類 工具を器面に対し斜めに用いたやや間隔の狭い連続刺突状の爪形文。

5類 格子目文が施されるもの。半隆起線による区画内に充填される。

6類 口縁部または頸部に半隆起線が横位施文され、ほかは地文となるもの。

6a類 縦位の撚糸文が施されるもの。

6b類 斜縄文が施されるもの。

7類 半隆起線文が施された破片資料。

7a類 B字状文等の幾何学文様や縦位の半隆起線文が施されるもの。

7b類 頸部に半隆起線文がめぐるもの。

8類 平行沈線文が施された破片資料。

### Ⅲ群 縄文中期前葉前半の異系統土器

1類 東北北部の影響を受けたもの（円筒式系）。

1a類 口縁部文様帯・隆帯上に縄側面圧痕文が施されるもの。

1b類 粘土紐の隆帯が貼り付けられ、隆帯上に斜縄文が施されるもの。

2類 中部高地・関東地方の影響を受けたもの（五領ヶ台式系）。

2a類 交互刺突文が施されるもの。

2b類 角押文が施されるもの。

3類 関東地方の影響を受けたもの（阿玉台式系）。輪積痕を明瞭にのこした指頭圧痕文系土器。

### Ⅳ群 地文・無文土器

1類 器面のほぼ全面に地文が施されるもの。

1a類 全面に地文が施されるもの。

1a i類 口縁部と体部で施文方向が異なるもの。

1a ii類 施文方向が同一のもの。

1b類 口縁部が無文のもの。高台付の浅鉢と無文帯下に沈線文がめぐる深鉢がある。

1c類 頸部に瘤状の突起が貼り付けられるもの。

2類 無文土器。

### Ⅴ群 縄文後期前葉の土器

1類 南三十稲葉式古段階併行のもの。

#### 4) 出土土器各説

① 谷1出土土器（図版20-1～31、写真図版18）

SX29（図版20、写真図版18）

1は口縁部から斜縄文LRが横位施文されたⅣ群1a ii類の地文深鉢である。口縁端部は面取りされている。2

はIV群2類の無文土器である。斜縄文LRの縦位施文がかすかに認められる為、一度斜縄文を施した後に指ナゲ整形により無文としている。

#### 谷1 包含層出土土器 (図版20、写真図版18)

3は細く深い竹管施文により口縁部に横位区画を設け、同一の工具による斜位の集合沈線と、拓影では不明瞭であるが、異なる工具による細線により斜格子目文が施されている。また、口唇部から口唇内面にかけてL原体が縦位押圧されている。竹管施文幅は4mmである。II群1類。

4は口縁部に細い半隆起線による縦位沈線文が施されたII群2a i類である。文様帯区画半隆起線下は器面が荒れており判然としないが斜縄文LRが施されているようである。半隆起線幅は5mm。内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、補正<sup>14</sup>C年代値は4770 ± 30yBPであった(第VI章自然科学分析参照)。もう一つの測定資料である97と近い値となっている。

5は口縁部上位文様帯にスリット状または楔形の印刻による小蓮弁文が施されたII群3b ii類である。口縁部下位文様帯はやや広めの無文帯で、頸部にはII群4b類と同様の爪形文がめぐる。剥落しているが頸部に突起の痕跡がある。半隆起線幅は6mm。

6・7は粗い楔形印刻文が施されたII群3c類である。口縁部文様帯は1段構成であり、幅が狭い。6は区画半隆起線下に斜縄文RLが横位施文されている。半隆起線幅は10mmと太く、施文は浅い。7は縦位施文の斜縄文LRを地文とし、半隆起線により縦位方向のモチーフが描かれている。半隆起線幅は6mmで施文は浅い。

8～12は口縁部に爪形文が施されるII群4b類である。8・9の爪形文下の文様は器面風化のため判然としない。10は口縁部下位文様帯が無文帯である。11はやや斜位の細線文が施され、12は半隆起線による区画がなく、爪形文下に縦位の短沈線が多段施文されている。

13～15は半隆起線により区画された口縁部文様帯内に斜縄文が施されるII群6b類である。13は口縁部上位に半隆起線が3条施され、口縁部文様帯には羽状縄文(LR・RL)が横位に施されている。谷2出土の70と同一個体の可能性がある。半隆起線幅は7mm。14は幅の狭い口縁部文様帯が区画され、区画半隆起線は垂下している。口縁部形状は緩い波状と考えられ、地文は斜縄文LRが縦位施文されている。半隆起線幅は7mm。15は口唇部が面取りされ、口縁上端が半隆起線状になっている。斜縄文LRが横位施文されている。半隆起線幅6mm。

16は半隆起線により文様が施された体部片II群7a類である。縦位に垂下する半隆起線と横位に延びる数条の半隆起線から構成されている。

17～21は頸部に半隆起線がめぐる破片資料のII群7b類である。17は頸部が屈曲し、口縁部下位が外傾、上位が内湾する器形である。口縁部下位文様帯は無文帯である。半隆起線幅は9mmと広めで施文は浅い。18は破片上部から内に屈折する器形である。地文は斜縄文LRの縦位と横位施文による羽状縄文となっている。半隆起線幅は9mmと広く、施文は浅い。19には4条の半隆起線がめぐる。地文は斜縄文Lの横位施文である。半隆起線幅は6mmでしっかりと施文されている。20は地文にLRとLRの結束第1種斜縄文が縦位施文されている。半隆起線は8mmで明瞭に施文されている。21はやや内傾して立ち上がる器形の体部上半である。地文にはLRとRLによる結束第1種の羽状縄文が縦位施文されている。半隆起線幅は7mm。

22・23はIV群1a ii類の地文深鉢である。22は口縁部から斜縄文LRが横位施文され、23には斜縄文LRが縦位施文されている。23には原体末端、または結節部の回転施文が見られる。

24は若干肥厚する口縁部が無文帯となり、無文帯下に沈線文が1条めぐる。体部には斜縄文LRが横位施文されている。IV群1b類。

25は高台付の浅鉢である。口縁上端部と頸部の地文が磨り消され、無文帯となっている。口唇内面が肥厚する形状であり、五領ヶ台式直後段階と考えられる100の口唇部形状と類似する。IV群1b類。

26は口縁部が短く外反する器形で、撚糸文Rを口縁部に横位、体部には縦位施文している。体部上位に瘤状

の突起が付く。IV群 1c 類。

27・28 は底部片である。27 は底部から丸みをもって立ち上がる器形で、地文には斜縄文 RL が横位施文され、底面にはスタレ状の圧痕が認められる。28 は筒形の体部で底部が広がる器形である。地文には斜縄文 LR が横位施文され、底面にはスタレ状の圧痕が認められる。

29・30 は後期前葉のV群 1 類土器である。29 は波状口縁の波頂部より粗い刺突の施された有刻隆帯が垂下している。30 は渦巻文が太い沈線により施されている。外面は丁寧に磨かれ、内面にはケズリ調整が施されている。胎土・調整から谷 3 出土の 219 と同一個体の可能性が高い。

31 は壺形土器の口縁部片と考える。無文で、外反する器形である。時期詳細は不明。

## ② 谷 2 出土土器（図版 20～24・32～118、写真図版 18～21）

### 谷 2 包含層出土土器（図版 20～24、写真図版 18～21）

32～35 は口縁部に半隆起線による縦位沈線文が施される II 群 2a i 類である。32 は口唇部が欠損している。半隆起線幅 6mm で、文様帯区画半隆起線と同じ施文である。33 は口縁部文様帯が 2 段構成であり、上位に縦位沈線文、下位が無文帯である。上下文様帯区画線に突起が剥落した痕跡があり、区画半隆起線は下位文様帯へ垂下する。縦位沈線文の半隆起線は密接施文されており幅は 4mm と狭く、区画半隆起線幅は 6mm である。34 も 2 段構成の口縁部文様帯であり、上位に縦位沈線文、下位が無文帯となる。体部には半隆起線による B 字状文等が施されている。半隆起線の施文具はすべて同一で幅は 5mm である。35 も口縁部文様帯は 2 段構成である。上位に半隆起線による縦位沈線文、下位が無文帯であり、区画半隆起線には爪形文（II 群 4a 類と同様）が施されている。上位文様帯の縦位沈線文は半隆起線間に単沈線が施されているようである。口縁上端部の一条半隆起線は施されていない。半隆起線幅は 7mm。

36～40 は幅狭の口縁部上位文様帯などに縦位の単沈線文が施される II 群 2b ii 類である。36 は口縁部文様帯が 2 段構成であり、下位文様帯には突起と縦位の半隆起線文が施されている。半隆起線幅は 6mm。37 の文様帯構成は不明である。明瞭な沈線により施されている。半隆起線幅は 6mm。38 も口縁部文様帯は 2 段構成であり、下位文様帯は無文帯となっている。半隆起線幅は 6mm。39 も口縁部文様帯は 2 段構成であり、下位文様帯は無文帯である。縦位沈線文の施文方法は工具の縦方向への動きではなく、爪形文施文と同様の横方向からの押圧による。半隆起線幅は 8mm。40 は頸部から体部にかけての資料であるが区画半隆起線上に縦位沈線文が施されている。体部の地文には結束第 1 種の斜縄文 LR が縦位施文されている。

41 は口縁部にやや大柄な蓮華文が施された II 群 3a 類である。口縁部が 2 段に区画され、上位文様帯に蓮華文、下位文様帯は無文帯に突起が付されている。蓮華文は正三角形の彫去ではなく、楔形の印刻によるものである。印刻間に細線文が施された ii 種である。同様の II 群 3a 類に分類される谷 3 出土の 137～140 は正三角形の彫去により大柄な蓮華文が施され、蓮弁の施文幅も 41 より広く、やや様相が異なるようである。41 の体部には半隆起線による縦位の区画・B 字状モチーフ・クランク状のモチーフが描かれ、空間には格子目文が施されている。格子目文は縦位の平行沈線を施文後に横位を施文している。半隆起線幅は 6mm で格子目文の平行沈線幅と同じである。

42～48 は口縁部に小規模の蓮華文が施された II 群 3b 類である。42～46 は幅狭の上位文様帯と無文帯の下位文様帯からなる 2 段構成の口縁部であり、上位文様帯に楔形印刻による小蓮弁文が施され、細線文が充填される 3b i 類である。半隆起線幅はいずれも 8mm である。44 の体部には LR と RL による羽状縄文が縦位に施文されている。47・48 も同様な文様帯構成であるが、上位文様帯の楔形印刻文間には細線文が施されない 3b ii 類である。48 の体部には斜縄文 LR が横位施文されている。半隆起線幅は 7mm である。

49～52 は粗い楔形印刻文が施された II 群 3c 類である。49・50 の口縁部は 1 段構成であると考えられる。49 は体部に斜縄文 LR が横位施文され、半隆起線が弧を描き斜位に施されているため、何らかのモチーフが描かれていたようである。50 は体部に縦位の集合沈線文が施されている。半隆起線幅は 5mm。51 は粗い楔形印刻文が



施されている。文様帯構成は不明である。半隆起線幅は8mm。52は口縁端部が短く外反する器形の口縁部片である。3条の半隆起線が施され、3条目の半隆起線の下側に楔形の印刻文を施している。半隆起線幅は7mm。

53は頸部に半隆起線と楔形印刻文が施された体部片である。頸部に突起が施され、突起上にも楔形印刻が施されている。半隆起線幅は7mm。Ⅱ群3b ii類。

54～64は爪形文が施されたⅡ群4類である。60は4a類、それ以外は4b類の爪形文が施されている。54は半隆起線による区画を持たず、口縁部上位に平行沈線を施した後、連続した爪形文を2段施している。口縁部下位は幅広の無文帯であり、頸部に再び爪形文を施している。55は半隆起線により区画された口縁部上位文様帯に爪形文が施され、下位文様帯は無文帯となっている。口縁上端部には半隆起線は施されていない。この爪形文は半截竹管状工具背面を用いた鋭い爪形文となっている。半隆起線幅は8mm。56は2条の半隆起線により区画された口縁部上位文様帯に爪形文が施されており、口縁端部から隆帯が垂下している。半隆起線幅は7mm。57は口縁部上位が欠損した資料である。下位文様帯は無文帯となり、頸部に半隆起線と爪形文がめぐり、半隆起線幅は7mm。58・59も口縁上端が欠損した資料である。58は上位文様帯に爪形文と3条の半隆起線が施され、下位は無文帯となっている。半隆起線幅は7mm。59は口縁部上位に半隆起線文と爪形文が施され、下位文様帯は無文帯である。半隆起線幅は7mm。60は谷3出土の137と同一個体と考える。61～64は爪形文が施された頸部・体部片である。61は頸部に爪形文がめぐり、直下に逆U字状の半隆起線文が施されている。半隆起線幅は7mm。62は頸部に爪形文と半隆起線がめぐり、半隆起線は体部へ短く垂下する。体部の地文は結束第1種のLR・RLによる羽状縄文が縦位に施文されている。半隆起線幅は7mm。63は半隆起線文下に爪形文が2条施された頸部片である。半隆起線幅は7mm。64には1条の爪形文が見られる。

65・66は口縁部に格子目文が施されたⅡ群5類である。65の口縁部文様帯は2段構成であり、上位文様帯にはヘラ状工具による縦位沈線と斜位沈線による細かい格子目文が施されている。下位文様帯は無文帯である。半隆起線幅は6mm。66は口縁部上位の2条の半隆起線下に、ヘラ状工具による縦位・横位沈線による細かい格子目文が施されている。半隆起線幅は6mm。

67・68は豊原遺跡Ⅵ群3類〔前山1991・2009〕類似土器である。半隆起線による横位区画内に燃糸文が施されたⅡ群6a類である。67の燃糸文は原体Lによる、前山氏の分類〔前山1994a p.314第11図〕の木目状燃糸文C1種である。半隆起線幅は7mm。68は口縁部に燃糸文Rを横位施文した後に半隆起線をめぐらせている。体部は燃糸文Rの縦位施文である。半隆起線幅は7mm。

69～72は口縁部に横位の半隆起線文が施され斜縄文が施されるⅡ群6b類である。69は口縁部文様帯に斜縄文LRが施されている。突起からクランク状に半隆起線が垂下し、口縁部文様帯を上下に区画している。70は谷1出土の13と同一個体の可能性がある。71は内湾してひらく器形の口縁部片である。口縁上端部と頸部に半隆起線がめぐり、区画内に斜縄文LRが施されている。72は口縁上端部が半隆起線状に整形されているが、それ以下は斜縄文RLが横位施文されている。口縁部の区画は不明である。

73～84は体部に縦位の半隆起線によるモチーフが施されたⅡ群7a類である。73は頸部片であろうか。突起下には斜位の細線文が施され、頸部と考えられる部位には半隆起線による区画内に半隆起線による縦位沈線文が充填されている。74は隆帯が口縁部から頸部まで垂下し、頸部の区画半隆起線が隆帯に沿って短く垂下している。隆帯下には縦位の半隆起線文が施され、B字状文が施されている。隆帯上も半隆起線と同一工具により半隆起状になぞられている。体部の地文は斜縄文LRの縦位施文である。75にもB字状文が施され、縦位の半隆起線には斜位の細線文が施されている。76は縦位の半隆起線文、クランク状の半隆起線文が垂下し、地文には斜縄文RLが縦位に施されている。77はh字状の半隆起線文が垂下している。地文は斜縄文LRが縦位施文されている。78は頸部から体部へ半隆起線文が垂下している。地文には斜縄文が施されている。79は横位と縦位の半隆起線文が施されている。80は縦位の半隆起線文が一条と、平行沈線文が施されている。81は横位と縦位の半隆起線文が施され、地文に木目状燃糸文Rが施されている。82～84は体部に縦位の半隆起線文が垂下し、

地文に斜縄文が施されている。82はRの縦位施文で、83はLRの横位施文、84はRLの縦位施文である。

85～91は頸部に半隆起線文がめぐるⅡ群7b類である。85～88は口頸部片であり、口縁部下位文様帯が無文帯である。85・86は3条の半隆起線文が見られる。半隆起線幅は7mm。89は頸部に3条の半隆起線文が施され、体部の地文には結束第1種の羽状縄文（LR・RL）が施されている。底部にはスタレ状の圧痕が見られる。90は体部の地文に斜縄文LRが横位施文され、91は結束第1種の羽状縄文（LR・RL）が縦位施文されている。91は頸部がくびれる器形である。

92～96は平行沈線文が施される体部片のⅡ群8類である。92は頸部に突起がつき、平行沈線文がめぐる。地文は斜縄文LRの横位施文である。93・94は数条の縦位平行沈線文が地文上に施されている。93は斜縄文LR、94は斜縄文RLが縦位施文されている。いずれも体部下位の破片である。95も平行沈線文が施された体部下位片であるが、器面磨滅のため地文は不明である。96は地文が施されず平行沈線文のみが施された底部片である。

97は東北地方北部の円筒式系の影響を強く受けたⅢ群1a類である。非常に緩い波状口縁で口縁部が若干ひらくのみの、ほぼ直線的に立ち上がる器形である。突起は3単位であり、突起から2条の隆帯が垂下し、頸部の隆帯と連結して口縁部の文様帯を区画している。隆帯連結部は瘤状に盛り上がる。隆帯による縦位分割の幅は均等でなく、1区画のみ他の区画より狭い。隆帯上にはLの原体押圧（縄側面圧痕文）が刻目文状に施され、口縁部上位にも2条のL原体の横位押圧が施されている。口縁部区画内の地文は縦位分割の幅が狭い区画のみが斜縄文Lの縦位施文となっており、他の区画は横位施文である。体部はすべて斜縄文Lの縦位施文である。施文に使用された原体はすべて同一のものと考えられる。この土器の位置づけについては、非常に緩い波状口縁、口縁部に垂下する2条の隆帯から円筒上層a2式段階〔小笠原2008〕の影響を受けた在地の土器と捉えたい。放射性炭素年代測定結果は補正<sup>14</sup>C年代値が $4760 \pm 30$ yBPとなっており（第Ⅵ章自然科学分析参照）、もう一つの測定資料である4と近い値となっている。

98は口縁部が内湾してひらく器形の口頸部片である。口縁部下半は磨消による無文帯であり、頸部に粘土紐の隆帯が貼り付けられ、隆帯上に斜縄文LRが横位施文されている。Ⅲ群1b類。

99は口縁部下位が無文帯となり、頸部に「の」字状突起、交互刺突文が施されるⅢ群2a類である。五領ヶ台Ⅱ式併行の土器と考える。

100は連続した角押文が施されるⅢ群2b類である。角押文が施される土器はこの1個体のみである。器面が磨滅しており文様が不明瞭であるが、口縁部文様帯は2段構成であり、口縁部上位文様帯には、上端部から順に鋭い爪形文・連続角押文・連続角押による鋸歯状文・沈線文が施されている。下位文様帯は無文帯である。頸部との境界に細い隆帯が貼り付けられ、突起が剥落した痕跡が見られる。頸部には連続角押文が2条施され、突起部から縦位に集合沈線文が垂下しており、頸部下には弧状の集合沈線文が施されている。キャリパー形の器形・爪形文は北陸系の属性、角押文とその他の文様は中部高地・関東系の属性と捉えられ、両者の折衷型と考えたい。五領ヶ台式直後併行段階に位置づけられると考える。

101は輪積痕が明瞭に残るⅢ群3類の粗製深鉢である。外面には弱い指頭圧痕が認められる。阿玉台式の影響を受けたものとする。

102は撚糸文Lが口縁部に横位、体部に斜位施文されている。Ⅳ群1a i類。

103は口縁端部が短く外反する器形の深鉢である。口縁部から体部まで斜縄文RLが縦位施文されている。破片下部に突起が剥落した痕跡があり、Ⅳ群1c類の可能性はある。

104は横位の羽状縄文が施された深鉢である。口縁部と体部で施文方向の異なるⅣ群1a i類の可能性はある。

105は無文土器の体部片である。外面は指頭による整形後に丁寧に磨かれている。Ⅳ群2類。

106～118は底部片である。106は体部に撚糸文Rが、109は羽状縄文が縦位施文され、その他の底部片には斜縄文が施されている。底面にはスタレ状の圧痕が明瞭に残るもの（108・110・115）と磨り消しているもの

(111・112・116)がある。117には圧痕が認められない。107の底面は特殊であり、平行沈線状の痕跡が見られる。圧痕によるものか工具による施文か判然としないが、若干上げ底状の器形にもかかわらず外周に痕跡がないため、工具による施文の可能性が高いと考える。櫛歯状工具によるものか、一部半隆起状となっているため半截竹管状工具によるものとする。底径が小さく、体部は丸みをもって立ち上がる器形であり、体部の斜縄文は底面ぎりぎりまで丁寧に施文されているため他の土器とは異質な印象をうける。118は底面のみの破片であるが、内面に赤色塗彩が見られる。

### ③ 谷3出土土器 (図版24～27・119～220、写真図版21～23)

#### SX17 (図版24、写真図版21)

119は口縁部が屈曲する器形の深鉢頸部片である。口縁部下位文様帯には地文上に半隆起線による幾何学的な文様が描かれ、頸部には2条の半隆起線文がめぐり、体部には地文の斜縄文RLが横位施文されている。半隆起線幅は約10mmと広く、施文は浅い。Ⅱ群7a類。120は体部に縦位の半隆起線によるh字状のモチーフが描かれている。地文には斜縄文LRが縦位施文されている。Ⅱ群7a類。121は半隆起線により区画された口縁部文様帯内に斜縄文が施されたⅡ群6b類である。LRを区画内は斜位、以下は縦位に施文している。122は交互刺突列が2段施され、以下には斜縄文LRが横位施文されている。頸部から体部の破片である。五領ヶ台Ⅱ式併行のⅢ群2a類。

#### 谷3包含層出土土器 (図版25～27、写真図版21～23)

123～136は口縁部文様帯に縦位沈線文が施されたⅡ群2類である。123～126は口縁部文様帯幅が区画半隆起線2条以上の幅広のもので、明瞭な半隆起線による縦位沈線文が施されたⅡ群2a i類である。縦位沈線文と区画線の半隆起線幅は同一である。123・124は半隆起線文が間隔をあけて施されている。127は幅狭の口縁部上位文様帯に半隆起線による縦位沈線文が施されたⅡ群2b i類である。下位文様帯は無文帯となっている。128～133は口縁部文様帯に深く明瞭な沈線文が施されている。128・131は口縁部上位文様帯幅が広いⅡ群2a ii類、その他は幅狭の文様帯の2b ii類である。128の口縁部文様帯は2段構成であり、上位文様帯に半隆起線による逆U字状の突起と縦位沈線文が施され、下位文様帯には地文の斜縄文LRが横位施文されている。体部には地文上に縦位の半隆起線文が施され、間にB字状モチーフが施されている。129～131の口縁部文様帯も2段構成であり、上位に縦位沈線文、下位が無文帯となっている。129は頸部にも縦位沈線文がめぐり、130は口唇部から下位文様帯へ渦巻き状の突起が垂下し、突起上には斜縄文が施されている。132の口縁部も2段構成であるが、1条の半隆起線により上下を区画され、両段ともに鋭く深い縦位沈線文が施されている。頸部には渦巻き状突起が付き、その下にはU字状に折り返る半隆起線が垂下している。体部の地文には結束第1種の斜縄文Lが縦位施文されている。134～136は口縁部文様帯に縦位の細線文が施されたⅡ群2b iii類である。136の口縁部文様帯は1段構成であり、地文に斜縄文LRが横位施文され、その上から細線文が施されている。小突起下には円形竹管文が施されている。体部の地文には斜縄文LRの縦位施文と横位施文による羽状縄文が施されており、頸部には瘤状突起が付き、突起下には半隆起線によるモチーフが垂下し、半隆起線文間には密な格子目文が施されている。半隆起線幅は1cm程と広い。

137～140は三角形の印刻による大柄な蓮華文が施されたⅡ群3a類である。137は印刻間に格子目文が充填された3a i類である。蓮華文下には半隆起線と爪形文が多段化している。谷2出土の60と同一個体である。138～140は縦位沈線文が充填された蓮華文の3a ii類である。138と139が正位、140は逆位の蓮華文となっている。138・139の下位文様帯は無文帯である。いずれも半隆起線幅は7～8mm。

141～143は楔形印刻が施されたⅡ群3c類である。Ⅱ群3b類のような整然とした蓮弁状となっていないため3c類とした。143は円孔突起が付き、突起上には斜縄文が施され、突起両脇の半隆起線直下に印刻文が施されているが文様詳細は不明である。口縁端面は平坦に面取りされている。

144～147は粗い楔形の印刻文が施されたⅡ群3c類である。いずれも器形・文様構成から口縁部文様帯は

1段構成と考えられる。147は楔形の印刻文以下に半隆起線が多段施されている。

148～153は爪形文が施されたⅡ群4b類の資料である。いずれも頸部付近の破片と考える。148は口縁部がひらく器形であり、頸部に半隆起線と爪形文が施されている。149・150も半隆起線と爪形文の組み合わせであり、151・152は隆帯上に爪形文が施されている。153は大沢遺跡捨場Ⅲd層出土のキャリパー器形の土器〔前山1994a p.309第7図66～68〕と類似し、無文となる口縁部下位文様帯と、頸部には半隆起線と密な爪形文が施されている。

154～159は格子目文の施されたⅡ群5類の破片資料である。154は底部裾が広がる器形の底部付近の破片である。半隆起線による曲線的な区画の中に格子目文が施されている。半隆起線幅は8mmで、格子目文の施文幅との関係は見られない。155・156は半隆起線幅が6mmほどで、格子目文の横位の平行沈線文幅が半隆起線幅と対応しているようである。157・158は屈曲する口縁部の下位文様帯にあたる破片である。1cmほどの幅の広い半隆起線によるモチーフ間に大雑把な格子目文がヘラ状工具により施されている。159は体部上位片であろうか。半隆起線による渦巻き状モチーフ内に非常に細かい格子目文が充填されている。半隆起線幅は5mmほどである。

160は豊原遺跡Ⅵ群3類〔前山1991・2009〕類似土器である。半隆起線による区画内に撚糸文が施されたⅡ群6a類である。撚糸文は原体Lによる、前山氏の分類〔前山1994a p.314第11図〕の木目状撚糸文C1種である。160は口縁上端部に半隆起線が2条施されるが、豊原遺跡では口縁上端部に半隆起線がめぐる例は少ないようである。半隆起線幅は7mm。

161は半隆起線による区画内に斜縄文が施されたⅡ群6b類である。LRが横位施文されている。器形から口縁部文様帯は1段構成であり、頸部には半隆起線が多条施されている。半隆起線幅は8mmで、施文は浅い。

162は口縁端部直下に半隆起線文が1条施され、地文に斜縄文LRが横位施文されたⅡ群6b類である。浅鉢の可能性を考慮したが口縁部はあまりひらかない。

163は半隆起線が多条施された口縁端部片である。文様構成は不明である。

164～181は半隆起線による幾何学文様、もしくは縦位の半隆起線文が施されたⅡ群7a類である。164は傾きから口縁部下位文様帯の破片と考えられる。半隆起線幅は6mm。165・166は同一個体である。頸部に幅広（1cm）の半隆起線がめぐり、体部に地文の斜縄文LRが横位施文され、その上から細い半隆起線（4mm）によりB字状のモチーフが施されている。また、頸部から隆帯が垂下し、隆帯上には爪形文が施されている。167も異なる幅の半隆起線により区画状のモチーフが施されている。半隆起線幅は7mmと4mm。168・169は縦位の半隆起線と曲線状の半隆起線が垂下している。169の体部には縦位の斜縄文LRが施されている。170・171には曲線状の隆帯が垂下している。170には隆帯と直交するように半隆起線が横位に施されているため口頸部の破片と考えられる。171は隆帯に沿って半隆起線が施されている。172・173は頸部片である。突起直下から2条1組の半隆起線が垂下している。172の地文は斜縄文RLの横位施文、173は斜縄文LRの縦位施文である。174は無文の口縁部下位文様帯から体部上位の破片である。頸部に半隆起線がめぐり、突起部から体部に半隆起線が垂下している。文様構成は172・173と同じであるが、半隆起線幅が3mmと非常に細い。体部の地文は不明瞭であるが斜縄文であり、結節があるように見える。175～181は縦位の半隆起線が垂下する体部片である。地文は175が斜縄文LRの横位施文、176はLRの縦位・横位施文による羽状縄文、177・178は斜縄文LRの縦位施文、179は斜縄文RLの縦位施文、180は羽状縄文（LR・RL）の縦位施文、181は不明である。

182～192は頸部に半隆起線がめぐるⅡ群7b類である。182～186は外にひらく器形で口縁部下位文様帯が無文帯となる資料である。183はやや内湾し、186は大きく外反する器形である。体部には斜縄文LRが横位施文されている。187・188は頸部がくびれる器形の頸部片である。187の地文には結束第1種による羽状縄文が縦位施文されており、188は斜縄文LRが横位施文されている。189の地文は不明である。190～

192 は半隆起線が3条めぐり、190の地文は原体Rによる前山氏の分類〔前山1994a p.314 第11図〕の木目状擦糸文C1種である。191の半隆起線上の文様帯は地文磨消による無文帯となっているようである。地文は斜縄文RLの横位施文である。192の半隆起線上の文様帯には斜縄文が施されている。半隆起線幅は188が細く5mm、他は7～8mmほどであるが、191と192の施文は浅く断面形状が扁平である。

193は縦位の平行沈線文が施された体部資料である。地文は施されていない。Ⅱ群8類。

194・195は円筒式の影響を受けたもので、縄側面圧痕文が施されたⅢ群1a類の口縁部片である。194は口唇部に原体Lの縦位押圧が施され、口縁部には2条1対の原体L横位押圧が施されている。上位の1条はやや斜位に押圧されている。口縁部の大きくひろく器形であり、頸部には半隆起線文がめぐり、195は小破片であるが、口縁上端部に原体Lの縦位押圧が施され、口縁部には3条の横位押圧が見られる。豊原遺跡V群1～2類併行の円筒下層d式～上層a式の影響を受けたものと考えられる。

196は粘土紐の貼付けによる棒状隆帯が口縁上端部から頸部まで垂下し、隆帯上に斜縄文が施されているⅢ群1b類である。この棒状隆帯は下部の幅が広がり、盛り上がる特徴的な形状である。この形状の隆帯は円筒上層式に系譜がもとめられ、村上市樋渡遺跡〔田辺・大賀2002〕の16区では同様の隆帯をもつ円筒上層a式の資料が出土している。ただし196は横位の半隆起線により文様帯を区画され、文様帯区画内を地文で充填する豊原遺跡Ⅵ群3類の特徴を有し、口縁部下位文様帯は無文帯、体部にはB字状モチーフが垂下しており北陸系の要素を併せ持つ。同様の特徴を有する土器は阿賀野川流域に認められ、阿賀野市萩野遺跡〔亀井・望月1994〕、阿賀町大坂上道遺跡〔斉藤2008〕に類例がある。

197は五領ヶ台式の集合沈線文系土器の影響を受けたⅢ群2a類である。口縁部上位文様帯には原体Lの縦位押圧が施され、円筒式系の要素も含まれている。口縁部下位文様帯は無文帯となり、頸部には交互刺突文が施される。頸部の突起には刻みが施され、突起下から半隆起線による集合沈線文が垂下している。体部の地文は結束第1種の斜縄文が縦位に施されており、片方の原体RLのみが判別できる。五領ヶ台Ⅱ式併行と考える。

198～202は地文のみが施されたⅣ群1類である。198はRの擦糸文が横位施文された口縁部片である。口縁部と体部で施文方向の異なる1a i類と考える。口唇が内面に短く屈折する器形である。199～201は斜縄文の施されたⅣ群1a ii類である。199は直線的に立ち上がる器形の口縁部片である。斜縄文LRが横位施文されている。200は内湾する器形の口縁部片であり、斜縄文RLが横位施文されている。201は口縁部が外反してひろく器形の深鉢で斜縄文LRが横位施文されている。202は頸部に瘤状突起が貼り付けられたⅣ群1c類である。口縁部は折り返しによる肥厚口縁であり、外反する器形の深鉢である。頸部は地文が磨り消されており、体部には結束第1種による羽状縄文が縦位施文されている。

203～218は底部片である。213以外は底面にスダレ状圧痕が認められる。203・204は体部に縦位の平行沈線文が施されている。203は地文に斜縄文LRが横位施文され、204には地文が見られない。その他の底部片は地文のみが施されており、斜縄文LRの横位施文が205～208、LRの縦位施文が209、縦位の羽状縄文が210・211に施され、その他は器面風化のため不明である。

219・220はV群1類の後期前葉南三十稲葉式古段階併行（後期前葉3段階〔田中耕作1999〕）の深鉢か鉢である。219は口頸部が無文で、頸部がくびれる器形である。口縁部文様は口縁部突起下の縦位の8字状文を中心として、脇には横位の沈線と沈線下に縦位の弧線文がめぐり、外面は丁寧に磨かれ、内面にはケズリ調整が顕著である。胎土・調整から谷1出土の30と同一個体の可能性がある。220は体部上位片であり、円形刺突文を中心に太い沈線により体部文様が描かれている。地文は斜縄文LRが充填されている。

#### ④ 谷外出土土器（図版27-221～227、写真図版23）

221は1B-10E24出土である。櫛歯状工具による横位の弧状条線により肋骨文が施されている。前期後葉の諸磯a式に比定されるⅠ群1類である。内面の磨きが丁寧に行われ、胎土も非常に緻密である。当該期の土器片はこの1点のみである。

222 は出土位置不明のⅢ層一括で採取したものである。東北地方北部の円筒式の影響を強く受けたⅢ群 1a 類土器である。波状口縁となる口縁部片であり、二股となる波頂部の片側のみが残存している。波頂部から垂下する隆帯脇には原体 L が押圧されており、波頂部の形状と垂下する隆帯の傾きから、隆帯は 2 条と考える。口唇部と隆帯上には L の原体押圧が刻目文状に施され、口縁部上位・中位・下位にも間隔を空けて横位押圧されている。地文には斜縄文 L が横位施文されている。頸部には幅の広い沈線文が 1 条めぐり。これらの特徴を有する類似土器は樋渡遺跡 16 区〔田辺・大賀<sup>ほか</sup> 2002 : 遺物図面 34-No.769〕から出土しており、「円筒上層 a 式の要素を強く残す円筒上層 b 式古段階」併行の土器と捉えられている。樋渡遺跡 No.769 の隆帯脇には原体押圧が見られないが、本遺跡 222 には認められる。この属性は円筒上層 b 式から c 式に認められるものであり〔小笠原 2008〕、樋渡遺跡 No.769 より新しい可能性も指摘される。

223 は 2B-6J1 出土である。口縁部上位の幅 1cm ほどの浅い半隆起線がめぐり、それ以下が地文となるⅡ群 6 類の浅鉢である。地文は判然としないが原体 L と R による横位の羽状縄文であろうか。

224 は口縁部文様帯に半隆起線による縦位沈線文が施されたⅡ群 2a i 類である。口縁部文様帯幅は区画半隆起線 2 条分以上の幅広のものであり、縦位の半隆起線は間隔をあけて施文されている。半隆起線幅は 7mm で施文は浅い。

225 は口縁部下位文様帯の無文帯が一部残存しており、頸部に半隆起線が 2 条めぐり、体部の地文には原体 L による木目状撚糸文 C1 種〔前山 1994a p.314 第 11 図〕が施されている。半隆起線幅は 7mm。Ⅱ群 7b 類。

226 は縦位の半隆起線と曲線状の半隆起線が垂下しているⅡ群 7a 類である。地文には斜縄文 LR が縦位施文されている。半隆起線幅は 7mm。

227 は出土位置不明のⅢ層一括で採取した底部片である。底面にはスダレ状圧痕が明瞭に認められ、体部には斜縄文 LR が横位施文されている。

#### ⑤ 土 製 品 (図版 27-228・229、写真図版 23)

228 は幅の広い面が平坦に成形され、狭い面に接合部の剥離痕が見られる。動物形土製品、または土偶の脚と考えられる。

229 は焼成粘土塊である。指による圧痕等は認められない。色調は 5YR6/8 の橙色であり、橙色土粒・白色岩粒・白色粒子を多量に含み、細粒砂が微量混じっている。本遺跡出土土器の主体を占める I a 類胎土と同じ粘土・混和材である。集落において土器製作が行われていた可能性を示す資料である。

## B 石 器

### 1) 概 要

縄文時代の石器は 70 点出土している (図版 28～36)。全点図化した。石器観察表は別表 3 に示した。そのうち縄文時代草創期前半に所属する尖頭器を除く、縄文時代中期前半に属すると考える 69 点について第 4～6 表に石器組成・石材組成・地区別組成を示した。層位の分かる資料については層位別の石器組成と石材組成を第 7・8 表に示した。さらに資料提示にあたり、縄文土器と同様に谷ごとに提示した。その他に搬入礫 51 点 533.08g が確認されている。全て径 2～4cm 程度の磨滅礫である。石材はチャートなどの硬質の石材が多く、在地の石材では無い。何らかの要因で近隣の海岸、河床あるいは段丘から採取され搬入されたものと考えられる。石器の原石に使用するには小さすぎるため一括した。

遺物の出土状況は、草創期の尖頭器 (図版 36-64) が調査区北側の 1B-10E4 (Ⅱ層) から単独出土している。平成 23 年度の試掘調査時に一部拡張したが、周辺から関連資料は出土していない。今回の本発掘調査範囲からわずかにはずれ周辺は全掘していない。中期前半の土器がⅢ～Ⅳ層に出土していることから、原位置を留めておらず尾根上からの崩落による可能性がある。

縄文時代中期の石器は<sup>注1)</sup>、前項の縄文土器出土状況同様に、谷 1・2・3 に集中して石器が出土している (図

版19)。出土層位はⅢ～Ⅳ層が主体で、Ⅲ層の出土量が多い(第7・8表)。層位的な傾向が窺える可能性もあるが記述は一括して行う。谷1ではSX29周辺から、標高の低い方に向かって遺物が出土している。谷1の上部は傾斜がきついことから尾根上からの落下物がSX29周辺に集まっている可能性がある。標高は7mから19mの間で比高差は12mほどである。谷1からは、不定形石器・原石・磨製石斧・敲石・台石・磨石・凹石・石製品などが出土している。谷2は、標高が谷1同様、7mから19mの間で比高差は12mである。傾斜は上部で斜度があり、下部で緩斜面となる。石鏃・楔形石器・不定形石器・原石・剥片・石核・磨製石斧・磨製石斧未成品・敲石・台石・磨石・凹石・砥石などが出土している。谷3は、13mから20mの間で比高差7m程であるが、下部の緩斜面は、調査区外である。石鏃・不定形石器・原石・剥片・石核・敲石などが出土している。

石材は剥片石器には珪質頁岩・珪質凝灰岩・玉髓・鉄石英など越後平野周辺で採取される在地石材が確認されている。また、黒曜石など明らかに遠隔地産の石材も出土しており多様な様相が窺える。さらに、玉未成品には遠隔地石材である蛇紋岩類<sup>注2)</sup>が認められる。また、磨製石斧の石材としては糸魚川地方からの蛇紋岩が多用されている。敲石や台石・磨石・凹石・砥石などに角田山麓で広くみられる安山岩が用いられている。

## 2) 分 類 (第20図)

種別ごとに分類を示す。

**尖 頭 器** 先端部に調整を加えて加工し尖頭部を作出した石器である。出土したものはそのうち、両面体のいわゆる「柳葉形の尖頭器」である。

**石 鏃** 「矢の先端につける石製のやじり」と定義され、分類は鈴木道之助氏の分類案を参考にした〔鈴木1981〕。

A類：基部に茎を持たず、基部に抉りが入る「凹基無茎鏃」である。身が浅いものをA-1類、身が深いものをA-2類とした。

B類：基部に茎を持たず、基部が平坦な「平基無茎鏃」である。

C類：基部に茎を持ち、基部が突出する「凸基有茎鏃」である。

**楔形石器** 両端に両極剥離による剥離痕が認められる石器を楔形石器とした。1点のみ出土している。

**不定形石器** 剥片等に二次加工が施された石器で定形的な形態をとらないものを不定形石器とした〔高橋(保雄)1992〕。不連続の刃部を持ち、剥片に対して刃部が上あるいは側縁につけられたものをA類とし、下縁に付けられたものをB類とした。

**原 石** 使用を目的として、遺跡内に持ち込まれたローリングを受けた石を原石として提示した。石器の石材としての利用法が考えられる。遺跡の地山などからは確認出来ないことから、全て近隣の河床あるいは海岸、または段丘などからの搬入物である。楕円形のをA類、円形のをB類とした。

**剥 片** 石核から打撃により採取された石片を剥片と呼称する。特別に分類は行わなかった。

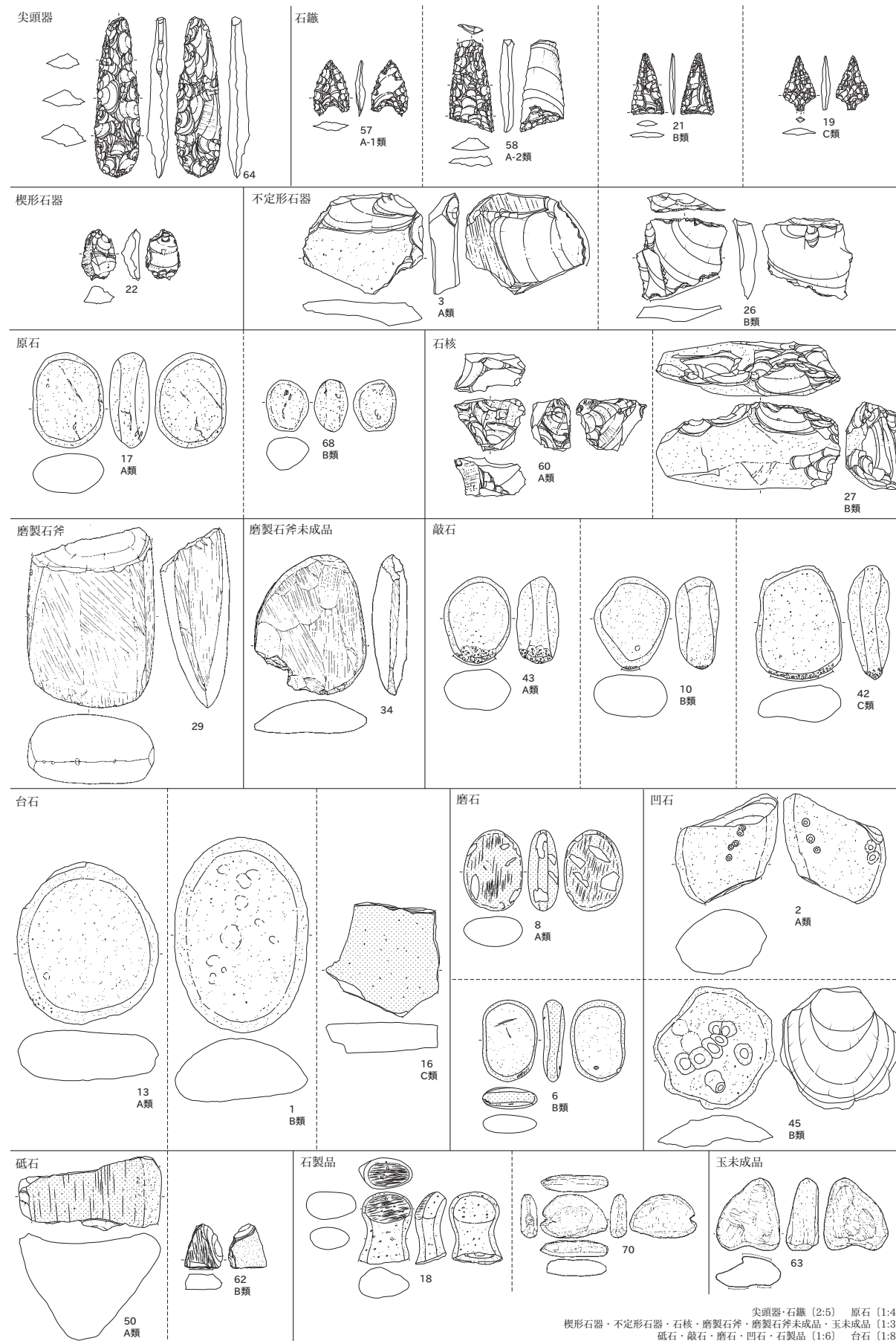
**石 核** 原石や礫などから剥片を採取する目的で行ったものを石核と呼称する。サイコロ状に剥離が進んだものをA類とし、原石から剥離開始の進行が進んでいない資料をB類とする。

**磨製石斧** 側縁が平行し、両刃となる刃部が研磨によって作出された石器である。完形資料が出土していないため分類は行っていない。

**磨製石斧未成品** 磨製石斧と未成品と考えられる。研磨段階の石器である。1点のみである。

**敲 石** 礫の端部に敲打痕が認められる石器である。端部の一端のみに認められる。敲打の進行により先端に剥離が生じている資料もある。敲打は下縁のみである。平面形状が楕円形の石器をA類、逆三角形の石器をB類、方形の石器をC類とした。

**台 石** 大形の素材礫が地面に置かれ、弱い研磨作業、敲き台として用いられたと考えられる石器である。目立った加工は少ない。礫素材をそのまま用い平面形状が円形の石器をA類、礫素材をそのまま用い楕円形の石器をB類、礫素材が分割されて方形状になった石器をC類とした。



尖頭器・石鏃 (2:5) 原石 (1:4)  
 楔形石器・不定形石器・石核・磨製石斧・磨製石斧未成品・玉未成品 (1:3)  
 砥石・敲石・磨石・凹石・石製品 (1:6) 台石 (1:8)

第20図 峰岡城山遺跡縄文時代石器分類図



**磨石** 自然礫が研磨行為によって磨かれた石器である。研磨面の強い・弱いがあるが、風化の度合いの強弱もあり、分類には至っていない。平面形が楕円形の石器をA類、方形状の石器をB類とした。

**凹石** 自然礫の表面に打割によって、蜂の巣状の凹みが生じた石器を凹石とする。両面に凹面がある石器をA類、片面に残る石器をB類とした。

**砥石** 対象物を磨く行為が行われる石器を砥石とした、砥面を持つ。置き砥石として地面に置かれて使用された砥石をA類、手持ち砥石として用いられた小形の砥石をB類とした。

**石製品** 用途不明な研磨痕のある石器を石製品とした。分類は行っていない。

**玉未成品** 蛇紋岩類を用い、原石に研磨痕のみが残る石器を玉未成品とした。1点のみである。

### 3) 出土石器各説

#### ① 谷1出土石器 (図版 28～30-1～18、写真図版 24・25)

SX29 (図版 28、写真図版 24)

台石 (1) と凹石 (2) が出土している。台石は礫素材でB類である。風化が著しく磨面は確認できないが形状から判断した。2は両面に弱い凹面を持つ、A類である。

谷1包含層出土石器 (図版 28～30、写真図版 24・25)

不定形石器 (3)、磨製石斧 (4・5)、磨石 (6～9)、敲石 (10・11)、台石 (12～16)、原石 (17)、石製品 (18) がある。3の不定形石器はA類である。4の蛇紋岩製磨製石斧は基部および刃部を欠く、側縁が平行する定角式の磨製石斧である。断面形は長方形である。5は両刃の蛇紋岩製磨製石斧刃部片である。6はB類の磨石で側縁に強い磨面が残る。7はA類で磨面は全体に弱く確認される。8はA類で全面に強い研磨面が残る。9はB類で半裁されている。側縁周に研磨痕跡が認められる。10・11はB類の敲石である。端部に敲痕が残る。12はB類、13はA類の台石である。風化が著しく磨面は確認できないが形状から台石とした。14・15は安山岩製の台石の破片である。側縁のみの資料である。16はC類の台石である。側縁を打割によって折断されている。表面の全面に弱い磨面が観察される。17は、チャート製のA類の原石である。18は珪質頁岩製の石製品である。自然石の球頭状の頭部平坦面に研磨痕が残る。縄文時代晩期に特徴的な石冠の球頭に似るが、石冠は敲打によって成形し研磨によって形状を整えている場合が多く、異なるものであると考える。全体形は石棒状になる可能性もあるが、同様に敲打の痕跡も無く、用途等不明品である。

#### ② 谷2出土石器 (図版 30～35-19～56、写真図版 25～28)

谷2包含層出土石器 (図版 30～35、写真図版 25～28)

石鎌 (19～21)、楔形石器 (22)、不定形石器 (23・24・26)、剥片 (25)、石核 (27・28)、磨製石斧 (29～33)、磨製石斧未成品 (34)、磨石 (35～37)、敲石 (38～44)、凹石 (45～49)、砥石 (50)、台石 (51～53)、原石 (54～56) が出土している。19はC類の石鎌である。半透明の玉髓を用いている。20はA-1類の石鎌で、鉄石英 (黄玉) を用いている。21は珪質頁岩製の石鎌でB類である。22は黒曜石の剥片を用いた楔形石器である。産地同定では、長野県産 (霧ヶ峰・観音沢・立科) との結果 (第VI章第5節参照) である。23・24・26はB類の不定形石器である。23・24が玉髓製、26が緑色系統の珪質頁岩製である。25は珪質凝灰岩製の剥片である。石核の打面調整剥片の可能性はある。27・28はB類の石核である。27は方形の珪質凝灰岩製自然礫の表面上端と裏面左縁から剥離を開始した初期段階の石核である。貝殻状の剥片が剥出されている。28は鉄石英 (赤玉) 製の楕円形礫の右側面に剥離を開始した初期段階石核である。29は蛇紋岩製の定角式磨製石斧刃部を含む下半資料である。刃部には微細の刃こぼれが観察される。表・裏両面に顕著な研磨痕が認められる。30・32は蛇紋岩製の磨製石斧刃部資料、31・33は緑色凝灰岩製の磨製石斧刃部資料である。34は蛇紋岩製の磨製石斧未成品である。蛇紋岩の自然礫を素材とし、表面に研磨痕跡が8単位程度認められ、裏面には礫面が残り研磨は表面に比べて弱い、側縁にも縦方向の研磨痕跡があり、本来は磨製石斧製作に係わる資料と判断した。上下端に剥離痕があるので、最終的には敲石として利用された可能性もある。35～37はA類の磨石である。35

第1節 下層（縄文時代）の遺物

第4表 縄文時代中期の石器組成と石材組成表

地区	種別															総点数(点)	総重量(g)	平均重量(g)	点数組成(%)	重量組成(%)
	石	楔形石器	不定形石器	原石	剥片	石核	磨製石斧	磨製石斧(未成品)	敵石	台石	磨石	凹石	砥石	石製品	玉未成品					
珪質頁岩	2		1												1	4	181.22	45.31	5.79	0.52
珪質凝灰岩					1	1										2	136.84	68.42	2.90	0.39
玉髓	2		3													5	23.44	4.69	7.24	0.07
安山岩									4	10	2	6	1			23	30,383.42	1,321.02	33.34	86.30
無珪晶質安山岩										1						1	422.06	422.06	1.45	1.20
黒曜石		1				1										2	22.40	11.20	2.90	0.07
緑色凝灰岩				2			2									4	194.93	48.73	5.79	0.55
鉄石英(赤玉)						1										1	279.51	279.51	1.45	0.79
鉄石英(黄玉)	1															1	1.00	1.00	1.45	0.01
蛇紋岩類														1		1	29.62	29.62	1.45	0.08
凝灰岩			1			1			1		2			1		6	855.96	142.66	8.69	2.43
蛇紋岩								6	1							8	806.24	100.78	11.59	2.29
砂岩											1		1			2	206.16	103.08	2.90	0.58
チャート				4						4		1				9	1,661.67	184.63	13.05	4.72
総点数(点)	5	1	5	6	2	3	8	1	10	10	7	6	2	2	1	69				
総重量(g)	8.51	3.78	84.88	531.19	11.52	433.30	516.15	112.65	3,376.94	20,512.06	3,925.86	3,883.50	1,530.19	244.32	29.62		35,204.47	510.21		100.00
点数組成(%)	7.24	1.45	7.24	8.69	2.89	4.35	11.59	1.45	14.5	14.5	10.15	8.69	2.90	2.90	1.45	100.00				
重量組成(%)	0.02	0.01	0.25	1.5	0.04	1.23	1.46	0.32	9.60	58.26	11.15	11.04	4.34	0.69	0.09	100.00				

第5表 縄文時代中期の地区別石器組成表

地区	種別															総点数(点)	総重量(g)	平均重量(g)
	石	楔形石器	不定形石器	原石	剥片	石核	磨製石斧	磨製石斧(未成品)	敵石	台石	磨石	凹石	砥石	石製品	玉未成品			
谷1			1	1		2	2	2	6	4	1		1		18	18,111.05	1,006.17	
谷2	3	1	3	3	1	2	5	1	7	3	3	5	1		38	15,887.68	418.10	
谷3	2	1	1			1		1					1	1	7	383.82	54.83	
谷外						1		1							2	571.90	285.95	
地点不明			2	1									1	4	250.02	62.51		
総点数	5	1	5	6	2	3	8	1	10	10	7	6	2	2	69	35,204.47	510.21	

第6表 縄文時代中期の地区別石材組成表

地区	石材															総点数(点)	総重量(g)	平均重量(g)
	珪質頁岩	珪質凝灰岩	玉髓	安山岩	無珪晶質安山岩	黒曜石	緑色凝灰岩	鉄石英(赤玉)	鉄石英(黄玉)	蛇紋岩類	凝灰岩	蛇紋岩	砂岩	チャート				
谷1	1			7											18	18,111.05	1,006.17	
谷2	2	2	3	15	1	1	4	1	1		4	3	1	2	43	15,887.68	418.10	
谷3	1	2				1			1		1	1	1	7	383.82	54.83		
谷外				1							1			2	571.90	285.95		
地点不明											2		2	4	250.02	62.51		
総点数	4	2	5	23	1	2	4	1	1	6	8	2	9	69	35,204.47	510.21		

第7表 縄文時代中期の層別別石器組成表

地区	層位	種別															総点数(点)	総重量(g)	平均重量(g)
		石	楔形石器	不定形石器	原石	剥片	石核	磨製石斧	磨製石斧(未成品)	敵石	台石	磨石	凹石	砥石	石製品	玉未成品			
谷1	I層															1	178.90	178.90	
	II層									1						9	8,302.63	922.51	
	III層			1				1		4	2			1		9	8,302.63	922.51	
	IV層								2		1					3	1,076.83	358.94	
谷2	I層						1									1	11.28	11.28	
	II層			2			1		1							5	1,960.36	392.07	
	III層	2	1	1	2	1	1		6	1	2	4			21	7,238.89	344.71		
	IV層	1					3	1	1	1					7	5,702.09	814.58		
谷3	I層																		
	II層																		
	III層	1		1					1					1	1	6	382.68	63.78	
	IV層																		
全体	総点数	4	1	5	2	1	3	5	1	9	7	7	4	2	1	53	24,853.66	468.94	
I層							1								1	11.28	11.28		
II層			2			1			1	1			1		6	2,139.26	356.54		
III層	3	1	3	2	1	2	1		7	5	4	4	1	1	36	15,924.20	442.34		
IV層	1					3	1	2	2	1	2				10	6,778.92	677.89		
全体	総点数	4	1	5	2	1	3	5	1	9	7	7	4	2	1	53	24,853.66	468.94	

※ 遺構内および一括出土を除く。

第8表 縄文時代中期の層別別石材組成表

地区	層位	石材															総点数(点)	総重量(g)	平均重量(g)	
		珪質頁岩	珪質凝灰岩	玉髓	安山岩	無珪晶質安山岩	黒曜石	緑色凝灰岩	鉄石英(赤玉)	鉄石英(黄玉)	蛇紋岩類	凝灰岩	蛇紋岩	砂岩	チャート					
谷1	I層																			
	II層															1	178.90	178.90		
	III層	1			4										2	1	1	9	8,302.63	922.51
	IV層														1	1	3	1,076.83	358.94	
谷2	I層																			
	II層			2	2				1								5	1,960.36	392.07	
	III層	1	2	1	10	1	1	1	1							3	21	7,238.89	344.71	
	IV層	1			2		1								3	7	5,702.09	814.58		
谷3	I層																			
	II層																			
	III層	1		1					1					1	1	6	382.68	63.78		
	IV層																			
全体	総点数	4	2	4	18	1	2	3	1	1	1	4	5	2	5	53	24,853.66	468.94		
I層															1	11.28	11.28			
II層			2	2					1						6	2,139.26	356.54			
III層	3	2	2	14	1	2	1	1	1	1	2	1	2	4	36	15,924.20	442.34			
IV層	1			2		1					1	4	1	10	10	6,778.92	677.89			
全体	総点数	4	2	4	18	1	2	3	1	1	1	4	5	2	5	53	24,853.66	468.94		

※ 遺構内および一括出土を除く。

第9表 縄文時代中期の遺構別石器点数組成表

地区	遺構	種別															合計				
		石	楔形石器	不定形石器	原石	剥片	石核	磨製石斧	磨製石斧(未成品)	敵石	台石	磨石	凹石	砥石	石製品	玉未成品					
谷1	SX29																			2点	
	合計																				2点

第10表 縄文時代中期の遺構別石器重量組成表

地区	遺構	種別															合計				
		石	楔形石器	不定形石器	原石	剥片	石核	磨製石斧	磨製石斧(未成品)	敵石	台石	磨石	凹石	砥石	石製品	玉未成品					
谷1	SX29																				8214.6g
	合計																				8214.6g

はチャート製で磨滅痕は弱い、36は風化が著しく形態から磨石と判断した。37は表裏面に磨痕が顕著に残る。38・39・41・43・44はA類の敲石である。大きさは多様である。下端に敲面が残る。44のみ凹痕跡が表面に残る。40・42はC類の敲石である。45～49は安山岩製の凹石である。おそらく地山に含まれる近隣の礫を使用したと考えられる。凹面は顕著ではない。50は断面三角形の安山岩製のA類の砥石である。大きさから置き砥石として利用されたと推定される。51・52は台石の破片資料である。53はB類の台石である。表面の頂部に弱い磨面が確認出来る。54はA類のチャート製原石である。55・56はB類の緑色凝灰岩製の原石である。

### ③ 谷3出土石器 (図版 35-57～63、写真図版 28)

#### 谷3 包含層出土石器 (図版 35、写真図版 28)

石鏃 (57・58)、不定形石器 (59)、石核 (60)、敲石 (61)、砥石 (62)、玉未成品 (63) が出土している。57はA-1類の玉髓製石鏃である。先端が赤色化しており加熱処理による調整剥離〔御堂島1993〕が行われている。58は灰白色の硬質な珪質頁岩を用いたA-2類の石鏃である。基部を再加工して片莖であるが、本来的には凹基無莖鏃と考えられる。基部が被熱しており、57と同様に被熱剥離が行われた可能性がある。59は小形のA類不定形石器である。60は黒曜石製のA類に分類される石核である。角礫(ズリ)を素材とし、5面にわたって剥離痕跡が残る。打面転移を繰り返し、最終的には略サイコロ状の形態となっている。22の楔形石器同様に産地同定では、長野県産(霧ヶ峰・観音沢・立科)との結果(第VI章第5節参照)が出ている。61はB類の敲石である。62は砂岩製の砥石である。B類に分類される。63は緑灰色の良質な蛇紋岩類原石を用いた玉未成品である。相当に円礫化が進んでおり、海岸で採取されたものが遺跡内に持ち込まれた表・裏両面に擦痕が中央部周辺に残る。表面左側縁にもわずかに擦痕が残る。加工の初期段階であると考ええる。

### ④ 谷外出土石器 (図版 36-64～66、写真図版 28)

尖頭器 (64)、磨製石斧 (65)、台石 (66) がある。64の柳葉形尖頭器は、前述したとおり縄文時代草創期の所産である。珪質頁岩を石材とし、裏面に横位置からの1次剥離面が残ることから厚手の剥片が素材とされている。両面からの平坦剥離で断面形は両凸レンズ状に仕上げている。基部は細かい階段状剥離で円基状に調整を行っている。先端はおそらく尖る形態であるが、古い欠損をしている。右側面に槌状のグレーバー状剥離が観察されることから、刺突具として使用され衝撃剥離〔御堂島1991〕によって欠損したと判断した。復元長は約100mmである。65の磨製石斧は刃部片側の側縁が欠損した資料である。使用によつての欠損である。66はC類の台石である。明瞭な磨面は認められない。

### ⑤ 出土地不明石器 (図版 36-67～70、写真図版 28)

剥片 (67)、原石 (68・69)、石製品 (70) がある。67の剥片は、背面に素材礫が残ることから、礫表皮除去の際の剥片である。68はB類、69はA類である。70は凝灰岩を石材とした石製品である。表裏面に素材面を残し、敲打および研磨によって成形されている。表面の左側縁はV字状のスリットが確認出来、研磨によって仕上げられている。上面および下面には2～3面の単位で横方向に研磨した跡が残る。

## 第2節 上層(古代・中世)の遺物

### A 土器

#### 1) 概要

峰岡城山遺跡上層(Ⅱ層)からは古代(平安時代)・中世の土器が出土している。出土状況を見ると調査区北東隅、斜面裾部の標高10mまでの範囲に集中していることが分かる(第13図・図版38)。現況は斜面前面に水田が広がり、本遺跡における出土状況を併せて推測すると、斜面裾部から田面下にかけて当該期の遺跡が埋没している可能性がある。今後確認が必要であろう。

土器出土総量は平箱(内寸54.3×33.6×10.0cm)で8箱ほどとあまり多くはなく、大半が平安時代の遺物である。

出土土器の編年的位置づけや時期区分については、古代の土器は春日真実氏による一連の編年研究（以下、「春日編年」）〔春日 1997a・b・1999・2000〕、珠洲焼については吉岡康暢氏の研究（以下、「吉岡編年」）〔吉岡 1994〕を参照した。

## 2) 古代の土器

すべて包含層出土である。器形全体が把握できる資料が少ないため器種ごとの分類は行っていない（第21図）。

### 須恵器（図版 42-11・13・18、写真図版 32）

貯蔵具の甕（11・13）と長頸壺（18）が出土している。11・13は甕体部片であり、11は体部下位、13は体部上位と考える。産地については11の胎土は比較的精良であり、白色凝灰岩と考えられる非常に小粒な白色粒子を全体的に含んでいる。新津丘陵窯跡群産の可能性はある。13は胎土が精良で器面に黒斑が見られるため佐渡地方小泊窯跡群産の可能性はある。18は長頸壺の口縁～頸部片である。胎土は13に類似し、広口の形態は佐渡小泊窯跡群江ノ下窯跡の長頸壺と類似する。春日編年VI期（9世紀後半から10世紀初頭）に位置づけられる。

須恵器の産地については本遺跡近隣に重稲場窯跡と前平野窯跡がある。重稲場窯跡資料と本遺跡出土資料とは全く異なる胎土であるが、前平野窯跡については詳細が不明であるため検討していない。11の甕体部片が前平野窯跡産の可能性が含まれる。

### 土師器（図版 42-1～10・12・14～17・19～23、写真図版 32）

食膳具の無台椀（1～4・6・8～10・12・14～17・19～23）・黒色土器無台椀（7）、煮炊具の小甕（5）がある。無台椀のうち2・8・12・16・17は口縁部片であり、2・16はロクロナデ痕が明瞭である。口径復元値は16・17が最も小さく12.8cmと12.9cm、次いで12の13.5cm、8の14cm、2の14.8cmとなる。底部片は切り離し技法が判別できるものは全て回転糸切りによるものであり、回転方向が判別できる8個体のうち右回転は3、左回転が5となる。底径は最小が4の4.3cm、最大が3の6.2cmである。5cm台が5個体、6cm台が6個体あり主体となるサイズのようなものである。19の底面には糸切り後、中央寄りに爪形の刺突が多数施されている。

黒色土器無台椀の7は口径16.0cm、底径6.8cm、器高6.2cmの大型品である。底部から丸みをもって立ち上がる器形であり、器厚は非常に薄く精緻なつくりである。底部付近から底面にかけてロクロケズリが施され、内面から口縁部にかけて黒色処理が施され丁寧にミガキ調整がなされている。

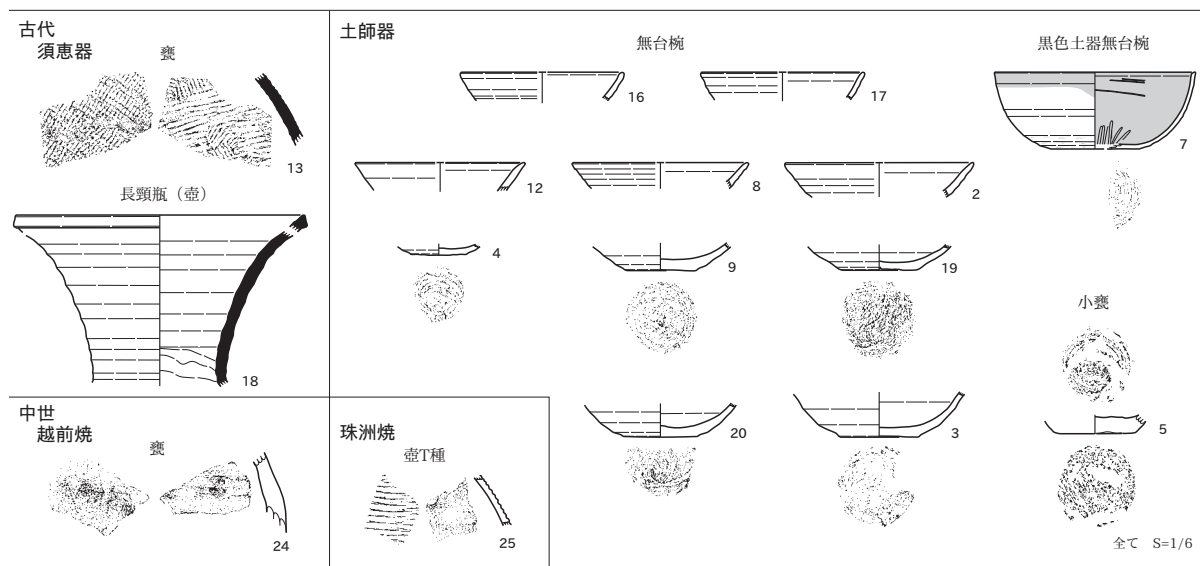
5は小甕の底部と考える。底面は風化が著しいが、内面のロクロナデから回転方向は左と考える。

### 土製品（図版 42-26、写真図版 32）

焼成粘土塊（26）が1点出土している。胎土には海綿骨針を含み、非常に細粒な石英・長石・橙色土粒・白色粒子が全体的に微量認められる。土師器無台椀の胎土と大差はない。

編年的位置づけ 本遺跡資料は、無調整土師器椀が突出しており、須恵器杯類の出土は見られない。須恵器の甕・長頸壺は佐渡小泊窯跡群産の可能性が高い。9世紀以降、食膳具に土師器・黒色土器が定量含まれるようになり、小泊窯跡群産須恵器が越後国内に流入する〔春日 1999〕。出土量が少数であるため統計的な組成ではないが、本遺跡出土資料も上記の傾向にあるといえる。土師器無台椀の法量を見ると、口縁部片と底部片のみのため器形全体の法量は不明であるが、口径は12.8cmから14.8cmであり、12cm台が2個体、13cm台が1個体、14cm台が2個体である。底径は4.3cmから6.2cmの幅があり、4cm台が2個体、5cm台が5個体、6cm台が6個体である。器高指数が算出できないため、底径指数を機械的にあてはめ仮算出すると、最小が35.9、最大が41.9、口径平均・底径平均の底径指数が41.2となる。

法量が把握できる黒色土器無台椀（7）は口径16.0cm、底径6.8cm、器高6.2cm、器高指数38.8、底径指数42.5を測る。口径15～16cmの大型品は今池SD3段階から存在するが〔春日 1997a〕、身が深めで底径の大きい形態は一之口西SD188・SE183・107段階（春日 1997 1期：9世紀末～10世紀初頭）で見られる。同段階に位置づけられている長岡市（旧和島村）八幡林遺跡4期〔田中靖 2005〕の無調整土師器無台椀は口径11.0cm～14.3cm、底径指数40～45程度であり、本遺跡資料と同様な数値となっている。



第 21 図 峰岡城山遺跡古代・中世土器分類図

須恵器長頸壺と以上の土師器無台椀の特徴から本遺跡古代資料は春日編年VI期に収まり、後半を主体とする可能性が高いと考える。

### 3) 中世の土器

2点のみの出土である(図版42-24・25、写真図版32)。すべて包含層から出土した。

24は越前焼の甕である。体部上位、肩付近の破片と考える。外面には釉がかかり、内面は横位にハケメ調整されている。なで肩の器形であるため室町時代の所産である可能性がある。25は珠洲焼壺T種の肩部片である。器厚は薄めで、外面にはタタキメ、内面には無文のあて具痕が見られる。なで肩の器形とタタキメ(叩打文)(吉岡1994)から吉岡編年IV~V期と考える。

## B 石製品

3点出土し全て図化した(図版43-1~3、写真図版33)。1はSK26から出土している。安山岩製のボール状の形状の磨石である。風化により加工痕等は不明である。2・3は包含層出土の砥石である。不定形の凝灰岩を用い、形状から鉄製品などの研磨に用いた手持ちの砥石と考えられる。

第 11 表 古代以降の石製品組成と石材組成表

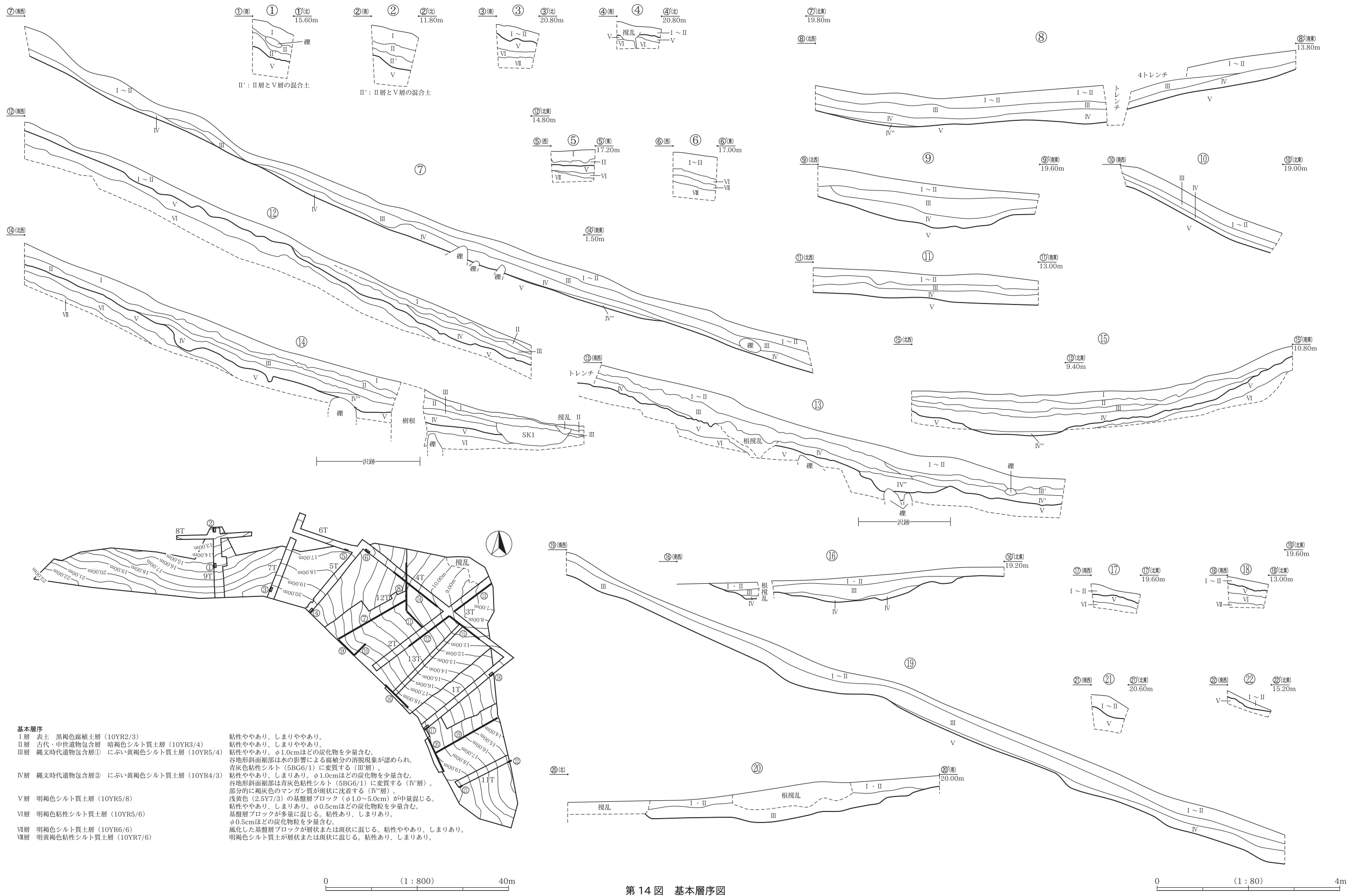
石材	種別	磨石	砥石	総点数(点)	総重量(g)	平均重量(g)	点数組成(%)	重量組成(%)
安山岩		1		1	3,410.00	3,410.00	33.34	94.86
凝灰岩			2	2	185.15	92.57	66.66	5.14
総点数(点)		1	2	3			100.00	
総重量(g)		3,410.00	185.15		3,595.15	1,198.38		100.00
点数組成(%)		33.34	66.66				100.00	
重量組成(%)		94.86	5.14					100.00

## C 鍛冶関連遺物

21点を図示した(図版44-1~21、写真図版33)。内訳は板状製品1点(2)、炉壁(炉底)1点(21)、鉄滓19点(1・3~20)である。出土位置は古代土器の分布と重なり、同時期の所産の可能性はある。1の鉄滓が焼土坑SK2出土であり、他は包含層I・II層出土である。1もSK2覆土上位層(1層)出土であり、埋没最終段階での流入と考えられる。鉄滓はすべて鍛冶滓であり、2の板状製品が第2次製鉄(精錬・大鍛冶)(川上1996)による産物と考えられる。21は炉壁である。内面が溶解してガラス質化しており、外壁側に流入している。ガラス成分の流入と椀状の断面形状から炉底の可能性も考えられる。

### 注

- 注1) 出土縄文土器の中には前期後半および後期前半の資料も一部含まれるが、大半は中期前葉が主体を占めていることから、中期前葉の石器群として扱い記述する。
- 注2) 本書で用いた「蛇紋岩類」および「蛇紋岩」の大部分は「透石岩類」(中村2011)の可能性が高いが、詳細な鑑定を行っていないので、従来通りの名称を用いた。



第14図 基本層序図

## 第VI章 自然科学分析

### 第1節 植物珪酸体分析

#### A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法で、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている [杉山 2000]。

#### B 試料

分析試料は、3 トレンチ 2B-2I6 地点において縄文時代遺物包含層とされるⅢ層とⅣ層 (上、下) から採取された計 3 点である。

#### C 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 [藤原 1976] を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^\circ\text{C}$  で 24 時間乾燥 (絶乾)。
- 2) 試料約 1g に対し直径約  $40\ \mu\text{m}$  のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法 ( $550^\circ\text{C}$ ・6 時間) による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射 ( $300\text{W}$ ・ $42\text{KHz}$ ・10 分間) による分散。
- 5) 沈底法による  $20\ \mu\text{m}$  以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数はガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる [杉山 2000]。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### D 分析結果

##### 1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 12 表および第 22 図に示した。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

ウシクサ族 A (チガヤ属など)

第 12 表 峰岡城山遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		2B-216		
分類群	地点・試料 学名	III層 IV層上 IV層下		
		イネ科	Gramineae	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	20	14	20
タケ亜科	Bambusoideae			
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	125	54	20
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	217	176	179
未分類等	Others	191	149	132
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	7	14	20
棒状珪酸体	Rodshaped	20	27	20
未分類等	Others	105	102	60
樹木起源	Arboreal			
その他	Others	39	14	13
植物珪酸体総数	Total	724	548	463

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)  
試料の仮比重を1.0と仮定して算出

チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.94	0.41	0.15
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.65	0.53	0.54
タケ亜科の比率 (%)				
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	59	43	22
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	41	57	78
メダケ率	Medake ratio	0	0	0

[イネ科-タケ亜科]

チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

その他

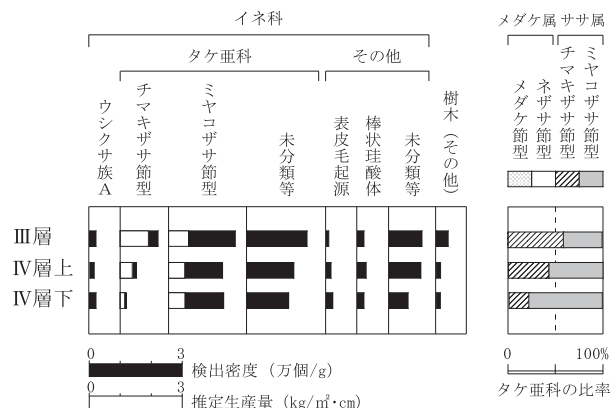
2) 植物珪酸体の検出状況

IV層 (上、下) では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族A、チマキザサ節型、および樹木 (その他) なども認められた。III層ではチマキザサ節型がやや増加している。なお、イネ科栽培植物 (イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど) に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、量的には比較的少ないものの、IV層ではミヤコザサ節型、III層ではチマキザサ節型が優勢となっている。

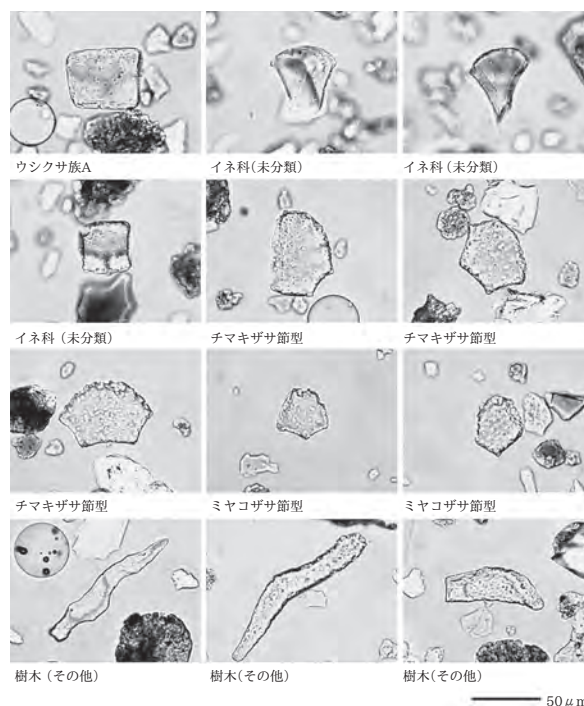
E 考 察

縄文時代遺物包含層とされるIII層とIV層 (上、下) の堆積当時は、ササ属 (チマキザサ節やミヤコザサ節など) を主体としてウシクサ族なども生育するイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

ササ属のうち、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ないところに分布しており冬季の乾燥に適應しているが、チシマザサ節やチマキザサ節は日本海側の多雪地帯に分布しており冬季の乾燥に弱い [室井 1960、鈴木 1996]。III層では後者が優勢になっていることから、当時はIV層の時期よりも比較的積雪の多い気候環境であった可能性が考えられる。



第 22 図 峰岡城山遺跡における植物珪酸体分析結果



第 23 図 峰岡城山遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



## 第2節 花粉分析

### A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物で保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### B 試料

分析試料は、3トレンチ 2B-2I6 地点において縄文時代遺物包含層とされるⅢ層とⅣ層（上、下）から採取された計3点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

### C 分析方法

花粉の分離抽出は、中村〔1967〕の方法をもとに次の手順で行った。

- 1) 試料から 1cm<sup>3</sup> を秤量。
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて 15 分間湯煎。
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去。
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置。
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理。
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成。

- 8) 検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉〔1973〕および中村〔1980〕をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

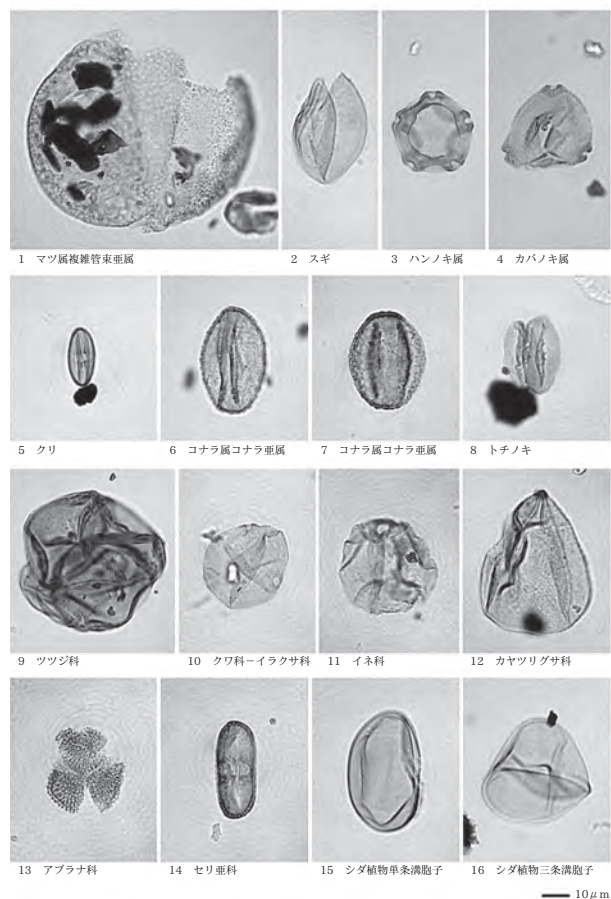
### D 結果

#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 12、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 4、シダ植物孢子 2 形態の計 19 である。分析結果を第 13 表に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。次に出現した分類群を記載する。

第 13 表 峰岡城山遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	2B-2I6		
			Ⅲ層	Ⅳ層上	Ⅳ層下
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>		マツ属単維管束亜属	1		
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ			5
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	2	1	
<i>Betula</i>		カバノキ属		1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1		
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	20		
<i>Rhus</i>		ウルシ属	1		
<i>Acer</i>		カエデ属			2
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	6	1	
Ericaceae		ツツジ科	1	5	
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属	1		
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	2		
Nonarboreal pollen		草本花粉			
Gramineae		イネ科	6		
Cyperaceae		カヤツリグサ科			1
Cruciferae		アブラナ科	5		
Apiodeae		セリ亜科	1		
Fern spore		シダ植物孢子			
Monolate type spore		単条溝孢子	32	42	1
Trilate type spore		三条溝孢子	2	1	1
Arboreal pollen		樹木花粉	35	8	7
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	2	0	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	12	0	1
Total pollen		花粉総数	49	8	8
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料 1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	3.9 × 10 <sup>2</sup>	0.7 × 10 <sup>2</sup>	0.6 × 10 <sup>2</sup>
Unknown pollen		未同定花粉	7	3	2
Fern spore		シダ植物孢子	34	43	2
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	<(+) <(+) <(+) <(+) <(+		



第24図 峰岡城山遺跡の花粉・胞子

## E 考 察

縄文時代遺物包含層とされるⅢ層とⅣ層(上、下)では、花粉があまり検出されないことから、詳細な植生や環境の推定は困難であるが、Ⅳ層の堆積当時は周辺にツツジ科、ハンノキ属、カバノキ属、トチノキ、シダ植物などが生育していた可能性が考えられる。ツツジ科は花粉生産量の少ない虫媒花植物であることから、調査地点に近接して生育していたことが想定される。

Ⅲ層の堆積当時は、周辺にナラ類(コナラ属コナラ亜属)、トチノキ、クリなどの樹木、およびイネ科、アブラナ科、シダ植物などの草本類が生育していた可能性が考えられる。イネ科やアブラナ科は畑作要素でもあり、周辺の森林が二次林化していたことも想定される。

## 第3節 樹種同定

### A はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体で、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能で、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### B 試 料

同定対象試料は、時期が不明の炭化材1点である。

### 〔樹木花粉〕

マツ属単維管束亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ウルシ属、カエデ属、トチノキ、ツツジ科、トネリコ属

### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

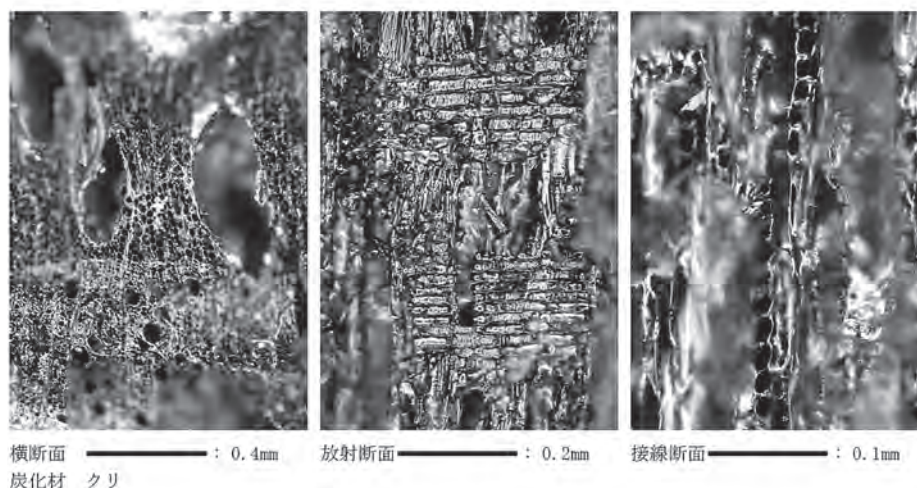
### 〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科  
〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三條溝胞子

### 2) 花粉群集の特徴

Ⅳ層下では、スギ、カエデ属、カヤツリグサ科などが検出されたが、いずれも少量である。Ⅳ層上では、ツツジ科、ハンノキ属、カバノキ属、トチノキなどが検出されたが、やはりいずれも少量である。Ⅲ層では、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、クリ、イネ科、アブラナ科などが検出されたが、同じようにいずれも比較的少量である。なお、Ⅳ層上とⅢ層ではシダ植物単条溝胞子が比較的多く認められた。



第 25 図 峰岡城山遺跡の炭化材

## C 分析方法

樹種同定の方法は次の手順による。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去。
- 2) 試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口，放射断面：柾目，接線断面：板目）を作成。
- 3) 落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定。

## D 結果

分析の結果、同定対象試料は、クリの炭化材片と同定された。その特徴を次に記して、顕微鏡写真を示す。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

横断面では、年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面では道管の穿孔は単穿孔を示す。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面では放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径 2m に達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

## E 考察

時期不明の炭化材 1 点はクリと同定された。クリは温帯に広く分布する落葉高木で、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。また、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

## 第 4 節 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定

### A 測定試料と測定方法

新潟市峰岡城山遺跡の発掘調査の際に採取された 3 試料（第 14 表）を対象に、酸-アルカリ-酸洗浄の後に、加速器質量分析（AMS）法により放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定を行った。試料の詳細を第 14 表に示す。年代測定は米国の Beta Analytic Inc.（ベータ社）で実施され、測定には 3MV HVEE タンデトロン加速器が使用された。

第14表 放射性炭素年代測定を試料と方法

試料	採取地点	重量	前処理	測定方法
TNH-164MJ	峰岡城山遺跡・SK1 (底面炭化物)	1.44g	酸-アルカリ-酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
TNH-165P1	峰岡城山遺跡・土器No.97	微量	酸-アルカリ-酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法
TNH-166P2	峰岡城山遺跡・土器No.4	微量	酸-アルカリ-酸洗浄	加速器質量分析 (AMS) 法

土器試料は、付着した炭化物が測定対象。炭化物採取は、発掘調査担当者により実施された。

## B 測定結果

測定結果および暦年較正年代を第15表に示す。SK1 炭化物、縄文土器 No.97 付着炭化物、縄文土器 No.4 付着炭化物の補正  $^{14}\text{C}$  年代は、順に  $850 \pm 30$  y BP (Beta-330455)、 $4760 \pm 30$  y BP (Beta-330456)、 $4770 \pm 30$  y BP (Beta-330457) である。各用語の意味は次の通りである。

### 1) 未補正 $^{14}\text{C}$ 年代値 (measured radiocarbon age)

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は、国際的慣例によりリビー (Libby) の 5,568 年を用いた。

### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値 (conventional radiocarbon age)

$\delta^{13}\text{C}$  測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を  $-25$  (‰) に標準化することによって得られる年代値である。

### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の  $^{14}\text{C}$  の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較、湖の年縞堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。

使用したデータセット : INTCAL09

Heaton, et al., (2009) Radiocarbon, 51 (4), p.1151-1164.

Reimer, et al., (2009) Radiocarbon, 51 (4), p.1111-1150.

Stuiver, et al., (1993) Radiocarbon, 35 (1), p.137-189.

Oescheger, et al., (1975) Tellus, 27, p.168-192. (海洋性試料については, Marine04)

較正曲線のスムーズ化に用いた理論 : Talma, A.S. and Vogel, J.C. (1993) A Simplified Approach to Calibrating  $\text{C}^{14}$  Dates. Radiocarbon, 35 (2), p.317-322.

なお、暦年代の交点とは、補正  $^{14}\text{C}$  年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1  $\sigma$  (68% 確率)・2  $\sigma$  (95% 確率) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

第15表 放射性炭素年代測定結果

試料	未補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (yBP)	$\delta^{13}\text{C}$	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (yBP)	暦年較正年代 (CalBC/AD)	測定番号
TNH-164MJ (SK1)	$860 \pm 30$	-25.9	$850 \pm 30$	2 $\sigma$ : AD1160 ~ 1260 (CalBP800 ~ 690) 1 $\sigma$ : AD1160 ~ 1220 (CalBP790 ~ 730) 交点 : AD1210 (CalBP740)	Beta-330455
TNH-165P1 (No.97)	$4740 \pm 30$	-23.6	$4760 \pm 30$	2 $\sigma$ : BC3640 ~ 3510 (CalBP5590 ~ 5460), BC3420 ~ 3420 (CalBP5370 ~ 5360), BC3410 ~ 3400 (CalBP5360 ~ 5350), BC3400 ~ 3380 (CalBP5350 ~ 5330) 1 $\sigma$ : BC3630 ~ 3620 (CalBP5580 ~ 5570), BC3610 ~ 3550 (CalBP5560 ~ 5500), BC3540 ~ 3520 (CalBP5490 ~ 5470) 交点 : BC3630 (CalBP5580), BC3580 (CalBP5530), BC3530 (CalBP5480)	Beta-330456
TNH-166P2 (No.4)	$4770 \pm 30$	-25.3	$4770 \pm 30$	2 $\sigma$ : BC3640 ~ 3520 (CalBP5590 ~ 5470), BC3390 ~ 3390 (CalBP5340 ~ 5340) 1 $\sigma$ : BC3630 ~ 3620 (CalBP5580 ~ 5570), BC3600 ~ 3520 (CalBP5550 ~ 5470) 交点 : BC3630 (CalBP5580), BC3580 (CalBP5530), BC3570 (CalBP5520), BC3570 (CalBP5520), BC3530 (CalBP5480)	Beta-330457

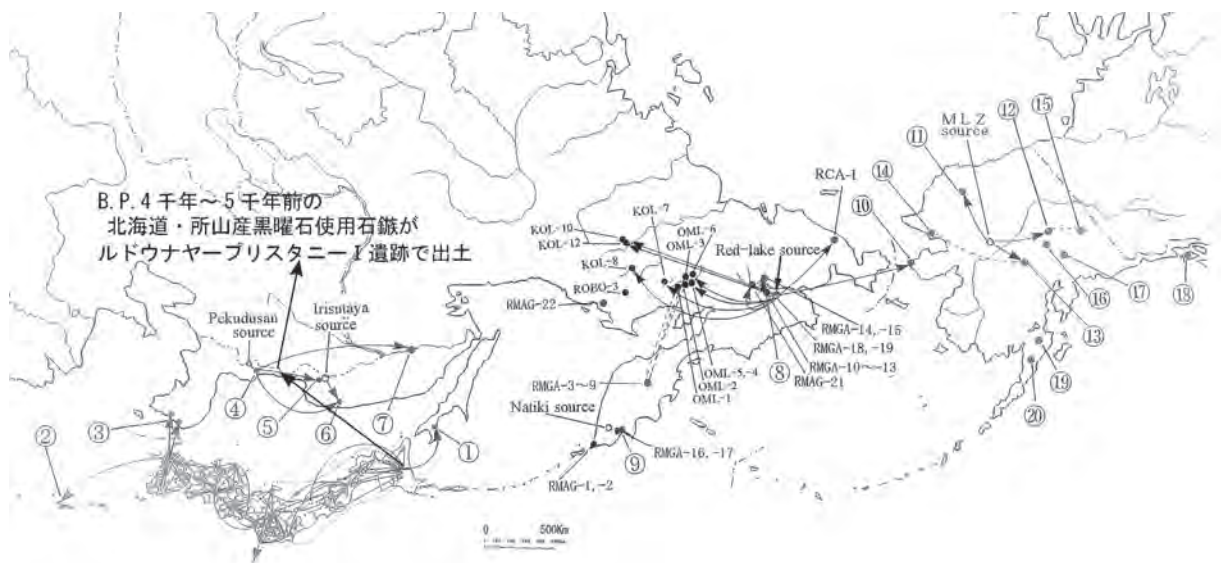
## 第5節 峰岡城山遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析

### A はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行なっている〔藁科・東村 1975・1983、藁科ほか 1977・1978〕。黒曜石の伝播に関する研究では、伝播距離は千数百キロメートルは（第26図）一般的で文系考古学（様式学）では更に広い範囲の様式伝搬が推測されてきた。様式伝搬に石材が伴ったかは、理系考古学（自然科学）の結果を取り入れ、真の考古学研究で先史を明らかにする必要がある。6千キロメートルを推測する学者もでてきている。このような研究結果が出てきている現在、正確に産地を判定すると言うことは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則は、同じ元素組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれば、科学とは、仮説をたて正しいか否かあらゆる可能性を否定することにある。即ち十分条件の証明が非常に重要であると言い換えられると思われる。遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。

### B 産地分析の方法

先ず原石採取であるが、本来、先史・古代人が各産地の何処の地点で原石を採取したか不明であるために、一カ所の産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として、理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT2乗検定がある。ホテリングのT2乗検定法の同定とクラスター判定法（同定ではなく分類）、元素散布図法（散布図範囲に入るか否かで判定）を比較するとク

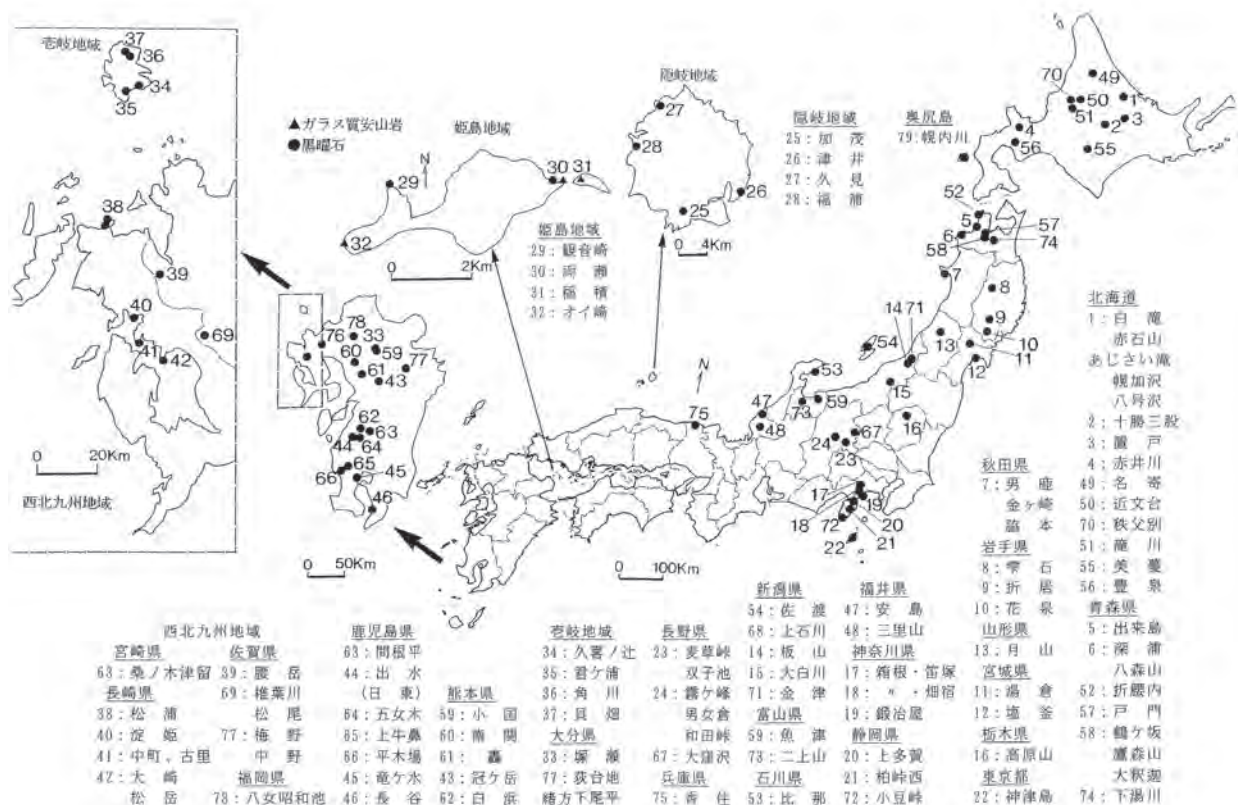


第26図 日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラスカ州における第16表使用の石器原材伝播図

クラスター判定法は判定基準が曖昧である。クラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A 原石製の遺物と A、B、C 産地の原石でクラスターを作ったとき遺物は A 原石とクラスターを作るが、A 原石を抜いて、D、E 産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物が E 産地とクラスターを作ると、A 産地が調査されていないと、遺物は E 原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。A 原石製遺物と分かっているならば、E 原石とクラスターを作らないように作為的にクラスターを操作できる。元素散布図法は肉眼で原石群元素散布の中に遺物の結果が入るか図示した方法で、原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学では最も適した方法であるが、産地分析からみると、クラスター法より、さらに後退した方法で、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明で、分析する原石の数で、原石数の少ないときには、A 産地と B 産地が区別できていたのに、原石数を増やすと、A 産地、B 産地の区別ができなくなる可能性があり（クラスター法でも同じ危険性がある）判定結果に疑問が残る。産地分析としては、地質学の常識的な知識（高校生）さえあればよく、火山学、堆積学など専門知識は必要なく、分析では非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を評価しながら、同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定を行うかである。クラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法でホテリングの T2 乗検定法である。仮に調査した 329 個の原石・遺物群について散布図を書くと、各群 40 個の元素分析結果を元素散布図にプロットすると、329 群×40 個 = 13160 点の元素散布図になり、これが 8 元素比では 28 個の 2 元素比の散布図となり、この図の中に遺物の分析点をプロットして産地を推測することは、想像できても実用的でない。もし、散布図で判定するならば、あらかじめ遺物の原石産地を決めて、予想した産地のみで散布図を書き産地を決定する。これでは、一致する産地のみを探すのみで、科学的分析のあらゆる可能性を否定することが科学分析であると言うことに反し科学的産地分析と言えない。ある産地の原石組成と遺物組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。考古学では、人工品の様式が一致するという結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調合素材があり一致するということは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致するということは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングの T2 乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある遺物原材が A 産地に 10% の確率で必要条件がみたされたとき、この意味は A 産地で 10 個原石を採取すると 1 個が遺物と同じ成分だと言うことで、現実であり得ることであり、遺物は A 産地原石と判定する。しかし、他の産地について、B 産地では 0.01% で一万個中に一個の組成の原石に相当し、遺跡人が 1 万個遺跡に持ち込んだとは考えにくい。従って、B 産地ではないと言う十分条件を満足する。また C 産地では百万個中に一個、D 産地では……一個と各産地毎に十分条件を満足させ、客観的な検定結果から必要条件と十分条件をみたした A 産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。今回分析した遺物は新潟市に位置する峰岡城山遺跡から出土した黒曜石製遺物について産地分析の結果が得られたので報告する。

### C 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比の値をそれぞれ用いる。また、これらの元素比で区別が困難な遺物についてはK/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Fe、Si/Feの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行った。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を第27図に示す。元素組成によってこれら原石を分類し第16表に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると329個の原石群になる。ここでは東北、北陸地域および中信高原などの産地を選択して記述すると、出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た元素組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱈ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、成田群、浪岡町泉民の森地区より産出の大釈迦群（旧浪岡群）、青森市西田沢群は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の元素組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石の中には5cm大のものもみられる。また、下湯川産黒曜石についても原石群を作った。男鹿群は秋田県男鹿市の男鹿半島の金ヶ崎温泉のあった海岸より採取された原石で作られ、男鹿半島の脇本地区で採取された原石の元素組成は男鹿群と相互に近似していることから、この両産地の原石の起源は同じと考えられる。岩手県の黒曜石原産地



第27図 黒曜石原産地





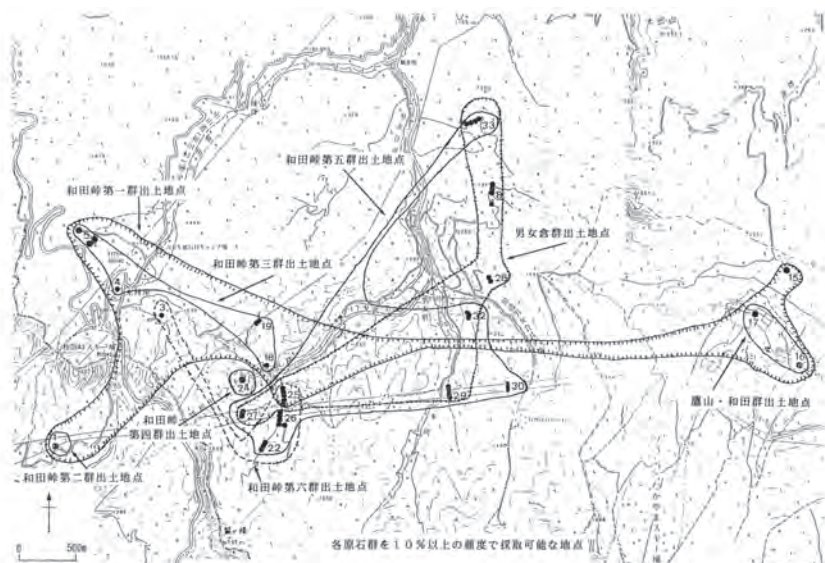
第 5 節 峰岡城山遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析

各地遺物群名	分析 個数	元 素 比										
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
ロシア アパチャ カ チャ カ 半 島	バラトウンカ-1	56	0.706±0.048	0.225±0.011	0.048±0.010	1.851±0.180	0.246±0.014	0.752±0.070	0.075±0.016	0.015±0.008	0.041±0.004	0.482±0.022
	バラトウンカ-2	40	0.717±0.018	0.269±0.006	0.031±0.006	1.604±0.043	0.119±0.007	0.398±0.016	0.095±0.008	0.016±0.006	0.031±0.003	0.402±0.010
	バラトウンカ-3	48	0.384±0.008	0.097±0.004	0.043±0.007	1.642±0.053	0.262±0.011	0.753±0.026	0.066±0.026	0.013±0.002	0.017±0.003	0.176±0.009
	バラトウンカ-4	48	0.141±0.007	0.074±0.003	0.029±0.004	1.069±0.025	0.203±0.007	0.150±0.006	0.106±0.009	0.024±0.006	0.016±0.002	0.146±0.004
	アパチャ	40	0.255±0.007	0.160±0.005	0.029±0.004	1.121±0.034	0.192±0.007	0.151±0.008	0.106±0.009	0.024±0.007	0.026±0.003	0.303±0.007
	ミリコボ遺物群	45	0.467±0.009	0.163±0.005	0.045±0.002	1.528±0.047	0.186±0.015	0.490±0.019	0.118±0.011	0.010±0.013	0.032±0.001	0.448±0.010
	Ushiki V 遺物群	44	0.184±0.006	0.074±0.003	0.075±0.004	1.406±0.079	0.756±0.038	0.435±0.045	0.151±0.027	0.281±0.079	0.022±0.001	0.328±0.003
	Ushiki 遺物群	50	0.537±0.015	0.186±0.011	0.061±0.004	1.384±0.082	0.253±0.023	1.423±0.086	0.080±0.018	0.020±0.023	0.030±0.001	0.397±0.012
	Ushiki II 遺物群	50	0.281±0.005	0.141±0.003	0.066±0.002	1.250±0.028	0.377±0.017	0.568±0.022	0.114±0.015	0.151±0.032	0.028±0.001	0.386±0.004
	GUL09 遺物群	40	0.167±0.017	0.074±0.003	0.035±0.002	1.498±0.030	0.975±0.037	0.215±0.023	0.220±0.018	0.139±0.038	0.023±0.001	0.327±0.005
	XMK02 遺物群	40	2.897±0.065	1.695±0.046	0.078±0.001	4.555±0.074	0.100±0.007	0.831±0.018	0.103±0.006	0.043±0.018	0.047±0.001	0.508±0.014
	YUK01 遺物群	40	0.155±0.005	0.041±0.002	0.026±0.002	1.530±0.035	1.022±0.027	0.007±0.010	0.253±0.017	0.146±0.043	0.022±0.001	0.331±0.010
YUK16 遺物群	40	0.154±0.007	0.066±0.004	0.037±0.002	1.496±0.039	1.046±0.032	0.178±0.017	0.232±0.014	0.146±0.036	0.023±0.001	0.327±0.007	
YUK34 遺物群	40	0.172±0.003	0.085±0.003	0.032±0.002	1.495±0.041	0.830±0.028	0.312±0.022	0.177±0.017	0.098±0.043	0.022±0.001	0.327±0.004	
UNL01 遺物群	40	0.427±0.005	0.170±0.002	0.024±0.001	1.162±0.009	0.128±0.005	0.136±0.005	0.129±0.004	0.037±0.010	0.027±0.001	0.361±0.004	
UNI07 遺物群	40	0.428±0.027	0.249±0.017	0.020±0.001	1.215±0.032	0.202±0.007	0.208±0.009	0.087±0.006	0.011±0.010	0.025±0.001	0.334±0.004	
CHK02 遺物群	40	0.606±0.008	0.269±0.029	0.043±0.001	1.774±0.045	0.106±0.007	0.246±0.007	0.106±0.007	0.041±0.015	0.034±0.001	0.459±0.016	
CRG01 遺物群	40	0.089±0.003	0.153±0.003	0.005±0.000	0.411±0.004	0.074±0.002	0.000±0.001	0.064±0.002	0.019±0.004	0.021±0.001	0.313±0.002	
MMK03 遺物群	41	0.438±0.007	0.165±0.005	0.027±0.001	1.409±0.029	0.245±0.010	0.560±0.016	0.068±0.010	0.020±0.017	0.029±0.001	0.371±0.007	
MMK12 遺物群	41	0.126±0.004	0.085±0.003	0.066±0.003	1.091±0.031	0.830±0.030	0.046±0.016	0.211±0.015	0.318±0.037	0.023±0.001	0.335±0.006	
HEA10 遺物群	41	0.222±0.007	0.130±0.004	0.021±0.001	1.338±0.135	0.454±0.026	0.412±0.018	0.134±0.014	0.052±0.022	0.020±0.001	0.279±0.003	
HEA26 遺物群	41	0.235±0.005	0.082±0.003	0.028±0.002	1.843±0.089	1.066±0.035	0.207±0.028	0.351±0.021	0.057±0.048	0.026±0.001	0.363±0.005	
XBD61 遺物群	41	0.073±0.004	0.214±0.004	0.008±0.000	0.721±0.004	0.063±0.002	0.001±0.001	0.067±0.002	0.179±0.004	0.019±0.001	0.322±0.003	
XBD124 遺物群	41	0.274±0.006	0.170±0.003	0.031±0.001	1.293±0.020	0.409±0.010	0.412±0.017	0.090±0.015	0.103±0.025	0.026±0.001	0.359±0.003	
XBD131 遺物群	41	0.156±0.004	0.048±0.003	0.131±0.006	1.244±0.041	2.125±0.091	0.031±0.023	0.430±0.024	0.790±0.062	0.024±0.001	0.342±0.002	
NOA02 遺物群	41	0.149±0.003	0.134±0.004	0.043±0.002	1.075±0.043	0.654±0.032	0.285±0.018	0.142±0.012	0.183±0.035	0.023±0.001	0.323±0.004	
NOA07 遺物群	41	0.210±0.005	0.176±0.011	0.017±0.001	0.871±0.016	0.221±0.007	0.068±0.006	0.097±0.006	0.065±0.014	0.024±0.001	0.301±0.005	
SIT-E 遺物群	40	0.076±0.010	0.121±0.020	0.006±0.000	0.454±0.005	0.097±0.002	0.001±0.001	0.073±0.002	0.224±0.005	0.022±0.001	0.338±0.009	
SIT-Z-2 遺物群	40	0.098±0.003	0.152±0.003	0.005±0.000	0.449±0.004	0.075±0.002	0.000±0.000	0.063±0.002	0.220±0.004	0.022±0.001	0.316±0.003	
BAEZA 遺物群	45	0.543±0.006	0.289±0.005	0.038±0.001	1.396±0.017	0.464±0.011	1.595±0.024	0.073±0.006	0.095±0.028	0.031±0.001	0.549±0.009	
SERGETTI-1 遺物群	45	0.204±0.008	0.100±0.007	0.015±0.001	1.004±0.027	0.530±0.013	0.010±0.005	0.158±0.003	1.260±0.021	0.020±0.001	0.423±0.022	
SERGETTI-2 遺物群	48	0.152±0.009	0.180±0.047	0.008±0.002	0.611±0.047	0.219±0.033	0.001±0.001	0.083±0.005	0.642±0.064	0.018±0.001	0.443±0.011	
SERGETTI-3 遺物群	45	0.210±0.017	0.315±0.053	0.030±0.001	1.468±0.029	0.119±0.002	0.006±0.002	0.085±0.002	0.638±0.006	0.015±0.002	0.395±0.058	
標準試料 JG-1 <sup>a)</sup>	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004	

M群=桑ノ木津留第1群、P群=UT遺物群、HS2群=置戸・置戸山群、FR2群=ケンシヨマップそれぞれ一致 平均値±標準偏差値、\*:ガラス質安山岩、NK遺物群:中つ原遺跡、HY遺物群:日和山遺跡、SN遺物群:三内丸山遺跡出土、KN遺物群:此掛沢遺跡、HS遺物群:北進遺跡、KI遺物群:桐木遺跡、UT遺物群:内屋敷遺跡、AI遺物群:相ノ沢遺跡、FS遺物群:房ノ沢遺跡、SD遺物群:下館銅屋遺跡、FR遺物群:東麓郷1, 2遺跡、FH遺物群:東9線8遺跡、KT遺物群:北区1遺跡、KS遺物群:キウス4遺跡A-R地区、SG遺物群:志風頭遺跡、OK遺物群:奥名野遺跡、TB遺物群:戸平川遺跡、NM遺物群:長樹遺跡、MK遺物群:南方遺跡、YM遺物群:南方、藤尾、岩上遺跡、AC1、2、3遺物群:アチャ平遺跡、IN1、2遺物群:岩野原遺跡、K19遺物群:K39遺跡、KK1、2遺物群:志志加里遺跡、HB1、2(フリント様):八久保第2遺跡、HR遺物群:堀屋遺跡、HM遺物群:春ノ山遺跡、KU4(硬質頁岩様):久木野遺跡、ON1、2:大原野遺跡、N129:穂香遺跡、UH63・UH66:上ノ原遺跡、UN51遺物群:雲南遺跡など出土遺物の産地不明の原石群。ウラジオストック付近:イリスタヤ遺跡、南カムチャッカ:バラトウンカ、ナチキ、アパチャ遺跡、中部カムチャッカ:Ushiki I、II、V遺跡、コムソリスクレーナムール:アチャミ遺物群、MTR21遺物群:耳取遺跡、FUT13遺物群:八千代村封地遺跡、NTO-6遺物群:仁田尾遺跡、SW4遺物群:沢ノ黒遺跡、原田36遺物群:原田遺跡、NTRS1、2、32、遺物群:西多羅追遺跡、矢野54風化石:矢野遺跡、TJD-A、37遺物群:天神段遺跡、SITNMH2-B遺物群:下市築地ノ峯東通2遺跡  
a) Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal* Vol.8, 175-192.

は北上川に沿った範囲に点々と見られ、雫石群は岩手郡雫石町の小赤沢地区の礫層から採取された原石で作られ、折居群は水沢市真城の折居地区の礫層より採取された円礫で作られ、花泉群は西磐井郡花泉町の払田および金沢の両地区の礫層より採取された小円礫の原石で作られた原石群である。これら岩手県の原石群の元素組成は相互に似ていて、これら原産地を元素組成で明確に区別できなく、遺物を分析してたとえこれら岩手県下の原石群の中の一地点に同定されても、この遺物の原石産地はこれら岩手県内の複数の原産地を考えなければならない。月山群は羽黒山から月山にかけての西麓付近に点々と分布する黒曜石産出地点より採取した原石で作った群である。最近、鈴木氏より提供された黒曜石原石は、寒河江市から転礫として産出した黒曜石原石で、西北九州の中町産地の原石と元素組成が似るが、一致せず全く新しい元素組成の黒曜石と判明し、寒河江群として原石群に加えた。湯倉群は宮城県加美郡宮崎町柳瀨の湯倉真珠岩層の露頭付近で採取された原石で作られた群である。新潟県内の原産地では、佐渡島は大佐渡山地の南部に位置し、所在地は佐渡市(旧佐渡郡金井町)堂林、二ツ坂地域から佐渡市(旧佐和田町)との境にかかる地帯である。今回分析した黒曜石は林道工事のときに産出した円礫状の原石で、1cmから3cmの大きさのものが大部分で、大きな原石は長径が約10cmのものが確認できた。現在、林道での採取は困難で、僅かに同地域の沢で採取できるにすぎない。この沢で採取した最大の原石は長径が約5cmの円礫で、小型の石鋸を作るには十分の大きさである。元素比の組成の似たもので群を作ると、佐渡第一群と佐渡第二群の二つの群にまとまる。これら佐渡第一、二群は佐渡固有の群で他の産地の原石群と区別することができる。新発田市の板山原石は牧場内に露頭があり、小粒の黒曜石は無数に採取され、牧場整備で土木工事で露出した露頭からは握り拳大の原石を採取することができた。板山産地から北方約5kmに上石川黒曜石産地があり良質の黒曜石を産出している。また、新潟市秋葉区(旧新津市)の秋葉山地区から小粒の黒曜石が産出することが知られていた。また、秋葉山南方約3kmの金津地区から新たに黒曜石が産出している地点が明らかになり金津産原石で金津群を作った。この他新潟県では魚沼市(旧入瀨村)の大白川地区から採取される黒曜石

は大半が親指大で肉眼的には良質であるが石器原材として使用された例はない。中信高原地域の黒曜石産地の原石採取地点を第28図に示す。霧ヶ峰群は、長野県下諏訪町金明水、星ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町観音沢の露頭の写真も、霧ヶ峰群に一致する元素組成を示した。和田峠地域原産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田峠トンネルを中心にした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成で分類すると、和田峠第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かれる。和田峠第一、第三群に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田峠第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田峠第四群は男女倉側の新トンネルの入り口、また、和田峠第五、第六群は男女倉側新トンネル入り口左側で、和田峠第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女倉原産地の原石は男女倉群にまとめられ元素組成は和田峠第五群に似る。鷹山、星糞峠の黒曜石の中に和田峠第一群に属する物が多数みられる。麦草峠群は大石川の上流および麦草峠より採取された原石で作られた。これら中信高原の原産地は、元素組成で第17表に示すように和田峠、霧ヶ峰、男女倉、麦草峠の各地域に区別される。伊豆箱根地方の原産地は笹塚、畑宿、鍛冶屋、上多賀、柏峠西の各地にあり、良質の石材は、畑宿、柏峠西で斑晶の多いやや石質の悪いものは鍛冶屋、上多賀の両原産地でみられる。笹塚産のものはピッチストーン様で、石器原材としては良くないであろう。伊豆諸島の神津島原産地は砂糠崎、長浜、沢尻湾、恩馳島の各地点から黒曜石が採取され、これら原石が



第28図 旧和田村（現長野市）付近地域原石採掘地点と和田峠諸群

第17表 中信高原地域原石採取地点における各原石群の出現頻度

原石採取地点	中信高原産出黒曜石原石群の各群出現頻度 % (個数)												
	霧ヶ峰	観音沢	和田峠						鷹山・和田	男女倉	麦草峠	冷山	双子池
			第一群	第二群	第三群	第四群	第五群	第六群					
うつき沢	-	-	-	-	-	-	90 (73)	-	-	95 (77)	-	-	-
星ヶ塔	100 (128)	98 (126)	-	-	-	-	3 (4)	-	-	0.8 (1)	-	-	98 (127)
金明水	98 (39)	98 (39)	-	-	-	-	5 (2)	-	-	-	-	-	98 (39)
観音沢	98 (50)	100 (52)	-	-	-	-	2 (1)	-	-	-	-	-	98 (51)
1地点	-	-	31 (8)	58 (15)	8 (2)	-	-	4 (1)	-	-	-	-	-
3地点	-	-	74 (26)	6 (2)	-	-	-	17 (6)	3 (1)	-	-	-	-
4地点	-	-	48 (10)	-	52 (11)	-	-	-	-	-	-	-	-
5地点	-	-	59 (27)	-	39 (18)	-	-	-	2 (1)	-	-	-	-
18地点	-	-	42 (27)	-	55 (35)	-	-	2 (1)	2 (1)	-	-	-	-
19地点	-	-	39 (22)	-	61 (35)	-	-	-	-	-	-	-	-
24地点	-	-	-	-	-	100 (37)	-	-	-	-	-	-	-
25地点	-	-	10 (3)	-	3 (1)	-	48 (15)	16 (5)	-	23 (7)	-	-	-
26地点	-	-	6 (3)	-	-	2 (1)	29 (14)	58 (28)	-	4 (2)	-	-	-
27地点	-	-	-	-	-	-	27 (3)	-	-	73 (8)	-	-	-
22地点	-	-	-	-	-	-	50 (5)	50 (5)	-	-	-	-	-
33地点	-	-	-	-	-	-	52 (30)	2 (1)	-	47 (27)	-	-	-
8地点	-	-	-	-	-	-	9 (11)	-	-	91 (112)	-	-	-
28地点	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 (30)	-	-	-
32地点	-	-	-	-	-	-	12 (3)	-	-	88 (23)	-	-	-
29地点	-	-	-	-	-	-	33 (3)	-	-	67 (6)	-	-	-
30地点	-	-	-	-	-	-	100 (3)	-	-	-	-	-	-
16+17地点	-	-	69 (36)	-	-	-	2 (1)	-	29 (15)	-	-	-	-
15地点	-	-	91 (40)	-	2 (1)	-	-	-	7 (3)	-	-	-	-
麦草峠周辺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	97 (94)	87 (84)	80 (78)	-
冷山	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99 (86)	100 (87)	90 (78)	-
双子池	-	-	-	-	-	-	-	-	-	80 (67)	33 (28)	99 (83)	-
立科周辺	88 (7)	88 (7)	12 (1)?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	88 (7)

33地点：高松沢、8地点：牧ヶ沢、28地点：ブドウ沢右岸、32地点：ブドウ沢左岸、29地点：本沢、15地点：星糞峠遺跡付近、16+17地点：鷹山、31地点：第1群に似る注：各群への誤判定率（帰属確率）を1%に設定する。

ら神津島第一群および第二群の原石群にまとめられる。浅間山の大窪沢の黒曜石は貝殻状剥離せず石器の原材料としては不適當ではあるが、考古学者の間でしばしば話題に上るため大窪沢群として遺物と比較した。

## D 結果と考察

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。縄文時代の黒曜石製遺物は表面から約 3 ミクロン程度の厚さで風化層ができています。分析はこの風化層を通して遺物の内部の新鮮面をいかに多く測定するかが重要であり蛍光 X 線分析法の中の電子線励起方式の EPMA 分析は表面の分析面積 1 ～数百ミクロン分析されているが、深さ約 1 ミクロンの風化層しか分析を行っていないために、得られた結果は原石で求めた新鮮面のマトリックスと全く異なった可能性の風化層のみの分析結果になるために、黒曜石遺物は破壊して新鮮面を出して分析する必要があります。従って、非破壊分析された黒曜石製遺物の EPMA 測定された産地分析結果は全く信用できない。一方、本研究で使用している遺物の分析はセイコーインスツルメンツ社の SEA2110L シリーズ卓上型蛍光 X 線分析計では X 線励起方式で黒曜石製遺物の表面から最低でも数ミリ深さまで励起可能で、風化層以外の新鮮な部分はかなり測定され、風化層（水和層）の影響が殆ど無視できる。しかし、黒曜石製遺物が地温の高い埋没状況では水和層が異常に厚く形成されるために、水和層の影響を考慮すると、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/K の両軽元素比の値を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比の値についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。また、安山岩製の遺物は、白っぽい表面が風化しているために、アルミナ粉末を風化面に吹き付け、新鮮面を出して分析している。

今回分析した峰岡城山遺跡出土の黒曜石製遺物を非破壊による塊状不定形で求めた化合物組成は、試料を粉末成形した厳密な定量結果ではないが、定性的な岩石考察に利用できる結果を第 18 表に、またマハラノビスの距離を求めて行うホテリングの T2 乗検定のために元素比（任意単位）を第 19 表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため Rb/Zr の一変量だけを考えると、第 19 表の試料番号 118594 番の遺物では Rb/Zr の値は 1.088 で、霧ヶ峰群の [平均値] ± [標準偏差値] は、1.052 ± 0.051 である。遺物と原石群の差を標準偏差値（σ）を基準にして考えるとこの遺物は原石群から 0.70 σ 離れている。ところで霧ヶ峰原産地から 100 ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から ± 0.70 σ のずれより大きいものが 48 個ある。すなわち、この遺物が、霧ヶ峰群の原石から作られていたと仮定しても、0.70 σ 以上離れる確率は 48% であると言える。だから、霧ヶ峰群の平均値から 0.70 σ しか離れていないときには、この遺物が霧ヶ峰群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を北海道、白滝・赤石山群に比較すると、赤石山群の [平均値] ± [標準偏差値] は、1.340 ±

第 18 表 峰岡城山遺跡出土黒曜石製遺物の非破壊不定形塊状分析による化学組成結果

No.	分析番号	化合物組成 (Wt%)														
		Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb	Sr	Y	Zr	Nb	Ba
1	118594	1.820	1.182	14.249	75.747	5.199	0.553	0.089	0.132	0.941	0.020	0.006	0.004	0.009	0.000	0.051
2	118595	1.749	1.235	14.396	75.668	5.212	0.537	0.100	0.138	0.887	0.018	0.006	0.004	0.009	0.000	0.041
	JG-1	3.402	0.735	14.324	72.755	3.986	2.184	0.272	0.061	2.184	0.018	0.019	0.003	0.011	0.001	0.044

第 19 表 峰岡城山遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
118594	0.155	0.066	0.099	1.318	1.088	0.350	0.269	0.083	0.028	0.318
118595	0.152	0.071	0.095	1.233	1.023	0.321	0.273	0.080	0.027	0.312
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1 : 標準試料-Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

0.059 であるので遺物と原石群の差を標準偏差値 ( $\sigma$ ) を基準にして考えるとこの遺物は原石群から 4.2  $\sigma$  である。これを確率の言葉で表現すると、赤石山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 4.2  $\sigma$  以上離れている確率は、約 10 万分の一であると言える。このように、10 万個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから (10 万個の原石が遺跡に搬入された可能性は考えられないから)、この遺物は、赤石山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は霧ヶ峰群に 48% の確率で帰属され、信頼限界の 0.1% を満たしていることから霧ヶ峰原石が使用されいと断定され、さらに赤石山群に 0.001% の低い確率で帰属され、信頼限界の 0.1% に満たないことから赤石山群の原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地 (霧ヶ峰産地) と一致したからと言って、例え霧ヶ峰群と赤石山群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形 (非破壊分析) であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地 (霧ヶ峰産地) に一致し必要条件を満足したと言っても一致した産地の原石とは限らないので、帰属確率による判断を第 16 表の 329 個すべての原石・遺物群について行ない十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて霧ヶ峰産地の石材のみが使用されていると判定される。実際は Rb/Zr といった唯一つの変数だけでなく、前述した 8 つの変数で取り扱うので変数間の相関を考慮しなければならない。例えば、A 原産地の A 群で Ca 元素と Rb 元素との間に相関があり Ca の量を計れば Rb の量は分析しなくても分かるようなときは、A 群の石材で作られた遺物であれば、A 群と比較したとき、Ca 量が一致すれば当然 Rb 量も一致するはずである。したがって、もし Rb 量だけが少しずれている場合には、この試料は A 群に属していないと言わなければならない。このことを数的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T2 乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する [東村 1976・1980]。産地の同定結果は 1 個の遺物に対して、黒曜石製では 329 個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略している (別途 CD に十分条件の結果を記録) が、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち霧ヶ峰産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石、北朝鮮白頭山原石および白滝・赤石山産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみを第 20 表に記入した。ここで大切なことは、遺物材料研究所で行った結果で、霧ヶ峰・観音沢・立科群と判定された遺物を使って、先史時代の交流を考察するときには、第 20 表に記入された霧ヶ峰・観音沢・立科群以外の第 16 表の 329 個の原石産地と交流がなかったとすることを証明している点である。新潟市の先史人は東北・関東・中部地方範囲のみでしか交流がなかったと仮定して、遺物と比較する産地を東北・関東・中部の主な産地だけで十分であると考えて遺物の原材産地を求め、霧ヶ峰・観音沢・立科産原石が使用されているとの結果は、先史時代の交易を一部の範囲に限定することになる (広い地域の範囲の黒曜石と比較していないから、広い範囲との交流は言えない、即ち日本の限定的地域にのみ有効で、東アジア、極東ロシア地域では通用しない結果である)。考古学者の主観的な石器の様式分類が例え東北・関東・中部地方に限定されていたとしても、分析された石器がもつ自然科学的結果が何処までの範囲に通用するかが、考古学の交易を考える上に非常に重要で、自分の主観的考察が満足されれば良いとの狭い見では真の考古学的研究とは言えない。

第 20 表 峰岡城山遺跡黒曜石製遺物の産地同定結果

No.	分析番号	フィル	報告No.	種別	注 記	ホテリングのT2検定結果 (%)	判 定
1	118594	KI2906A-2	60	石核	2B-4I17、III層、No.389	霧ヶ峰(96%)、観音沢(89%)、立科(79%)、和田峠第4群(0.1%)	霧ヶ峰・観音沢・立科
2	118595	KI2906A-9	22	楔形石器	2B-3G15、III層、No.1526	霧ヶ峰(73%)、観音沢(45%)、立科(26%)、和田峠第4群(0.1%)	霧ヶ峰・観音沢・立科

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法 (石器様式の基準も研究方法で異なるように) にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係 (相互チェックなし) ありません。本研究結果に連続させるには本研究方法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察をする必要があります。

他の広い交易範囲を考えている考古学者にも通用する産地分析結果が必要である。論外は、個人知識による肉眼観察を含め、霧ヶ峰・観音沢・立科産原石が使用されているとの判定を、比較をしていないロシア産黒曜石、ロシア遺跡で使用されている遺物の、肉眼観察とか組成（遺物群）ではないと評価することで、ないと評価するには実際に比較し確認するしかない。また、産地分析の結果を評価するときに、比較する原石群は新鮮面であり、また遺物群は風化面を測定し作った群が第16表に示している。風化の程度の差はあるものの風化していない遺物はなく、遺物を分析して原石産地が同定されない場合は、1：風化の影響で分析値が変動し、新鮮面と分析値が大きくことなるとき。2：遺物の厚さが薄く、厚さの影響が分析値に現れたとき。3：未発見の原石産地の原石が使用されているときなど。風化の影響を受けている遺物は黒曜石は光沢なく表面が曇っていて、分析するとカリウムの分析値が大きく分析される。風化の影響が少ないときは軽元素比を抜くことにより同定が行える。風化が激しく、軽元素以外の他の元素まで風化の影響がおよぶと、遺物の産地は同定できなくなったり、また、新鮮面分析と異なった原石産地に同定されることがあり注意が必要である。原石群を作った原石試料は直径3cm以上で5mm以上の厚さであるが、細石刃などの小さな遺物試料の分析では、遺物の厚さが1.5mm以下の薄い部分を含んで分析すると、厚さの影響を受けて、重い元素は小さく測定され、分析値には大きな誤差範囲が含まれるために、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて同定を行わなければならない。分析平均厚さが0.3mm以下になると補正が困難になり同定できない。細石刃は厚さが薄く、縄文時代の遺物より風化の進んだ遺物もあり、厚さ補正と軽元素を抜いて同定を行っている。蛍光X線分析では、分析試料の風化による化学的変化（カリウムが大きく観測される）、表面が削られる理的变化、不定形の試料では薄い部分を完全に避けて分析できないとき、分析面が遺物の極端な曲面しか分析できない場合など、分析値に影響が残り、また、装置による分析誤差も加わり、分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素比組成の似た原産地同士では区別が困難で、遺物の原石産地が原石・遺物群の複数の原石産地に同定されるとき、および、信頼限界の0.1%の判定境界に位置する場合は、分析場所を変えて3～12回分析し最も多くの回数同定された産地を判定の欄に記している。風化、厚さ、不定形など比較原石群分析とは異なる誤差が遺物の分析値に含まれるために、産地分析では、一致する産地（必要条件）の結果だけでは信頼性が小さく、他の産地には一致しない（十分条件）ことを満足しなければならない。また、判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率（1%以下）の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。ホテリングのT2乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して遺物の原石産地を判定する。

今回分析した峰岡城山遺跡出土の遺物2個についてホテリングのT2乗検定法で第16表の原石・遺物群の329個と比較したところ、霧ヶ峰、観音沢、立科の各群に高確率に同定される遺物で、透明なものは、観音沢、立科の原石に多く見られ、縞の入ったものが非常に少ないことから、観音沢、立科と推測できるが、霧ヶ峰（星ヶ塔、星ヶ台、金明水）にも透明ものが見られることから、霧ヶ峰を加えて、判定の欄に霧ヶ峰・観音沢・立科と記した。透明原石は観音沢が最も多く、立科は大きさが最大5cm以下で量も少ない。峰岡城山遺跡で信州霧ヶ峰・観音沢・立科産の原石が使用されていることから、原石の伝播に伴って、遺跡の生活情報を信州、原産地地域に伝播し、またこれら原産地地域の文化、生活情報を入手していたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また、石器の捏造事件いらい、ロシアの研究者から言われることは、日本の黒曜石がロシアに伝播していると昔から言われているが、特に沿海州の西部地域の遺物を分析すると日本のものが見られない、本当に来ているのかと質問されたことと聞いたことがある。私見であるが、ロシアの原石とかロシアの遺跡で使用している遺物の分析データを入れずに、日本の黒曜石原石のみでロシアの遺物の原石産地を判別したからではないかと推測される。今回の分析では日本についてはほぼ全土、外国については、第16表で調査された原石産地と外国遺跡で使用されている黒曜石原材料の範囲内に限定されるが、石器様式が日本に伝搬したと推測されている東アジア沿海州、極東ロシアからの伝搬が石器原材料をとまっていなかったことも証明されたことと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

# 第Ⅶ章 総 括

## 第 1 節 縄文土器について

### A 編年的位置づけ

本遺跡からは中期前葉の土器群が主体的に出土している。大枠としては、上限については 1 点のみの資料であるが、口縁部文様が集合沈線文により描出されるⅡ群 1 類 (No.3) があり、豊原遺跡Ⅴ群に比定される (中期前葉 1～2 期: 高橋保 1999)。同様の資料が大沢遺跡 A 地区の 2 号土坑より五領ヶ台 I 式と伴出している〔前山 1994a〕ことから前期末までは上がらない。下限の資料で明確なものは、後述するが、連続角押文の施されたⅢ群 2b 類の No.100 があり、さらにⅢ群 3 類の阿玉台式系統の土器 (No.101)、Ⅳ群 1c 類の頸部瘤状突起付土器 (No.26・202) が存在することから大沢Ⅲ a 期 (中期前葉 4 期) (寺崎 2009 第Ⅱ段階) の要素を含むことは確実である。本遺跡の様相は中期前葉 3・4 期が混在している状況であるが、細片資料が大半であり全体の文様構成が読み取れず、さらには 4 期のメルクマールとなる刻印蓮華文が一切存在しないことが細分を困難とさせる要因となっている。本遺跡のみでなく角田山麓一帯において刻印蓮華文の出現は非常に少ない。

そこで、当該期・当地域の基準資料である豊原遺跡出土土器群〔小野・前山ほか 1988、前山 1994a〕を中心に、周辺の同時期集落 (大沢遺跡 A 地区・松郷屋遺跡・久保遺跡)〔前山 1994a〕との比較を通し、本遺跡出土の中期前葉土器群 (本遺跡分類Ⅱ群・Ⅲ群) (第 19 図、図版 20～27) について検討する。編年的位置づけに関しては、高橋保氏の論考〔高橋保 1999〕、寺崎裕助氏の論考〔寺崎 2009〕を基準とする。

**分類ごとの検討** 縦位沈線文が施される本遺跡Ⅱ群 2 類 (以下、Ⅱ群を省略) は角田山麓では散見される程度である。豊原遺跡ではⅥ群において竹管集合沈線が施されたものとして 1 点のみ報告されている〔前山 1994a p.186No.471〕。本遺跡 2a i 類に対応する資料である。大沢遺跡ではⅡ期に間隔の空いた半截竹管文が縦位施文された資料〔同 p.308No.55〕 (本遺跡 2a i 類)、縦位細線文が施されたもの〔同 No.53〕 (本遺跡 2b iii 類) が散見され、Ⅲ a 期資料中に縦位平行沈線文・細線文が施されたものがある〔同 p.311No.84・94〕。これらの資料は本遺跡 2b ii・2b iii 類の特徴を有する。しかし大沢遺跡 No.94 には頸部に爪形文が巡っており、本遺跡 2 類には縦位沈線文と頸部の爪形文が同一個体に共存する資料は見られない。本遺跡における頸部爪形文との共存事例は後述する楔形印刻文が施される 3b ii 類 (No.5) で見られる。松郷屋遺跡では下層Ⅲ期Ⅲ A 群において本遺跡 2b ii・iii 類類似資料がある〔同 p.344 No.109～111〕。ただし上述の大沢遺跡と同様に爪形文と共存するものがある〔同 No.110〕。本遺跡では No.36 のように口縁部下位文様帯に半隆起線による縦位沈線文が施されるものがあり、さらに突起が口縁部上下文様帯界線より下がっていることから豊原Ⅵ群併行段階のものが含まれるようである。

このように縦位沈線文系の 2 類は角田山麓周辺遺跡での出土は少ないが、本遺跡ではⅡ群土器口縁部残存資料 76 点中 23 点の 30.3% という、彫刻蓮華文系土器群 (3 類) と同率の主要文様となっており (第 21 表) 本遺跡の特徴と言える。この傾向は阿賀野川流域以北では比較的多く認められるようであり〔坂上 2011〕、大関上野遺跡〔塩原・竹内 2000〕、樋渡遺跡〔田辺・大賀 2002〕、長割遺跡最下面〔滝沢・坂上ほか 2011〕、大坂上道遺跡〔斉藤 2008〕に多いようである。縦位沈線文土器については、彫刻蓮華文との前後関係・同時併存の可能性等問題提起がされており〔坂上 2011〕、後述するが本遺跡においても解決できないままである。口縁部上位文様のみでは判断できず、施文法によっても判別困難なようであり、全体の文様構成・共伴資料により判断せざる

第 21 表 Ⅱ群土器口縁部文様別組成比率

文様分類	個体数	組成率
Ⅱ群1類 (集合沈線文系)	1	1.3%
Ⅱ群2類 (縦位沈線文系)	23	30.3%
Ⅱ群3類 (彫刻蓮華文系)	23	30.3%
Ⅱ群4類 (爪形文系)	12	15.8%
Ⅱ群5類 (格子目文系)	2	2.6%
Ⅱ群6類 (半隆起線+地文)	15	19.7%
合 計	76	100%

を得ない土器群のようである。ただし本遺跡 2a i 類のような文様帯幅が広く、明確な半隆起線により施文されたもの、またその間隔があくもの、さらに 2a ii 類の No.128 のように体部に B 字状文が施されるもの、さらには上述した 2b ii 類 No.36 のように口縁部下位文様帯に半隆起線による縦位沈線文が施されているものについては豊原VI群段階の可能性が高いと思われる。

彫刻蓮華文が施される 3 類は、豊原遺跡ではVI群において三角形印刻文が施された大柄な蓮華文の本遺跡 3a 類が目立ち、三角形印刻が長くなり楔状となった印刻、またはスリット状の沈線により施される小柄な蓮華文の 3b i 類は少ないようである。細線文が充填されない 3b ii 類は見当たらない。また 3c 類についても類似資料は不明である。松郷屋遺跡においては 3a 類・3b i 類が松郷屋遺跡下層Ⅱ期に、3b ii 類・3c 類類似資料〔前山 1994a p.344No.112・119〕が下層Ⅲ期に位置づけられている。3b i 類類似資料の松郷屋遺跡下層Ⅱ期 No.47〔同 p.342〕は拓影図では体部に幾何学的彫去文が施されているようであり、新しい段階に属する可能性がある。大沢遺跡ではⅡ期に 3a 類・3b i 類が見受けられるのみである。ただしⅢ a 期には頸部の突起に楔形印刻が施された資料〔同 p.311 No.91〕があり、本遺跡 3b ii 類 No.53 と対応する。

爪形文の 4 類については、間隔のあく押し引きによる 4a 類では口縁上端部に施されたものはなく、口縁部下位文様帯もしくは頸部に施されている (No.60・137)。大柄な蓮華文の 3a 類と併存しているため豊原VI群併行に位置づけられる。4b 類の爪形文は口縁部上位と頸部にめぐる。口縁部上位に 4b 類の爪形文がめぐる資料は豊原VII群・松郷屋下層Ⅲ期・大沢Ⅲ a 期に見られる。

格子目文の 5 類については、斜格子目文が施される No.65 は豊原V群の可能性を含むが、Ⅱ群 1 類の No.3 とは器形・施文法が異なり、また No.65 の口縁部下位文様帯は無文帯となっている。文様構成から豊原VI群併行の範疇と考えたい。

口縁部・頸部に半隆起線が横位施文され、地文が充填される 6 類は豊原VI群 3 類類似資料である。豊原遺跡におけるVI群 3 類の出現率は 57% と非常に高いが〔前山 2009〕、本遺跡ではⅡ群土器口縁部残存資料 76 点中 15 点の 19.7% と低く、主体を成す土器群とは言えない。角田山麓ではその他に大沢遺跡・松郷屋遺跡での出現率は低く、久保遺跡の出現率が出土個体数の割には高いという〔前山前掲〕。

異系統土器群のⅢ群は搬入品等ではなく、異系統の属性を取り込んだ在地の土器群である。東北北部円筒式系の影響を受けた 1 類、中部高地・関東地方五領ヶ台式系の影響を受けた 2 類、関東地方阿玉台式の影響を受けた指頭圧痕文系土器の 3 類が出土している。1a 類については時期幅があり、円筒下層 d 式～上層 a 式の No.194、円筒上層 a2 式の No.97、円筒上層 b～c 式併行の No.222 がある (第V章参照)。1b 類 No.196 の棒状隆帯は円筒上層式で見られ、器面の文様構成は豊原VI群 3 類と同様である。阿賀野川流域以北で認められるようであり、萩野遺跡〔亀井・望月 1994〕・大坂上道遺跡〔斎藤 2008〕・樋渡遺跡〔田辺・大賀 2002〕に類例がある。2a 類には五領ヶ台Ⅱ式の集合沈線文系土器に、円筒式系の属性である原体押圧が採用された折衷土器の No.197 がある。異系統土器群については縦位沈線文系Ⅱ群 2 類土器と同様に北方との関連性が高く、本遺跡の集団が角田山麓の在地集団に北方からの集団が融合して形成された状況を良く示していると言える。2b 類の連続角押文が施される No.100 は、キャリパー形の器形・口縁上端部の爪形文・口縁部下位文様の無文帯は北陸系の属性 (大沢遺跡捨場Ⅲ d 層出土 前山 1994a p.309 : 66～68)、角押文とその他の文様は中部高地・関東系の属性と捉えられ、両者の折衷型と考えたい。異系統土器群の位置づけは、大沢遺跡 A 地区から I a 期に円筒下層 d 式類似資料、2 号土壇からは突起から垂下する隆帯が発達した円筒上層 a1 式併行と考えられる資料〔同 p.307 : No.5〕、Ⅲ a 期には円筒上層 b 式類似資料が出土しており、本遺跡円筒上層 a2 式に比定した No.97 は谷 2 から中期前葉 3・4 期の土器群と共に出土している (図版 17)。ただしⅢ～Ⅳ層にかけて出土しており、谷 2 の中でも古く位置づけられるが、頸部に多条半隆起線文・体部に結束第 1 種羽状縄文が施された No.89 と同一地点から出土しており (図版 17 : 垂直分布参照)、出土状況からは中期前葉 3 期以上は上がらないものとする。

出土状況からの検討 本遺跡における出土状況は、斜面地の捨場であるため後天的な原位置移動の可能性が確

実に存在する。ただし分布が谷単位でまとまっているため土器の廃棄には何等かの傾向が存在する可能性がある。谷単位の出土状況を図版16～18に、分類ごとの口縁部残存個体数を第22表に示した。遺物の集中する谷2と谷3を比較すると、II群については三角形印刻文による大柄な蓮華文の3a類が谷3に集中し、小柄な蓮華文の3b類が谷2にまとまるという対照的な在り方を示している。3a ii類のNo.41は谷2出土であるが、蓮華文の彫去が正三角形ではなく楔状となっており3b類の傾向をもっている。またNo.41のように体部に格子目文が充填されるものは、角田山麓では大沢遺跡II期のNo.28〔前山1994a p.308〕や松郷屋遺跡II期のNo.46〔同p.342〕に見られるがいずれも小蓮弁化・彫去の楔状化の傾向がある。爪形文の4b類も谷2に偏る傾向が見られ、時期が明確な異系統土器III群についても両谷から五領ヶ台II式系の2a類が出土しているが、谷2からは一段階新しい五領ヶ台直後段階の2b類と、阿玉台式系土器の3類が出土している。つまり谷2・3の両者に豊原VI群段階の要素が認められるが、谷2からはより新しい要素が見受けられる状況である。よってII群の蓮華文系3類については、出土状況から3a類→3b類という変遷の可能性が考えられる。縦

第22表 土器分類別谷単位出土個体数

分類	谷		
	谷1	谷2	谷3
I群			
1類	1		
2a i類	1	4	4
2a ii類			1
2b i類			1
2b ii類		4	3
2b iii類			3
3a i類			1
3a ii類		1	3
II群			
3b i類		5	
3b ii類	1	2	
3c類	2	4	7
4a類		1	
4b類	5	5	1
5類		2	
6a類		2	1
6b類	4	4	3
その他		4	7
III群			
1a類		1	2
1b類		1	
2a類	1	1	1
2b類		1	
3類		1	
IV群			
1c類	1	1	1
合計	16	44	39

第23表 角田山麓周辺縄文時代中期前葉編年対比表

高橋1999	寺崎2009	豊原遺跡	松郷屋遺跡	大沢遺跡A地区	久保遺跡	峰岡城山遺跡			東北北部地方	中部高地・関東地方	
						I期	II群	III群(異系統)			
中期前葉1・2期		V群	I期	Ib・c期(2号土壇)	I期	I期	1類	1a類(194)	円筒上層a1	五領ヶ台I	
中期前葉3期	第I段階(古屋敷式)	VI群	II期	II期	II期	II～III期	3a・4a・5・6類	2・3c類	1a類(97)・1b・2a類	円筒上層a2	五領ヶ台II
中期前葉4期	第II段階(千石原I式)	VII群1期	III期III A群	III a期	III期		3b・4b類		1a類(222)・2b類・3類	円筒上層b	五領ヶ台直後型式・阿玉台Ia～Ib

位沈線文系の2類については両谷からの出土が認められるため傾向は読み取れず、上述のように課題としてのこる土器群である。

以上の点から本遺跡の編年試案として第29図に示した。角田山麓周辺遺跡と本遺跡の併行関係を示したのが第23表であるが、本遺跡III期とした土器群が中期前葉3期(寺崎2009 I段階)(豊原VI群)の範疇における新傾向であるのか、中期前葉4期(寺崎2009 II段階)(大沢III a期)併行となるかは明確でない。本遺跡出土の中期前葉土器群は中期前葉3期～4期〔高橋保1999〕の過渡期的な資料群と捉えておきたい。

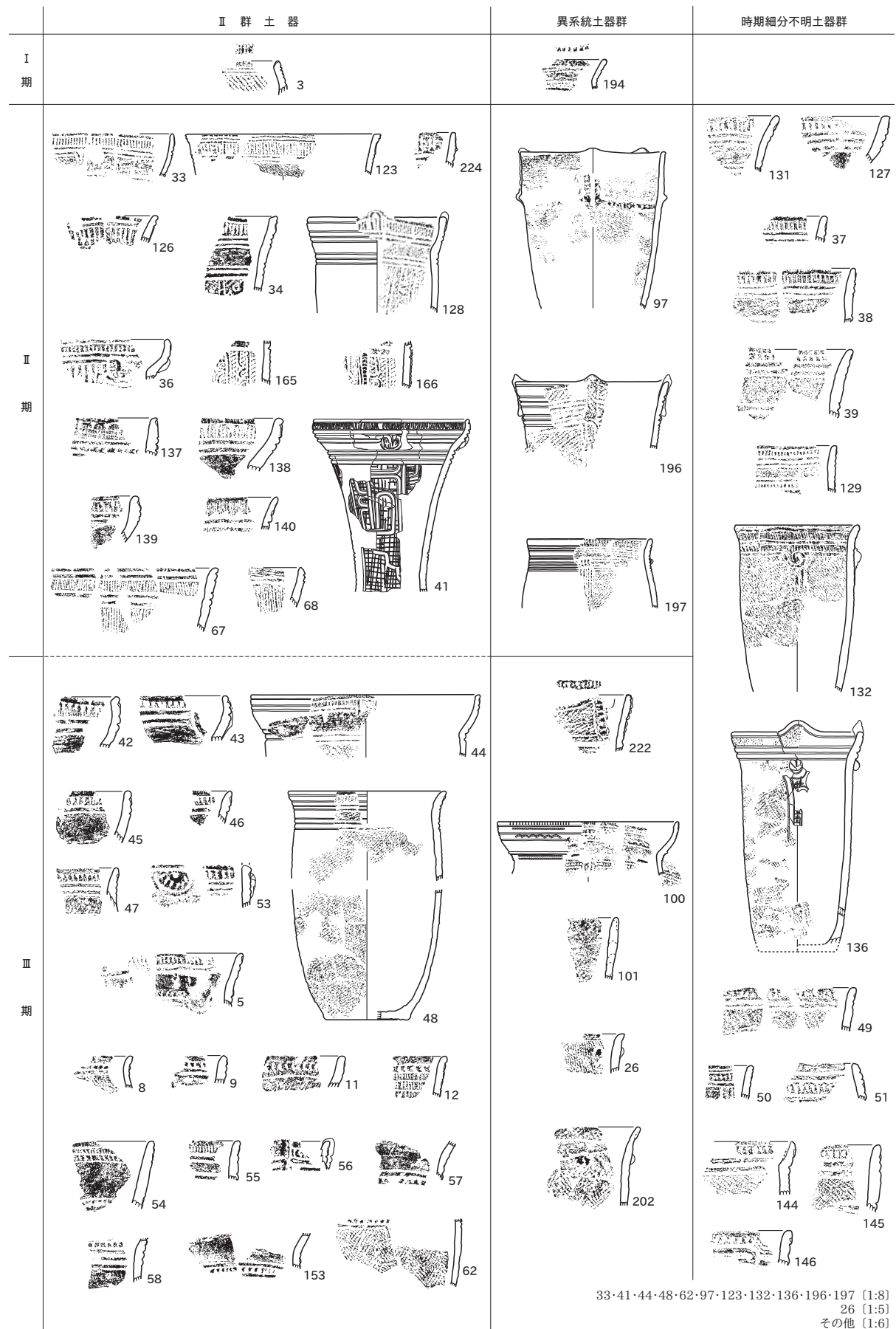
### B 土器胎土について

土器分類別の胎土・混和材組成を個体数にて第24表に示した。これを見ると本遺跡出土土器群の主要胎土は橙色土粒と白色岩粒を主体的に含むI類と、石英・長石等の鉱物を主体的に含むII類に二分され、分析対象資料189点中、I類が104点の55.0%、II類が69点の36.5%を占める。I類の中でも他の鉱物・チャート類を含まないIa類が75点あり本遺跡の代表的な胎土となっている。II類では雲母の有無で細分したがほぼ半々の割合となっている。文様分類から見ると、分類単位で大きな偏りはなく、むしろI類・II類が混在している状況が本遺跡の特徴と言える。強いて指摘するならば、II群3a類の大柄な彫刻蓮華文が

第24表 土器分類別胎土類別個体数

分類	胎土						
	Ia	Ib	IIa	IIb	III	IV	V
I群							
1類							1
2a i類	1	6	1	2			
2a ii類	1			1			
2b i類				1			
2b ii類	3	1	3	2			
2b iii類	1	1			1		
3a i類			1				
3a ii類			2	2			
3b i類	1	2	2				
II群							
3b ii類	2			1			
3c類	6	3	1	1			
4a類			1				
4b類	8	5	2	3			2
5類	4			3			1
6a類	3						
6b類	4	2	1	3			
7a類	15	3	6	6	2	2	1
7b類	10	4	2	7	1		
8類	3	1	1		1		
III群							
1a類	2		1				1
1b類			1	1			
2a類	1		1	1			
2b類			1				
3類	1						
IV群							
1a i類	1			2			
1a ii類	4	1		1			
1b類	1		1				
1c類	1		1	1			
2類	2						
V群							
1類			1				3
合計	75	29	30	39	5	6	5





第 29 図 峰岡城山遺跡縄文時代中期前葉土器群編年試案

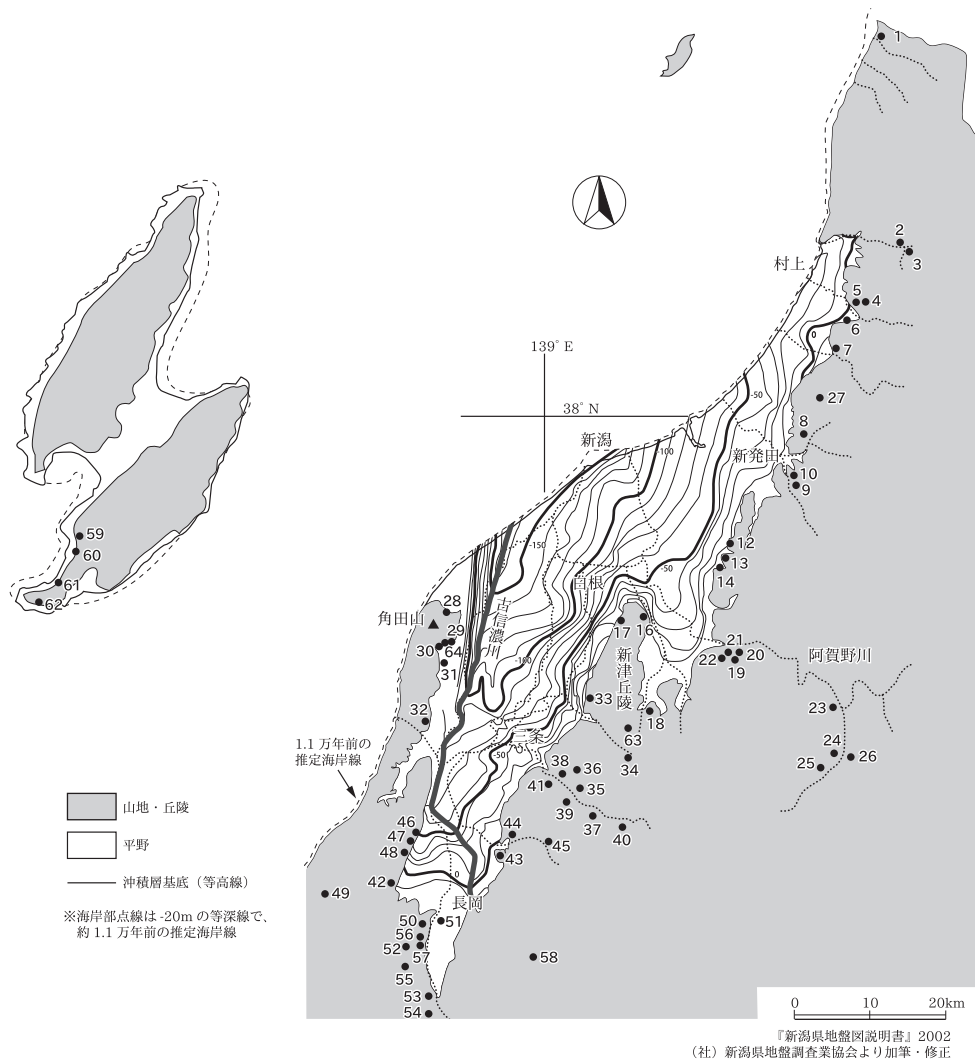
施される土器群については全てが胎土Ⅱ類であり、Ⅱa・Ⅱb類両者が存在している。異系統土器群のⅢ群についてもⅡ類が多く、雲母を含むⅡa類がやや多いようである。非常に少数であるが角閃石を含むⅣ類のものが円筒上層a式系と、後期の土器群に認められた。本遺跡出土土器群とは異なる場所で制作された可能性がある。

## 第2節 石器について

### A 縄文時代草創期の石器

峰岡城山遺跡から尖頭器が1点出土している(図版36-64)。衝撃剥離による槌状剥離が生じたことにより、先端部を欠損しているが、復元長100mm程度の柳葉形尖頭器である。基部が円基状になるのが特徴的である。縄文時代早期以降の尖頭器・石槍と比較して調整剥離の精緻さと石材が選択的に良質な珪質頁岩を用いていることを重視し、縄文時代草創期の尖頭器と判断した。阿賀町小瀬ヶ沢洞窟〔中村1960、土橋1993〕出土の尖頭器に基部が円基状の尖頭器が類例としてある。草創期前半の隆起線文段階に時期的に相当すると考える。

周辺の旧石器時代終末から草創期遺跡分布を第30図、第25表に示した。遺跡分布は2001年の地図・表〔小・立木2001〕に訂正・加筆した。越後平野の基底地形(約20,000万年前後)を参考に示したが、旧石器時代の終末にはこの地形より河川堆積の影響で平野部では標高が高いと判断される。越後平野周辺では阿賀野川上流域を含め64遺跡確認された。その中でも尖頭器・石斧(局部磨製石斧・片刃石斧)の単独出土が多い〔立木・小熊2012〕。



第30図 越後平野周辺の旧石器時代終末～縄文時代草創期の遺跡

第2節 石器について

第25表 越後平野周辺の旧石器時代終末～縄文時代草創期の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	主な遺構・遺物〔発掘調査〕
1	上山	村上市(岩船郡山北町)	(尖頭器)
2	樽口	村上市(岩船郡朝日村)	尖頭器〔朝日村教委発掘1992・93年〕
3	ガラハギ	村上市(岩船郡朝日村)	ブロック1か所、配石2基：尖頭器、搔器、円形搔器、削器〔朝日村教委発掘1995年〕
4	能登山	村上市(岩船郡朝日村)	尖頭器
5	大関上野	村上市	尖頭器〔村上市教委発掘1996年〕
6	平林	村上市(岩船郡神林村)	尖頭器
7	天王前	村上市(岩船郡神林村)	尖頭器、棒状尖頭器〔県埋文事業団・神林村教委発掘1996年〕
8	松山	新発田市	尖頭器
9	上ノ山B	新発田市	尖頭器
10	上車野D	新発田市	尖頭器、局部磨製石斧、搔器
11	川東地区	新発田市	尖頭器、搔器、削器
12	岩倉A	阿賀野市(北蒲原郡笹神村)	尖頭器(旧遺跡名：勝屋)
13	薬師平A	阿賀野市(北蒲原郡笹神村)	尖頭器、局部磨製石斧、搔器、石核、石刃(旧遺跡名：村杉)
14	王ヶ峰	阿賀野市(北蒲原郡笹神村)	尖頭器
15	寺社地内	阿賀野市(北蒲原郡安田町)	尖頭器、有舌尖頭器(中道遺跡周辺)
16	愛宕澤	新潟市	局部磨製石斧、片刃打製石斧、石核〔新潟市教委発掘1998年〕
17	古津八幡山	新潟市	尖頭器〔新潟市教委発掘〕
18	大久保	三条市(中蒲原郡村松町)	局部磨製石斧
19	吉ヶ沢B	阿賀町(東蒲原郡三川村)	ブロック5か所、尖頭器、両面加工石器、片刃打製石斧、石刃〔県埋文事業団発掘1993年・94年〕
20	上ノ平A	阿賀町(東蒲原郡三川村)	尖頭器、局部磨製石斧〔県埋文事業団発掘1992年〕
21	上ノ平C	阿賀町(東蒲原郡三川村)	ブロック5か所、尖頭器、彫器、石核〔県埋文事業団発掘1991～93年〕
22	中峰	阿賀町(東蒲原郡三川村)	尖頭器、局部磨製石斧〔県埋文事業団発掘1993年〕
23	猿額	阿賀町(東蒲原郡津川町)	尖頭器〔県埋文事業団調査1992年〕
24	小瀬ヶ沢洞窟	阿賀町(東蒲原郡上川村)	縄文土器(隆起、爪形、押圧、回転他)、尖頭器、有舌尖頭器、植刃、棒状尖頭器、石斧、石鏃、石錐、搔器、石匙、磨石・敲石類、石皿、不定形石器、石核、船底形石器、有孔石製品、骨器、獣骨〔長岡市立科学博物館発掘1958・59年〕
25	室谷洞窟	阿賀町(東蒲原郡上川村)	縄文土器(多縄文系)、石鏃、石斧、搔器、不定形石器、磨石類、石核、骨製品、獣骨〔長岡市立科学博物館発掘1960～62年〕
26	八田蟹	阿賀町(東蒲原郡上川村)	尖頭器
27	上深沢牛谷窪	新発田市	石斧
28	稲島馬渡	新潟市(西蒲原郡巻町)	尖頭器
29	御手洗山	新潟市(西蒲原郡巻町)	片刃打製石斧
30	新谷	新潟市(西蒲原郡巻町)	局部磨製石斧
31	福井	新潟市(西蒲原郡巻町)	局部磨製石斧
32	有馬崎	燕市(南蒲原部分水町)	ブロック1か所：局部磨製石斧、石核〔分水町教委発掘1997年〕
33	川船河	南蒲原郡田上町	片刃打製石斧
34	牛ヶ沢B	加茂市	尖頭器〔加茂市教委発掘1992年〕
35	牛ヶ首B	三条市(南蒲原郡下田村)	局部磨製石斧
36	江口A	三条市(南蒲原郡下田村)	局部磨製石斧、採錐器
37	荒沢	三条市(南蒲原郡下田村)	ブロック1か所：尖頭器、削器、石刃(旧遺跡名：朴ノ倉)〔下田村教委発掘1992年〕
38	鹿峠	三条市(南蒲原郡下田村)	尖頭器、搔器
39	倉(蔵)山	三条市(南蒲原郡下田村)	尖頭器、彫器、削器、搔器、石刃
40	長坂	三条市(南蒲原郡下田村)	搔器、不定形石器
41	藤平A	三条市(南蒲原郡下田村)	尖頭器〔下田村教委発掘1984年〕
42	山屋	長岡市(三島郡越路町)	局部磨製石斧
43	耳取塚A	見附市	縄文土器(押圧)〔見附市教委発掘1987年〕
44	峠	見附市	局部磨製石斧
45	梅野俣北	栃尾市	尖頭器
46	上の沢	長岡市	棒状尖頭器
47	藤橋蛇新田	長岡市	局部磨製石斧
48	雉子打場	長岡市	尖頭器、片刃打製石斧
49	大原	柏崎市	局部磨製石斧
50	三仏生	小千谷市	縄文土器(爪形)、尖頭器、局部磨製石斧、片刃打製石斧〔長岡市科博発掘1955年、県埋文事業団発掘1996年〕
51	島山	長岡市	局部磨製石斧
52	城之腰	小千谷市	尖頭器、局部磨製石斧〔県教委発掘1980年〕
53	川井愛染堂	小千谷市	(尖頭器)
54	川井本田	小千谷市	(縄文土器(押圧))
55	天辺原A	小千谷市	(彫器、搔器)
56	百塚西C	小千谷市	縄文土器(隆起、無文)、断面三角形錐〔県埋文事業団発掘1995年〕
57	金塚	小千谷市	縄文土器(爪形)、局部磨製石斧〔県埋文事業団1995・96年〕
58	松ヶ城	南魚沼市(北魚沼郡広神村)	石鏃、打製石斧、両面加工石器、石核〔広神村教委発掘1990年〕
59	関山	佐渡市(佐渡郡真野町)	局部磨製石斧
60	にいやの田	佐渡市(佐渡郡真野町)	局部磨製石斧
61	八升ヶ平	佐渡市(佐渡郡羽茂町)	尖頭器
62	長者ヶ平	佐渡市(佐渡郡小木町)	有舌尖頭器
63	丸山	加茂市	尖頭器〔加茂市教委立会2011年〕
64	峰岡城山	新潟市(西蒲原郡巻町)	尖頭器

※〔小熊・立木2001〕に一部改変・訂正・追加

※※所在地の( )内町村名は合併前旧町村名

北から三面川、荒川、加治川、阿賀野川、加茂川、五十嵐川、刈谷田川水系の河成段丘上に所在する遺跡と越後平野に面する笹神、西山、東山・新津丘陵、角田・弥彦山塊麓など低丘陵上に立地する遺跡に大きく分かれる。

峰岡城山遺跡周辺の角田・弥彦山塊周辺は尖頭器・石斧（局部磨製石斧・片刃石斧）の単独遺物出土遺跡が5遺跡ある。唯一、燕市有馬崎遺跡〔前山1997〕では局部磨製石斧と石核・剥片の遺物集中地点が1か所確認されている。有馬崎遺跡も標高22mの丘陵先端に遺跡が形成されている。このような例は、新潟市内では秋葉区愛宕澤遺跡〔立木ほか2004〕で新津丘陵上標高15mのやせ尾根先端で局部磨製石斧・片刃石斧・石核・敲石が出土した遺物集中地点が1か所確認されている。両丘陵地ともに遺跡が丘陵上に断続的につながる状況を勘案すると、平野を望む丘陵上に移動ルートを持ち行動していた可能性を持つ。

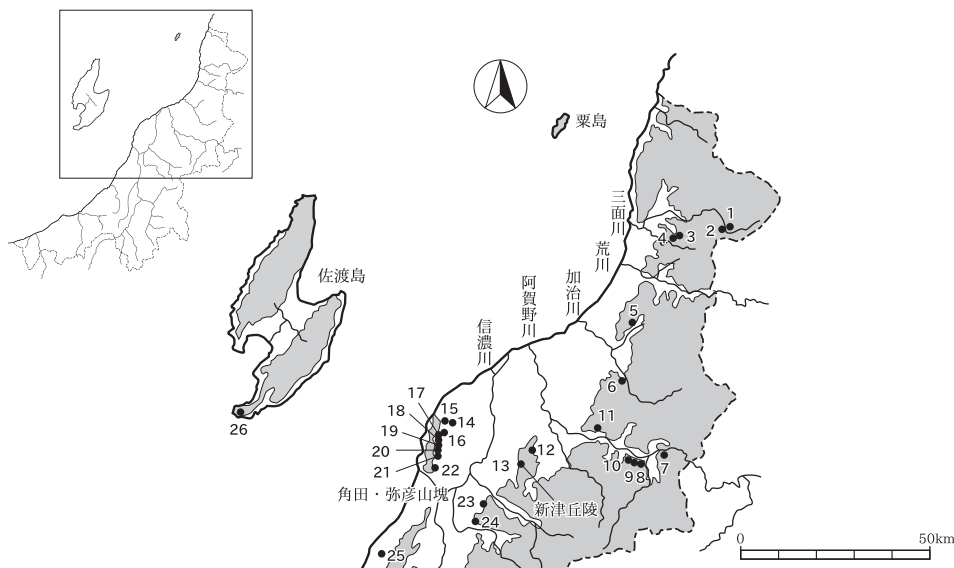
ただし、旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけての遺跡が平野部で検出されていない問題がある。平野の基底地形などからは古信濃川の河底が現在より100m以上低いことが確認されている〔新潟県地盤図編集委員会2002〕。角田・弥彦山塊の西蒲区干納遺跡〔新潟市2007〕では丘陵脇から急激に落ち込み、現地表面から約7m下で縄文時代前期の貝塚を含む包含層が確認されている。それ以前の旧石器～縄文時代草創期の地層はさらに下と考えられ、遺跡の存在の確認が出来ていないと考えるのが妥当であろう。現在の遺跡分布が「見かけの分布」の可能性を示唆している。これを考慮に入ると、当時の行動様式の解釈が異なってくる可能性がある。将来の正確な解釈のために、丘陵上も含めて、現在の平野部で旧石器時代終末から縄文時代草創期の拠点遺跡が確認されることを期待したい。

## B 縄文時代中期の石器

峰岡城山遺跡の縄文時代中期前葉の石器群は、数量的には縄文時代の石器群としては僅かではあるが、時期がある程度限定でき、かつ石器形態が多様であることで貴重な資料である。他遺跡との比較を通して様相を明らかにしたい。

比較の方法として新潟県下越地域周辺の前期終末から中期前葉の石器組成が比較可能な遺跡を抽出し、分布図（第31図）と組成表（第26表）を作成した。峰岡城山遺跡の中期前葉石器群は、前節の土器の詳細な分析による時期決定との対応は不可能である。あくまでも大枠で中期前葉石器群として進める。

新潟県域を対象とした石器組成研究は時空的・時間的双方の手法で新潟県全域を対象に活発におこなわれている。新潟県下越地域に関わる代表的なものとして新潟県域全体を対象とした鈴木俊成氏は各器種の機能を狩猟具、採集・加工具、調理具と仮定し、県内を結果として4ブロックに分かれるとし、組成パターンの変遷を明らか



第31図 新潟県下越地域周辺の縄文時代前期終末～中期前葉の石器組成関係遺跡



にした論考〔鈴木 1996・1998・1999〕、中期の生業に関する石器器種に限定し地域区分を行い、生業活動を明らかにした論考〔前山 2004〕、角田・弥彦山塊の石器組成と石材環境を検討し両地域での活動件の変動を検討した論考〔澤田 2011〕、村上市奥三面遺跡群の石器組成を遺跡類型ごとに扱った論考〔滝沢 1999〕、新発田市周辺の石器組成を扱った論考〔鈴木 2003〕などがある。

石器の機能については個別の検討が必要であると考え、以前より早急な機能との結び付けの限界性も指摘〔阿部 1985〕されており、今回はあくまで個別に石器種別として扱い「器種」としては明らかに確定的なものについて述べるに留める。時期的差違を当初考慮する予定であったが、前期末から中期前葉にかけての連続的に出土する遺跡が多く、特徴を明確に示せない遺跡が多く、明確に分離できる場合について触れる。以下、河川や丘陵ごとにまとめて説明する。

三面川流域では下ゾリ遺跡 (1)、沼ノ沢遺跡 (2) など石鎌・石匙・篋状石器が目立つ。また、磨製石斧中に蛇紋岩製が定量ある。山崎遺跡 (3)、大関上野遺跡 (4) で打製石斧が多数出土している。

加治川流域では二タ子沢 A 遺跡 (5)、狐森 B 遺跡 (6) があり石鎌・石匙・篋状石器の多出が目立つ。また、両遺跡ともに玉関連資料が多く出土しており垂飾などは蛇紋岩を多用している。また二タ子沢 A 遺跡では磨製石斧の蛇紋岩使用比率が半分近くある。打製石斧も数量的に安定して両遺跡で確認出来る。

阿賀野川流域には上流域を中心に遺跡が密集して確認されている。上層、下層としたものは福島県沼沢火山起源の「鹿瀬軽石質砂層」〔稲葉ほか 1976〕の堆積層の上下である。沼沢火山は約 5,000 年前に噴火している。「鹿瀬軽石質砂層」の下層直下から猿額遺跡〔桐原ほか 2008〕で大木 6 式新段階の遺物が出土している。前期末葉から中期前葉に係わる遺跡で上下層確認出来る遺跡は北野 (7)・向大浦 (8)・大坂上道 (9)・猿額 (10) 遺跡である。「鹿瀬軽石質砂層」の上下層が概ね、前期と中期の境となるようである。北野遺跡上層は相当の異時期の資料が混じっており、評価が難しい。多量に出ている板状石器は中期中葉以降の所産である。下層も前期全般の時期が出ており時期比定が難しいが石鎌・石匙・篋状石器の多出などが目立つ。また、磨製石斧は 16 点中 4 点が糸魚川産蛇紋岩製である。また、石錘が 340 点出土しており遺跡の特徴を表している。猿額遺跡 (II) の下層は前期前葉を含むが末葉が主体の好資料である。篋状石器が定量出ている。向大浦遺跡上層は中期前葉主体の遺跡である。篋状石器が比較的多出している。阿賀野川中流域の萩野遺跡 (11) で磨製石斧が 15 点中 9 点確認される。篋状石器が皆無である。

新津丘陵から東山丘陵沿いの平 (12)、古屋敷 (13)、吉野屋 (23)、山崎 A (24) 遺跡では、篋状石器が組成に見られない。磨製石斧中の蛇紋岩が定量確認出来る。吉野屋遺跡では石鎌が多出する。

角田・弥彦山塊丘陵地(一部低地含む)の遺跡では篋状石器は確認出来ない。磨製石斧は前期前葉の布目遺跡(14)の段階から見られ、新谷遺跡 (20) では糸魚川方面から搬入された蛇紋岩の原石や未成品を用いて磨製石斧製作を行っている〔浅井 1989〕。また石錘も多量に出土している。前期後半以降から始まる南赤坂遺跡 (16)、重稲場遺跡 (18)、豊原遺跡 (19) では明確に磨製石斧中に定量蛇紋岩が入り、南赤坂・豊原遺跡では磨製石斧製作が行われている。礫石錘が相当量入っている。中期前葉が主体の大沢遺跡 (15) では石鎌の多出が目立ち、石錘が定量存在する。峰岡城山遺跡 (17) では、磨製石斧中に 9 点中 7 点と蛇紋岩の比率が高い。玉未成品も良質な蛇紋岩類を用いている。石錘が皆無である。弥彦山麓の樋筒遺跡 (21) では前期前葉から遺跡が始まるが、磨製石斧中の蛇紋岩の比率が高い。石錘が調査面積の割合にしては非常に多出している。有馬崎遺跡 (22) では磨製石斧中に蛇紋岩製が半数入る。タテ遺跡 (25) でも同様の傾向がある。参考に佐渡市長者ヶ平遺跡 (26) を掲載した。石鎌が多出しており、磨製石斧中に数量不明であるが蛇紋岩が用いられている。海岸に近いが石錘がほとんど出土していない。

以上、地域別に見てきたが、特徴ある石器種別を見てみたい。石鎌の出土量が多い遺跡と少ない遺跡が地域に偏らず存在している。狩猟形態の違いもあるが遺跡規模と場の機能に制約された結果であろう。石匙は、阿賀野川流域の下流域の遺跡で相対的な数が減少している。三面川・加治川・阿賀野川流域で多く越後平野丘陵部の遺

跡で少ないのも地域差の一つと考える。籠状石器は三面川・加治川流域および阿賀野川上流域では定量存在するが、阿賀野川中流域から越後平野丘陵部の遺跡では見いだせない。片寄った分布状況である。籠状石器は新潟県内では早期終末から前期前半に出現し〔北村ほか1990〕、期中中葉にはほとんど姿を消す〔鈴木1996〕。前期終末から中期前葉は籠状石器の終末にあたる。分布の差は地域差を表す様相と考える。ただし、新津丘陵沿いの加茂川上流域などには時期不明ながら籠状石器が出土することから<sup>注1)</sup>、低地での使用の頻度が低い石器の可能性もある。打製石斧は組成上の特異性を前山精明氏が指摘しており、エリアIVとした魚沼地方からの「貫入的」ともいえる情報移入<sup>注2)</sup>であると述べている〔前山2004〕。加治川流域にも多少出土していることから「貫入」の過程の可能性もある。磨製石斧は糸魚川産蛇紋岩の出土の多僅の比較を試みたが、結論的にはこのエリア内を超える範囲で流通している。山形県境の三面川上流域と福島県境の阿賀野川上流域で定量検出されていることから、さらに県外に広がる広範囲の流通が見通せる。中期初頭から前葉の磨製石斧生産を検討した鈴木俊成氏の論考によると〔鈴木1998〕、この段階を磨製石斧生産のⅡ期として磨製石斧生産地の糸魚川地域での集約化と陸路を使つての遺跡間ネットワークの拡大する時期と位置付けている。まさに陸路を使つての広域のネットワーク化が計らえた段階として鈴木氏の考えに首肯できる。今回、蛇紋岩以外の磨製石斧に気になった点がある。峰岡城山遺跡では破片ながら2点蛇紋岩以外の石材である緑色凝灰岩が用いられていた。明確な産地は不明であるが近隣では阿賀野川流域上流の第三紀層に含まれる石材である。阿賀野川流域との関係を示唆すると考えられる。中期前葉段階でも自己消費以外の目的で在地石材を用いた磨製石斧生産を行った遺跡が下越地方に存在する可能性がある。後・晩期に多量に磨製石斧を製作する遺跡が多数、阿賀野川以北に見られる〔高橋(保雄)1999〕。中期前葉以降に磨製石斧製作を行っているのは北野遺跡上層〔高橋(保雄)ほか2005〕がある<sup>注2)</sup>。それ以外では、角田山麓の南赤坂・豊原遺跡で蛇紋岩を用いた磨製石斧製作が一部自家消費的に行われている。石錘は用途については諸論〔前山2004〕あるが、同地域内でも保有数に相当な偏りが見られる。この時期の石錘は礫石錘が大多数で、漁獵等が用途の候補になろう。今回の峰岡城山遺跡では皆無であったが、北500m程の谷向こうの南赤坂遺跡では多量に保有している。南赤坂遺跡の南側すぐに旧河道があった可能性が高いことも影響していると考えられる。このように地図上で隣接していても保有の有無に差が出る遺跡がある。

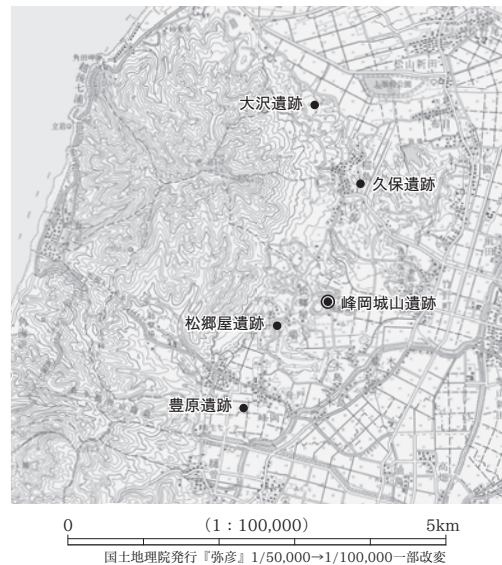
石器組成について以上述べたが、先学の業績に対して屋上屋を重ねるだけとなった。阿賀野川上流域の「鹿瀬軽石質砂層」の上下で前期と中期の境界となるようである。前期末葉と中期前葉の様相差は明確に出来なかった。層位的な事例が積み重なれば弥彦・角田山塊周辺の低湿地遺跡の層位的事例との対比も可能となろう。課題が多く検討を続けたい。

最後に若干、磨製石斧の石材以外の峰岡城山遺跡の石材について触れる。前述の前期終末の重稲場遺跡(18)と中期前葉主体の大沢遺跡では、信州産の黒曜石が相当数持ち込まれている〔前山1990・1994c、金山・鈴木・前山1995〕。今回の峰岡城山遺跡の黒曜石は信州産との結果(第VI章第5節参照)が出ている。ほぼ、大沢遺跡と同時期であり黒曜石の大量搬入時期と符合する。剥片石器の多くは珪質頁岩・珪質凝灰岩・玉髓・鉄石英(赤・黄玉)などが使用されている。また1点の敲石は無斑晶質安山岩製である。

珪質頁岩の一部や玉髓、鉄石英(赤・黄玉)などは新第三紀層中に含まれる。弥彦山周辺〔阿部2010〕、阿賀野川以北〔阿部1997、早瀬2007〕あるいは信濃川流域の新津・東山丘陵沿いの加茂川・五十嵐川〔堀川・渋木2010〕・刈谷田川〔中村2007〕などを含めた地域からもたらされた可能性もある。また無斑晶質安山岩は信濃川上流域の津南から長野県飯山市付近に産する。近くても新潟市内の信濃川に転石としてあったものを利用している。敲石や台石・凹石などは峰岡城山遺跡の基盤層の地山に含まれる安山岩なども石材として利用している。玉未成品の良質な蛇紋岩類は糸魚川地域からもたらされた可能性が高い。石材の直接・間接的交流域の幅は海岸部に位置する遺跡の特徴として見いだせる。

### 第3節 峰岡城山遺跡の性格について

本報告にて述べてきたように、本調査区は削平され消滅した尾根上に存在したと推定される縄文時代中期前葉を主体とした集落の遺物廃棄場である。角田山麓周辺の当該期の集落としては本遺跡をのぞき北から大沢遺跡・久保遺跡・松郷屋遺跡・豊原遺跡の計4か所の集落跡が存在する〔前山1994a〕(第32図)。本遺跡を含め全て東麓に位置し、1～2kmを隔てて点在している。北と南に前段階から長期継続している大沢遺跡と豊原遺跡が位置し、久保・峰岡城山・松郷屋遺跡が出現する。出土遺物の様相からは本遺跡が最も短期継続であったようである。本集落は遺物の出土量・継続期間、および第2・3図・写真図版1から見受けられる尾根平坦面の規模等を考慮すると大きな集落ではなく、小規模な最小単位集団程度で形成されていた集落と推測する。土器群の様相からは出土個体数の割には異系統土器群の出土が見られるため、前段階からの在地の集団に異系統の集団が融合し、新規に進出した集落の可能性を考える。



第32図 角田山麓における縄文時代中期前葉集落遺跡分布図

遺跡の本体は壊滅しているため不明であるが、本調査範囲には谷1の沢跡湧水地点下流にSX29と称した沢跡を掘り込んだ土坑が存在する。位置的な状況から簡易の水場と推測する。検出された3条の谷のうち、谷2・3からは遺物が集中して出土しており廃棄場もしくは物送りの場としての機能が推測される。反面、水場が存在する谷1からの遺物出土量は少なく、さらにSX29からは台石・凹石という日常の仕器の出土が見受けられたため、谷1は日常の場であった可能性が高い。また、谷1の出土土器の様相は谷2出土土器の傾向と類似しており(3b ii類の楔形印刻文、4b類の爪形文土器群の出土傾向)、谷2へ遺物を廃棄した人々により利用されていた可能性が想定される。

今回の調査事例から、当該期の集落調査においては集落外への遺物の廃棄行為を視野に入れる必要性が挙げられ、集落外周の踏査も重要となろう。当該期の遺跡では土器の遺構内一括出土資料が非常に乏しく、編年の確立を困難としている要因となっている。遺構一括資料が乏しい限り、こうした廃棄場の廃棄単位とその様相、さらには集落内出土遺物との接合関係等を手掛かりに、同時性に近い資料を抽出していくことが当該期の様相解明の一助になると考える。

本遺跡上層からは古代・中世の遺物が出土している。中世の遺物は僅かであり、隣接する下城跡と関連するものと思われる。古代については遺物の様相から9世紀末から10世紀初頭と考えられるが、その遺物分布を見ると斜面裾部の標高10mまでの範囲に集中していることが分かる(第13図・図版38)。現況は斜面前面に水田が広がり、本遺跡における遺物の分布状況を併せて推測すると、斜面裾端部から田面下にかけて当該期の遺跡が埋没している可能性が高いと言えよう。当該期は大規模な集落が沖積平野部へ進出する時期であり、角田山東麓の様相は未だ不明瞭であるため、今後の成果が期待される。

#### 注

注1) 加茂市民俗資料館伊藤秀和氏ご教示。

注2) 中期中葉以降の可能性もある。



## 引用・参考文献

- ア 相田泰臣・前山精明 2003 『菖蒲塚古墳・隼人塚古墳 2002 年度確認調査の概要』 巻町教育委員会  
相田泰臣・前山精明 2005 『菖蒲塚古墳・隼人塚古墳Ⅱ 2003 年度確認調査の概要』 巻町教育委員会  
相田泰臣<sup>ほか</sup> 2012 『林付遺跡 第2次調査-新潟市立潟東南小学校体育館建設工事に伴う林付遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市文化観光・スポーツ部 文化財センター  
青森県史編さん考古部会編 2003 「脇野沢沖海上がり陶磁器」『青森県史 資料編考古4 中世・近世』 青森県  
浅井芳伸 1989 「巻町新谷遺跡における磨製石斧製作工程の復元」『巻町史研究』V 巻町  
阿部朝衛 1985 「縄文時代石器研究の視点と方法」『法政考古学』第10集 記念論文集 法政考古学会  
阿部朝衛 1997 「新潟県北部地域における縄文時代の石材利用とその背景」『帝京史学』第12号 帝京史学会  
阿部朝衛 1999 「第1章 旧石器時代 第3節 環境と遺跡 第3項 石材」『新潟県の考古学』高志書院  
阿部朝衛 2010 「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』第25号 帝京大学文学部史学科  
甘粕 健・小野 昭<sup>ほか</sup> 1993 『越後山谷古墳』 巻町教育委員会  
甘粕 健・古川知明<sup>ほか</sup> 1981 『大沢遺跡B'・B地区の調査概報』 巻町・潟東村教育委員会  
甘粕 健 1994 「Ⅱ考古資料 2各時代の概観 3弥生時代・古墳時代」『巻町史 資料編1 考古』 巻町
- イ 石川秀雄 1976 『陶磁選書6 越後の陶磁』 雄山閣  
稲葉 明<sup>ほか</sup> 1976 「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県立教育センター研究報告』第9号 新潟県立教育センター
- オ 小笠原雅行 2008 「円筒上層式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編 『総覧縄文土器』 刊行委員会  
小熊博史 1994 「布目遺跡」『巻町史』資料編1 考古 巻町  
小熊博史・立木宏明 2001 「V新潟県における縄文時代草創期の遺跡と遺物 1 新潟県内の遺跡と遺物の概要」『長岡市立科学博物館開館50周年記念特別展図録 重要文化財考古資料展-火焰土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品-』 長岡市立科学博物館  
小野 昭<sup>ほか</sup> 1982 『大沢遺跡Ⅱ 第3次調査概報』 新潟大学考古学研究室  
小野 昭・小熊博史 1987 「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅲ 巻町  
小野 昭・前山精明<sup>ほか</sup> 1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ 巻町  
小野 昭・前山精明 1994 「豊原遺跡」『巻町史』資料編1 考古 巻町
- カ 春日真実 1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会  
春日真実 1997b 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会  
春日真実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会  
春日真実 2000 「第5章 まとめ」『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』 吉田町  
加藤 学・荒川隆史 1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
金内 元<sup>ほか</sup> 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第222集 一般国道49号線揚川改良関係発掘調査報告書Ⅳ 向大浦遺跡 上空野中丸遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
金山喜昭・鈴木正男・前山精明 1995 「(4) 縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会  
亀井 功・望月正樹 1994 「4. 遺物」『磐越自動車道関係発掘調査報告書 萩野遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
亀井 功<sup>ほか</sup> 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 萩野遺跡 官林遺跡』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
川上貞雄 1982 『平遺跡緊急発掘調査報告書』 新津市教育委員会  
川上貞雄 1996 『金津丘陵製鉄遺跡群 居村B・D地区』 新津市教育委員会  
川上貞雄 1997 『和納館遺跡』 岩室村教育委員会
- キ 北村 亮<sup>ほか</sup> 1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原I遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会  
桐原雅史<sup>ほか</sup> 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第186集 一般国道49号線揚川改良関係発掘調査報告書Ⅱ 大阪上道遺跡Ⅱ 猿額遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ク 桑原正史 1994 「第二編 第一章 古代の蒲原地方」『巻町史 通史編上』 巻町

- コ 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡 的場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会  
 小林達雄<sup>ほか</sup> 1981 『長者ヶ平遺跡』 小木町教育委員会  
 小林達雄<sup>ほか</sup> 1982 『長者ヶ平遺跡－Ⅱ－』 小木町教育委員会  
 小林達雄<sup>ほか</sup> 1983 『長者ヶ平遺跡－Ⅲ－』 小木町教育委員会  
 小林達雄<sup>ほか</sup> 1984 『長者ヶ平遺跡－Ⅳ－』 小木町教育委員会
- サ 坂上有紀 2011 「第Ⅴ章 4A 土器」 「第Ⅶ章 1B 最下面の遺物」 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXVII 長割遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 224 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 斉藤 準 2008 「B 縄文土器」 『一般国道 49 号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅱ 大坂上道遺跡Ⅱ』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 186 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 佐々木達夫・野上建紀・佐々木花江 2010 「青森県むつ市・北海道村松町・上ノ国町・江差町・函館市の水中文化遺産」 『金大考古』 第 68 号 金沢大学考古学研究室  
 佐藤雅一 1991 『山崎 A 遺跡発掘調査報告書』 見附市教育委員会  
 澤田 敦 2011 「第Ⅶ章まとめ 2 石器 3 遺跡」 『県営かんがい排水事業西蒲原排水 2 期地区矢川排水路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 桶筒遺跡』 弥彦村教育委員会  
 澤田 敦・山下 研 2011 『県営かんがい排水事業西蒲原排水 2 期地区矢川排水路に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 桶筒遺跡』 弥彦村教育委員会
- シ 塩原知人・竹内 裕 2000 『大関上野遺跡・山崎遺跡－県営ほ場整備事業（村上山辺里地区）関連発掘調査報告書 村上市教育委員会  
 品田高志<sup>ほか</sup> 2011 『新潟県柏崎市剣野遺跡群 剣野 B 遺跡発掘調査報告書 剣野』 柏崎市埋蔵文化財報告書第 63 集 柏崎市教育委員会  
 縄文セミナーの会 2009 第 22 回縄文セミナー 『中期初頭の再検討－記録集－』 縄文セミナーの会
- ス 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』 柏書房  
 鈴木俊成 1996 「A 新潟県の石器組成の概要と清水上遺跡」 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集 清水上遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 鈴木俊成 1998 「新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について－縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に－」 『研究紀要』 第 2 号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 鈴木俊成 1999 「第 2 章 縄文時代 第 5 節 道具と技術 第 2 項 早期から晩期の石器組成」 『新潟県の考古学』 高志書院  
 鈴木 暁 2003 「第Ⅵ章 まとめ C. 石器と石製品」 『二太子沢 A 遺跡発掘調査報告書 県営農村活性化住環境整備事業（菅谷地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 新発田市教育委員会
- タ 高橋 保 1999 「第 2 章 縄文時代 第 4 項 中期 2 編年と地域性 中期前葉」 『新潟県の考古学』 新潟県考古学会  
 高橋 保・鈴木俊成 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 39 国道 116 号線埋蔵文化財発掘調査報告書 タテ遺跡』 新潟県教育委員会  
 高橋保雄 1998 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅸ 落合向い遺跡 坂巻遺跡 沼ノ沢遺跡』 朝日村教育委員会  
 高橋保雄 1992 「第Ⅳ章 五丁歩遺跡 4 遺物 B 石器類」 『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡 十二木遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 57 集 新潟県教育委員会  
 高橋保雄 1999 「阿賀野川以北の磨製石斧生産の様相」 『新潟考古学談話会会報』 第 20 号 新潟考古学談話会  
 高橋保雄・荒谷伸郎 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 119 集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 北野遺跡Ⅰ（下層）』 新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 高橋保雄<sup>ほか</sup> 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 141 集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 北野遺跡Ⅱ（上層）』 新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 滝沢規朗<sup>ほか</sup> 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 68 集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 大阪上道遺跡 猿額遺跡 中棚遺跡 牧ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 滝沢規朗 1999 「奥三面遺跡群の石器組成－遺跡類型別に見た石器組成比較－」 『新潟考古学談話会会報』 第 20 号 新潟考古学談話会  
 滝沢規朗・坂上有紀<sup>ほか</sup> 2011 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXVII 長割遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 224 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 田中耕作 1999 「第 2 章 縄文時代 第 5 項 後期 2 編年と地域性 後期前葉」 『新潟県の考古学』 新潟県考古学会

- 田中耕作・鈴木 暁 2003 『ニタ子沢 A 遺跡発掘調査報告書 県営農村活性化住環境整備事業（菅谷地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 III』 新発田市教育委員会
- 田中耕作<sup>ほか</sup> 2007 『狐森 B 遺跡発掘調査報告書—県営ほ場整備事業（加治川右岸地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II』 新発田市埋蔵文化財調査報告書第 34 号 新発田市教育委員会
- 田中 靖 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書 第 16 集 八幡林遺跡 IV』 新潟県和島村教育委員会
- 田辺早苗・大賀 健 2002 『神林村埋蔵文化財報告第 18 樋渡遺跡・堀下遺跡』 神林村教育委員会
- ツ 立木宏明<sup>ほか</sup> 2004 『愛宕澤遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明 2013 「峰岡城山遺跡」『平成 24 年度遺跡発掘調査速報会—最新調査成果が語る新潟市の歴史—』 新潟市文化財センター
- 立木宏明・小熊博史 2012 「信濃川中流域における縄文時代草創期の石斧—長岡市立科学博物館所蔵資料を中心に—」『長岡市立科学博物館研究報告』第 47 号 長岡市立科学博物館
- テ 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式系土器—縄文時代中期初頭後半から前葉の編年と型式—」『新潟県の考古学 II』 新潟県考古学会
- ト 田海義正・藤田 登 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 235 集 一般国道 49 号揚川改良関係発掘調査報告書 V 大坂上道遺跡 III』 新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 1993 「新潟県小瀬が沢洞窟出土遺物の再検討 石器 A. 尖頭器」『環日本海における土器出現期の様相』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- ナ 中島栄一<sup>ほか</sup> 1976 『古屋敷遺跡 新潟県南蒲原郡田上町古屋敷遺跡調査報告』 田上町教育委員会
- 中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』 長岡市立科学博物館
- 中村由克 2007 「石器石材としての玉髓の原産地とその調査方法—長岡市栃尾における玉髓原産地を例として—」『新潟考古』第 18 号 新潟県考古学会
- 中村由克 2011 「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第 19 号 野尻湖ナウマンゾウ博物館
- ニ 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974 『吉野屋遺跡 調査報告第 5 冊』
- 新潟県農地部農地計画課 1974 下越開発地域土地分類基本調査（国土調査）弥彦・内野 5 万分の 1
- 新潟県地盤図編集委員会 2002 『新潟県地盤図説明書』 社団法人新潟県地質調査業協会
- 新潟市 2007 「干納遺跡」『新新潟歴史双書 2 新潟市の遺跡』
- ハ 早瀬加菜 2007 「縄文時代における加熱処理石器製作技術の研究—新潟県域の玉髓製石器の観察を通して—」『新潟考古』第 18 号 新潟県考古学会
- ホ 堀川正美・渋谷宏人 2010 「五十嵐川流域の石器石材について」『三条考古学研究会機関誌』第 4 号 三条考古学研究会
- マ 前山精明 1990 『大沢遺跡—縄文時代中期前葉を主とする集落跡の調査概要—』 巻町教育委員会
- 前山清明 1991 「巻町豊原遺跡 VI 群 3 類土器器」『新潟考古』第 2 号 新潟県考古学会
- 前山精明 1994a 「II 2 各時代の概観 2 縄文時代・3 遺跡と遺物 縄文時代」『巻町史 資料編 1 考古』 巻町
- 前山精明 1994b 「重稲場須恵器窯跡」『巻町史』資料編 1 考古 巻町
- 前山精明 1994c 「第 1 編 第 3 章 角田山麓の縄文文化—成熟した狩猟・漁撈・採集社会」『巻町史 通史編上』 巻町
- 前山精明 1997 『有馬崎遺跡』 分水町教育委員会
- 前山精明 2004 「石器から見た生業」『火炎土器の研究』 同成社
- 前山精明 2009 「豊原遺跡 VI 群 3 類土器再考」『新潟県の考古学 II』 新潟県考古学会
- 前山精明・山口栄一 1985 『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』 巻町教育委員会
- 前山精明・滝沢規朗 2000 「第 4 章 吉田町周辺の遺跡 第 1 節 時代概観」『吉田町史 資料編 1 考古・古代・中世』 吉田町
- 前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡—縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査—』 巻町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2003 『御井戸遺跡 I—2002 年度確認調査の概要—』 巻町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2004 『御井戸遺跡 II—2002 年度確認調査の概要—』 巻町教育委員会
- 巻町閉町記念誌編集委員会 2005 『新潟県巻町閉町記念誌 光あふれる大地から』 巻町
- 松下 亘・氏家 等・笹木義友 1978 「焼酎徳利について—明治期における新潟と北海道との関連資料—」『北海道開拓記念館研究年報』第 6 号 北海道開拓記念館
- ミ 御堂島正 1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』第 92 号 早稲田大学考古学会
- 御堂島正 1993 「加熱処理による石器製作」『考古学雑誌』第 79 号 日本考古学会

- ヤ 山口栄一 1983 『巻町郷土資料館資料目録 No.5 松郷屋焼館蔵品目録』 巻町郷土資料館  
山口栄一 1984 「西川の遺跡」『西川町史考』 西川町教育委員会  
山口栄一 1994a 「第二編第一章考古学が捉える巻町の古代」『巻町史 通史編上』 巻町  
山口栄一 1994b 「第二編第四章考古学が捉える巻町の中世」『巻町史 通史編上』 巻町  
山口栄一 1994c 「Ⅱ考古資料 2 各時代の概観 5 中世」『巻町史 資料編 1 考古』 巻町  
山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
- ヨ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館  
吉田町 2000 「第2章 中世資料」『吉田町史 資料編 1 考古 古代 中世』 吉田町
- ワ 若月正光・山口栄一 1994 「上城跡」『巻町史 資料編 1 考古』 巻町  
和田寿久<sup>ほか</sup> 1990 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 下ゾリ遺跡』 朝日村教育委員会  
渡邊朋和・小田由美子・上沼茂 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－居村遺跡 E・A・C 地点、大入遺跡 A 地点』 新津市教育委員会  
渡邊朋和・立木宏明<sup>ほか</sup> 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会  
渡邊朋和・立木宏明<sup>ほか</sup> 2004 『八幡山遺跡群発掘調査報告書 第11・12・13・14次調査』 新津市教育委員会  
渡邊ますみ 1993 『緒立 C 遺跡発掘調査概報』 黒埼町教育委員会  
渡邊ますみ<sup>ほか</sup> 1994 『緒立 C 遺跡発掘調査報告書』 黒埼教育委員会  
渡邊ますみ・奈良貴史 2012 『四十石遺跡 第2次調査－(仮称)新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四十石遺跡第2次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会

## 第Ⅵ章 自然科学分析 参考文献

### (第1節)

- 杉山真二・藤原宏志 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19 p.69-84.  
杉山真二 2000 「植物珪酸体 (プラント・オパール)」『考古学と植物学』 同成社 p.189-213.  
鈴木貞雄 1996 「タケ科植物の概説」『日本タケ科植物図鑑』 聚海書林 p.8-27.  
藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29.  
室井 緯 1960 「竹笹の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』5 p.103-121.

### (第2節)

- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』 角川書店 p.248-262.  
島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.  
中村 純 1967 『花粉分析』 古今書院 p.82-102.  
中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p.

### (第3節)

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985 『木材の構造』 文永堂出版 290p.  
島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣 296p.

### (第4節)

- Talma, A.S. and Vogel, J.C. 1993 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates Radiocarbon 35 (2) p.317-322.

### (第5節)

- 藁科哲男・東村武信 1975 「蛍光 X 線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅱ)」『考古学と自然科学』8 p.61-69  
藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 1977 「蛍光 X 線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅲ)」『考古学と自然科学』10 p.53-81  
藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 1978 「蛍光 X 線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅳ)」『考古学と自然科学』11 p.33-47  
藁科哲男・東村武信 1983 「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16 p.59-89  
東村武信 1976 「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9 p.77-90  
東村武信 1980 『考古学と物理化学』 学生社

別表1 峰岡城山遺跡下層（縄文時代）遺構計測表

凡例 1. 観察表の記載順は遺構の種類ごと、番号順であり、あわせて分割図版 No.・個別図版 No.・写真図版 No. を明記し、索引としての役割をもたせてある。  
2. 遺構の分類及び項目・切り合い関係等は、本文第IV章の記述に対応する。  
3. 規模の（ ）内数値は残存部からの復元推定値である。

## ピット (Pit)

分割図版 No.	個別図版 No.	写真図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	規模 (m)					底面標高 (m)	ピット傾斜		形態		覆土	堆積状況	重複関係	出土遺物	遺物図版頁	備考
							上端		下端		深度		角度	方向	平面	断面						
							長軸	短軸	長軸	短軸												
10	13	11	Pit 4	2B-2I7	縄文中期	IV層	0.39	0.29	0.14	0.12	0.34	8.32	19°	N-23° -W	楕円形	階段状	2	斜位				
10	13	11	Pit 5	2B-2I1	縄文中期	IV層	0.24	0.21	0.12	0.08	0.25	8.46	鉛直		楕円形	U字状	1	単層				
10	13	11	Pit 8	2B-2H2	縄文中期	IV層	0.40	0.32	0.27	0.24	0.20	11.88	鉛直		楕円形	台形状	1	単層				
10	13	11	Pit 9	2B-2H7	縄文中期	IV層	0.33	0.23	0.12	0.08	0.18	11.98	鉛直		楕円形	半円状	1	単層				
10	13	12	Pit 10	2B-1H22	縄文中期	IV層	0.26	0.20	0.19	0.14	0.20	11.24	鉛直		楕円形	U字状	1	単層				
10	13	12	Pit 11	2B-2H1	縄文中期	IV層	0.26	0.26	0.20	0.12	0.20	12.00	鉛直		円形	台形状	1	単層				
10	13	12	Pit 14	2B-1H12	縄文中期	IV層	0.24	0.24	0.14	0.06	0.37	7.80	鉛直		円形	U字状	1	単層				
10	13	12	Pit 15	2B-2H7	縄文中期	IV層	0.40	0.40	0.10	0.08	0.40	11.64	16°	N-45° -E	円形	階段状	1	単層				
10	13	13	Pit 16	2B-2H1	縄文中期	IV層	0.20	0.20	0.15	0.10	0.20	12.12	鉛直		円形	U字状	1	単層				
10	13	13	Pit 18	2B-1H11	縄文中期	IV層	0.26	0.26	0.17	0.13	0.36	11.84	鉛直		円形	U字状	1	単層				
10	13	13	Pit 19	2B-1H18	縄文中期	IV層	0.22	0.22	0.14	0.13	0.20	10.12	鉛直		円形	台形状	1	単層				
10	13	13	Pit 20	2B-1H22	縄文中期	IV層	0.31	0.31	0.18	0.15	0.23	11.16	鉛直		円形	U字状	1	単層				
10	13	13・14	Pit 21	2B-1H17	縄文中期	IV層	0.20	0.20	0.12	0.08	0.23	10.70	15°	N-35° -E	円形	U字状	1	単層				
10	13	14	Pit 23	2B-1H11・12	縄文中期	IV層	0.32	0.32	0.12	0.12	0.23	10.96	鉛直		円形	階段状	2	斜位				
11・12	13	14	Pit 24	2B-4I21・22	縄文中期	III層下	0.34	0.34	0.12	0.08	0.64	15.88	13°	N-60° -E	円形	U字状	1	単層		土器片 2点		
11・12	13	14	Pit 28	2B-4I21・22	縄文晩期	III層下	0.20	0.20	0.11	0.11	0.43	16.12	鉛直		円形	U字状	1	単層				

## 性格不明遺構 (SX)

分割図版 No.	個別図版 No.	写真図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方向	規模 (m)					底面標高 (m)	形態		覆土	堆積状況	重複関係	出土遺物	遺物図版頁	備考
								上端		下端		深度		平面	断面						
								長軸	短軸	長軸	短軸										
11・12	14	14・15	SX 17	2B-4H15・20・25, 4I11・16・21	縄文中期	III層下	N-33° -W	3.08	2.68	2.52	2.28	0.88	16.04	不整楕円形	弧状	8	斜位	縄文土器 (119 ~ 122)、土器片 8点	24	倒木痕	
9・10	15	15	SX 29	2B-2G1・2・6 ~ 8・11 ~ 13	縄文中期	III層下	N-34° -E	2.60	1.44	2.22	1.12	0.40	14.92	不整隅丸方形	弧状	2	レンズ状	縄文土器(1・2)、土器片 10点、石器(1・2)	20・28	簡易な水場か	

別表2 縄文土器観察表

凡例 出土位置の遺構とグリッド両者に記載のあるものは、遺構出土土器と包含層出土土器が接合・同一個体関係にあることを示している。

口径・底径の（ ）内数値は復元値である。

胴部最大径は、口径よりも胴部に最大径を有するものの値である。

器高の [ ] 内数値は、口径部から8割程度遺存するものの残存値である。

胎土中の混和材については右の略号にて記した。石英：石、長石：長、チャート：チャ、海綿骨針：海、雲母：雲、角閃石：角、白色岩粒：白岩、橙色土粒：橙粒、白色粒子：白粒。

相対的な量を右のようにした。◎：多量、○：中量、なし：微量～少量

施文の原体回転方向は横位方向以外のものみ（ ）内に表記した。

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土		付着物		文様・施文	備考	
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部最大径	底径	器高	口径部	底部	全体	色調	混和材	分類	外面			内面
20	18	1	SX29		1, 2	深鉢	IV群 1a ii類	口					1			橙 (7.5YR6/6)	チャ・雲・白粒・橙粒○	I a	炭化物		口：斜縄文 LR	
20	18	2	SX29		1, 2, III, IV	深鉢	IV群 2類	口～体					4			橙 (7.5YR7/6)	白岩○・橙粒○	I a			口～体：無文 ミガキ	
20	18	3	谷 1 包含層	2B-1G24	III	深鉢	II群 1類	口					1			にぶい橙 (7.5YR7/4)	石○・長○・チャ・白粒	II b			口唇：縄側面圧痕文 口：斜格子目文	
20	18	4	谷 1 包含層	2B-1G24, 2G4	III	深鉢	II群 2a i類	口					1			浅黄 (2.5Y7/3)	石◎・雲◎	II a	炭化物	炭化物	口上位：縦位沈線文 (半隆起線) 口下位：斜縄文 LR	
20	18	5	谷 1 包含層	2B-2G1	III, IV	深鉢	II群 3b ii類	口					2			明黄褐 (10YR7/6)	石・チャ・白粒・橙粒	II b			口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯 頸：爪形文	
20	18	6	谷 1 包含層	2B-2G21	III	深鉢	II群 3c類	口					1			褐 (7.5YR4/6)	石・雲・白岩○・橙粒○	I a			口：楔形印刻文 体：斜縄文 RL	
20	18	7	谷 1 包含層	2B-2F10, 2G1・2	III, IV	深鉢	II群 3c類	口～底			(8.8)		1	4	2	明赤褐 (5YR5/6)	チャ・白岩○・橙粒	I a			口：楔形印刻文 体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	
20	18	8	谷 1 包含層	2B-1H13	IV	深鉢	II群 4b類	口					1			橙 (7.5YR7/6)	白岩○・白粒・橙粒	I b			口：爪形文	
20	18	9	谷 1 包含層	2B-1H13	IV	深鉢	II群 4b類	口					1			褐 (7.5YR4/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口：爪形文	

図版 No.	写真 図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土		付着物		文様・施文	備考	
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部 最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体	色調	混和材	分類	外面			内面
20	18	10	谷 1 包含層	2B-2G8	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	□					1			黄橙 (7.5YR7/8)	石◎・長○・チャ・白粒	Ⅱ b		口上位：爪形文 口下位：無文帯		
20	18	11	谷 1 包含層	2B-2G6	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	□					2			橙 (7.5YR7/6)	白岩◎・白粒・橙粒	Ⅱ b		口上位：爪形文 口下位：斜縄文		
20	18	12	谷 1 包含層	2B-2G13	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	□					1			明黄褐 (10YR7/6)	石・白粒◎	Ⅱ b		口上位：爪形文 口下位：縦位沈線文 (多段)		
20	18	13	谷 1 包含層	2B-2G22	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6b 類	□					1			明黄褐 (10YR7/6)	石・長・白粒・橙粒	Ⅱ b		口：区画内羽状縄文 (LR・RL)		
20	18	14	谷 1 包含層	2B-2G11	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6b 類	□					1			橙 (7.5YR7/6)	白岩◎・白粒・橙粒◎	Ⅱ a		口上位：区画内斜縄文 LR (縦位) 口下位：斜縄文 LR (縦位)		
20	18	15	谷 1 包含層	2B-2F25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6b 類	□					1			浅黄 (2.5Y7/4)	石◎・長○・白岩◎・白粒	Ⅱ b		口上位：区画内斜縄文 LR		
20	18	16	谷 1 包含層	2B-1H14	Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・雲・白岩◎・白粒	Ⅱ a		体：縦位・横位半隆起線文		
20	18	17	谷 1 包含層	2B-2F24	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7b 類	体						1		橙 (7.5YR6/6)	白岩◎・白粒・橙粒◎	Ⅱ a		口下位：無文帯		
20	18	18	谷 1 包含層	2B-1G25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7b 類	体						1		にぶい褐 (7.5YR5/4)	白岩◎・白粒・橙粒◎	Ⅱ a		体：羽状縄文 (LR 横位・縦位)		
20	18	19	谷 1 包含層	2B-2G22	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7b 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR6/4)	白岩◎・白粒・橙粒	Ⅱ b		頸：多条半隆起線文 体：斜縄文 L		
20	18	20	谷 1 包含層	2B-2G17	Ⅱ, Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7b 類	体						1		橙 (7.5YR6/6)	白岩◎・白粒・橙粒	Ⅱ a		体：結束第 1 種斜縄文 LR (縦位)		
20	18	21	谷 1 包含層	2B-2G11	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7b 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・チャ・白岩・白粒・橙粒◎	Ⅱ b		体：結束第 1 種羽状縄文 (LR・RL) (縦位)		
20	18	22	谷 1 包含層	2B-2G4	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群 1a ii 類	□					1			にぶい黄橙 (10YR6/4)	石・長・白粒・橙粒	Ⅱ b	炭化物	炭化物	口：斜縄文 LR	
20	18	23	谷 1 包含層	2B-1H12	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群 1a ii 類	□					2			橙 (7.5YR6/6)	白岩◎・白粒・橙粒◎	Ⅱ a		口：斜縄文 LR (縦位) 結節か		
20	18	24	谷 1 包含層	2B-1H7	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群 1b 類	□					3			にぶい黄橙 (10YR7/3)	石◎・長○・雲◎・白岩◎	Ⅱ a		口：肥厚 無文 沈線文 体：斜縄文 LR		
20	18	25	谷 1 包含層	2B-1G25, 2G3・4, 1H21	Ⅲ, Ⅳ	浅鉢	Ⅳ群 1b 類	□～底						7		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白粒・橙粒◎	Ⅱ a		口内面肥厚 口上端・頸部：無文 (磨消縄文) 地文斜縄文 LR		
20	18	26	谷 1 包含層	2B-1H10	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群 1c 類	□					1			橙 (7.5YR6/6)	石・長・白岩・橙粒	Ⅱ b		口：燃糸文 R 体：燃糸文 R (縦位) 瘤状突起		
20	18	27	谷 1 包含層	2B-2F25	Ⅳ	深鉢	—	底						9		橙 (7.5YR6/6)	白岩◎・白粒・橙粒	Ⅱ a		体：斜縄文 RL 底面：スタレ状圧痕		
20	18	28	谷 1 包含層	2B-2G8・12	Ⅲ	深鉢	—	底					18			橙 (5YR6/6)	石・長・白岩◎・白粒◎・橙粒	Ⅱ a	炭化物	炭化物	口：斜縄文 LR 底面：スタレ状圧痕	
20	18	29	谷 1 包含層	2B-2G6	Ⅲ	深鉢	V 群 1 類	□							1		明黄褐 (10YR7/6)	石◎・長・チャ◎・角・白岩◎	Ⅳ		口：無文 有刻隆帯	
20	18	30	谷 1 包含層	2B-2G12	Ⅲ	深鉢	V 群 1 類	体						1		にぶい橙 (7.5YR7/4)	石◎・長・チャ◎・角◎・白岩◎	Ⅳ		体：渦巻文 無文		
20	18	31	谷 1 包含層	2B-1H15	Ⅳ	壺	—	□						2		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・雲・白岩◎・白粒	Ⅱ a		口：無文		
20	18	32	谷 2 包含層	2B-1H12, 3H16	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2a i 類	□						1			白粒・橙粒◎	Ⅱ b		口：縦位沈線文 (半隆起線)		
20	18	33	谷 2 包含層	2B-3G19・ 24, 3H11	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2a i 類	□						4			橙 (7.5YR7/6)	石・長・白岩・白粒	Ⅱ b	炭化物	口上位：縦位沈線文 (半隆起線) 口下位：無文帯	
20	18	34	谷 2 包含層	2B-3G24	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2a i 類	□						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・白岩◎・橙粒	Ⅱ b		口上位：縦位沈線文 (半隆起線) 口下位： 無文帯 体：B 字状文 (半隆起線)		
20	18	35	谷 2 包含層	2B-3H7	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2a i 類	□						1		橙 (7.5YR7/6)	石・長・白粒・橙粒◎	Ⅱ b		口上位：縦位沈線文 (半隆起線) 爪形文 口下位：無文帯		
20	18	36	谷 2 包含層	2B-2G11, 3G20	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b ii 類	□					3			明赤褐 (5YR5/6)	石◎・長・白岩◎	Ⅱ b	炭化物	口上位：縦位沈線文 (単沈線) 口下位：突起 縦位沈線文 (半隆起線)		
20	18	37	谷 2 包含層	2B-1H20	不明	深鉢	Ⅱ群 2b ii 類	□						2		にぶい褐 (7.5YR5/4)	白粒◎・橙粒	Ⅱ a		口：縦位沈線文 (単沈線)		
20	18	38	谷 2 包含層	2B-3G19	Ⅲ, Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 2b ii 類	□						2			明赤褐 (5YR5/6)	石・白岩◎・橙粒	Ⅱ b		口上位：縦位沈線文 (単沈線) 口下位：無文帯	
20	18	39	谷 2 包含層	2B-3G25, 3H17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b ii 類	□						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石◎・長・チャ・白岩◎	Ⅱ b		口上位：縦位沈線文 (単沈線) 口下位：無文帯		
20	18	40	谷 2 包含層	2B-3G15	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b ii 類	体						1		明赤褐 (5YR5/6)	白岩◎・白粒・橙粒◎	Ⅱ a		頸：縦位沈線文 (単沈線) 体：結束第 1 種斜縄文 LR (縦位)		
21	19	41	谷 2 包含層	2B-3G20・ 24・25, 3H6	Ⅲ, Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 3a ii 類	□～体	(22.0)				6	12		淡黄 (2.5Y8/4)	石◎・長○・雲◎・白岩◎	Ⅱ a		口上位：蓮華文 口下位：突起 無文帯 体：半隆起線による B 字状・クランク状文 格子目文		
21	19	42	谷 2 包含層	2B-3G19	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3b i 類	□						1		橙 (7.5YR6/6)	石◎・雲・白岩◎・白粒	Ⅱ a		口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯		
21	19	43	谷 2 包含層	2B-3G19	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3b i 類	□						1		橙 (7.5YR6/6)	石◎・雲・白岩◎・白粒	Ⅱ a		口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯		
21	19	44	谷 2 包含層	2B-3H6・16	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3b i 類	□～体	(32.7)					3		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・チャ・白岩・白粒・橙粒◎	Ⅱ b	炭化物	口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯 体：羽状縄文 (LR・RL) (縦位)		
21	19	45	谷 2 包含層	2B-3G19	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3b i 類	□						1		橙 (7.5YR6/6)	石・白岩◎・橙粒◎	Ⅱ a		口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯		
21	19	46	谷 2 包含層	2B-3G5	Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 3b i 類	□						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・チャ・白岩・白粒・橙粒◎	Ⅱ b		口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯		
21	19	47	谷 2 包含層	2B-3H16	Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 3b ii 類	□						1		橙 (7.5YR6/6)	白岩◎・橙粒◎	Ⅱ a	炭化物	口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯		
21	19	48	谷 2 包含層	2B-2H25, 3H11・12・ 16・25	Ⅲ, Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 3b ii 類	□～底	(22.4)					18		橙 (7.5YR6/6)	白岩◎・橙粒◎	Ⅱ a		口上位：蓮華文 (小蓮弁) 口下位：無文帯 体：斜縄文 LR		
21	19	49	谷 2 包含層	2B-2H15, 2H14・17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	□						1		赤褐 (5YR4/8)	白岩・橙粒◎	Ⅱ a	炭化物	口：楔形印刻文 体：斜縄文 LR 弧状半隆起線		

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土			付着物		文様・施文	備考
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体	色調	混和材	分類	外面	内面		
21	19	50	谷2包含層	2B-3H11	II	深鉢	II群3c類	口				1			にぶい橙 (7.5YR7/4)	石・白岩・白粒	II b			口：楔形印刻文 体：集合沈線文 (縦位)		
21	19	51	谷2包含層	2B-3G4	III	深鉢	II群3c類	口				1			橙 (7.5YR7/6)	橙粒○	I a			口：楔形印刻文		
21	19	52	谷2包含層	2B-2I2	III	深鉢	II群3c類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・白粒・橙粒○	I a			口：多条半隆起線文 楔形印刻文		
21	19	53	谷2包含層	2B-3G20・25	III	深鉢	II群3b ii類	体						1	橙 (7.5YR7/6)	石・長・白岩・橙粒	II b			頸：楔形印刻文 多条半隆起線文 突起		
22	19	54	谷2包含層	2B-3H2	III	深鉢	II群4b類	口				1			橙 (7.5YR7/6)	石・長・白岩○・橙粒○	I a			口上位：平行沈線文 爪形文 口下位：無文帯 頸：平行沈線文 爪形文		
22	19	55	谷2包含層	2B-3H21	III	深鉢	II群4b類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/3)	石・長・白岩・白粒	II b			口上位：爪形文 口下位：無文帯		
22	19	56	谷2包含層	2B-3H6	III	深鉢	II群4b類	口				1			明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒○	I a			口上位：爪形文 隆帯 (縦位)		
22	19	57	谷2包含層	2B-3G14	III	深鉢	II群4b類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長○・雲○・白岩○	II a			口下位：無文帯 頸：爪形文		
22	19	58	谷2包含層	2B-3H2	I	深鉢	II群4b類	口				1			橙 (7.5YR6/6)	白岩・橙粒	I a			口上位：爪形文 多条半隆起線文 口下位：無文帯		
22	19	59	谷2包含層	2B-3H7	IV	深鉢	II群4b類	口				1			橙 (7.5YR7/6)	白岩○・橙粒	I a			口上位：爪形文 口下位：無文帯		
22	19	60	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	II群4a類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長○・雲○・白岩○	II a			口上位：蓮華文 (格子目文) 口下位：爪形文		
22	19	61	谷2包含層	2B-3G15	IV	深鉢	II群4b類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩・橙粒	I a			頸：爪形文 逆U字状半隆起線文		
22	19	62	谷2包含層	2B-2H24・3H1・6	III, IV	深鉢	II群4b類	体					2		橙 (7.5YR6/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a	炭化物		頸：爪形文 体：結束第1種羽状縄文 (LR・RL) (縦位)		
22	19	63	谷2包含層	2B-3H11	III	深鉢	II群4b類	体					1		明黄褐 (10YR7/6)	石○・長○・雲○・白岩○	II a			頸：爪形文		
22	19	64	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	II群4b類	体					1		明赤褐 (5YR5/6)	長・白粒・橙粒○	I b			頸：爪形文		
22	19	65	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	II群5類	口				1			橙 (7.5YR6/6)	白粒・橙粒	I a			口上位：格子目文 口下位：無文帯		
22	19	66	谷2包含層	2B-2H13	III	深鉢	II群5類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・白粒	II b			口：格子目文		
22	19	67	谷2包含層	2B-2G21・3G25・3H6	III, IV	深鉢	II群6a類	口				2			橙 (7.5YR6/6)	白粒○・橙粒	I a			口：区画内木目状燃系文 L (縦位) 体：木目状燃系文 L (縦位)		
22	19	68	谷2包含層	2B-3H11	III	深鉢	II群6a類	口				1			明赤褐 (5YR5/6)	白岩◎・白粒・橙粒◎	I a			口：燃系文 R 体：燃系文 R (縦位)		
22	19	69	谷2包含層	2B-3G10	III	深鉢	II群6b類	口				1			にぶい橙 (7.5YR6/4)	白粒・橙粒○	I a			口：区画内斜縄文 LR		
22	19	70	谷2包含層	2B-3G5	IV	深鉢	II群6b類	口				1			明黄褐 (10YR7/6)	石・長・白岩・白粒	II b			口：区画内羽状縄文 (LR・RL)		
22	19	71	谷2包含層	2B-3G5・3H6	IV	深鉢	II群6b類	口				2			にぶい黄橙 (10YR6/4)	石・白岩・橙粒○	I a			口：区画内斜縄文 LR		
22	20	72	谷2包含層	2B-3H21	III	深鉢	II群6b類	口				3			橙 (7.5YR6/6)	石○・長○・雲○・白岩○	II a	炭化物		口：区画内斜縄文 RL		
22	20	73	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	II群7a類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩・白粒・橙粒	I a			頸：縦位沈線文 (半隆起線) 突起 細線文 (斜位)		
22	20	74	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	II群7a類	体					1		明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒○	I a	炭化物		体：隆帯 (縦位) B字状文 (半隆起線) 斜縄文 LR (縦位)		
22	20	75	谷2包含層	2B-4H1	III	深鉢	II群7a類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・チャ○・雲・白岩○	II a			体：B字状文 縦位半隆起線上細線文		
22	20	76	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	II群7a類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・橙粒○	I b			体：縦位半隆起線文 斜縄文 RL (縦位)		
22	20	77	谷2包含層	2B-3G20	III	深鉢	II群7a類	体					1		にぶい黄橙 (10YR6/4)	石・雲○・白粒	II a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)		
22	20	78	谷2包含層	2B-3G15	III	深鉢	II群7a類	体					1		明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体：縦位半隆起線文 斜縄文		
22	20	79	谷2包含層	2B-3G15	III	深鉢	II群7a類	体					1		橙 (7.5YR6/6)	白岩・橙粒	I a			体：縦位・横位半隆起線文		
22	20	80	谷2包含層	2B-3G13	III	深鉢	II群7a類	体					1		橙 (7.5YR6/6)	石・長・海・白岩・白粒	II b			体：縦位半隆起線文 縦位平行沈線文		
22	20	81	谷2包含層	2B-3G15	III	深鉢	II群7a類	体						1	明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体：縦位・横位半隆起線文 木目状燃系文 R (縦位)		
22	20	82	谷2包含層	2B-3H16	IV	深鉢	II群7a類	体					1		橙 (7.5YR6/6)	石・白岩・白粒・橙粒	II b			体：縦位半隆起線文 斜縄文 R (縦位)		
22	20	83	谷2包含層	2B-3G10	III	深鉢	II群7a類	体					1		橙 (5YR6/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR		
22	20	84	谷2包含層	2B-1I19	III	深鉢	II群7a類	体					1		灰白 (10YR8/2)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 RL (縦位)		
22	20	85	谷2包含層	2B-2H23	III	深鉢	II群7b類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口下位：無文帯 頸：多条半隆起線文		
22	20	86	谷2包含層	2B-3H16	III	深鉢	II群7b類	口				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長○・雲○・白岩○	II a			口下位：無文帯 頸：多条半隆起線文		
22	20	87	谷2包含層	2B-2I16	IV	深鉢	II群7b類	口				1			明褐 (7.5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒○	I a			口下位：無文帯 頸：半隆起線文		
22	20	88	谷2包含層	2B-3G19	III	深鉢	II群7b類	口				1			橙 (7.5YR6/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口下位：無文帯 頸：半隆起線文		
22	20	89	谷2包含層	2B-2H24・25・3G19・24・3H12・17	III, IV	深鉢	II群7b類	体～底	(18.7)	(18.9)	(12.0)		18	9	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長○・白岩○	II b	炭化物		頸：多条半隆起線文 体：結束第1種羽状縄文 (LR・RL) 底面：スタレ状丘痕		
22	20	90	谷2包含層	2B-3H12	IV	深鉢	II群7b類	体					1		にぶい黄橙 (10YR6/4)	石・白岩・橙粒○	I a			頸：半隆起線文 体：斜縄文 LR		
22	20	91	谷2包含層	2B-3G19・20	III	深鉢	II群7b類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・白岩・白粒	II b			頸：半隆起線文 体：結束第1種羽状縄文 (LR・RL) (縦位)		
22	20	92	谷2包含層	2B-3H6	III	深鉢	II群8類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・白岩・橙粒	I a			頸：突起 平行沈線文 体：斜縄文 LR		
22	20	93	谷2包含層	2B-4G5	III	深鉢	II群8類	体					1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・チャ◎・白岩	III			体：縦位平行沈線文 斜縄文 LR (縦位)		

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土			付着物		文様・施文	備考
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体	色調		混和材	分類	外面		
22	20	94	谷2包含層	2B-3H7	IV	深鉢	Ⅱ群8類	体							1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・白岩・白粒・橙粒○	I b			体：縦位平行沈線文 斜縄文 RL (縦位)	
22	20	95	谷2包含層	2B-3G20	III	深鉢	Ⅱ群8類	体							1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長○・雲○・白岩○	II a			体：縦位平行沈線文	
22	20	96	谷2包含層	2B-3H1	IV	深鉢	Ⅱ群8類	底						1	明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a				体：縦位平行沈線文	
23	20	97	谷2包含層 3トレンチ	2B-2H15・ 20・24, 216 ・7	Ⅱ, Ⅲ, IV	深鉢	Ⅲ群1a類	□～体	21.0	22.0	[23.0]	24		18	橙 (7.5YR6/6)	石・長・チャ・海・雲・角・白 岩・橙粒	IV	炭化物			口：波状口縁 突起3単位 縦位隆帯2条 (隆帯上縄側面圧痕文L) 口上位：縄側面圧 痕文L2条 口下位：斜縄文L 頸：隆帯 (隆 帯上縄側面圧痕文L) 体：斜縄文L (縦位)	
23	20	98	谷2包含層	2B-3G15	III	深鉢	Ⅲ群1b類	□						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・チャ・白岩○	II b				口下位：無文帯 頸：隆帯 (隆帯上斜縄文 LR)	
23	20	99	谷2包含層	2B-3G19	III	深鉢	Ⅲ群2a類	□				1			明黄褐 (10YR7/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a				口下位：無文帯 頸：の字状突起 交互刺突文	
23	20	100	谷2包含層	2B-2H15, 216・11	Ⅱ, Ⅲ, IV	深鉢	Ⅲ群2b類	□	25.8			12		9	褐 (7.5YR4/6)	石・長◎・雲○・白岩◎	II a	炭化物	炭化物		口上端：爪形文 口上位：角押文 (直線状・ 鋸歯状) 口下位：無文帯 頸：隆帯 突起 (剥落) 角押文 (直線状) 体：集合沈線文 (縦位・弧状)	
23	20	101	谷2包含層	2B-2I12	III	深鉢	Ⅲ群3類	□				1			にぶい赤褐 (5YR4/4)	白岩○・白粒・橙粒○	I a	炭化物	炭化物		□～体：無文 指頭圧痕 輪積痕	
24	20	102	谷2包含層	2B-3G20	III	深鉢	Ⅳ群1a i類	□				1			にぶい橙 (7.5YR6/4)	石○・長・チャ○・白岩○	II b				口：燃系文L 体：燃系文L (斜位)	
24	20	103	谷2包含層	2B-3G19	III	深鉢	Ⅳ群1c類	□				1			にぶい黄橙 (10YR6/4)	石○・長・雲・白岩○	II a				□～体：斜縄文 RL (縦位) 頸：突起 (剥落)	
24	21	104	谷2包含層	2B-3G20	III	深鉢	Ⅳ群1a i類	□				6	6		橙 (7.5YR6/6)	石・白岩・白粒・橙粒	II b	炭化物	炭化物		口：斜縄文 LR 体：斜縄文 LR (縦位)	
24	21	105	谷2包含層	2B-3G24	III	深鉢	Ⅳ群2類	体						1	明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・橙粒	I a				体：無文 ミガキ	
24	21	106	谷2包含層	2B-3G24	III	深鉢	—	底		(14.4)				5	橙 (7.5YR7/6)	石・雲・白岩○・橙粒○	I b				体：燃系文 R (縦位) 底面：圧痕	
24	21	107	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	—	底		6.5				36	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・チャ・白岩・橙粒	II b				体：斜縄文 LR 底面：集合沈線	
24	21	108	谷2包含層	2B-3G19	III	深鉢	—	底		(14.2)				8	橙 (7.5YR7/6)	石・白岩○・橙粒○	I b		炭化物		体：斜縄文 LR 底面：スタレ状圧痕	
24	21	109	谷2包含層	2B-3H6	IV	深鉢	—	底		(13.0)				7	橙 (5YR6/6)	白岩○・橙粒	I a				体：羽状縄文 (LR・RL) (縦位) 底面：圧痕	
24	21	110	谷2包含層	2B-3H8	IV	深鉢	—	底		(10.0)				9	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・橙粒	I a		炭化物		体：斜縄文 底面：スタレ状圧痕	
24	21	111	谷2包含層	2B-2I14	III	深鉢	—	底		8.0			12		橙 (7.5YR6/6)	チャ・白岩○・橙粒○	I b				体：斜縄文 LR 底面：圧痕磨消	
24	21	112	谷2包含層	2B-3G24	III	深鉢	—	底		(12.0)				6	橙 (7.5YR6/6)	白岩・橙粒	I a				体：斜縄文 LR 底面：圧痕磨消	
24	21	113	谷2包含層	2B-2H23	Ⅱ, IV	深鉢	—	底		(8.9)			1		橙 (7.5YR7/6)	石・長・白岩・白粒・橙粒	II b				体：斜縄文 RL 底面：圧痕	
24	21	114	谷2包含層	2B-3G25	III	深鉢	—	底		(7.8)				4	橙 (7.5YR7/6)	チャ・白岩・橙粒○	I b				体：斜縄文 RL 底面：圧痕	
24	21	115	谷2包含層	2B-3H16	Ⅲ, IV	深鉢	—	底		(12.2)				8	橙 (7.5YR7/6)	石・白岩○・白粒	I a				底面：スタレ状圧痕	
24	21	116	谷2包含層	2B-3G19	III	深鉢	—	底		(13.0)				6	明赤褐 (5YR5/6)	白岩・橙粒○	I a				底面：スタレ状圧痕磨消	
24	21	117	谷2包含層	2B-2I4	III	深鉢	—	底		9.6				36	橙 (7.5YR6/6)	石○・長・白岩・白粒○	II b				底面：無文	
24	21	118	谷2包含層	2B-3H11	IV	深鉢	—	底						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩・橙粒○	I a		赤色塗彩		内面：赤色塗彩	
24	21	119	SX17	2B-4I17	5, III	深鉢	Ⅱ群7a類	□～体						1	明赤褐 (5YR5/6)	白岩◎・橙粒○	I a				口下位：幾何学的半隆起線文 頸：半隆起線文 体：斜縄文 RL	
24	21	120	SX17		4	深鉢	Ⅱ群7a類	体						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	チャ・白岩○・橙粒	I b				体：h字状半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	
24	21	121	SX17		5	深鉢	Ⅱ群6b類	□						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・白岩・橙粒○	I b				口：区画内斜縄文 LR (斜位) 体：斜縄文 LR (縦位)	
24	21	122	SX17		6	深鉢	Ⅲ群2a類	体							浅黄 (2.5Y7/4)	石・白岩・白粒	II b				頸：交互刺突文 体：斜縄文 LR	
25	21	123	谷3包含層	2B-4H25, 5H9・10	III	深鉢	Ⅱ群2a i類	□	(28.0)			3			橙 (7.5YR7/6)	白岩○・橙粒	I a				口：縦位沈線文 (間隔のあく半隆起線) 体：斜縄文 RL	
25	21	124	谷3包含層	2B-4H20	III	深鉢	Ⅱ群2a i類	□				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩・橙粒	I b				口：縦位沈線文 (間隔のあく半隆起線)	
25	21	125	谷3包含層	2B-4I16	III	深鉢	Ⅱ群2a i類	□				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	チャ・白岩○・白粒・橙粒	I b				口：突起 (斜縄文) 縦位沈線文 (半隆起線)	
25	21	126	谷3包含層	2B-4I17	III	深鉢	Ⅱ群2a i類	□				1			明赤褐 (5YR5/6)	石・長・海・白粒	II b				口：縦位沈線文 (半隆起線)	
25	21	127	谷3包含層	2B-4I17	III	深鉢	Ⅱ群2b i類	□						1	明赤褐 (5YR5/6)	石・長・白岩・白粒	II b				口上位：縦位沈線文 (半隆起線) 口下位：無文帯	
25	21	128	谷3包含層	2B-4I13・ 14・17・18	III	深鉢	Ⅱ群2a ii類	□～体	(15.0)					7	にぶい黄橙 (10YR6/3)	石○・長・白岩○・橙粒	II b	炭化物	炭化物		口上位：逆U字状突起 縦位沈線文 (単沈線) 口下位：斜縄文 LR 体：縦位半隆起線文 B字状半隆起線文 斜縄文 LR	
25	21	129	谷3包含層	2B-5H10	III	深鉢	Ⅱ群2b ii類	□				3			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・雲○	II a	炭化物	炭化物		口上位：縦位沈線文 (単沈線) 口下位：無文帯 頸：縦位沈線文 (単沈線)	
25	21	130	谷3包含層	2B-5H5	III	深鉢	Ⅱ群2b ii類	□				1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・雲○・白岩	II a	炭化物			口：渦巻状突起 口上位：縦位沈線文 (単 沈線) 口下位：無文帯	
25	21	131	谷3包含層	2B-5I1	III	深鉢	Ⅱ群2a ii類	□				2			橙 (7.5YR6/6)	長・白粒○・橙粒○	I a				口上位：縦位沈線文 (単沈線) 口下位：無文帯	
25	21	132	谷3包含層	2B-4I10・17 ・18・22, 5H9	III	深鉢	Ⅱ群2b ii類	□～体	17.6		[23.9]	13			橙 (5YR6/6)	白岩○・橙粒○	I a				口上位・下位：縦位沈線文 (単沈線) 頸：渦巻状突起 体：U字状半隆起線文 結束第1種斜縄文L (縦位)	



図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土			付着物		文様・施文	備考
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体	色調	混和材	分類	外面	内面		
25	21	133	谷 3 包含層	2B-5H5	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b ii 類	口							1	にぶい黄橙 (10YR6/4)	石・雲・白岩	Ⅱ a		炭化物	口：縦位沈線文 (単沈線)	
25	21	134	谷 3 包含層	2B-5I1	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b iii 類	口					1			にぶい黄橙 (10YR7/2)	石・チャ○	Ⅲ			口：縦位沈線文 (細線文)	
25	21	135	谷 3 包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b iii 類	口					1			橙 (7.5YR6/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口：縦位沈線文 (細線文)	
25	21	136	谷 3 包含層	2B-4I13, 5H10, 5I1	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 2b iii 類	口～底	19.0	19.0	(11.0)	[33.2]	12		12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・チャ・白岩○・橙粒○	I b	炭化物		口：突起 円形刺突文 斜縄文 LR 縦位沈線文 (細線文) 体：突起 縦位半隆起線文 格子目文 羽状縄文 (LR 縦位・横位) (縦位)	
25	22	137	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3a i 類	口					1			浅黄橙 (10YR8/4)	石○・雲・白岩○	Ⅱ a			口上位：蓮華文 (格子目文) 口下位：爪形文	
25	22	138	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3a ii 類	口					2			明黄褐 (10YR7/6)	石・白岩・白粒・橙粒	Ⅱ b	炭化物		口上位：蓮華文 (縦位沈線文) 口下位：無文帯	
25	22	139	谷 3 包含層	2B-4H24, 5H5	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3a ii 類	口					1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・チャ・白岩・白粒	Ⅱ b			口上位：蓮華文 (縦位沈線文) 口下位：無文帯	
25	22	140	谷 3 包含層	2B-4I11	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3a ii 類	口					1			浅黄橙 (10YR8/4)	石○・長・雲○・白岩・白粒	Ⅱ a			口上位：逆位蓮華文 (細線文)	
25	22	141	谷 3 包含層	2B-5I6	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					1			浅黄橙 (10YR8/3)	石・白岩・橙粒○	I b			口：楔形印刻文	
25	22	142	谷 3 包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					1			明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・橙粒	I a			口：楔形印刻文	
25	22	143	谷 3 包含層	2B-5H5	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					1			淡黄 (2.5Y8/3)	長○・白岩・橙粒○	I b			口：円孔突起 楔形印刻文 (蓮華文か)	
25	22	144	谷 3 包含層	2B-4H19, 4I16・17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					1			にぶい褐 (7.5YR5/4)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口：楔形印刻文 体：斜縄文 RL	
25	22	145	谷 3 包含層	2B-4H19	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					1			橙 (7.5YR6/6)	石○・長・雲・白岩・白粒○	Ⅱ a			口：楔形印刻文 体：斜縄文 RL 半隆起線文	
25	22	146	谷 3 包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					2			にぶい褐 (7.5YR5/4)	石・白岩○・橙粒	I a			口：楔形印刻文	
25	22	147	谷 3 包含層	2B-5H5	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 3c 類	口					1			橙 (7.5YR7/6)	石・白岩○・白粒・橙粒	I b			口：楔形印刻文 頸：多条半隆起線文	
25	22	148	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	体						1		明黄褐 (10YR7/6)	白粒	V			頸：爪形文	
25	22	149	谷 3 包含層	2B-4I16	I	深鉢	Ⅱ群 4b 類	体						1		明赤褐 (5YR5/6)	白岩・白粒・橙粒	I a			頸：爪形文	
25	22	150	谷 3 包含層	2B-5H9	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	体						1		赤褐 (5YR4/8)	白岩○・白粒・橙粒	I b			頸：爪形文	
25	22	151	谷 3 包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	体						1		明黄褐 (10YR7/6)	白粒	V			頸：爪形文 (隆带上)	
25	22	152	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR5/4)	白粒・橙粒	I b			頸：爪形文 (隆带上)	
25	22	153	谷 3 包含層	2B-4I10・19	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 4b 類	口					1			明黄褐 (10YR7/6)	白岩・白粒○・橙粒	I a			口下位：無文帯 頸：爪形文	
26	22	154	谷 3 包含層	2B-4H24	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 5 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・チャ・白岩○・橙粒	Ⅱ b			体：区画内格子目文	
26	22	155	谷 3 包含層	2B-4H24	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 5 類	体						1		浅黄橙 (10YR8/3)	—	V			体：区画内格子目文	
26	22	156	谷 3 包含層	2B-5H9	Ⅱ	深鉢	Ⅱ群 5 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・チャ・白岩○・橙粒	Ⅱ b			体：区画内格子目文	
26	22	157	谷 3 包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 5 類	体					1			明赤褐 (5YR5/6)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口下位：区画内格子目文	
26	22	158	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 5 類	体					1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・白粒・橙粒	I a			口下位：区画内格子目文	
26	22	159	谷 3 包含層	2B-4I17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 5 類	体						1		橙 (7.5YR6/6)	チャ・白岩・白粒・橙粒	I a			体：区画内格子目文	
26	22	160	谷 3 包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6a 類	口						1		橙 (7.5YR7/6)	白岩・橙粒	I a			口：区画内木目状燃系文 L (縦位) 体：木目状燃系文 L (縦位)	
26	22	161	谷 3 包含層	2B-4I22, 5I1	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6b 類	口						2		橙 (7.5YR7/6)	白岩○・白粒・橙粒	I b			口：区画内斜縄文 LR 頸：多条半隆起線文	
26	22	162	谷 3 包含層	2B-5H9・10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6b 類	口					2			明黄褐 (10YR7/6)	白岩○・橙粒	I a			口：半隆起線文 体：斜縄文 LR	
26	22	163	谷 3 包含層	2B-4I18	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 6 類	口					1			橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	I a			口上位：多条半隆起線文	
26	22	164	谷 3 包含層	2B-5H15	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	口					1			にぶい黄橙 (10YR7/4)	—	V			口下位：半隆起線文	
26	22	165	谷 3 包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長○・チャ・角○・橙粒	IV			体：B 字状半隆起線文	
26	22	166	谷 3 包含層	2B-6I1	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長○・チャ・角○・橙粒	IV	炭化物		体：縦位隆帯 (隆带上爪形文) B 字状半隆起線文	
26	22	167	谷 3 包含層	2B-4I16	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・白岩○・橙粒	Ⅱ b			体：区画状半隆起線文	
26	22	168	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・雲・白岩	Ⅱ a			体：縦位半隆起線文	
26	22	169	谷 3 包含層	2B-4I9	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・雲・白岩・橙粒	Ⅱ a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	
26	22	170	谷 3 包含層	2B-4I15	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒○・橙粒	I a			頸：曲線状隆帯 半隆起線文	
26	22	171	谷 3 包含層	2B-4I18	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩・白粒・橙粒	I a			体：曲線状隆帯 半隆起線文 斜縄文	
26	22	172	谷 3 包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・チャ・白岩・白粒	Ⅱ b	炭化物		頸：半隆起線文 突起 体：縦位半隆起線文 斜縄文 RL	
26	22	173	谷 3 包含層	2B-4I10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体：突起 縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	
26	22	174	谷 3 包含層	2B-4I5	Ⅳ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・白岩○・橙粒	Ⅱ b	炭化物		口下位：無文帯 頸：半隆起線文 突起 体：縦位半隆起線文 斜縄文	
26	22	175	谷 3 包含層	2B-5H9	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	I a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR	
26	22	176	谷 3 包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・白岩・橙粒	Ⅱ b	炭化物		体：縦位半隆起線文 羽状縄文 (LR 縦位・横位)	
26	22	177	谷 3 包含層	2B-4I10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	
26	22	178	谷 3 包含層	2B-4I17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒○	I a			体：縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土			付着物		文様・施文	備考
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体	色調	混和材	分類	外面	内面		
26	22	179	谷3包含層	2B-4H19	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7a類	体							1	橙 (7.5YR7/6)	石○・雲・白岩○・橙粒	Ⅱa			体：縦位半階起線文 斜縄文 RL (縦位)	
26	22	180	谷3包含層	2B-5H9	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7a類	体							1	赤褐 (5YR4/8)	白岩・橙粒○	Ⅰb			体：縦位半階起線文 羽状縄文 (LR・RL) (縦位)	
26	22	181	谷3包含層	2B-4I17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7a類	体							1	にぶい橙 (7.5YR7/3)	チャ○・白岩○	Ⅲ			体：縦位半階起線文	
26	22	182	谷3包含層	2B-4I15	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	口				1				橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			口下位：無文帯	
26	22	183	谷3包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	口				1				にぶい黄橙 (10YR7/4)	白粒・橙粒	Ⅰb			口下位：無文帯	
26	22	184	谷3包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	口				1				にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・雲○・白岩・白粒	Ⅱa			口下位：無文帯	
26	22	185	谷3包含層	2B-4I12	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	口				1				にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・チャ・白岩	Ⅱb			口下位：無文帯	
26	22	186	谷3包含層	2B-4H24	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	口				1				にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・チャ・白岩	Ⅱb			口下位：無文帯 体：斜縄文 LR	
26	22	187	谷3包含層	2B-5H15	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	体						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・長・白粒	Ⅱb			頸：半階起線文 体：結束第1種羽状縄文 (縦位)		
26	22	188	谷3包含層	2B-4I17	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	体						1	にぶい黄橙 (10YR7/2)	石・長・白岩	Ⅱb			頸：半階起線文 体：斜縄文 LR		
26	22	189	谷3包含層	2B-5I1	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	体						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・雲・白岩	Ⅱb			頸：半階起線文 体：不明		
26	22	190	谷3包含層	2B-2G6, 4H19・20	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	体						1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	チャ○・白岩○・白粒	Ⅲ			頸：多条半階起線文 体：木目状燃糸文 R (縦位)		
26	22	191	谷3包含層	2B-5I1	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	体						1	にぶい黄橙 (10YR6/4)	石・白岩・橙粒○	Ⅰb			口下位：無文帯 頸：多条半階起線文 体：斜縄文 RL		
26	22	192	谷3包含層	2B-4I14	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群7b類	口				1				橙 (7.5YR6/6)	白岩○・橙粒	Ⅰa			口下位：斜縄文 頸：多条半階起線文	
26	22	193	谷3包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群8類	体						1	にぶい褐 (7.5YR5/4)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			体：縦位平行沈線文		
26	22	194	谷3包含層	2B-5H4	Ⅲ	深鉢	Ⅲ群1a類	口				1				明赤褐 (5YR5/6)	長・白岩・橙粒	Ⅰa			口唇：縄側面圧痕文 L (縦位) 口：縄側面圧痕文 L 頸：半階起線文	
26	22	195	谷3包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅲ群1a類	口				1				にぶい黄橙 (10YR7/3)	石○・雲○・白岩	Ⅱa			口端：縄側面圧痕文 L (縦位) 口：縄側面圧痕文 L	
26	22	196	谷3包含層	2B-4H19・20・25, 4I13・18・21	Ⅲ	深鉢	Ⅲ群1b類	口～体	22.8			9		6	浅黄 (2.5Y7/3)	石○・雲○・白岩	Ⅱa			口頸：縦位隆帯 (隆帯上斜縄文) 口上位：区画内斜縄文 LR 口下位：無文帯 体：縦位半階起線文 斜縄文 LR		
26	23	197	谷3包含層	2B-4H25, 4I13・14・21	Ⅲ	深鉢	Ⅲ群2a類	口～体	18.0			9		6	淡黄 (2.5Y8/3)	石○・雲・白岩・橙粒	Ⅱa			口上位：縄側面圧痕文 L (縦位) 口下位：無文帯 頸：交互刺突文 突起 体：集合沈線文 結束第1種斜縄文 RL (縦位)		
26	23	198	谷3包含層	2B-4I9	Ⅳ	深鉢	Ⅳ群1a i類	口				1				赤褐 (5YR4/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			口：燃糸文 R	
26	23	199	谷3包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群1a ii類	口				1				橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			口：斜縄文 LR	
26	23	200	谷3包含層	2B-5H4	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群1a ii類	口				1				にぶい橙 (7.5YR6/4)	長・白岩・白粒・橙粒	Ⅰb			口：斜縄文 RL	
26	23	201	谷3包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群1a ii類	口～体	(21.4)			4				橙 (7.5YR6/6)	白岩・橙粒○	Ⅰa			口～体：斜縄文 LR	
27	23	202	谷3包含層	2B-4H19・24, 3G9	Ⅲ	深鉢	Ⅳ群1c類	口～体				2				橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			口：肥厚 斜縄文 頸：無文 (磨消縄文) 突起 体：結束第1種羽状縄文 (縦位)	
27	23	203	谷3包含層	2B-5I1	Ⅲ	深鉢	—	底			(9.0)		9			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石・白岩○・橙粒○	Ⅰb			体：斜縄文 LR 縦位平行沈線文 底面：スタレ状圧痕	
27	23	204	谷3包含層	2B-4H19	Ⅲ	深鉢	—	底			(8.4)		8			にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・雲・白岩	Ⅱa			体：縦位平行沈線文 底面：スタレ状圧痕	
27	23	205	谷3包含層	2B-4H19・24, 4I21	Ⅲ	深鉢	—	底			(11.2)		12			にぶい橙 (7.5YR7/4)	石○・長・雲・白岩	Ⅱa			炭化物 体：斜縄文 LR 底面：スタレ状圧痕	
27	23	206	谷3包含層	2B-4H25, 5H4・5・9	Ⅱ, Ⅲ	深鉢	—	底			12.4		18			橙 (7.5YR6/6)	石・白岩○・白粒・橙粒	Ⅰb			体：斜縄文 LR 底面：スタレ状圧痕	
27	23	207	谷3包含層	2B-5H4	Ⅲ	深鉢	—	底			(11.8)		9			橙 (7.5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			体：斜縄文 LR 底面：スタレ状圧痕	
27	23	208	谷3包含層	2B-4I21	Ⅱ	深鉢	—	底			(7.5)		6			にぶい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・白粒・橙粒	Ⅰa			体：斜縄文 LR 底面：スタレ状圧痕	
27	23	209	谷3包含層	2B-5H9	Ⅲ	深鉢	—	底			(12.8)		5			にぶい黄橙 (10YR7/4)	白粒	V			体：斜縄文 LR (縦位) 底面：スタレ状圧痕	
27	23	210	谷3包含層	2B-4I23	Ⅲ	深鉢	—	底			(10.9)		4			にぶい黄橙 (10YR6/4)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			体：羽状縄文 (縦位) 底面：スタレ状圧痕	
27	23	211	谷3包含層	2B-5H10	Ⅲ	深鉢	—	底			(9.5)		6			明赤褐 (5YR5/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			炭化物 体：羽状縄文 (縦位) 底面：スタレ状圧痕	
27	23	212	谷3包含層	2B-4H19	Ⅲ	深鉢	—	底			9.4		20			橙 (7.5YR7/6)	石・長・白岩・白粒	Ⅱb			底面：スタレ状圧痕	
27	23	213	谷3包含層	2B-4I21	Ⅲ	深鉢	—	底			9.8		11			にぶい橙 (7.5YR6/4)	石○・長・チャ・白岩○	Ⅱb			不明	
27	23	214	谷3包含層	2B-4I10	Ⅳ	深鉢	—	底			(11.0)		5			明赤褐 (5YR5/6)	石・白岩・白粒・橙粒○	Ⅰb			底面：スタレ状圧痕	
27	23	215	谷3包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	—	底			(10.0)		4			にぶい橙 (7.5YR7/4)	白岩・橙粒	Ⅰa			底面：スタレ状圧痕	
27	23	216	谷3包含層	2B-5H5	Ⅲ	深鉢	—	底			(11.8)		9			明黄橙 (10YR6/6)	石・長・白粒	Ⅱb			底面：スタレ状圧痕	
27	23	217	谷3包含層	2B-5H9	Ⅲ	深鉢	—	底			(8.8)		4			橙 (5YR6/6)	白岩・白粒・橙粒	Ⅰa			底面：スタレ状圧痕	
27	23	218	谷3包含層	2B-5I1	Ⅲ	深鉢	—	底			(8.4)		6			橙 (7.5YR6/6)	白岩・橙粒	Ⅰa			底面：スタレ状圧痕	
27	23	219	谷3包含層	2B-5I1	Ⅲ	深鉢	V群1類	口				2				にぶい黄橙 (10YR7/4)	石○・長・チャ○・角○・白岩○	Ⅳ			口：8字状文 横位沈線文 縦位弧線文 口頸：無文	
27	23	220	谷3包含層	2B-4H25	Ⅲ	深鉢	V群1類	体					1			にぶい黄橙 (10YR7/3)	石・長・雲・白岩・白粒	Ⅱa			炭化物 炭化物 体：円形刺突文 斜縄文 LR	
27	23	221	表探	1B-10E24	I	深鉢	I群1類	体					1			灰 (5Y5/1)	—	V			肋骨文 (弧状条線)	

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置			器種	分類	遺存部位	法量 (cm)				遺存率 (/36)			胎土			付着物		文様・施文	備考
			遺構名等	グリッド	層位				口径	胴部最大径	底径	器高	口縁部	底部	全体	色調	混和材	分類	外面	内面		
27	23	222		不明	Ⅲ	深鉢	Ⅲ群 1a 類	口					2			橙 (7.5YR6/6)	白岩○・橙粒	I a	炭化物	炭化物	波状口縁 口唇: 縄側面圧痕文 L 口: 縦位隆帯 (隆帯土縄側面圧痕文 L) 隆帯沿い・縄側面圧痕文 L 横位縄側面圧痕文 L 斜縄文 L 頸: 沈線文	
27	23	223		2B-6J1	Ⅲ	浅鉢	Ⅱ群 6 類	口					2			明黄褐 (10YR7/6)	石・白岩・橙粒	I b			口: 半隆起線文 体: 羽状縄文 (L・R)	
27	23	224	表採	不明	I	深鉢	Ⅱ群 2a i 類	口					1			浅黄橙 (10YR8/3)	白粒・橙粒	I b			口: 縦位沈線文 (間隔のあく半隆起線)	
27	23	225		2B-6I9	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7b 類	体						1		にふい黄橙 (10YR7/4)	白岩・白粒・橙粒	I a			口下位: 無文帯 体: 木目状燃糸文 L (縦位)	
27	23	226		2B-6I3	Ⅲ	深鉢	Ⅱ群 7a 類	体						1		にふい黄橙 (10YR7/4)	白岩○・白粒・橙粒	I a			体: 縦位半隆起線文 斜縄文 LR (縦位)	
27	23	227		不明	Ⅲ	深鉢	—	底			(9.2)					橙 (7.5YR7/6)	石・長・雲・白岩	Ⅱ a			体: 斜縄文 LR 底面: スタレ状圧痕	
27	23	228	谷 3 包含層	2B-4H24	Ⅲ	土製品	—	脚								橙 (7.5YR7/6)	白岩・白粒・橙粒	I a				
27	23	229	谷 3 包含層	2B-5H9	Ⅲ	焼成粘土塊	—	—								橙 (5YR6/8)	白岩・白粒・橙粒	I a				

別表 3 縄文時代石器観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置				種別	分類	石材	法量 (mm, g)				時代	備考
			遺構	谷	グリッド	層位				長さ	幅	厚さ	重量		
28	24	1	SX29	谷 1	2B-2G7	2	台石	B	安山岩	278.40	191.00	97.00	7, 400.00	縄文	
28	24	2	SX29	谷 1	2B-2G7	3	凹石	A	安山岩	117.60	109.80	72.50	814.60	縄文	
28	24	3	包含層	谷 1	2B-2G8	Ⅲ	不定形石器	A	凝灰岩	53.90	63.90	16.10	46.54	縄文	
28	24	4	包含層	谷 1	2B-3G1	Ⅲ	磨製石斧	—	蛇紋岩	66.10	37.10	20.30	91.98	縄文	
28	24	5	表採	谷 1	2B-1G5	一括	磨製石斧	—	蛇紋岩	32.70	26.30	16.40	10.12	縄文	
28	24	6	包含層	谷 1	2B-2G2	Ⅳ	磨石	B	蛇紋岩	87.30	58.50	23.40	190.07	縄文	
28	24	7	包含層	谷 1	2B-1G23	Ⅲ	磨石	A	凝灰岩	67.30	56.00	41.50	134.90	縄文	
29	24	8	包含層	谷 1	2B-1H20	Ⅱ	磨石	A	凝灰岩	85.40	62.50	32.20	178.90	縄文	
29	24	9	包含層	谷 1	2B-1I6	Ⅲ	磨石	B	砂岩	71.10	67.70	28.40	175.57	縄文	
29	24	10	包含層	谷 1	2B-2G3	Ⅳ	蔽石	B	凝灰岩	98.70	81.00	46.40	400.26	縄文	
29	24	11	包含層	谷 1	2B-1I18	Ⅳ	蔽石	B	チャート	93.60	87.20	47.20	486.50	縄文	
29	24	12	包含層	谷 1	2B-1G25	Ⅲ	台石	B	安山岩	207.60	155.30	101.00	2, 600.00	縄文	
29	25	13	包含層	谷 1	2B-1G3	Ⅲ	台石	A	安山岩	232.00	201.80	71.60	2, 635.00	縄文	
29	25	14	包含層	谷 1	2B-1G23	Ⅲ	台石	—	安山岩	115.20	69.80	55.50	630.00	縄文	
29	25	15	表採	谷 1	2B-1G14	一括	台石	—	安山岩	116.60	52.80	31.50	181.28	縄文	
30	25	16	包含層	谷 1	2B-2G3	Ⅲ	台石	C	安山岩	163.20	162.00	47.10	1, 829.83	縄文	
30	25	17	包含層	谷 1	2B-1G19	一括	原石	A	チャート	67.90	50.30	28.50	146.69	縄文	SK22 付近
30	25	18	包含層	谷 1	2B-2G11	Ⅲ	石製品	—	珪質頁岩	77.20	53.50	33.20	158.81	縄文	
30	25	19	包含層	谷 2	2B-2I14	Ⅲ	石鎌	C	玉髓	24.10	14.10	4.20	0.91	縄文	
30	25	20	包含層	谷 2	2B-3H6	Ⅲ	石鎌	A-1	鉄石英 (黄玉)	21.60	10.80	4.90	1.00	縄文	
30	25	21	包含層	谷 2	2B-3H12	Ⅳ	石鎌	B	珪質頁岩	27.30	14.30	2.60	0.86	縄文	
30	25	22	包含層	谷 2	2B-3G15	Ⅲ	楔形石器	—	黒曜石	27.10	18.10	9.80	3.78	縄文	
30	25	23	包含層	谷 2	2B-3H3	Ⅱ	不定形石器	B	玉髓	31.20	39.00	10.40	12.51	縄文	
30	25	24	包含層	谷 2	2B-2H20	Ⅱ	不定形石器	B	玉髓	33.30	23.60	10.40	6.68	縄文	
30	25	25	包含層	谷 2	2B-3G10	Ⅲ	剥片	—	珪質凝灰岩	14.90	24.50	6.00	1.67	縄文	
31	25	26	包含層	谷 2	2B-3H17	Ⅲ	不定形石器	B	珪質頁岩	43.40	48.60	10.60	16.95	縄文	
31	25	27	包含層	谷 2	2B-3H3	Ⅲ	石核	B	珪質凝灰岩	46.50	37.60	29.00	135.17	縄文	
31	26	28	包含層	谷 2	2B-4H2	Ⅱ	石核	B	鉄石英 (赤玉)	47.20	106.40	60.60	279.51	縄文	
32	26	29	包含層	谷 2	2B-3H7	Ⅳ	磨製石斧	—	蛇紋岩	96.60	67.30	36.90	358.78	縄文	
32	26	30	表採	谷 2	2B-3I18	一括	磨製石斧	—	蛇紋岩	33.50	37.60	16.70	12.87	縄文	
32	26	31	包含層	谷 2	2B-1I24	I	磨製石斧	—	緑色凝灰岩	28.20	32.90	10.50	11.28	縄文	
32	26	32	包含層	谷 2	2B-1I20	Ⅳ	磨製石斧	—	蛇紋岩	21.30	27.80	5.60	3.54	縄文	
32	26	33	包含層	谷 2	2B-1I26	Ⅳ	磨製石斧	—	緑色凝灰岩	16.20	20.20	4.80	1.35	縄文	
32	26	34	包含層	谷 2	2B-3H6	Ⅳ	磨製石斧未成品	—	蛇紋岩	74.20	59.30	18.30	112.65	縄文	
32	26	35	包含層	谷 2	2B-3H4	Ⅲ	磨石	A	チャート	91.70	66.90	38.40	308.79	縄文	

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置				種別	分類	石材	法量 (mm, g)				時代	備考
			遺構	谷	グリッド	層位				長さ	幅	厚さ	重量		
32	26	36	包含層	谷 2	2B-3G20	Ⅲ	磨石	A	安山岩	124.70	131.20	105.00	2, 012.72	縄文	
33	26	37	包含層	谷 2	2B-2H24	Ⅳ	磨石	A	安山岩	113.30	96.90	56.70	924.91	縄文	
33	26	38	包含層	谷 2	2B-3G19	Ⅲ	蔽石	A	安山岩	108.70	70.10	56.50	534.86	縄文	
33	26	39	包含層	谷 2	2B-2H23	Ⅲ	蔽石	A	無斑晶質安山岩	101.20	84.40	38.20	422.06	縄文	
33	26	40	2 トレンチ	谷 2	2B-2H5	Ⅱ	蔽石	C	チャート	77.90	40.10	27.50	129.30	縄文	試掘
33	26	41	包含層	谷 2	2B-3G20	Ⅲ	蔽石	A	チャート	86.00	50.90	16.50	91.14	縄文	
33	27	42	包含層	谷 2	2B-2I6	Ⅲ	蔽石	C	安山岩	121.70	92.50	44.50	539.00	縄文	
33	27	43	包含層	谷 2	2B-3H2	Ⅲ	蔽石	A	安山岩	92.70	71.50	45.10	281.80	縄文	
33	27	44	包含層	谷 2	2B-3H21	Ⅲ	蔽石	A	安山岩	72.60	56.10	45.40	194.97	縄文	
33	27	45	包含層	谷 2	2B-4G5	Ⅲ	凹石	B	安山岩	131.40	129.20	45.30	587.69	縄文	
33	27	46	包含層	谷 2	2B-3G25	Ⅲ	凹石	B	安山岩	104.10	67.20	29.30	188.86	縄文	
34	27	47	表採	谷 2	2B-4H3	一括	凹石	B	安山岩	133.90	98.60	51.80	721.34	縄文	
34	27	48	包含層	谷 2	2B-2I1	Ⅲ	凹石	B	安山岩	157.20	108.50	38.80	634.87	縄文	
34	27	49	包含層	谷 2	2B-211	Ⅲ	凹石	B	安山岩	132.50	87.80	67.60	936.14	縄文	
34	27	50	包含層	谷 2	2B-2I1	Ⅱ	砥石	A	安山岩	79.30	152.60	127.80	1, 499.60	縄文	
34	27	51	包含層	谷 2	2B-1I19	Ⅲ	台石	—	安山岩	108.50	99.40	21.00	228.22	縄文	
34	27	52	包含層	谷 2	2B-1I22	Ⅱ	台石	—	安山岩	55.20	55.30	54.10	162.06	縄文	
34	27	53	包含層	谷 2	2B-2I7	Ⅳ	台石	B	安山岩	261.00	196.00	75.50	4, 300.00	縄文	
35	27	54	包含層	谷 2	2B-3I7	Ⅲ	原石	A	チャート	44.20	37.50	19.40	47.54	縄文	
35	27	55	包含層	谷 2	2B-3H17	Ⅲ	原石	B	緑色凝灰岩	51.80	33.10	36.40	70.75	縄文	
35	28	56	拂土	谷 2	2B-3H	一括	原石	B	緑色凝灰岩	63.00	46.70	39.70	111.55	縄文	
35	28	57	10 トレンチ	谷 3	2B-4H25	I	石鎌	A-1	玉髓	24.40	16.00	4.50	1.14	縄文	被熱処理
35	28	58	包含層	谷 3	2B-4I14	Ⅲ	石鎌	A-2	珪質頁岩	41.00	19.70	6.10	4.60	縄文	被熱処理
35	28	59	包含層	谷 3	2B-4I10	Ⅲ	不定形石器	A	玉髓	11.80	18.40	7.80	2.20	縄文	
35	28	60	包含層	谷 3	2B-4I17	Ⅲ	石核	A	黒曜石	28.00	37.40	21.00	18.62	縄文	
35	28	61	包含層	谷 3	2B-4I8	Ⅲ	蔽石	B	チャート	83.70	77.90	33.40	297.05	縄文	
35	28	62	包含層	谷 3	2B-4H25	Ⅲ	砥石	B	砂岩	47.40	40.70	16.20	30.59	縄文	
35	28	63	包含層	谷 3	2B-4I14	Ⅲ	玉未成品	—	蛇紋岩類	38.20	34.00	17.10	29.62	縄文	
36	28	64	6 トレンチ	谷外	1B-10E4	Ⅱ	尖頭器	—	珪質頁岩	71.10	20.30	9.50	12.31	縄文	試掘
36	28	65	包含層	谷外	2B-1F6	I	磨製石斧	—	蛇紋岩	49.60	32.30	14.30	26.23	縄文	
36	28	66	包含層	谷外	1B-10E24	Ⅲ	台石	C	安山岩	129.10	99.00	37.50	545.67	縄文	
36	28	67	拂土	不明	一括	剥片	—	凝灰岩	26.70	38.70	8.50	9.85	縄文		
36	28	68	拂土	不明	一括	原石 (小)	B	チャート	36.90	30.50	23.90	35.88	縄文		
36	28	69	拂土	不明	一括	原石 (大)	A	チャート	60.60	55.80	21.70	118.78	縄文		
36	28	70	拂土	不明	一括	石製品	—	凝灰岩	48.10	74.00	17.90	85.51	縄文		

別表 4 峰岡城山遺跡上層（古代・中世）遺構計測表

凡例 1. 観察表の記載順は遺構の種類ごと、番号順であり、あわせて分割図版 No.・個別図版 No.・写真図版 No.・本文記載頁を明記し、索引としての役割をもたせてある。  
 2. 遺構の分類及び項目・切り合い関係等は、本文第IV章の記述に対応する。  
 3. 規模の（ ）内数値は残存部からの復元推定値である。

焼土坑 (SK)

全体図版 No.	個別図版 No.	写真図版 No.	遺構		グリッド	時代	分類	確認面	主軸方向	規模 (m)				底面標高 (m)	形態		覆土	堆積状況	重複関係	出土遺物	遺物図版 No.	備考	
										上端		下端			深度	平面							断面
										長軸	短軸	長軸	短軸										
37	40	29	SK	1	2B-1H18・19・23・24		1類	Ⅱ層	N-40°-W	1.68	1.60	1.24	1.24	0.50	10.00	隅丸方形	台形状	5	斜位				
37	40	29	SK	2	2B-1H25, 2H5		1類	Ⅱ層	N-11°-W	1.60	1.56	1.10	1.04	0.52	8.96	隅丸方形	台形状	6	レンズ状		鉄滓 (1)	44	
37	40	29	SK	3	2B-2I5		1類	Ⅱ層	N-48°-W	—	—	—	—	0.40	7.46	隅丸方形	台形状	3	斜位				
37	40	29・30	SK	6	1B-10C25, 10D21, 2B-1C5, 1D1		1類	Ⅱ層	N-3°-E	1.44	1.40	1.28	1.20	0.28	14.76	隅丸方形	台形状	4	レンズ状				
37	40	30	SK	7	1B-10C9		3類	Ⅱ層	—	1.60	(1.60)	1.40	(1.40)	0.40	11.00	円形	台形状	4	斜位				
37	41	30	SK	13	2B-1H3・8		2類	Ⅱ層	N-45°-E	1.40	1.16	1.08	0.96	0.50	11.30	隅丸長方形	台形状 (谷側開放)	4	斜位				
37	41	30・31	SK	22	2B-1G19・20・24・25		1類	Ⅱ層	N-89°-W	1.36	1.33	1.04	0.96	0.60	12.66	隅丸方形	台形状	3	レンズ状				
37	41	31	SK	25	2B-3G20		2類	Ⅱ層	N-60°-W	1.32	0.88	1.16	0.84	0.26	17.48	隅丸長方形	台形状 (谷側開放)	4	斜位				
37	41	31	SK	26	2B-2I11		2類	Ⅱ層	N-40°-W	0.88	0.64	0.72	0.60	0.22	9.68	隅丸長方形	台形状 (谷側開放)	3	斜位		古代以降石製品 (1)	43	
37	41	31	SK	27	2B-2H20		2類	Ⅱ層	N-39°-W	1.24	0.92	0.88	0.76	0.43	11.04	隅丸長方形	台形状 (谷側開放)	3	斜位				

土坑 (SK)

全体図版 No.	個別図版 No.	写真図版 No.	遺構		グリッド	時代	分類	確認面	主軸方向	規模 (m)				底面標高 (m)	形態		覆土	堆積状況	重複関係	出土遺物	遺物図版 No.	備考	
										上端		下端			深度	平面							断面
										長軸	短軸	長軸	短軸										
37	41	30	SK	12	2B-1H20, 1I16	古代		Ⅱ層	N-80°-E	1.28	1.16	0.96	0.96	0.20	9.06	不整隅丸方形	弧状	1	単層		土師器片 2点		

別表 5 古代・中世土器観察表

凡例 1. 出土位置 遺構名・グリッド名を記載した。  
 2. 器種 第V章に記載した。  
 3. 器高指数 器高 / 口径 × 100  
 4. 底径指数 底径 / 口径 × 100  
 5. 法量 口径・底径・器高を示す。( ) 内数値は推定復元値、[ ] 内数値は残存値である。  
 6. 胎土 胎土中に含まれる鉱物等について記した。石英：石、長石：長、チャート：チャ、海綿骨針：海、雲母：雲、角閃石：角、白色凝灰岩：白凝、橙色土粒：橙粒、白色粒子：白粒。産地については第V章に記載した。  
 7. 色調 『新版標準土色帖』[小山・竹原 2005] の記号を記した。  
 8. 焼成 酸化焰焼成・還元焰焼成の区別を記した。本遺跡出土須恵器はすべて還元焰焼成であり軟質のものは含まない。  
 9. 手法 特徴的な手法のみ記載し、網羅的な記載は行っていない。底部の切り離し技法のうちで、「糸切り」・「ヘラ切り」等の記載は回転台を用いた手法を示している。回転方向は、回転台の回転方向が判るもののみ記した。  
 10. 遺存率 分数表示で遺存割合を示した。

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置			種別	器種	分類	法量 (cm)			器高指数	底径指数	胎土		色調		焼成	手法				遺存率 (/36)			備考			
			遺構	グリッド	層位				口径	長軸	底径			短軸	器高	厚さ	含有物		産地	外面	内面	外面	内面	底部	回転方向		口縁部	底部	全体
42	32	1		2B-1H20	Ⅱ	土師器	無台碗			(5.4)	[1.0]	—	—	石・長・チャ・橙粒・白粒		10YR7/4 ぶい黄橙	10YR7/3 ぶい黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右			7	2			
42	32	2		2B-1I6	Ⅱ	土師器	無台碗		(14.8)	—	[2.8]	—	—	石・チャ・白凝・橙粒		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	1		1				
42	32	3		2B-1I12	Ⅱ	土師器	無台碗			6.2	[3.4]	—	—	石・チャ・橙粒		10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	左			30	18			
42	32	4		2B-1I16	Ⅱ	土師器	無台碗		—	4.3	[0.7]	—	—	石・長・チャ・雲		10YR7/4 ぶい黄橙	10YR7/4 ぶい黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	左			36	10			
42	32	5	2トレンチ	2B-1I21	Ⅱ	土師器	小甕		—	6.4	[1.0]	—	—	チャ・橙粒・白粒		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	左			36	12			
42	32	6	2トレンチ	2B-1I21	Ⅱ	土師器	無台碗		—	(5.2)	[1.2]	—	—	石・長・雲・橙粒・白粒		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	不明(磨滅)				10	5			
42	32	7		2B-1I22	Ⅱ	黒色土器	無台碗		(16.0)	(6.8)	6.2	38.8	42.5	石・長・チャ・海・雲・角・橙粒・白粒		10YR7/3 ぶい黄橙	10YR2/1 黒	酸化	ロクロナデ・ロクロケズリ	ロクロナデ・ミガキ	糸切り後ヘラケズリ	右			5	11	9		
42	32	8		2B-1I22	Ⅱ	土師器	無台碗		(14.0)	—	[2.1]	—	—	石・長・チャ・橙粒・白粒		10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	2		1				
42	32	9		2B-1I22	Ⅱ	土師器	無台碗		—	5.6	[1.9]	—	—	石・長・チャ・海・橙粒・白粒		10YR7/4 ぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	左			36	18			
42	32	10	2トレンチ	2B-1I22	Ⅲ	土師器	無台碗		—	6.2	[1.3]	—	—	石・長・チャ・海・橙粒・白粒		10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右			18	10			

図版 No.	写真 図版 No.	報告 No.	出土位置			種別	器種	分類	法量 (cm)				器高 指数	底径 指数	胎土		色調		焼成	手法				遺存率 (/36)			備考		
			遺構	グリッド	層位				口径	長軸	底径	短軸			器高	厚さ	含有物	産地		外面	内面	外面	内面	底部	回転 方向	口縁部		底部	全体
42	32	11		2B-1123	II	須恵器	甕	—	—	[5.0]	—	—	—	—	長・白凝・白粒	新津力	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	還元	タタキ	あて具痕	—	—				1		
42	32	12		2B-2G5	III	土師器	無台碗	(13.5)	—	[2.3]	—	—	—	—	石・長・チャ・白凝・橙粒		5YR6/6 橙	10YR4/2 灰黄褐	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	2			1		
42	32	13		2B-2H15	II	須恵器	甕	—	—	[5.0]	—	—	—	白粒・黒斑あり	小泊	5Y5/1 灰	2.5Y7/1 灰白	還元	タタキ	あて具痕	—	—				1			
42	32	14		2B-2I2	II	土師器	無台碗	—	5.6	[0.7]	—	—	—	チャ・橙粒		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	—			8	2			
42	32	15		2B-2I2	II	土師器	無台碗	—	5.0	[1.0]	—	—	—	石・チャ・白凝・橙粒		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	左			9	3			
42	32	16	3 トレンチ	2B-2I6	II	土師器	無台碗	(12.8)	—	[2.3]	—	—	—	石・チャ・白凝		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	3			1			
42	32	17		2B-2I6	II	土師器	無台碗	(12.9)	—	[2.2]	—	—	—	石・チャ・白粒		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	1			1			
42	32	18	3 トレンチ	2B-2I6	II	須恵器	長頸瓶	(22.7)	—	[13.6]	—	—	—	白粒・黒斑あり	小泊	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	1			18			
42	32	19		2B-2I6	II	土師器	無台碗	—	6.0	[1.9]	—	—	—	石・長・チャ・海・橙粒・白粒		7.5YR 橙 7/6	7.5YR7/6 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り後 爪形刺突	左			36	18			
42	32	20	3 トレンチ	2B-2I6	II	土師器	無台碗	—	(6.0)	[2.5]	—	—	—	石・長・チャ・橙粒・白粒		10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右			8	7			
42	32	21	3 トレンチ	2B-2I6	II	土師器	無台碗	—	4.6	[1.2]	—	—	—	石・長・チャ・橙粒・白粒		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	不明(磨減)	—			18	9			
42	32	22	3 トレンチ	2B-2I6	II	土師器	無台碗	—	(6.0)	[0.8]	—	—	—	チャ・橙粒		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	—			9	4			
42	32	23	3 トレンチ	2B-2I6	II	土師器	無台碗	—	(6.0)	[1.7]	—	—	—	石・チャ・橙粒		10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	不明(磨減)	—			10	4			
42	32	24		2B-1117	I	越前焼	甕	—	—	[6.5]	—	—	—	白粒		5YR5/6 明赤褐	2.5Y6/2 灰黄	還元	施軸	ハケメ	—	—				1	中世(室町カ)		
42	32	25		2B-1119	攪乱	珠洲焼	壺T種	—	—	[4.6]	—	—	—	石・白粒		N6/1 灰	N6/1 灰	還元	タタキ	あて具痕	—	—				1	中世(珠洲IV~V期)		
42	32	26	3 トレンチ	2B-2I1	II	土製品	焼成粘土塊	長軸:4.1	短軸:2.9	厚さ:2.0	—	—	—	石・長・海・橙粒・白粒		10YR8/3 浅黄橙	10YR6/2 灰黄褐	酸化	—	—	—	—						古代以降所産	

別表 6 古代以降石製品観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置				器種	分類	石材	法量 (mm, g)				時代	備考
			遺構	谷	グリッド	層位				長さ	幅	厚さ	重量		
43	33	1	SK26	谷 2	2B-2I11	2	磨石	A	安山岩	171.70	126.60	112.80	3,410.00	古代以降	
43	33	2	包含層	谷 1	2B-1117	I	砥石	B	凝灰岩	97.30	66.40	31.00	159.42	古代以降	
43	33	3	10 トレンチ	谷 3	2B-4I	III層一括	砥石	B	凝灰岩	45.30	30.30	36.70	25.73	古代以降	

別表 7 鍛冶関連遺物観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置			種類	法量 (cm)				備考
			遺構	グリッド	層位		長軸	短軸	厚さ	重量 (g)	
44	33	1	SK2		I	鉄滓(鍛冶滓)	6.3	5.8	2.7	122.7	
44	33	2		2B-1G22	II	板状製品	4.6	2.7	0.8	33.5	
44	33	3		2B-1H19	II	鉄滓(鍛冶滓)	2.8	2.3	1.9	10.4	
44	33	4		2B-1I11	II	鉄滓(鍛冶滓)	4.3	2.6	1.5	15.3	
44	33	5		2B-1I11	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.2	2.6	2.0	18.3	
44	33	6		2B-1I18	II	鉄滓(鍛冶滓)	8.8	7.5	7.4	419.0	
44	33	7		2B-1I19	I	鉄滓(鍛冶滓)	3.4	2.8	1.4	14.6	
44	33	8		2B-1I21	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.4	3.3	1.9	21.3	
44	33	9		2B-1I22	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.8	3.7	2.1	21.0	木炭付着
44	33	10		2B-1I22	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.3	2.3	1.5	16.5	
44	33	11		2B-1I23	II	鉄滓(鍛冶滓)	2.7	2.2	2.1	10.5	
44	33	12		2B-1I24	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.6	2.5	1.7	9.3	木炭付着
44	33	13		2B-1I25	II	鉄滓(鍛冶滓)	4.1	2.7	2.4	22.2	
44	33	14		2B-2I2	II	鉄滓(鍛冶滓)	4.0	2.7	2.2	23.9	
44	33	15		2B-2I2	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.8	2.9	2.3	19.3	
44	33	16		2B-2I2	II	鉄滓(鍛冶滓)	5.3	4.6	4.6	92.5	
44	33	17		2B-2I2	I	鉄滓(鍛冶滓)	8.8	6.0	3.5	188.2	
44	33	18		2B-2I2	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.5	3.0	1.5	17.0	
44	33	19		2B-2I2	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.8	3.1	2.4	18.6	木炭付着
44	33	20		2B-2I3	II	鉄滓(鍛冶滓)	3.6	3.2	2.1	16.7	
44	33	21		2B-2I4	I	炉壁炉底	8.3	7.0	3.8	192.4	内面溶解ガラス質壁面流入

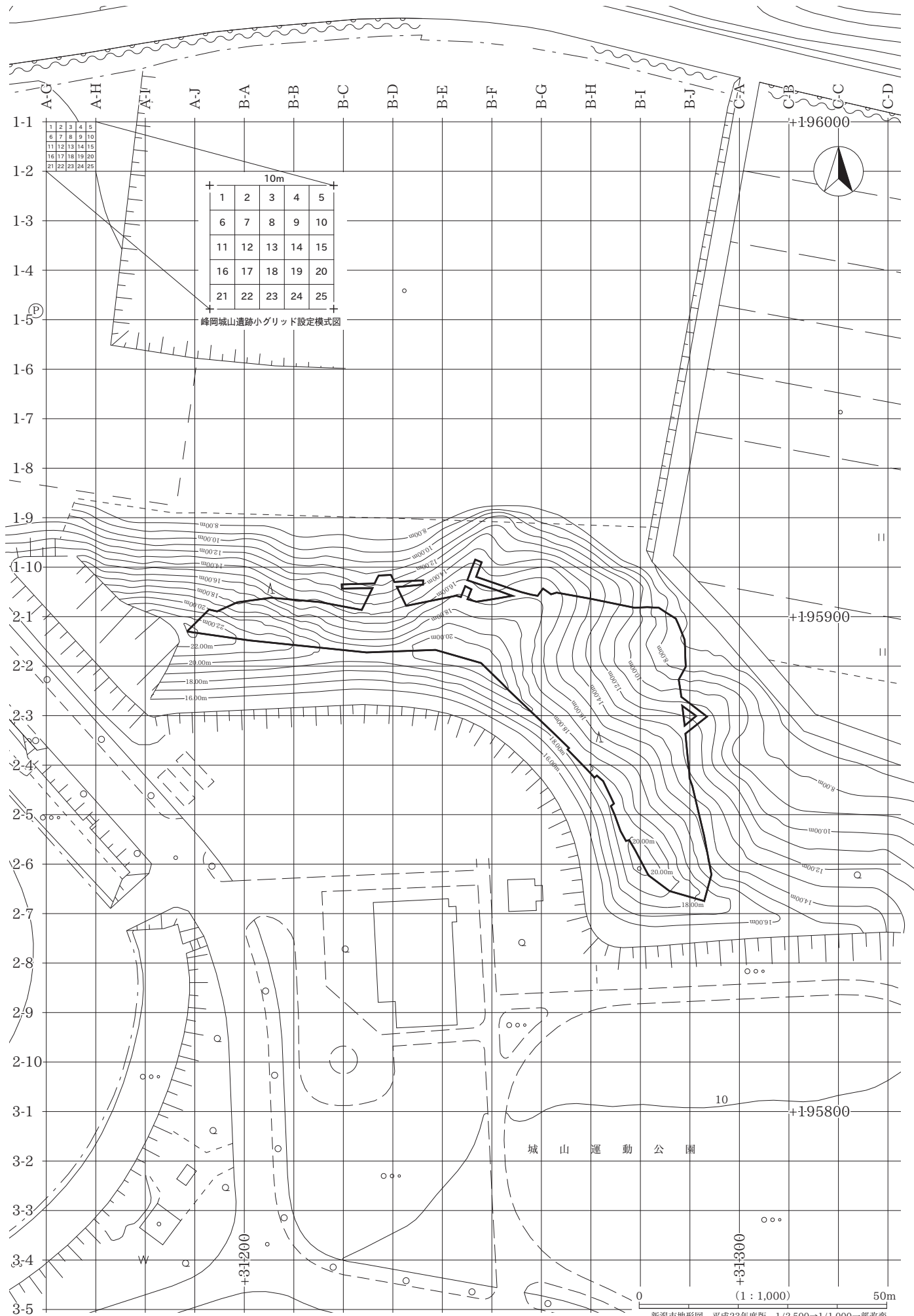
# 圖 版

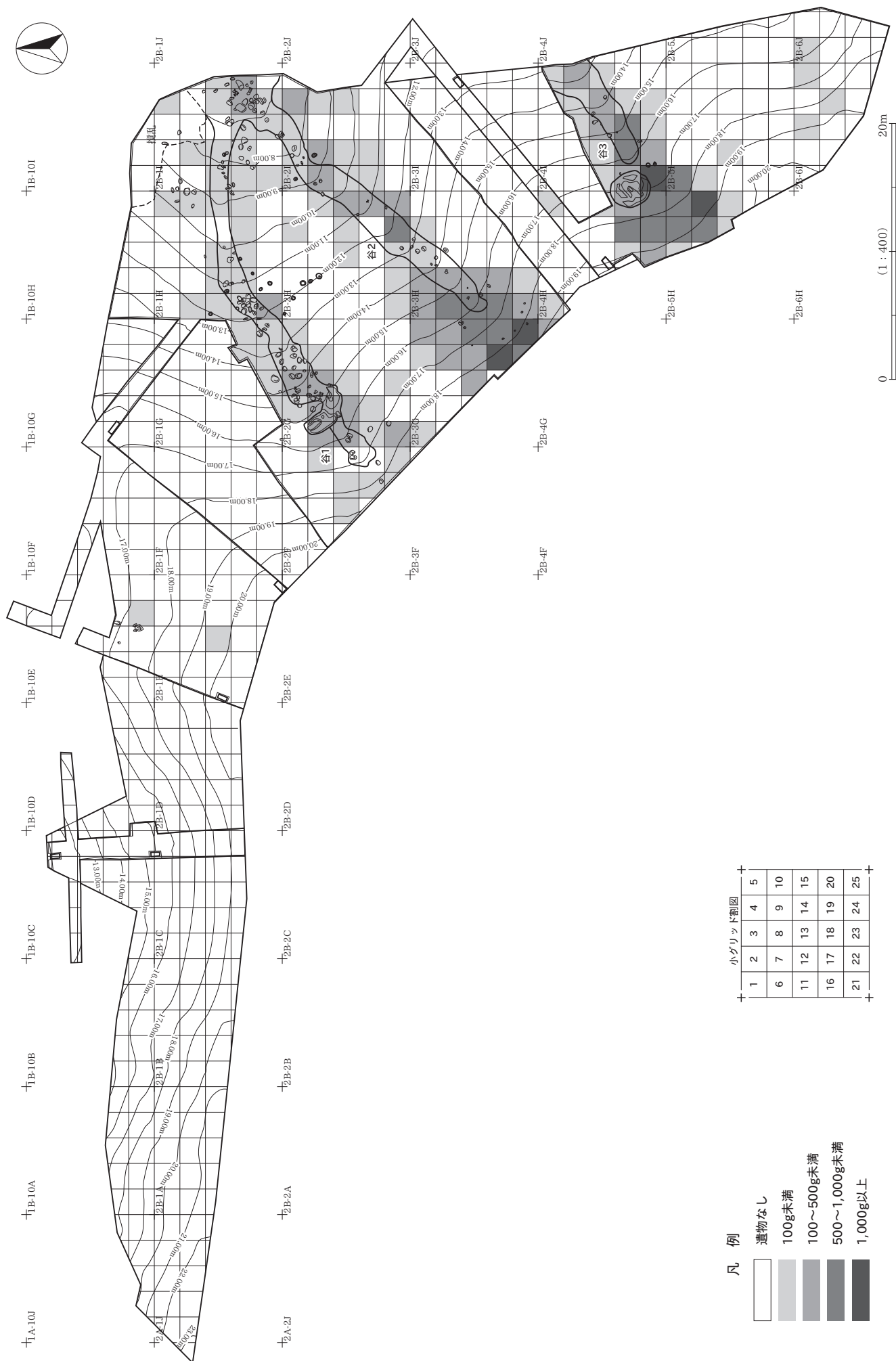


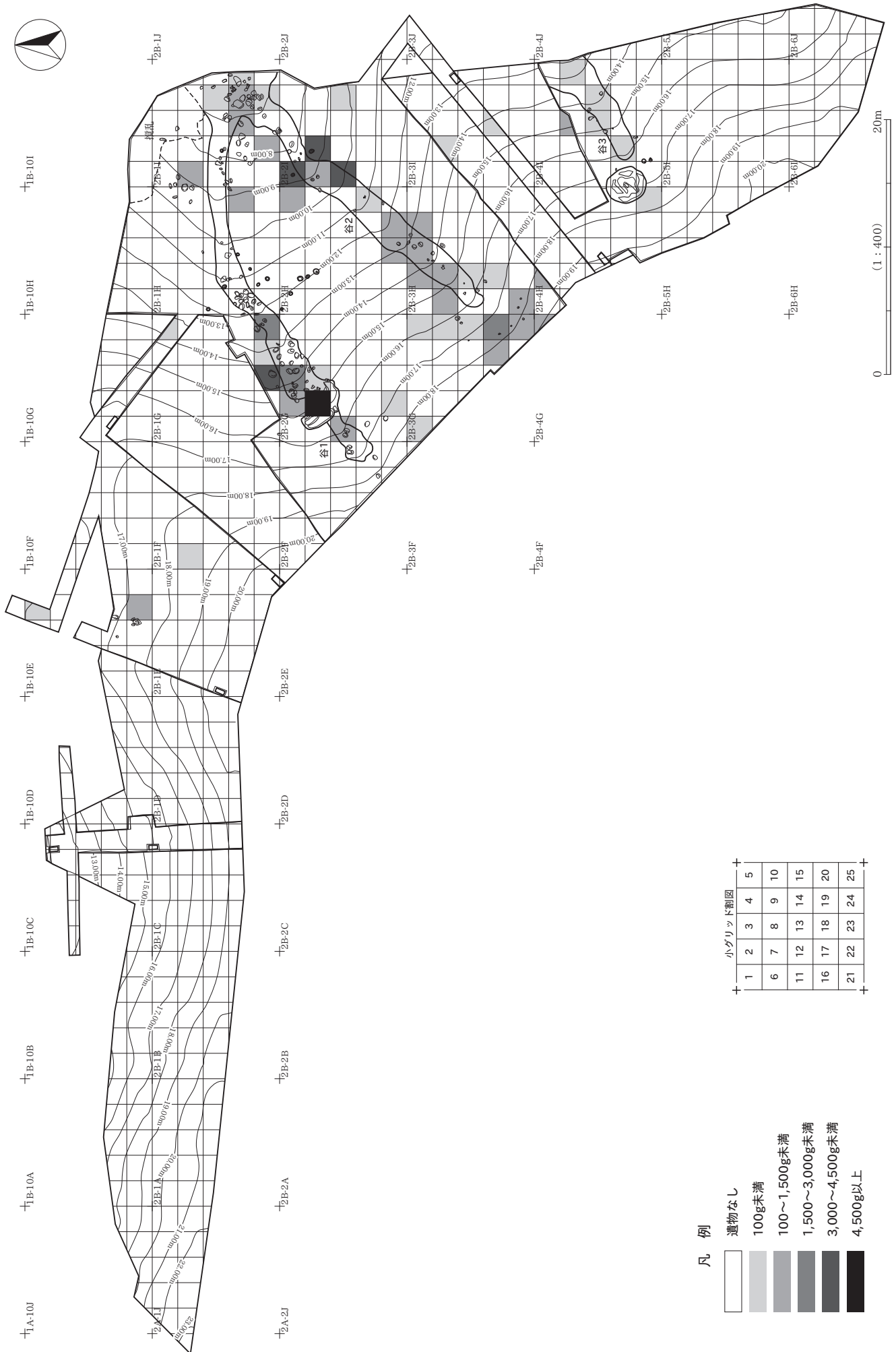




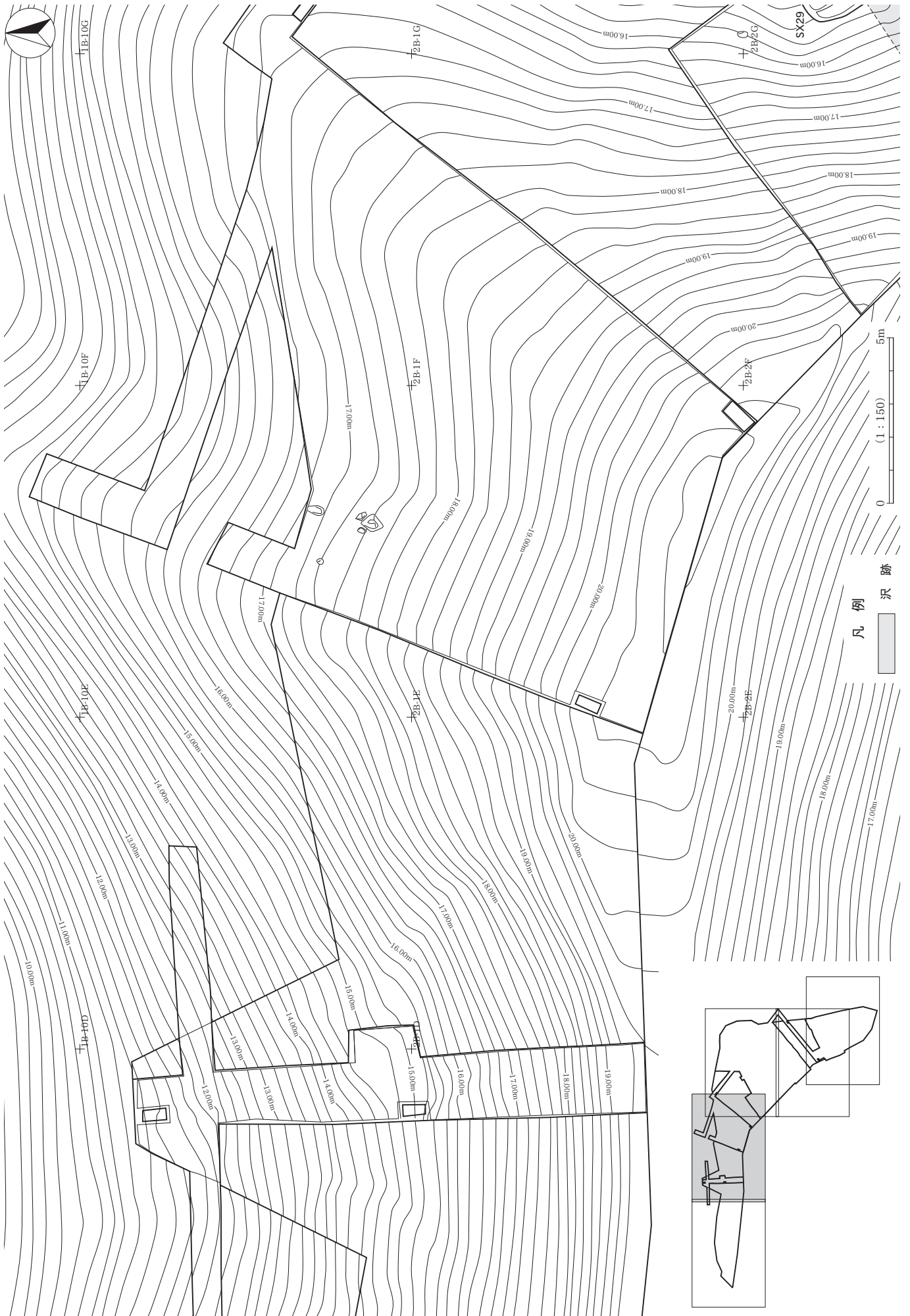


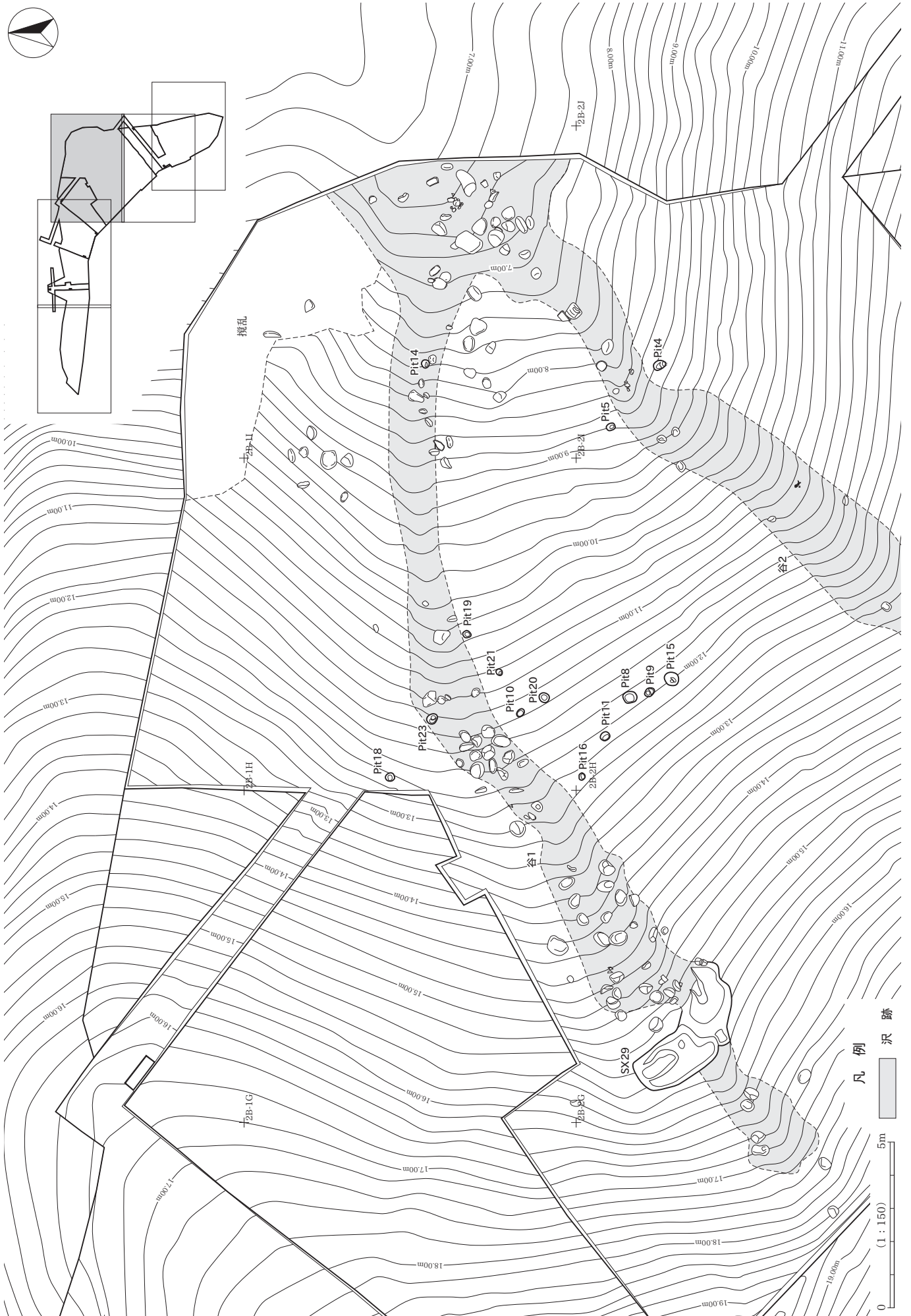


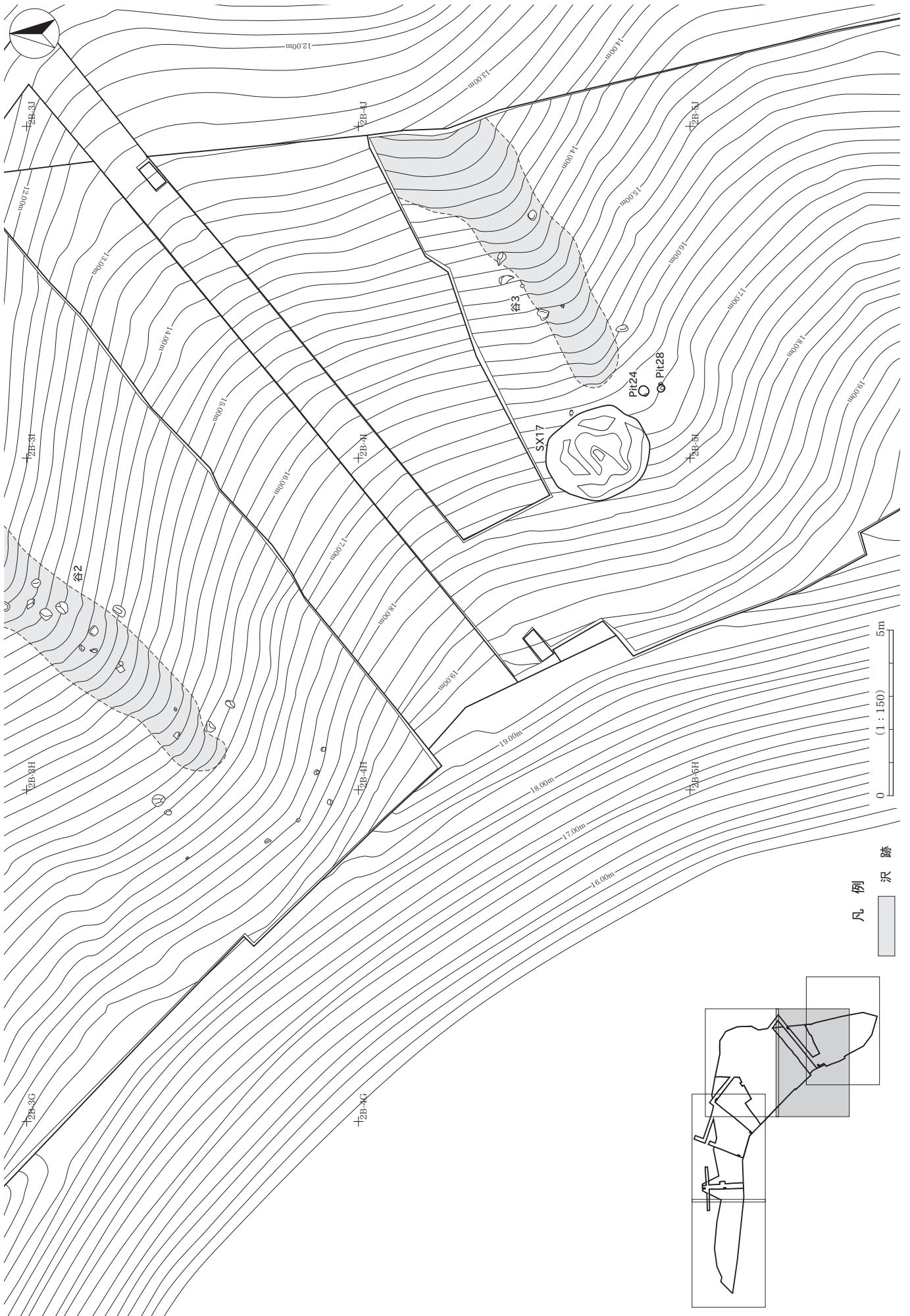






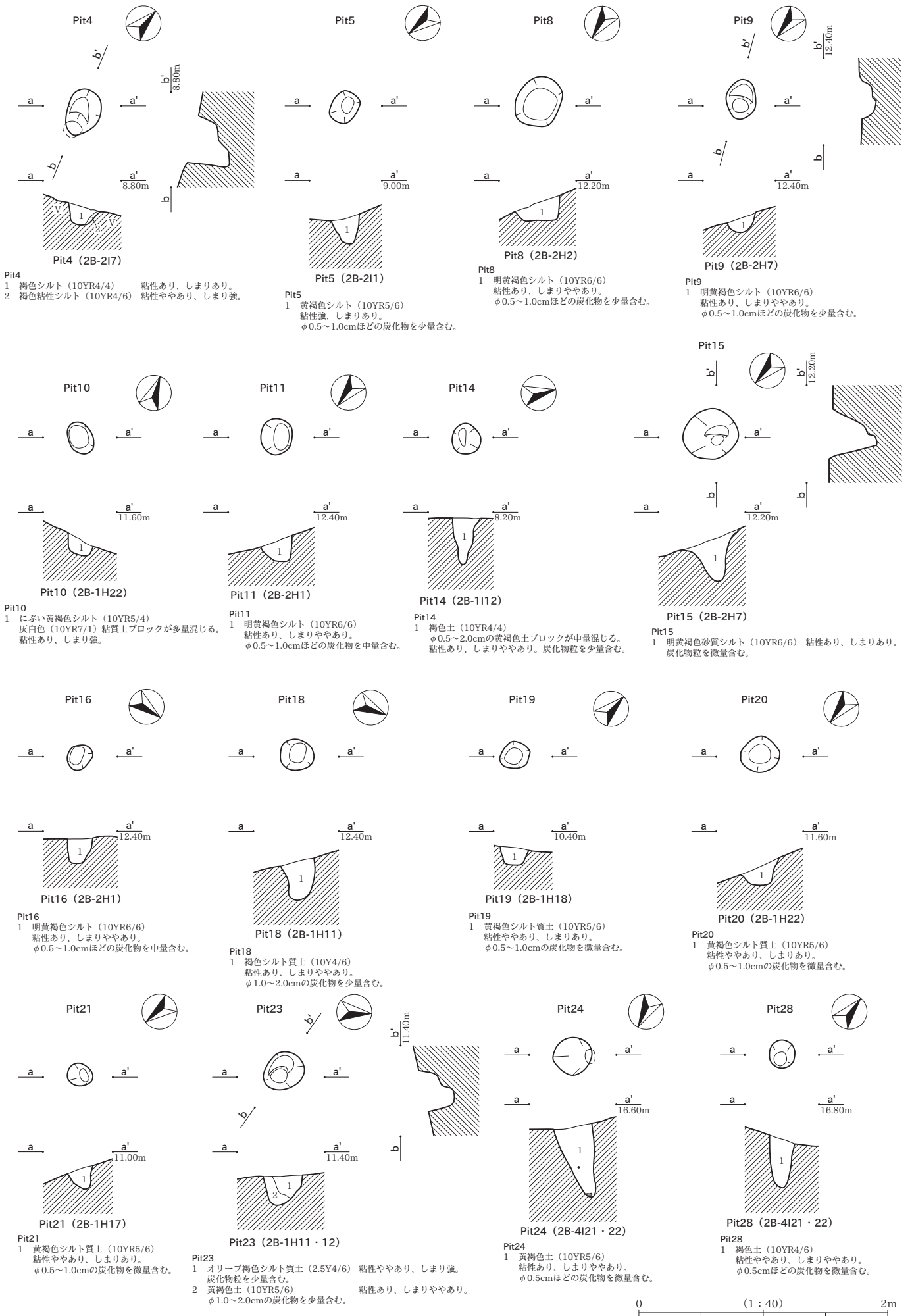


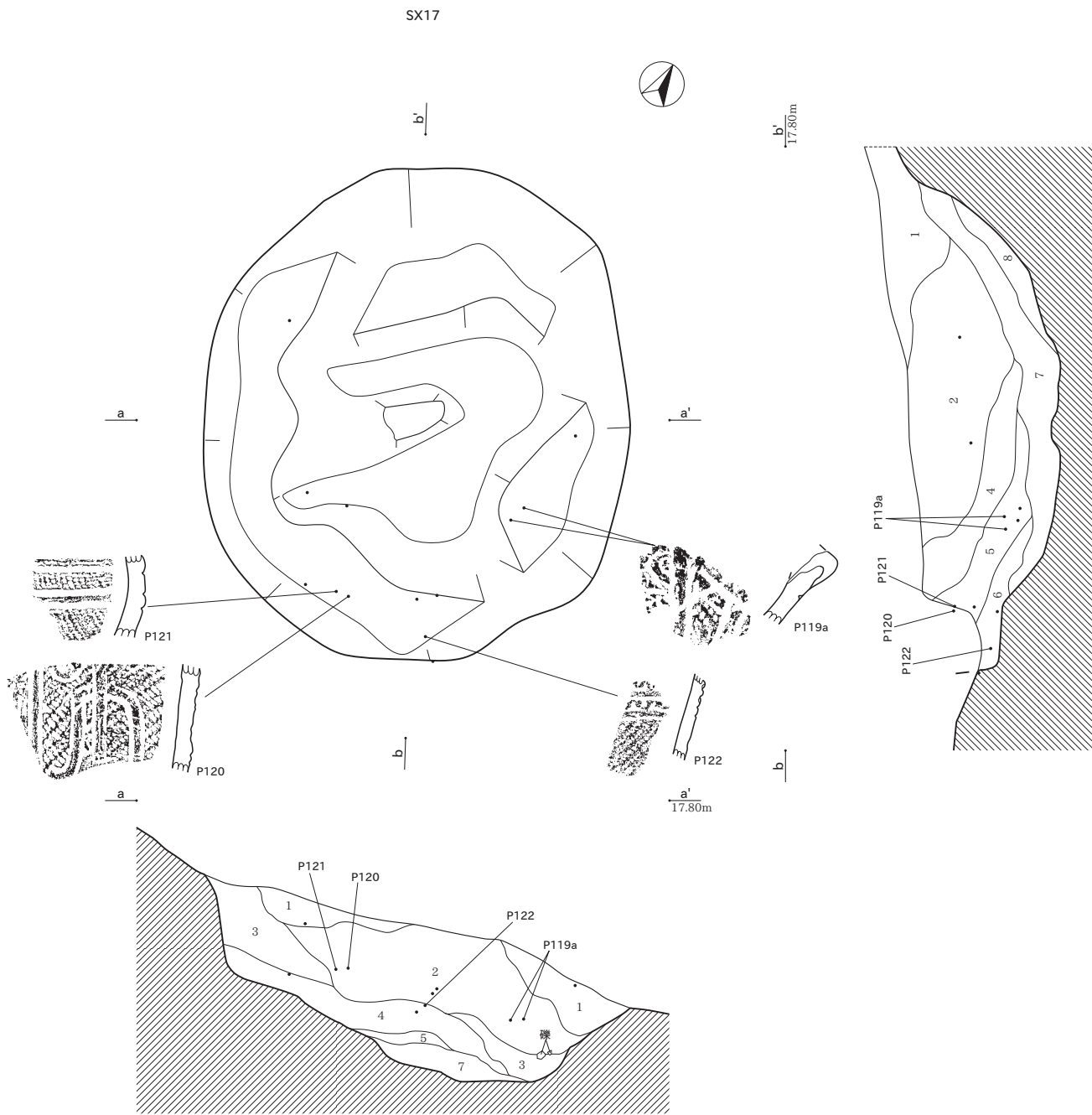








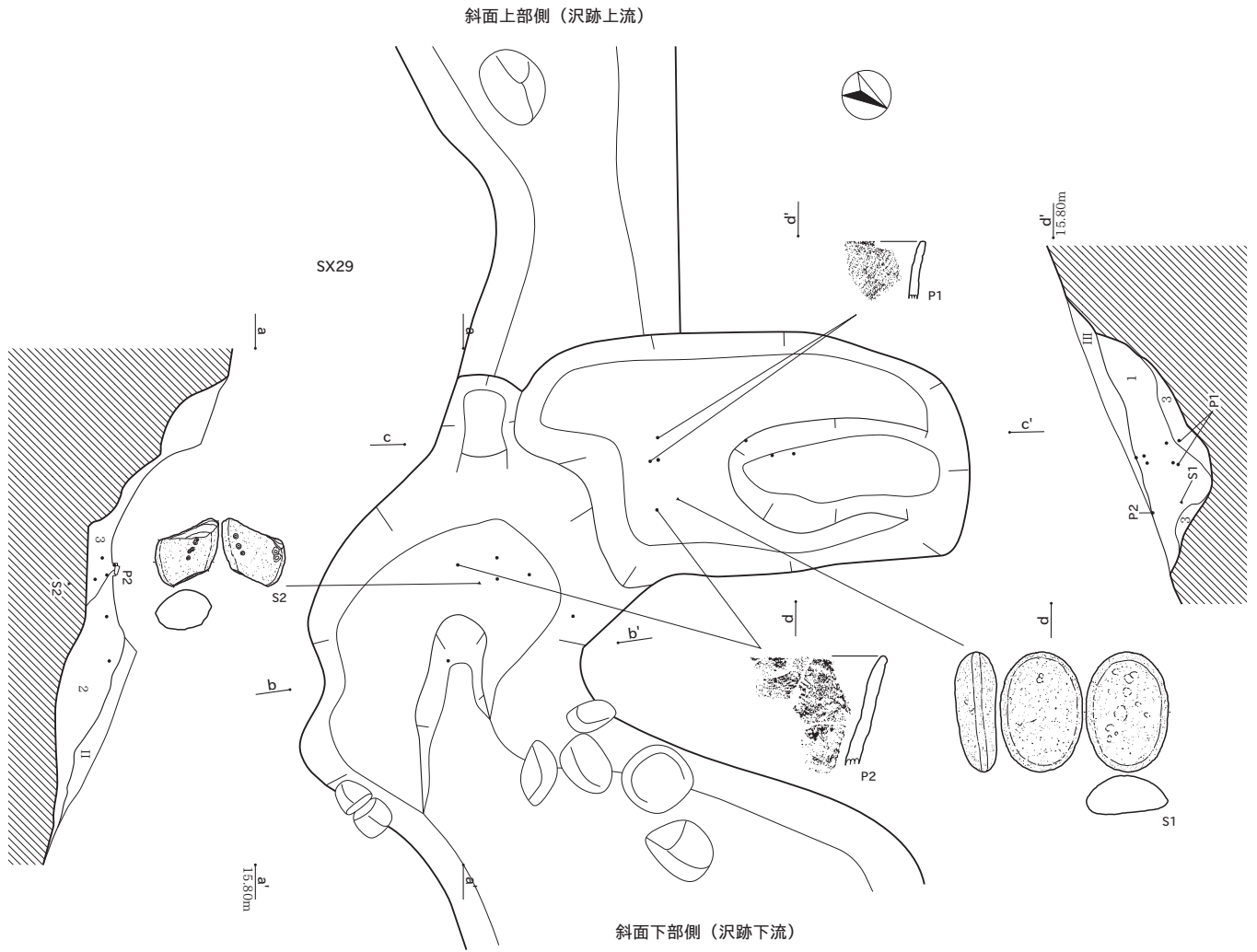




SX17 (2B-4H15・20・25, 4I11・16・21)

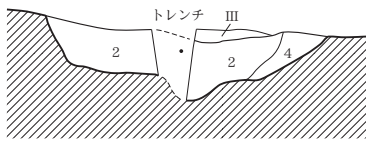
SX17

- 1 黄褐色シルト質土 (10YR5/6) 粘性あり、しまりややあり。φ0.5cmほどの炭化物を微量含む。(Ⅲ層相当土)
- 2 橙色シルト質土 (7.5YR6/6) φ1.0~10.0cmの地山土ブロックが全体的に多量混じる。粘性ややあり、しまりあり。(Ⅶ層起因土)
- 3 1層土と同じ。(Ⅲ層相当土)
- 4 2層と5層の混合層。
- 5 2層土に黄褐色シルト質土が斑状に混じる。粘性あり、しまりあり。
- 6 1層土と同じ。(Ⅲ層相当土)
- 7 褐色シルト質土 (10YR4/4) Ⅲ層相当土に2層土が斑状に混じる。粘性あり、しまりややあり。
- 8 明褐色シルト質土 (7.5YR5/6) φ1.0~10.0cmの地山土ブロックが全体的に多量混じる。粘性あり、しまりあり。

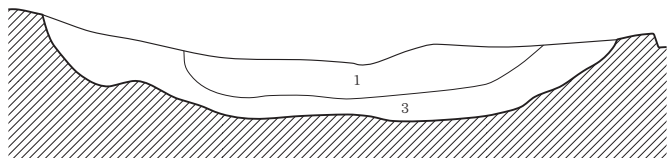


斜面下部側 (沢跡下流)

b b' 15.80m

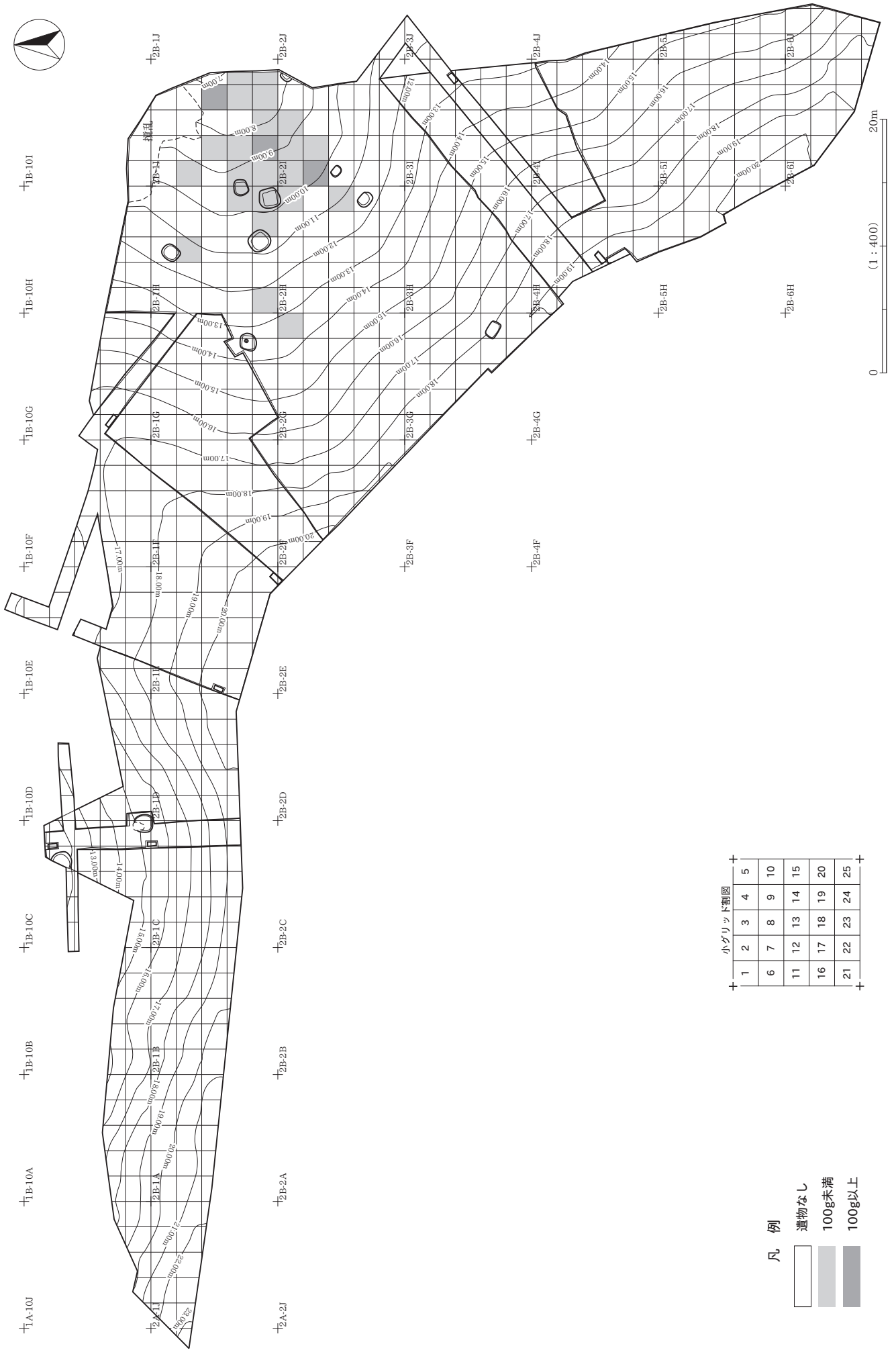


c c' 15.80m



SX29 (2B-2G1・2・6~8・11~13)

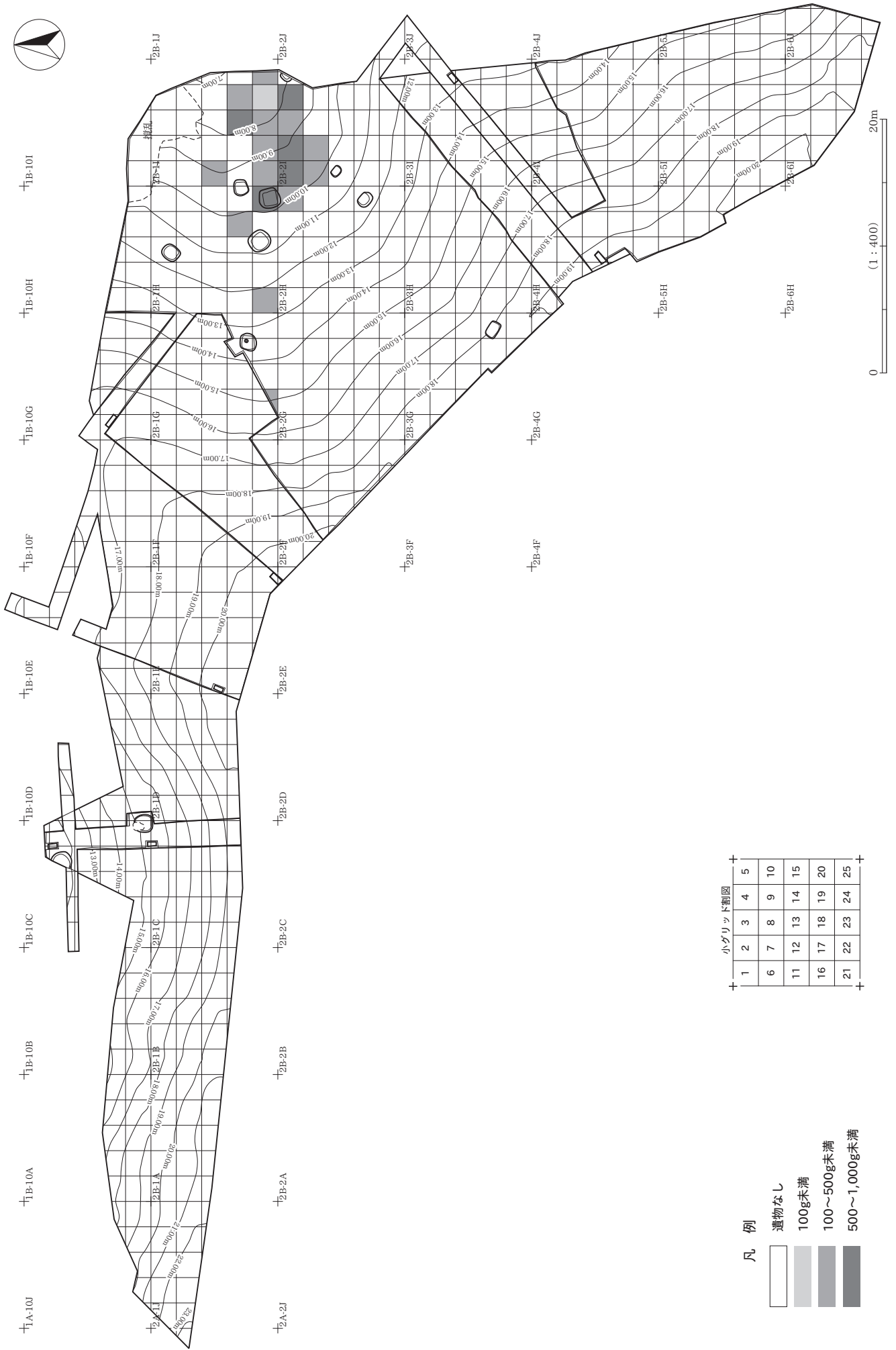
- SX29
- 1 褐色土 (10YR4/4) 粘性ややあり、しまりややあり。φ1.0cmほどの炭化物を少量含む。
  - 2 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、しまりあり。φ1.0cmほどの炭化物を微量含む。暗褐色の色素が斑状に少量沈着する。
  - 3 黄褐色土 (10YR6/6) 粘性ややあり、しまりあり。φ1.0cmほどの炭化物を微量含む。暗褐色の色素が斑状に全体的に多量沈着する。
  - 4 黄褐色土 (10YR5/8) φ1.0~2.0cmの地山土ブロックが少量混じる。粘性ややあり、しまりあり。φ1.0cmの炭化物を少量含む。



小グリッド分割図

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

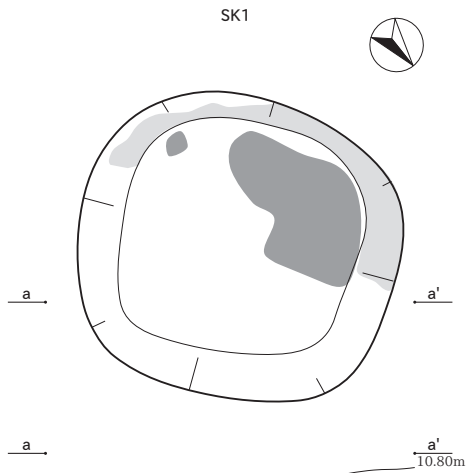
- 凡例
- 遺物なし
  - 100g未満
  - 100g以上



小グリッド分割図

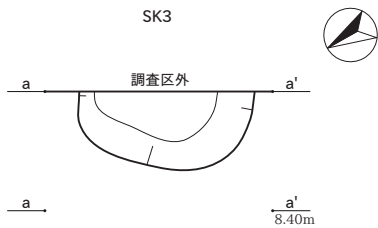
1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

- 凡例
- 遺物なし
  - 100g未満
  - 100~500g未満
  - 500~1,000g未満



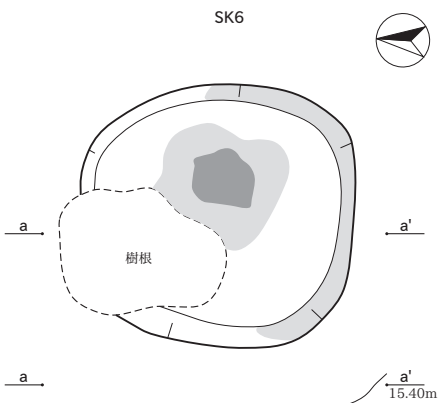
SK1 (2B-1H18・19・23・24)

- SK1
- 1 褐色シルト (10YR4/4) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼成粘土塊を微量含む。
  - 2 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼成粘土塊を少量含む。
  - 3 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) 粘性あり、しまりあり。焼成粘土塊を多量含む。
  - 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性強、しまりあり。φ1.0~2.0cmの炭化物を中量、焼成粘土塊を少量含む。
  - 5 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性強、しまり強。φ1.0~2.0cmの炭化物・焼成粘土塊を多量含む。



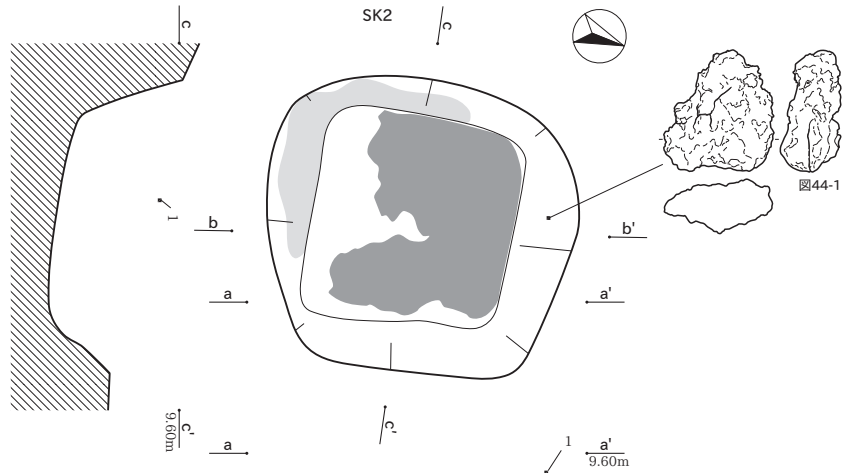
SK3 (2B-215)

- SK3
- 1 にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 粘性あり、しまり強。炭化物粒を微量含む。
  - 2 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘性あり、しまりややあり。φ0.5cmほどの炭化物粒を少量含む。
  - 3 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物集中層。



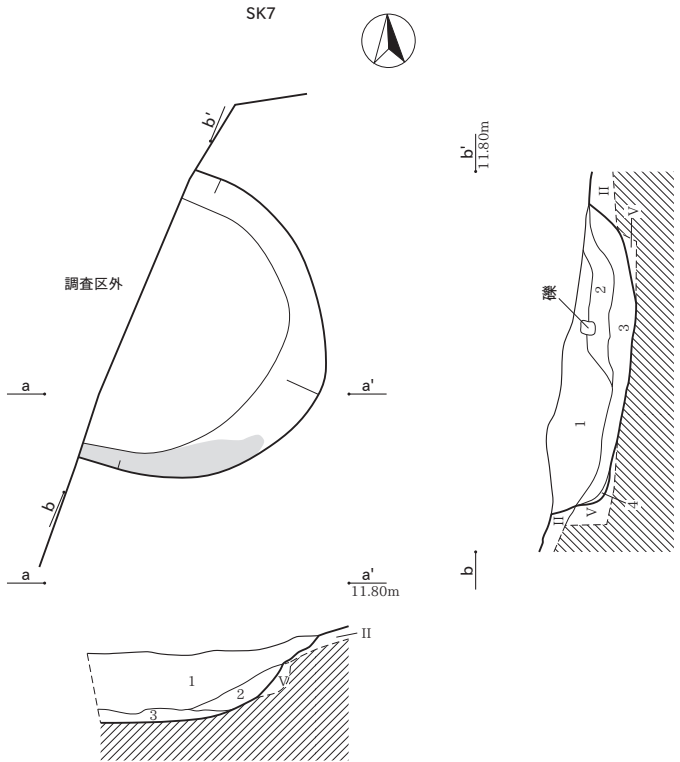
SK6 (1B-10C25, 10D21, 2B-1C5, 1D1)

- SK6
- 1 にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 粘性あり、しまり強。炭化物粒を微量含む。
  - 2 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘性あり、しまりややあり。φ0.5cmほどの炭化物粒を少量含む。
  - 3 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物集中層。
  - 4 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) 粘性あり、しまり強。焼成粘土塊を多量含む。



SK2 (2B-1H25, 2H5)

- SK2
- 1 褐色シルト (10YR4/4) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼成粘土塊を微量含む。
  - 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり、しまり強。φ1.0~2.0cmほどの炭化物を少量、φ1.0cmほどの焼成粘土塊を微量含む。
  - 3 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性強、しまりあり。φ1.0~2.0cmほどの炭化物を少量、φ1.0cmほどの焼成粘土塊を微量含む。
  - 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性強、しまりあり。φ1.0~2.0cmほどの炭化物を少量、φ1.0cmほどの焼成粘土塊を微量含む。
  - 5 黒褐色土 (10YR3/1) 黄褐色土ブロック多量混じる。粘性あり、しまり強。φ1.0~2.0cmほどの炭化物を少量、φ1.0cmほどの焼成粘土塊を微量含む。
  - 6 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土粒が全体的に混じる。粘性強、しまりあり。φ1.0~2.0cmほどの炭化物を多量含む。

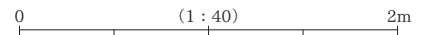


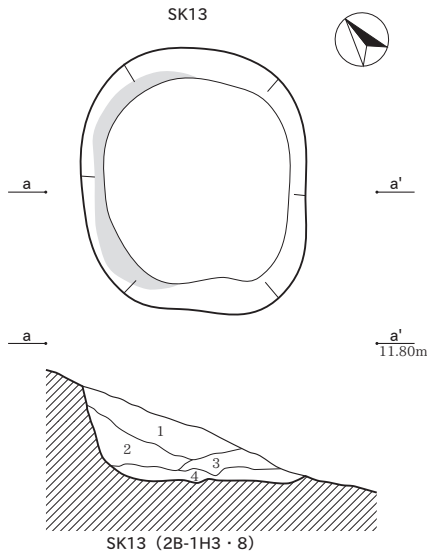
SK7 (1B-10C9)

- SK7
- 1 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性あり、しまり強。炭化物粒を微量含む。
  - 2 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘性あり、しまりややあり。φ0.5cmほどの炭化物粒を少量含む。
  - 3 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物集中層。
  - 4 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) 粘性あり、しまり強。焼成粘土塊を多量含む。

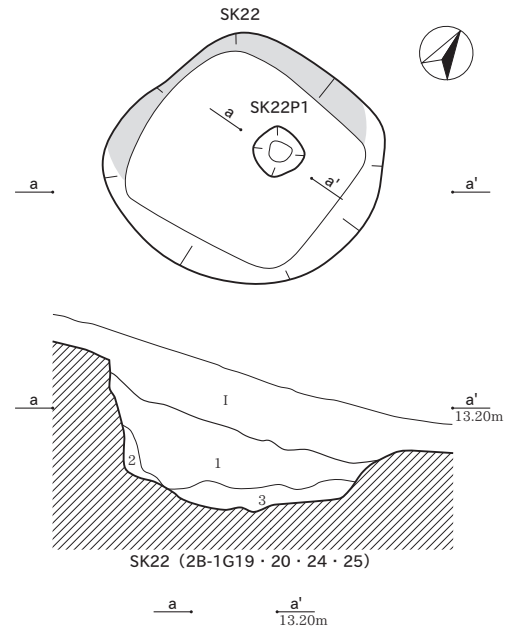
凡例

- 被熱範囲
- 炭化物範囲



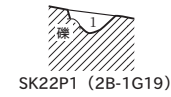


SK13 (2B-1H3・8)

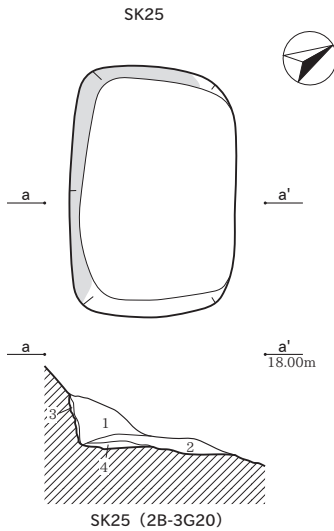


SK22 (2B-1G19・20・24・25)

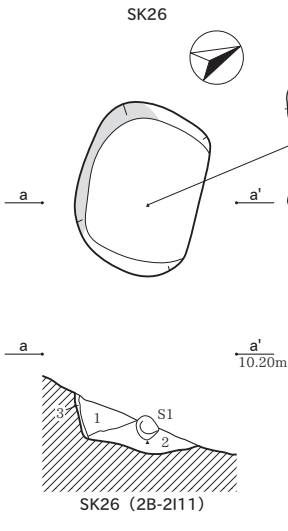
- SK13  
 1 褐色シルト (10YR4/4) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼成粘土塊を微量含む。  
 2 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼成粘土塊を少量含む。  
 3 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘性あり、しまりややあり。φ0.5cmほどの炭化物粒を少量含む。  
 4 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強、しまりあり。φ1.0~2.0cmほどの炭化物を多量含む。



SK22P1 (2B-1G19)



SK25 (2B-3G20)



SK26 (2B-2111)

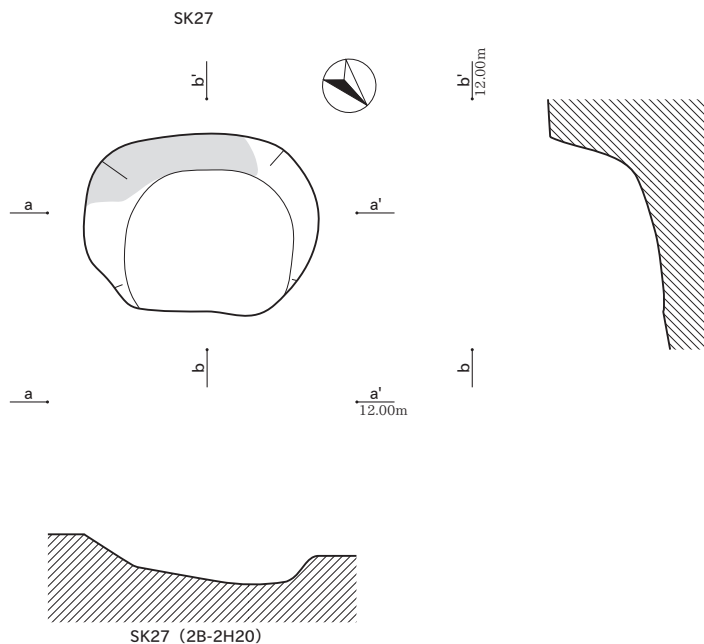
- SK22  
 1 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼成粘土塊を少量含む。  
 2 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) 粘性あり、しまりあり。焼成粘土塊を多量含む。  
 3 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性強、しまりあり。φ1.0~2.0cmの炭化物を多量、焼成粘土塊を少量含む。

- SK22P1  
 1 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物・焼土を少量含む。

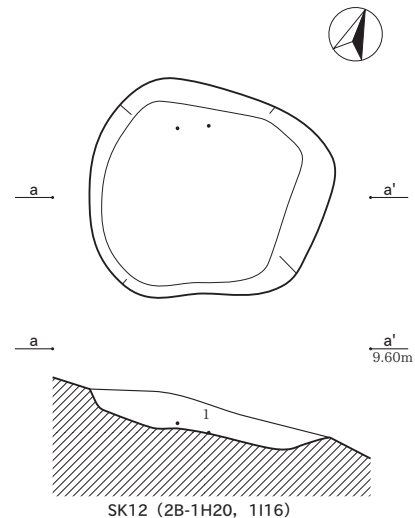
- SK25  
 1 褐色シルト (10YR4/4) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼土・焼成粘土塊を微量含む。  
 2 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物集中层。焼土を微量含む。  
 3 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 被熱土層。粘性あり、しまり強。  
 4 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) 粘性あり、しまり強。焼成粘土塊を多量含む。

- SK26  
 1 褐色シルト (10YR4/4) 粘性あり、しまりあり。φ0.5~1.0cmほどの炭化物・焼土・焼成粘土塊を微量含む。  
 2 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物集中层。焼土を微量含む。  
 3 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 被熱土層。粘性あり、しまり強。

SK12



SK27 (2B-2H20)



SK12 (2B-1H20, 1116)

- SK12  
 1 褐色土 (7.5Y4/4) 粘性あり、しまりややあり。  
 φ2.0~3.0cmの明赤褐色 (2.5YR5/8) 焼土ブロック・炭化物を少量含む。

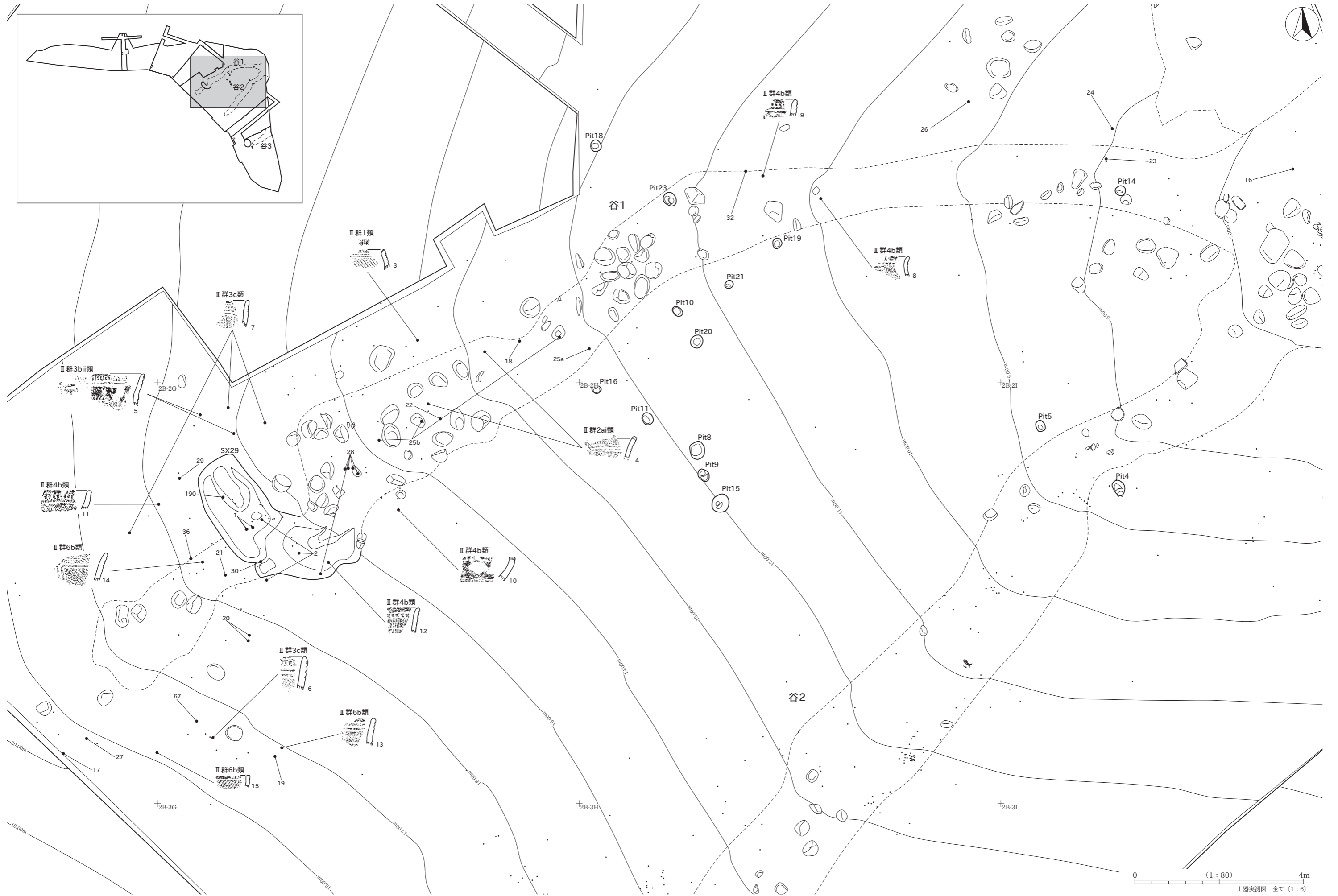
凡例

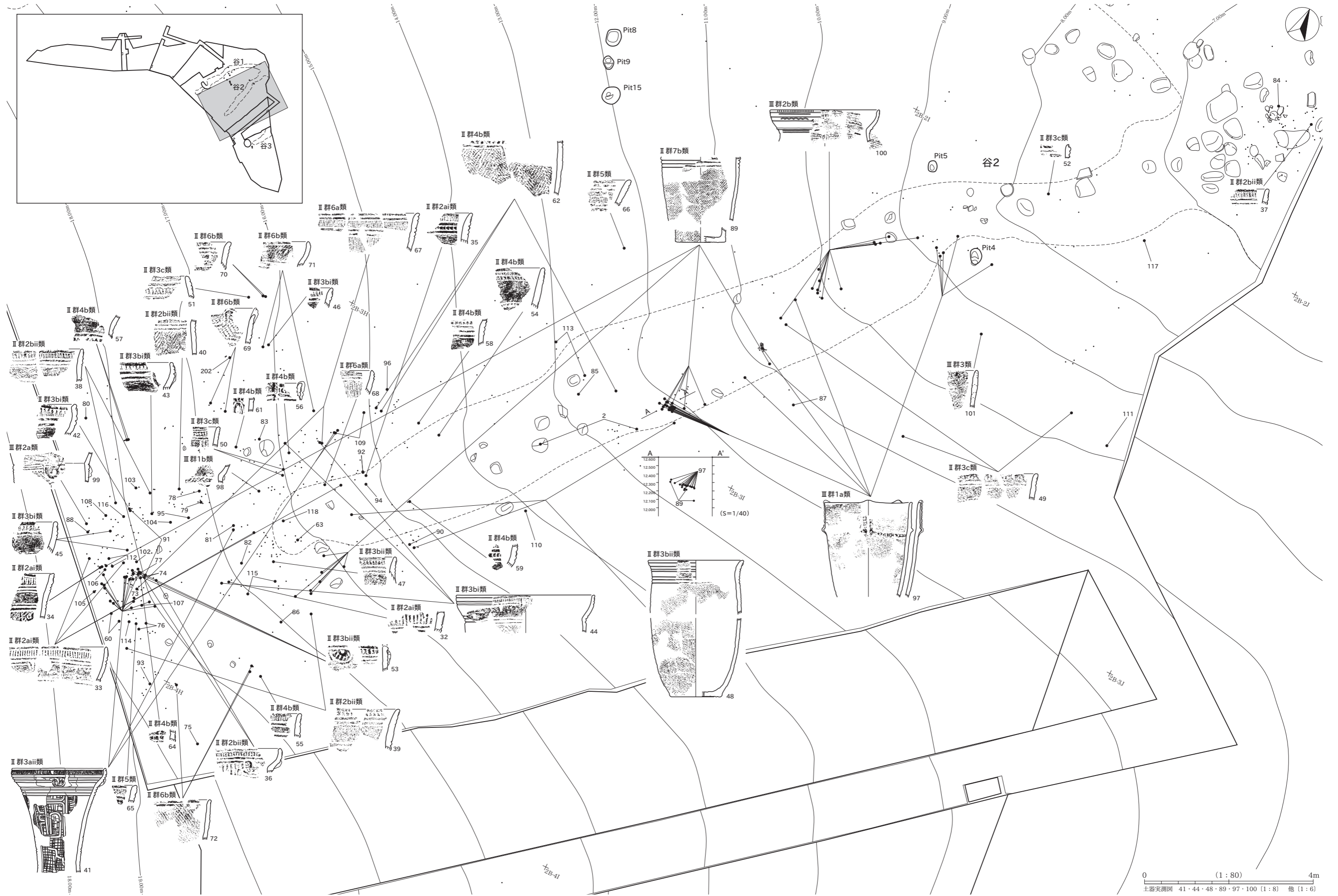
■ 被熱範囲

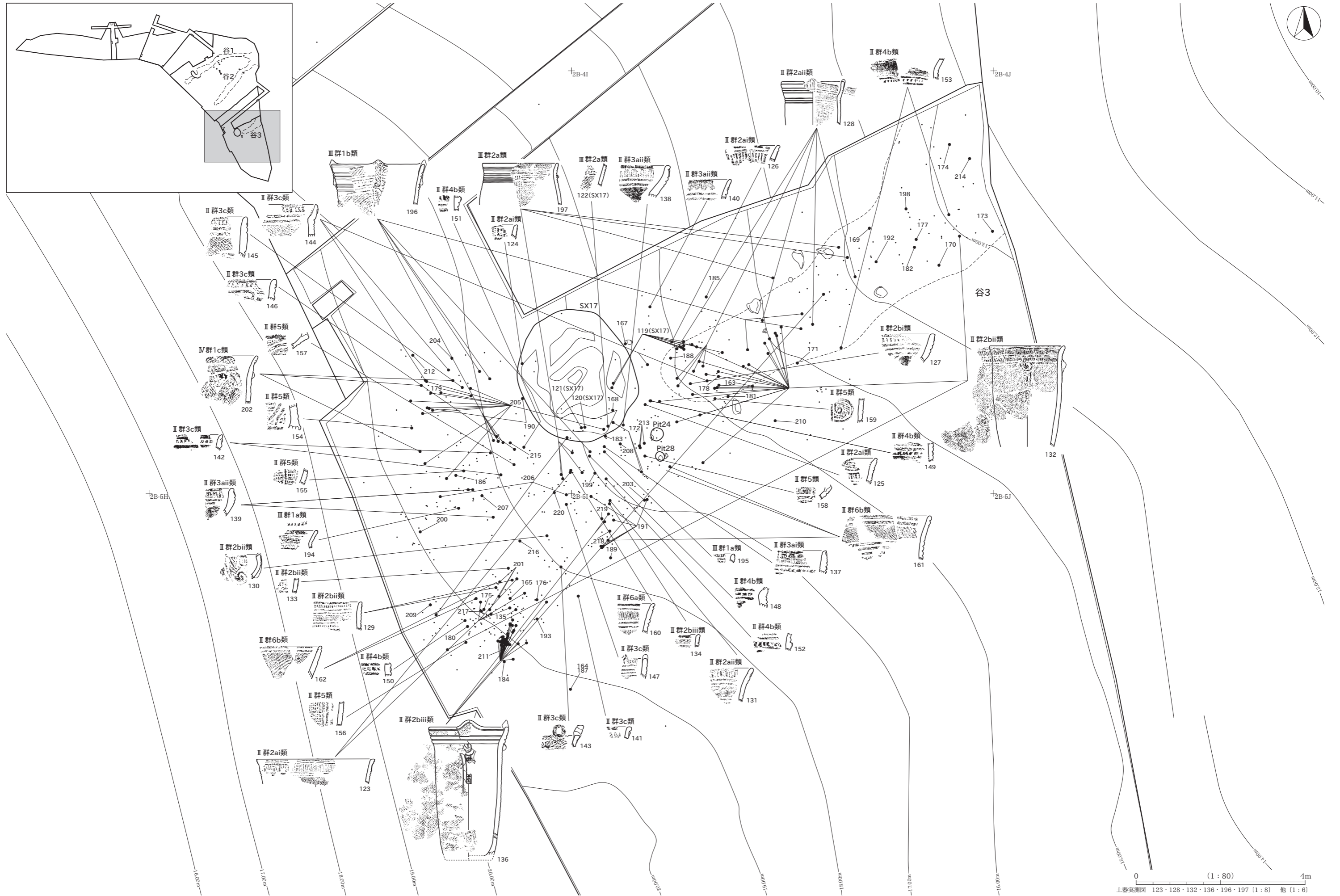
0 (1:40) 2m













石器実測図縮尺

実測図番号	縮尺
1・12~16 51~53・66	(1/8)
2・6~11・35~50 60・62	(1/6)
3~5・18・22~34 59・60・63・65	(1/3)
17・54~56	(1/4)
19~21・57・58・64	(2/5)

0 (1:300) 15m



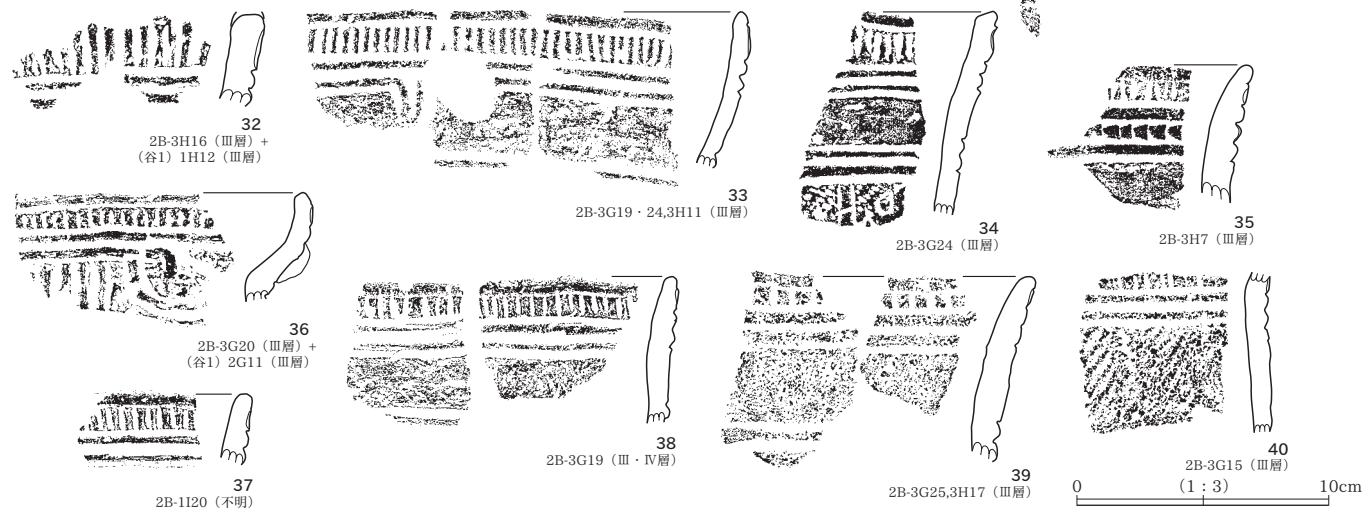
谷1出土土器(1~31)  
SX29(1・2)

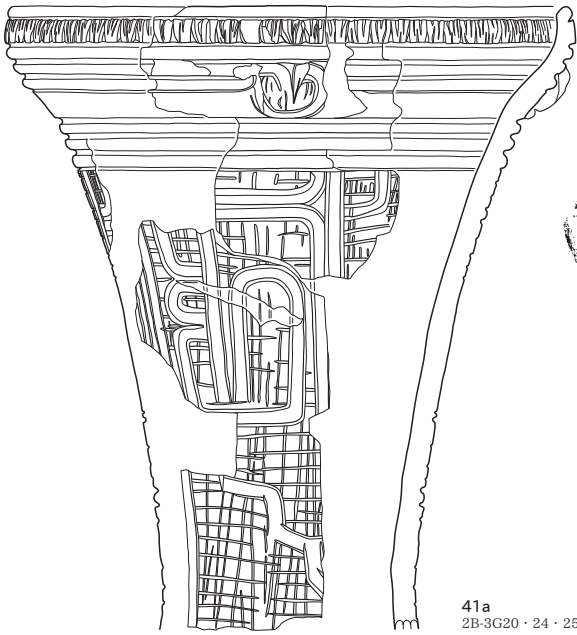
谷1包含層  
(3~31)



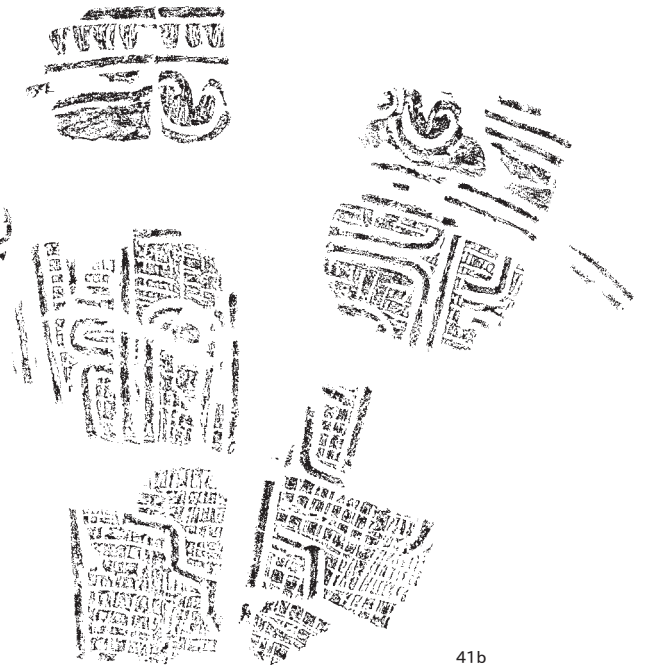
谷2出土土器(32~118)

谷2包含層(32~118)

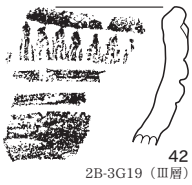




41a  
2B-3G20・24・25,3H6 (Ⅲ・Ⅳ層)



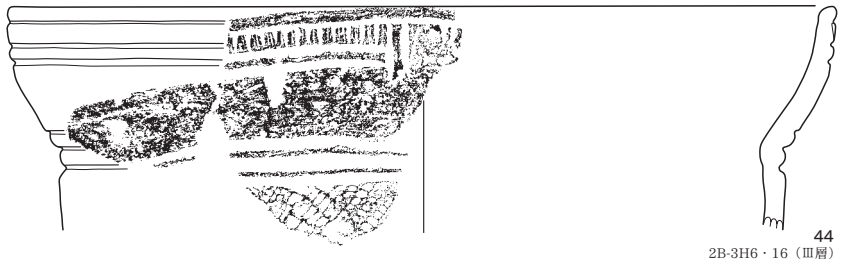
41b



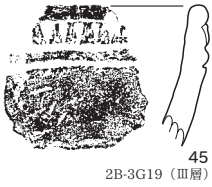
42  
2B-3G19 (Ⅲ層)



43  
2B-3G19 (Ⅲ層)



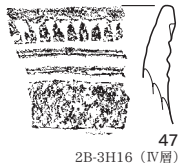
44  
2B-3H6・16 (Ⅲ層)



45  
2B-3G19 (Ⅲ層)



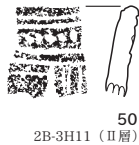
46  
2B-3G5 (Ⅳ層)



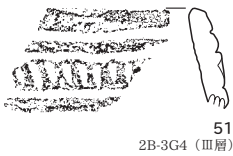
47  
2B-3H16 (Ⅳ層)



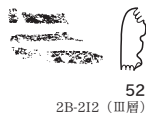
49  
2B-2H15,2I14・17 (Ⅲ層)



50  
2B-3H11 (Ⅱ層)



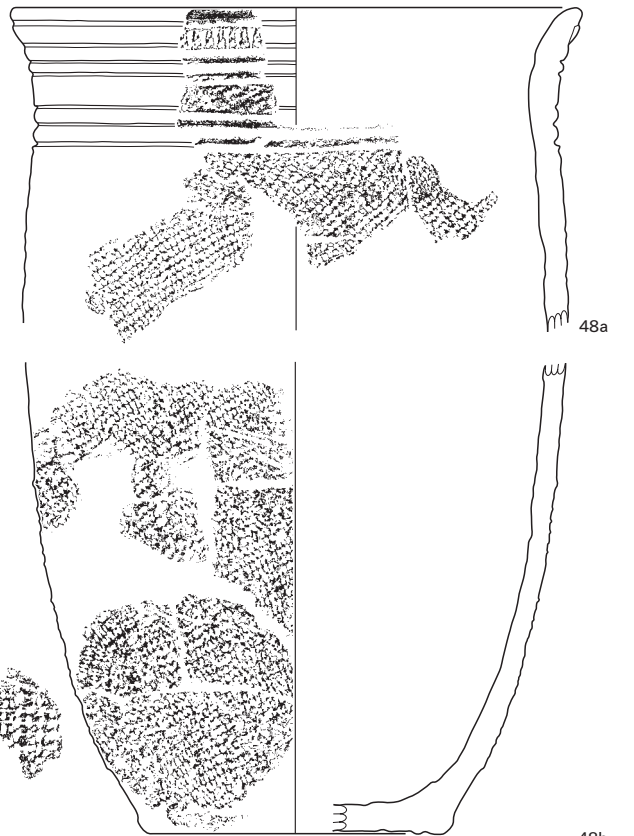
51  
2B-3G4 (Ⅲ層)



52  
2B-2I2 (Ⅲ層)



53  
2B-3G20・25 (Ⅲ層)

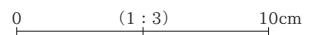


48a

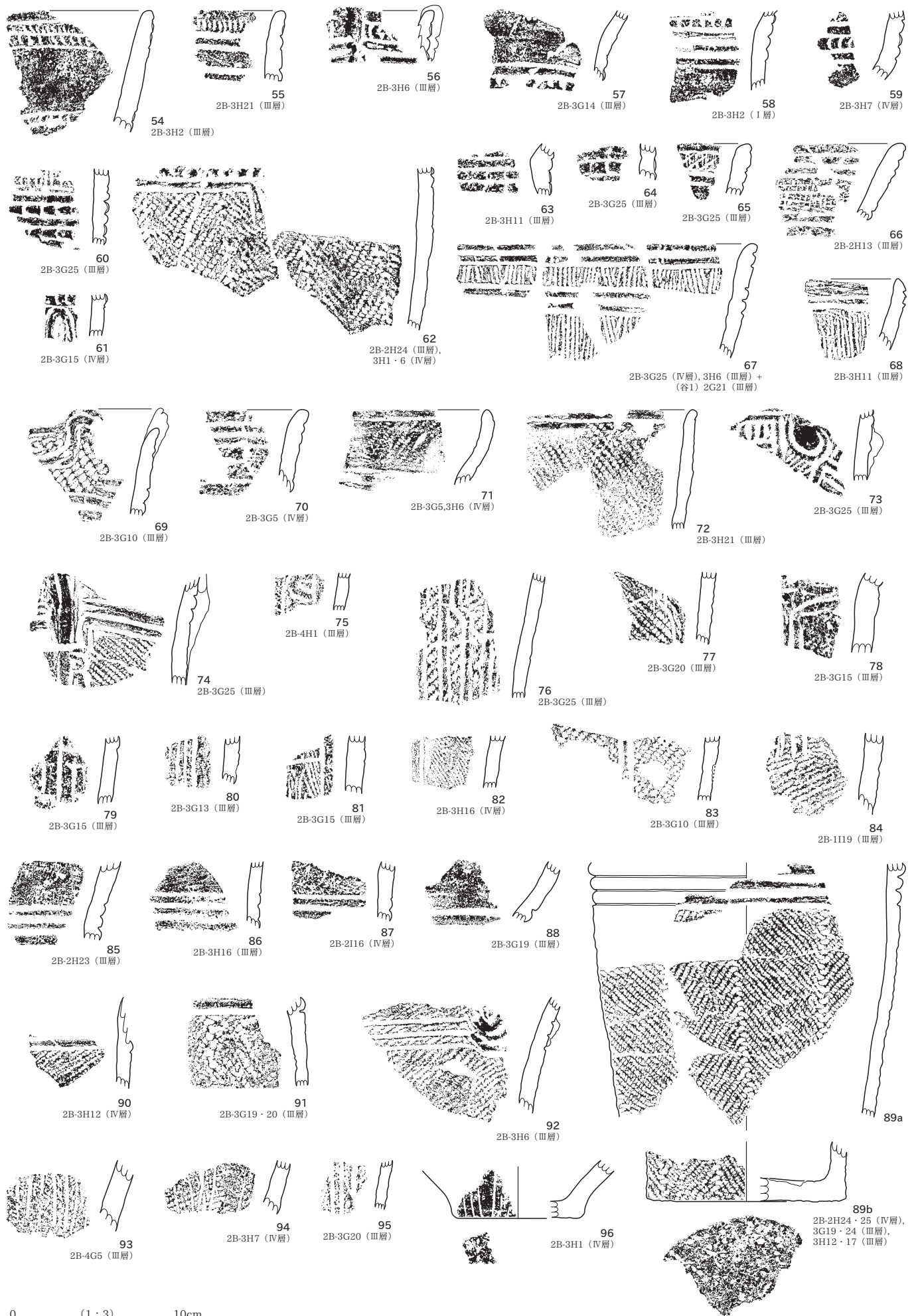
48b

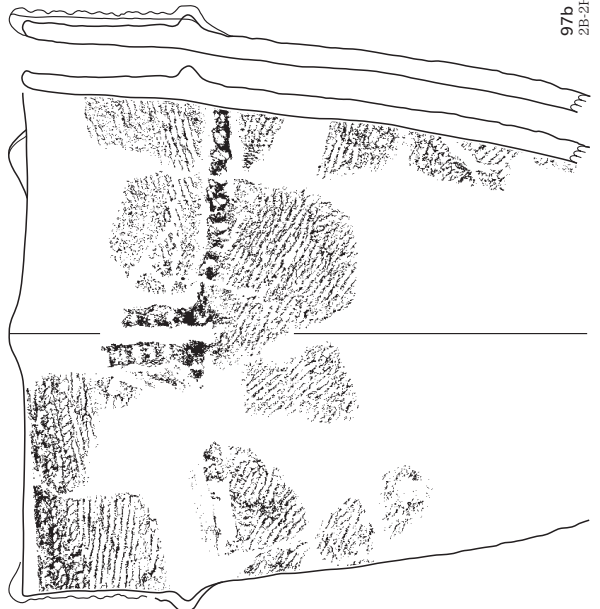
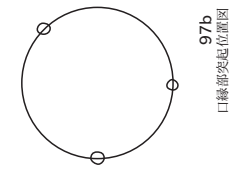
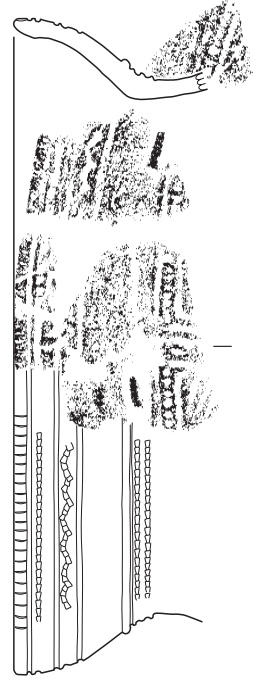
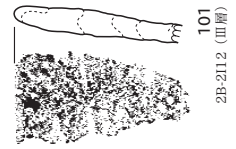
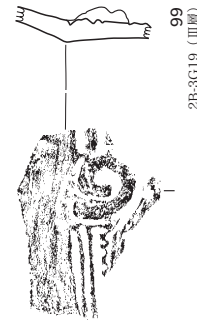
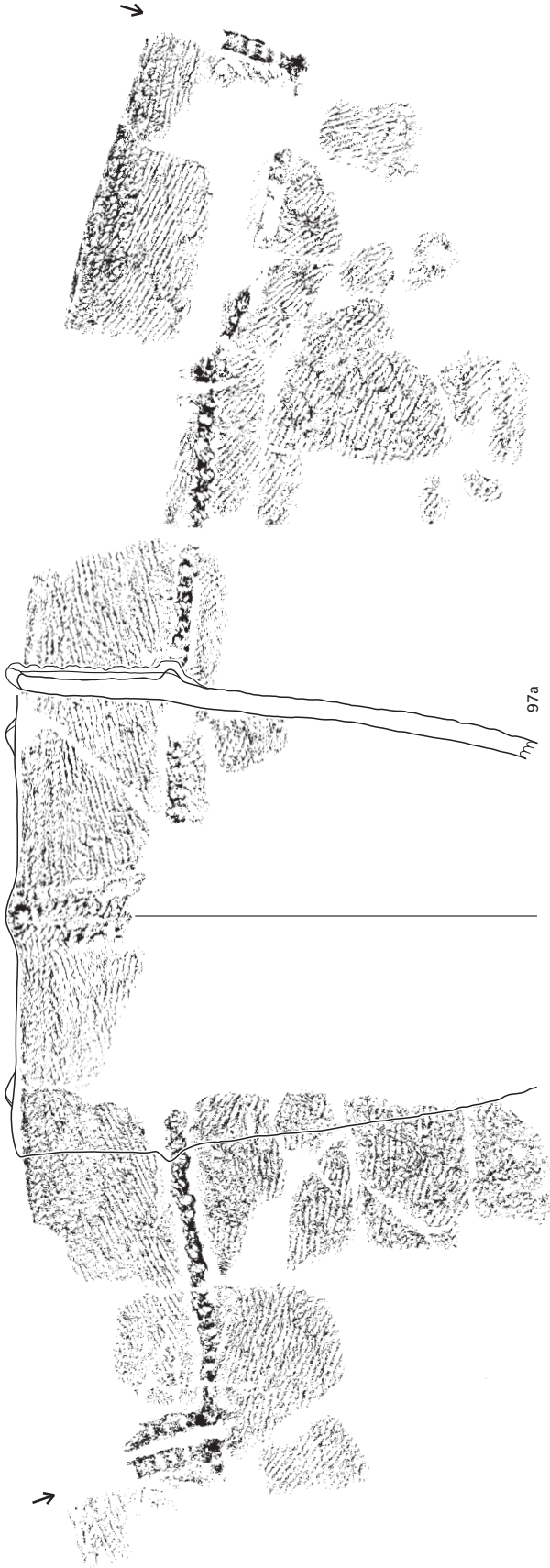
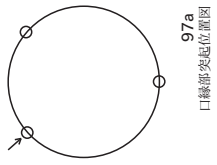
2B-2H25,3H11・12・16・25 (Ⅲ・Ⅳ層)

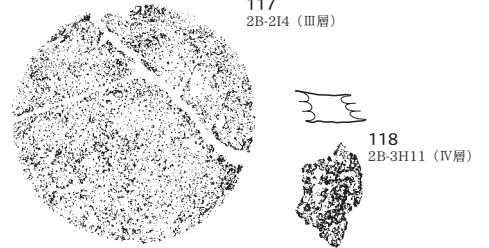
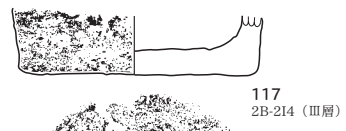
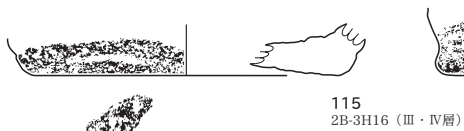
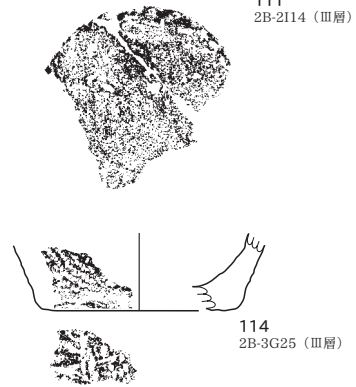
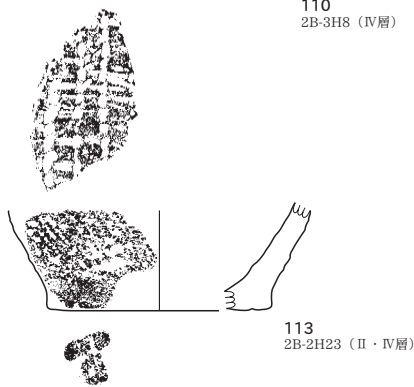
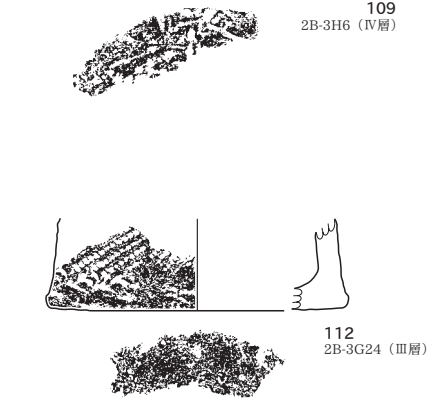
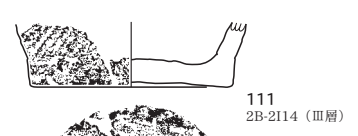
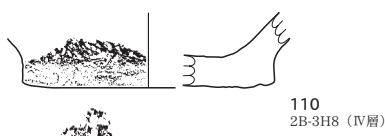
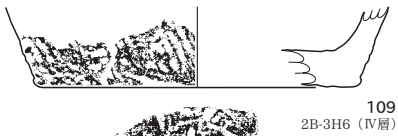
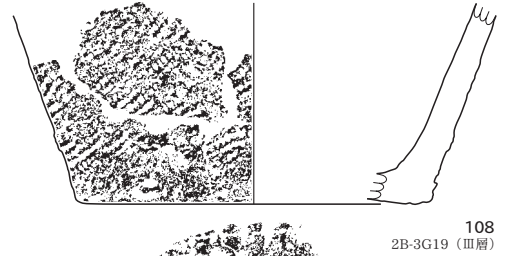
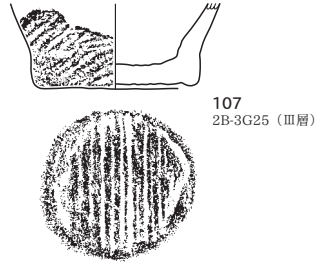
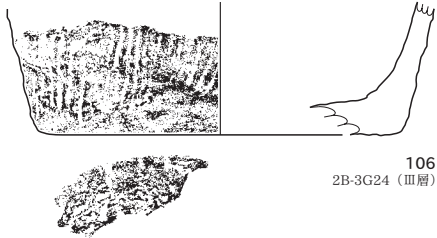
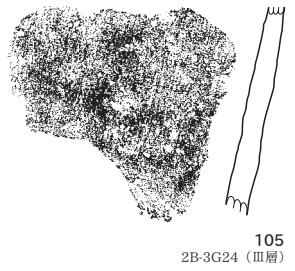
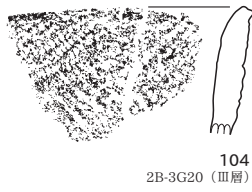
48c



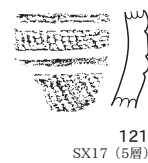
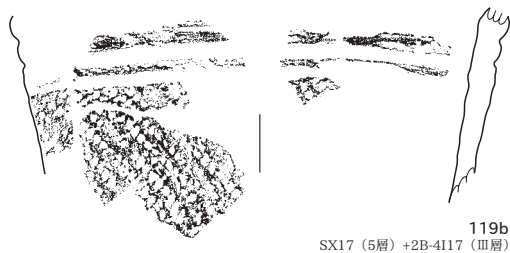




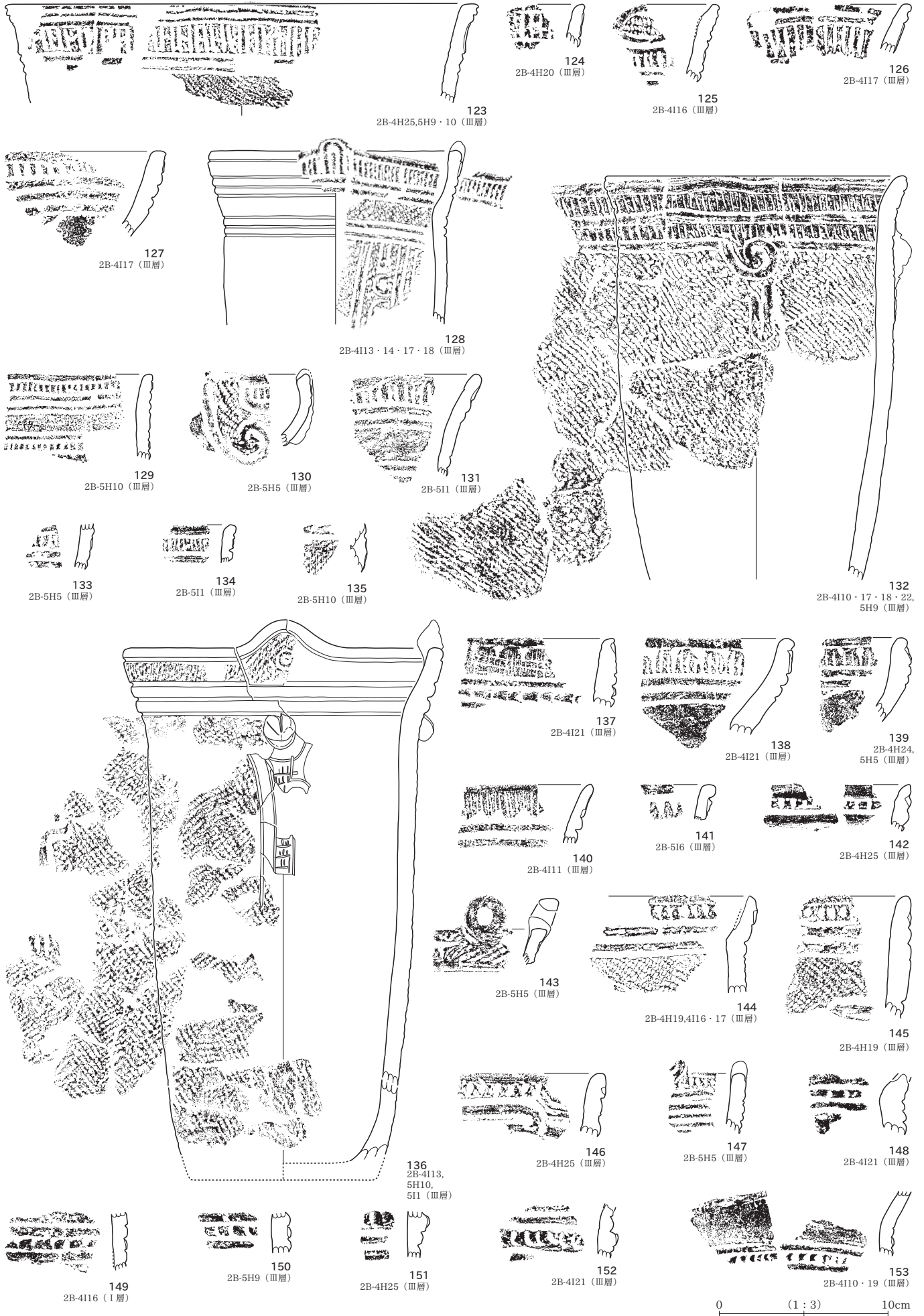


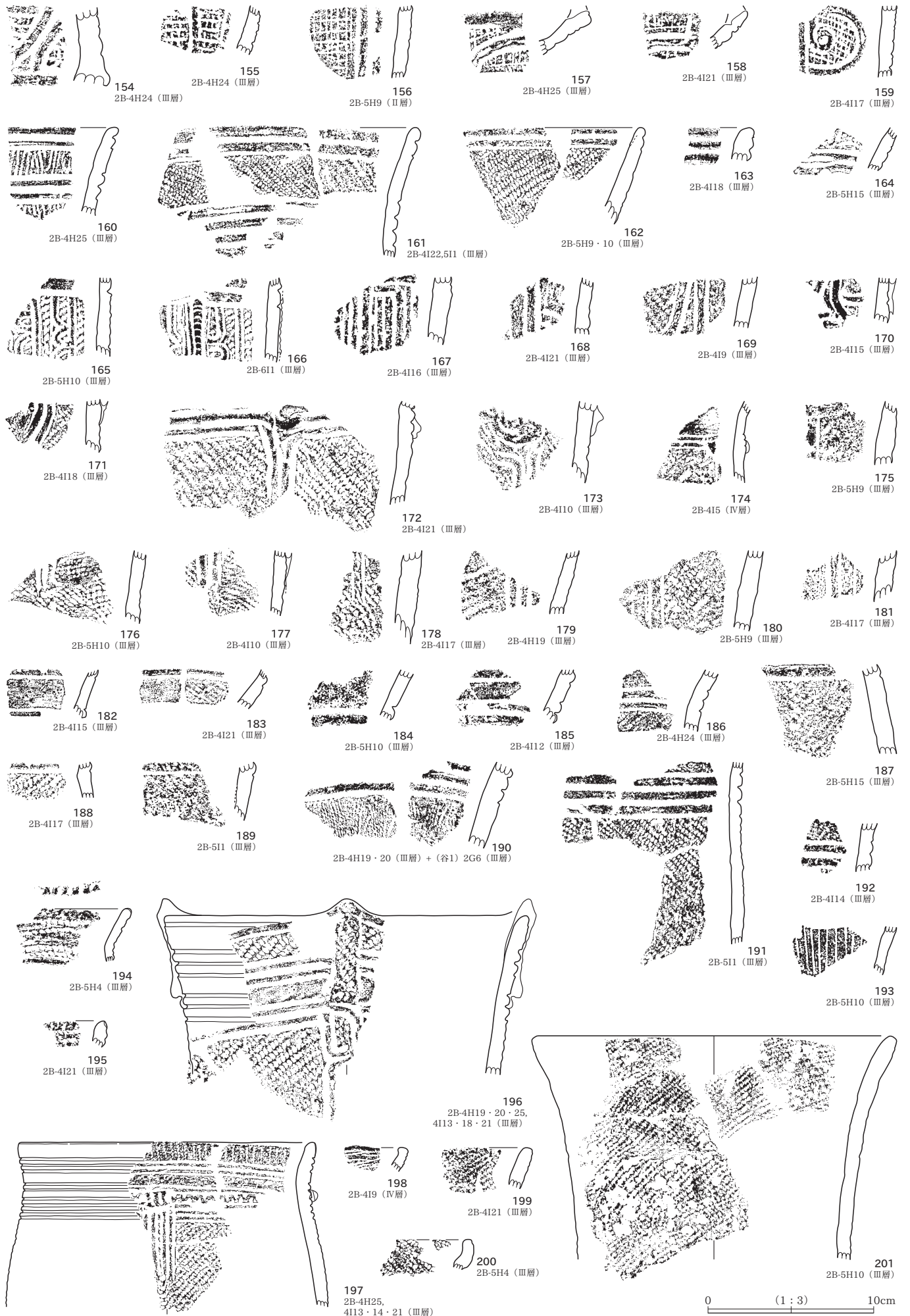


谷3出土土器 (119~220)  
SX17 (119~122)

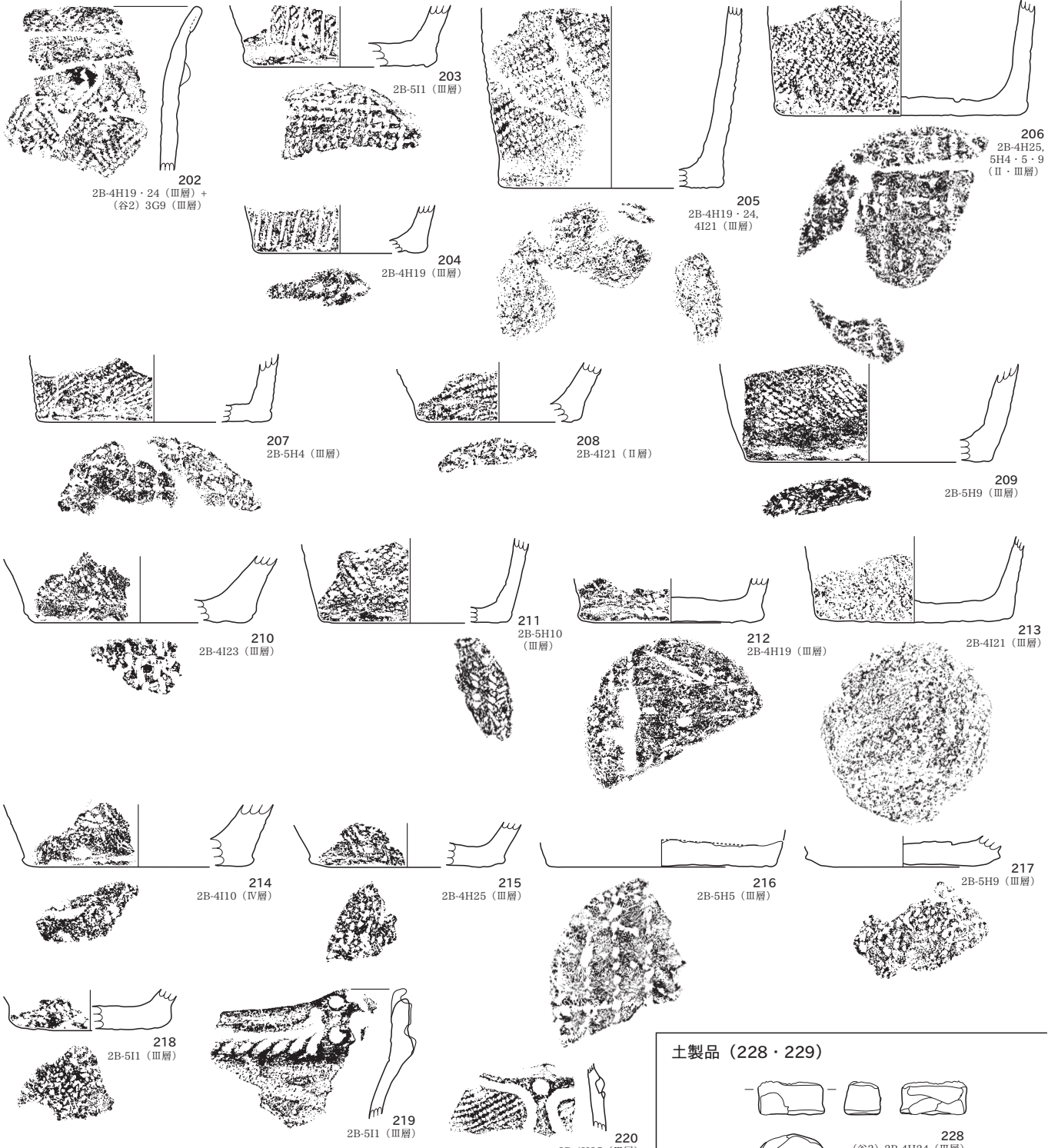


谷3包含層 (123~220)

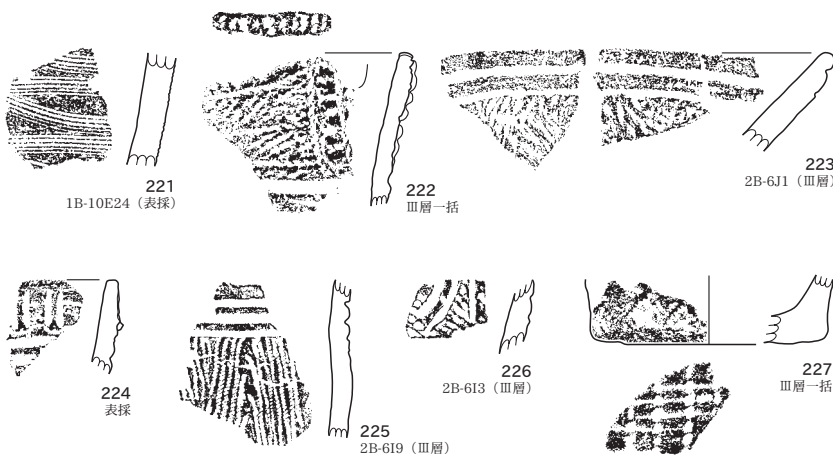




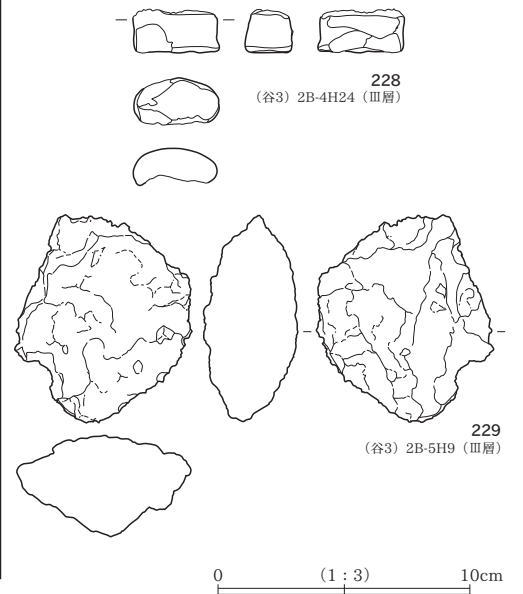
0 (1:3) 10cm



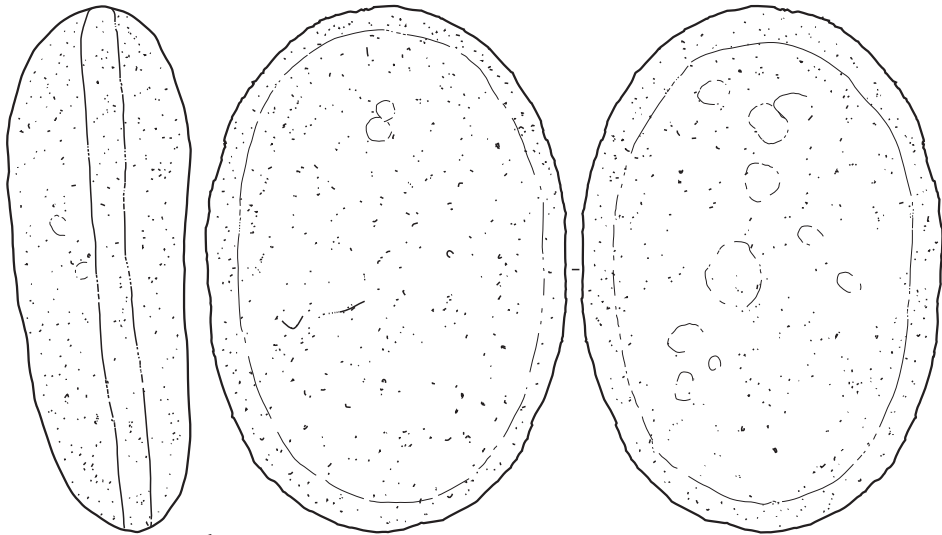
谷外出土土器 (221~227)



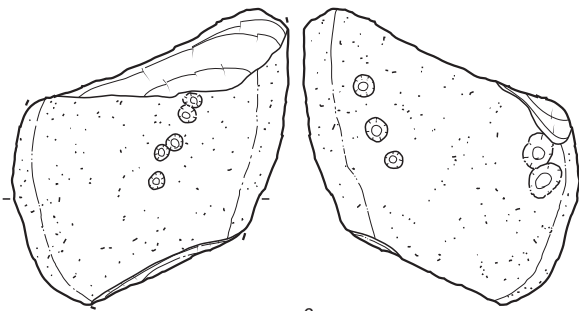
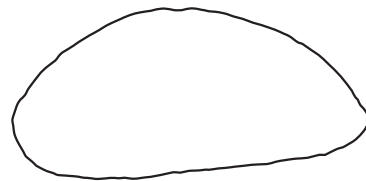
土製品 (228・229)



谷1 出土石器 (1・2)  
SX29 (1・2)

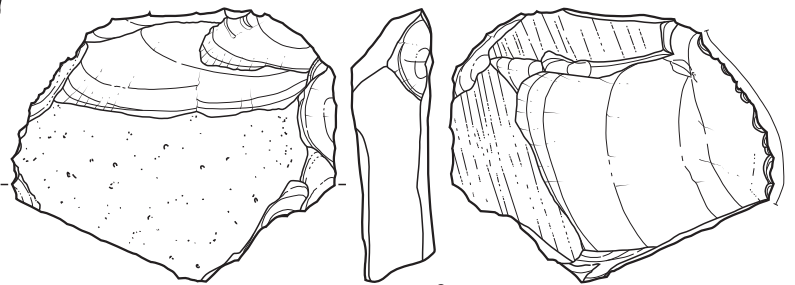


1  
2B-2G7 (2層)

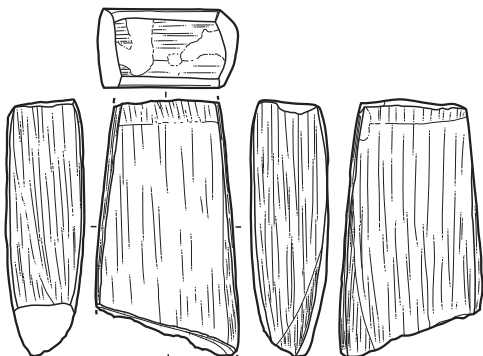


2  
2B-2G7 (3層)

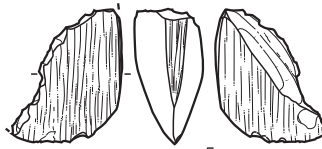
谷1 出土石器 (3~7)



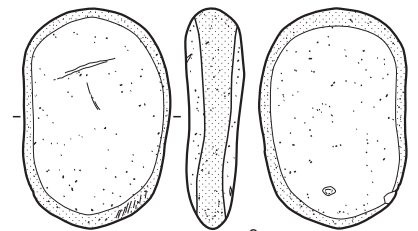
3  
2B-2G8 (Ⅲ層)



4  
2B-3G1 (Ⅲ層)

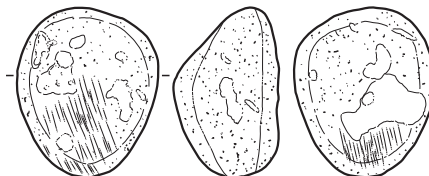


5  
2B-1G5 (表採)

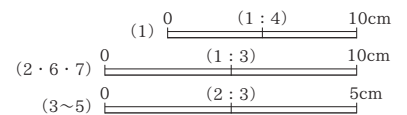


6  
2B-2G2 (Ⅳ層)

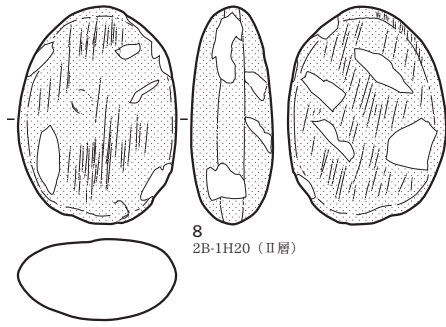
磨面



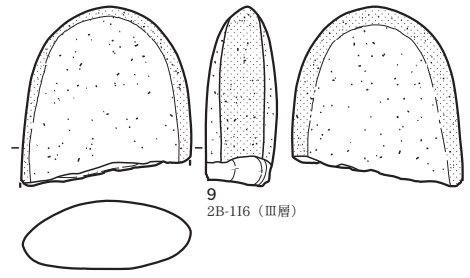
7  
2B-1G23 (Ⅲ層)



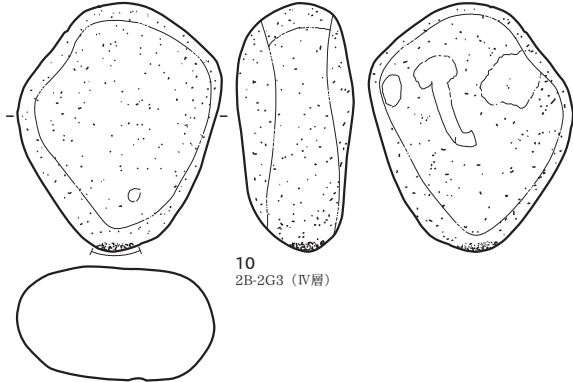
谷 1 出土石器 (8~15)



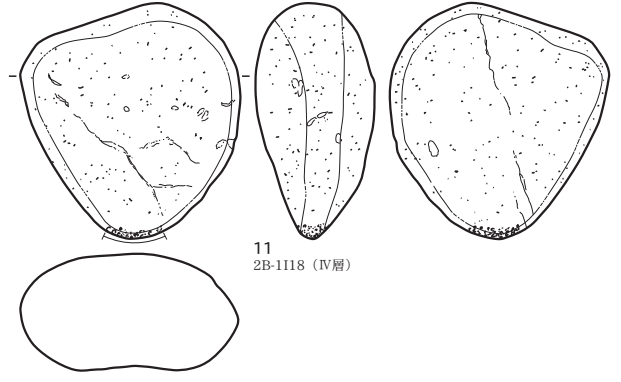
8  
2B-1H20 (II層)



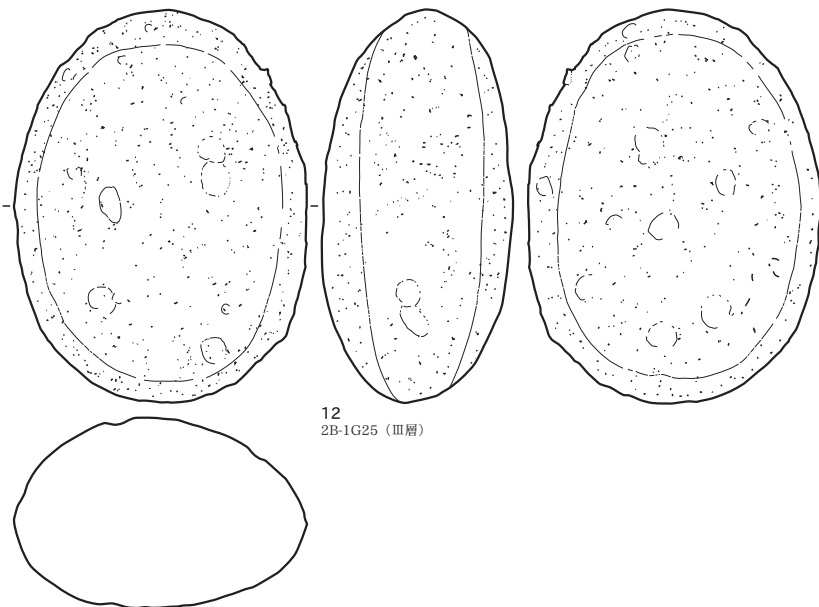
9  
2B-1I6 (III層)



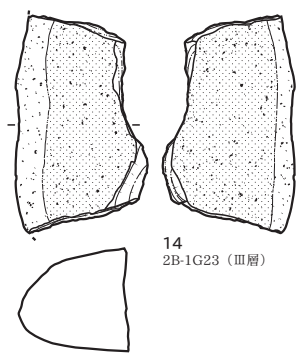
10  
2B-2G3 (IV層)



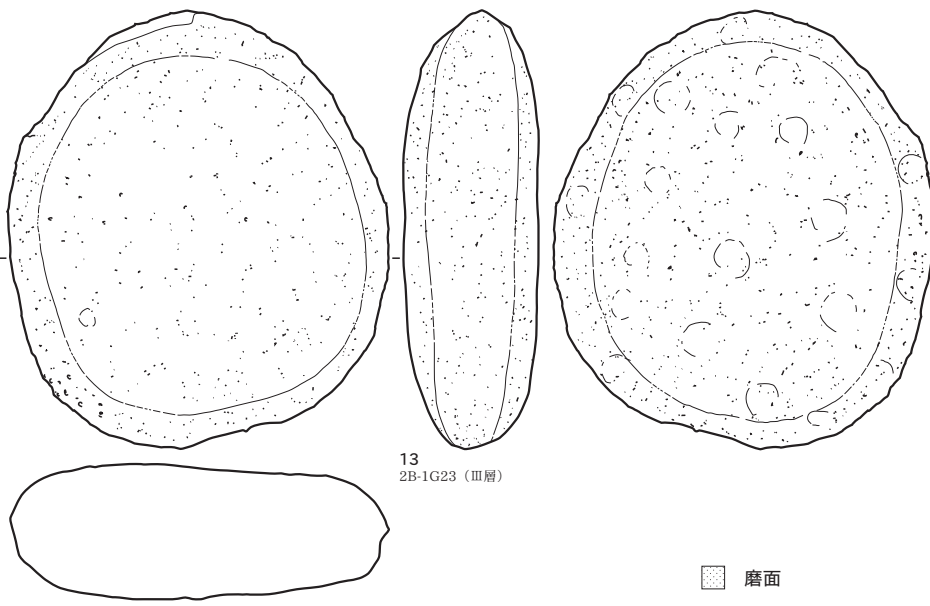
11  
2B-1I18 (IV層)



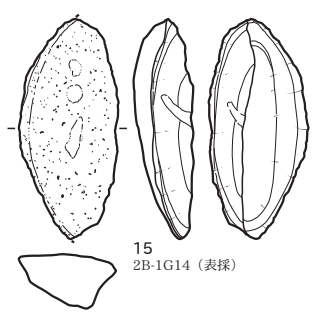
12  
2B-1G25 (III層)



14  
2B-1G23 (III層)

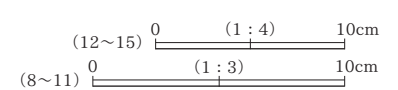


13  
2B-1G23 (III層)



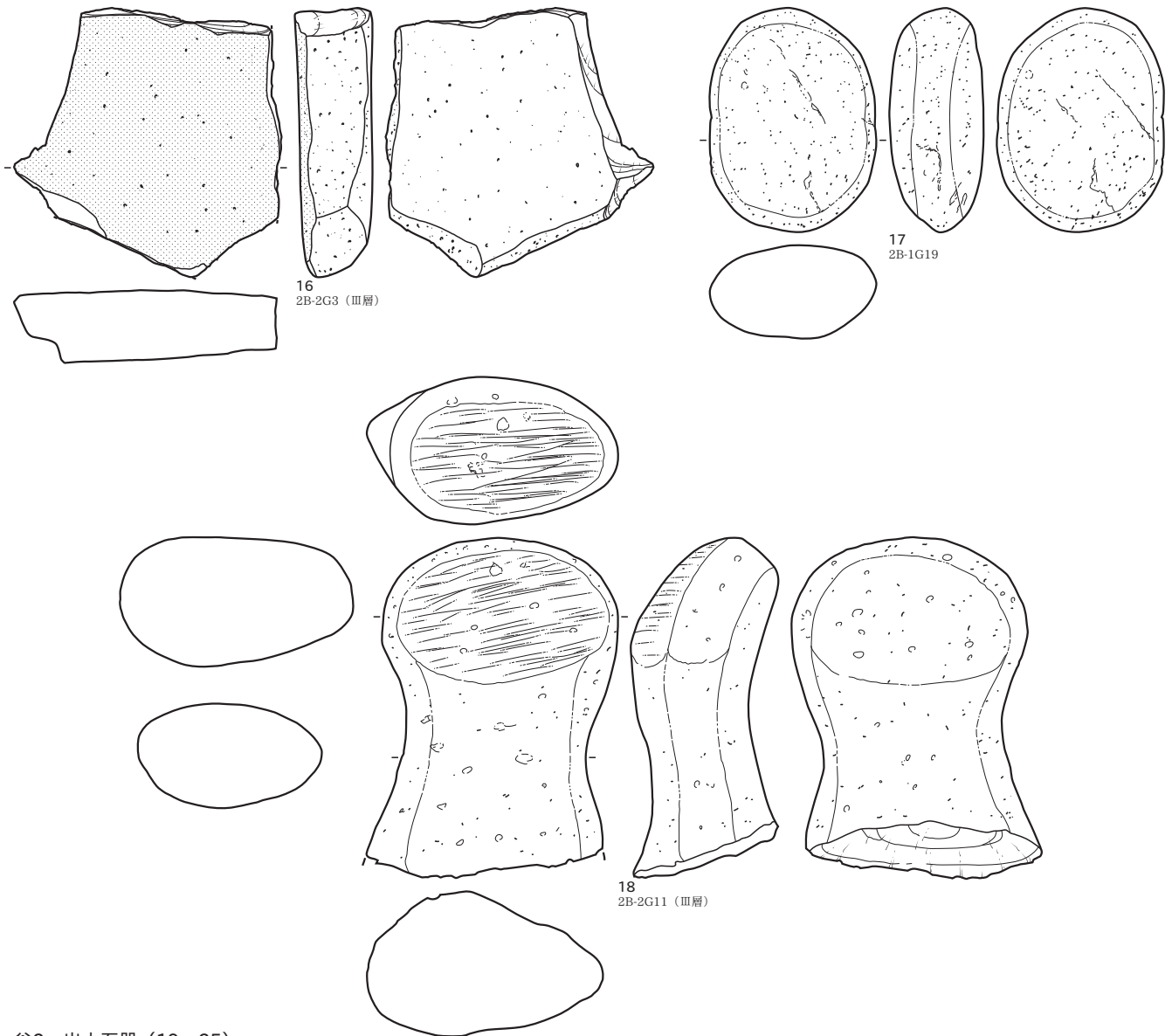
15  
2B-1G14 (表探)

磨面

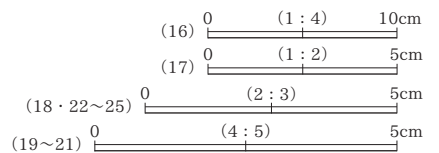
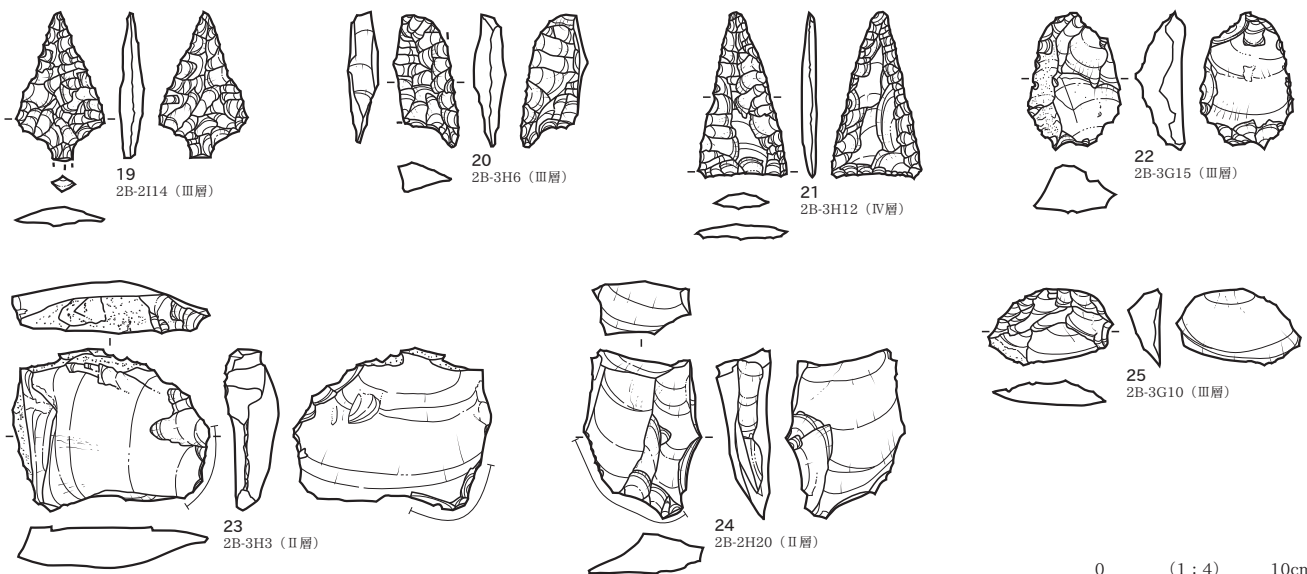




谷 1 出土石器 (16~18)



谷 2 出土石器 (19~25)



磨面

谷 2 出土石器 (26~28)



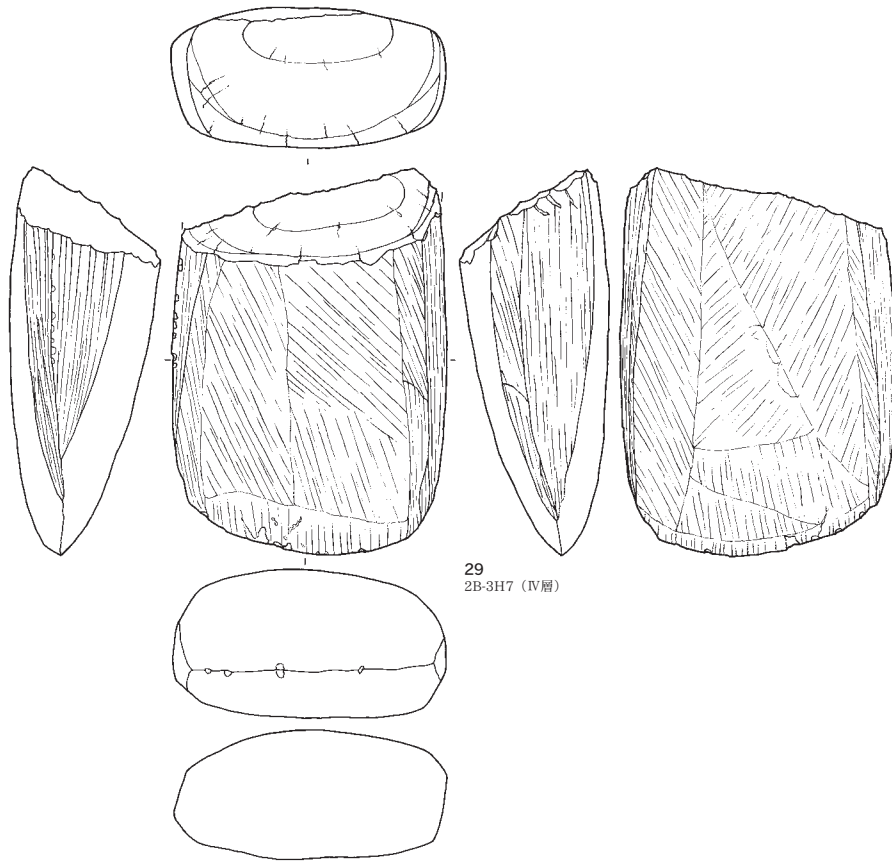
26  
2B-3H17 (III層)

27  
2B-3H3 (III層)

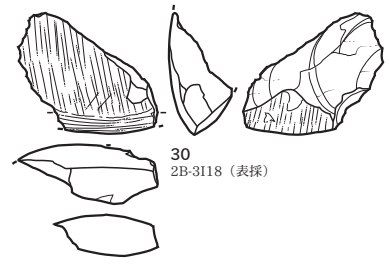
28  
2B-4H2 (II層)

0 (2:3) 5cm

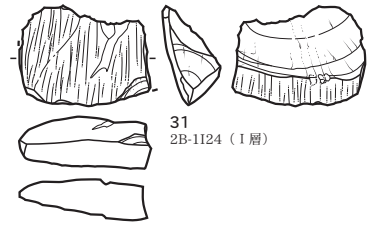
谷 2 出土石器 (29~36)



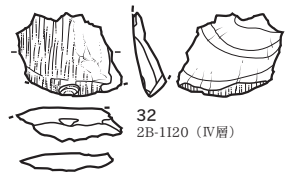
29  
2B-3H7 (IV層)



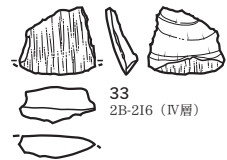
30  
2B-3118 (表採)



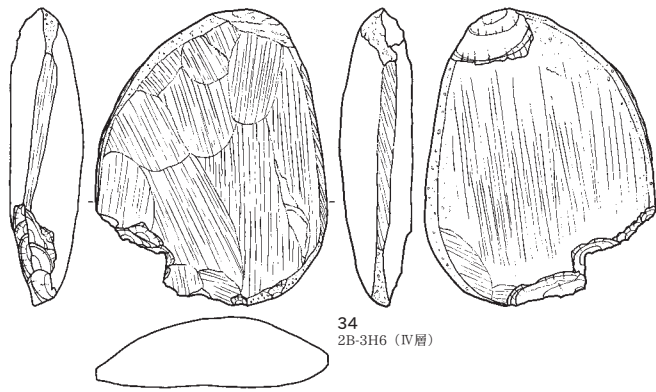
31  
2B-1124 (I層)



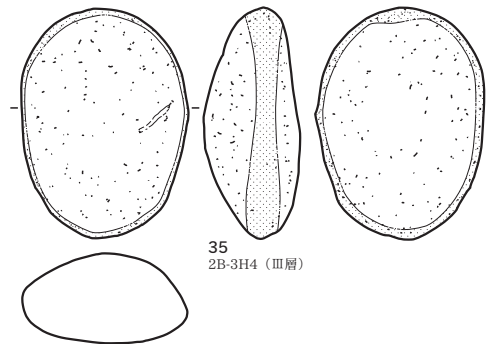
32  
2B-1120 (IV層)



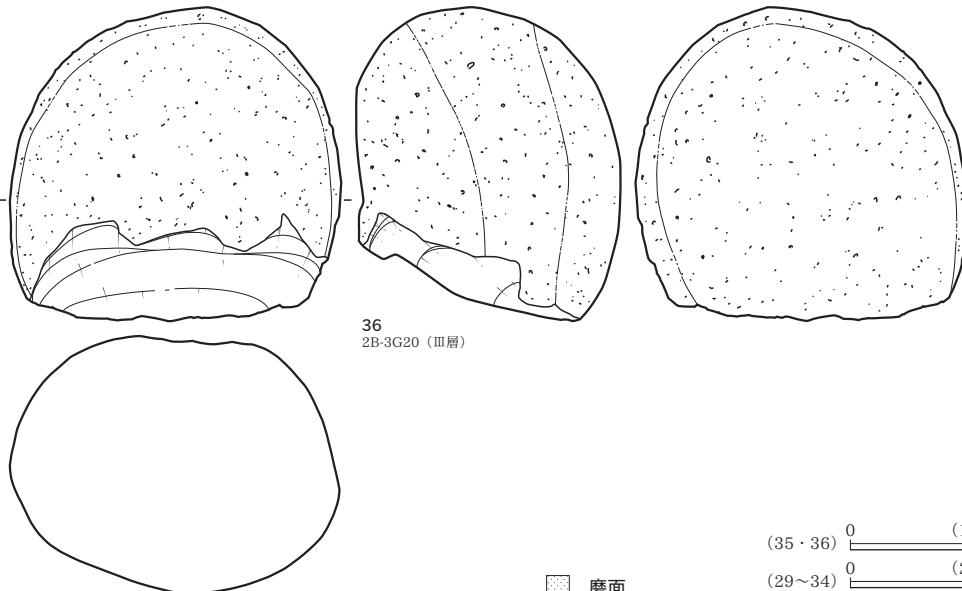
33  
2B-216 (IV層)



34  
2B-3H6 (IV層)



35  
2B-3H4 (III層)

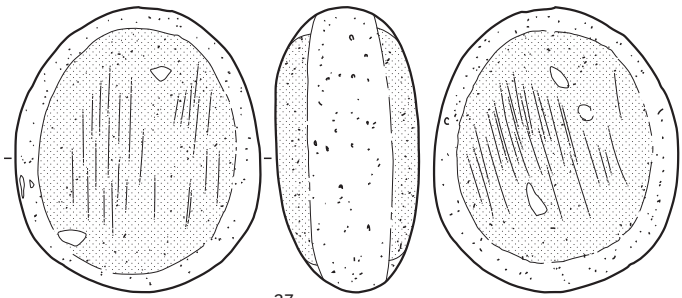


36  
2B-3G20 (III層)

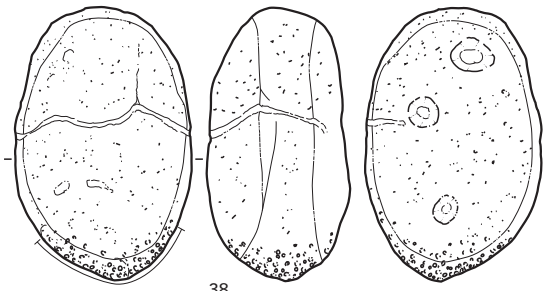
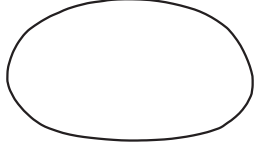
磨面

(35・36) 0 10cm  
 (29~34) 0 5cm

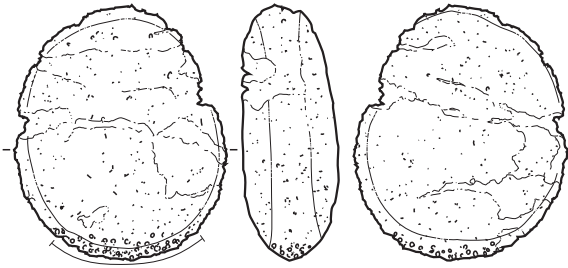
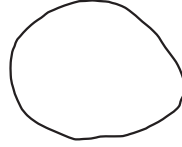
谷 2 出土石器 (37~46)



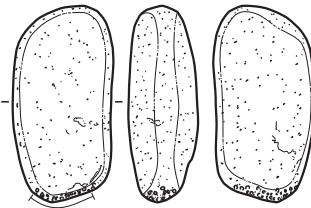
37  
2B-2H24 (IV層)



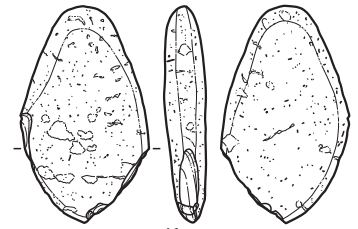
38  
2B-3G19 (III層)



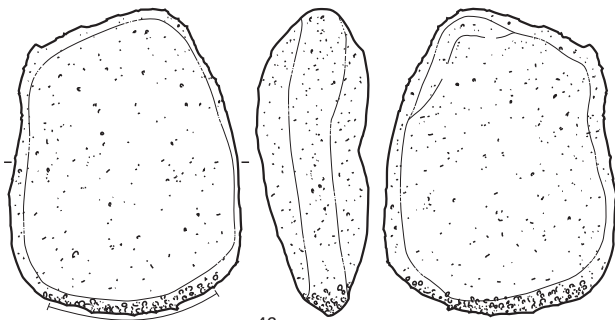
39  
2B-2H23 (III層)



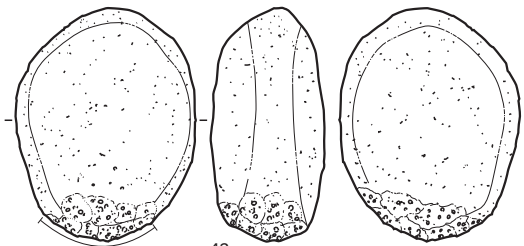
40  
2B-2H5 (II層)



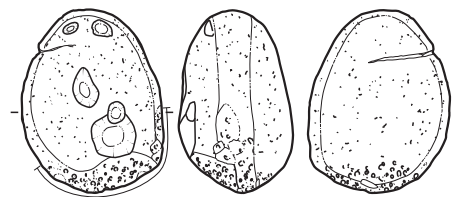
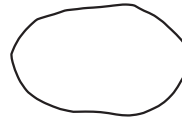
41  
2B-3G20 (III層)



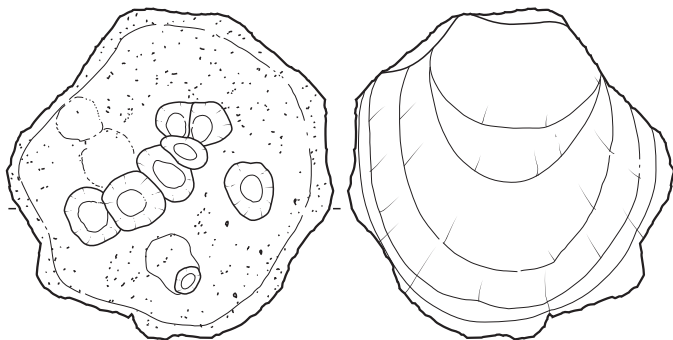
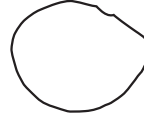
42  
2B-216 (III層)



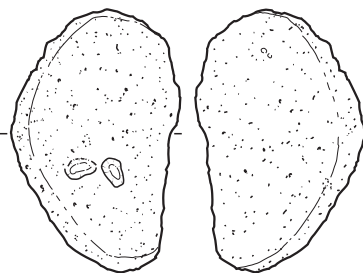
43  
2B-3H2 (III層)



44  
2B-3H21 (III層)



45  
2B-4G5 (III層)



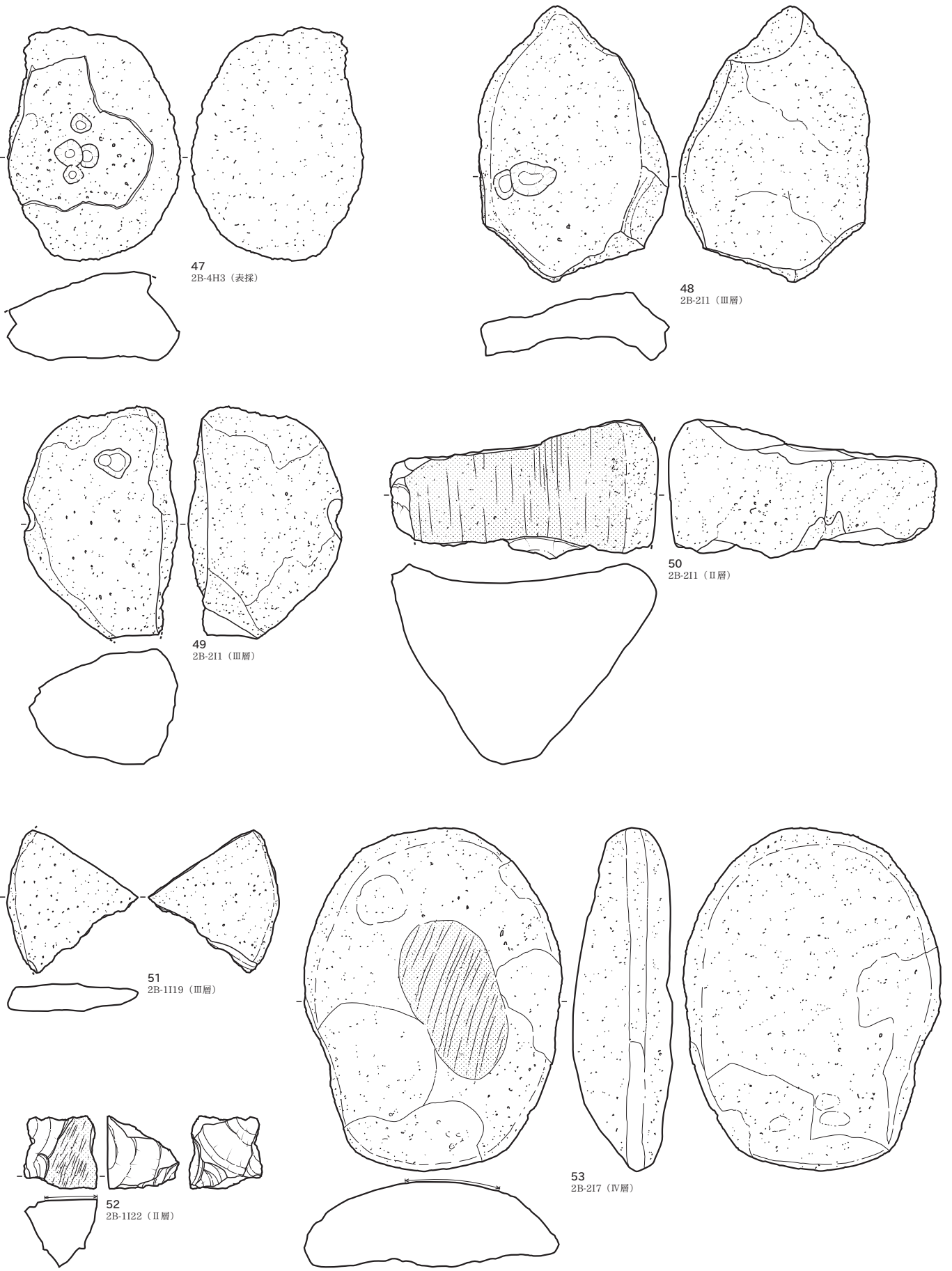
46  
2B-3G25 (III層)



磨面

0 (1:3) 10cm

谷2 出土石器 (47~53)



47  
2B-4H3 (表採)

48  
2B-211 (Ⅲ層)

49  
2B-211 (Ⅲ層)

50  
2B-211 (Ⅱ層)

51  
2B-1119 (Ⅲ層)

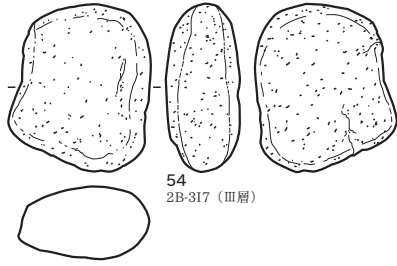
52  
2B-1122 (Ⅱ層)

53  
2B-217 (Ⅳ層)

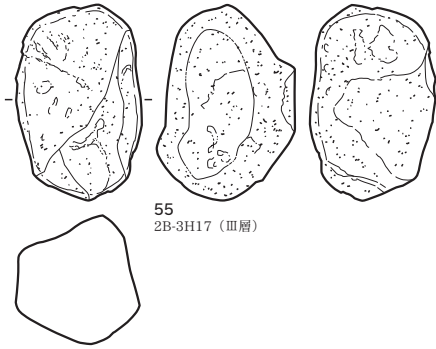
磨面・砥面

(51~53) 0 (1:4) 10cm  
 (47~50) 0 (1:3) 10cm

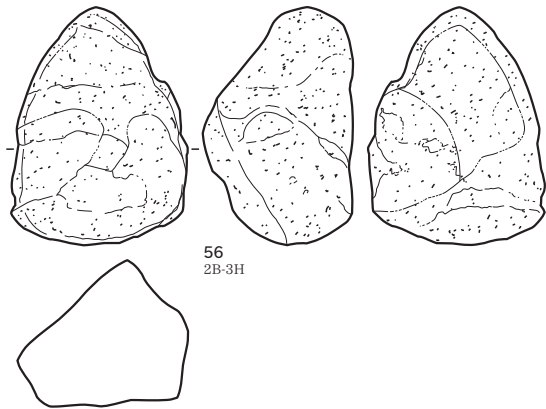
谷 2 出土石器 (54~56)



54  
2B-317 (III層)

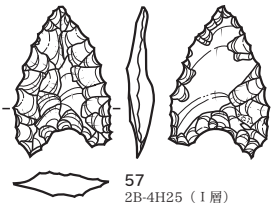


55  
2B-3H17 (III層)

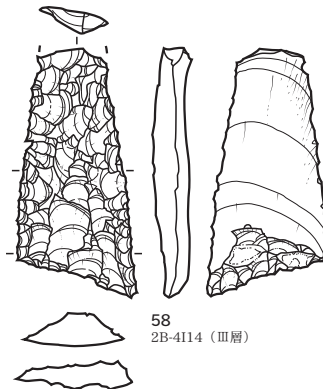


56  
2B-3H

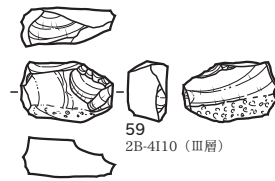
谷 3 出土石器 (57~63)



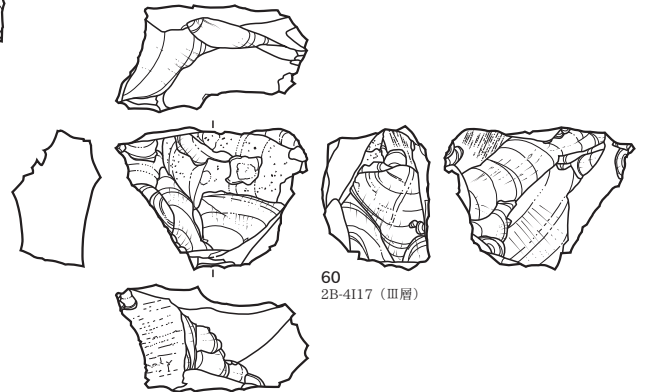
57  
2B-4H25 (I層)



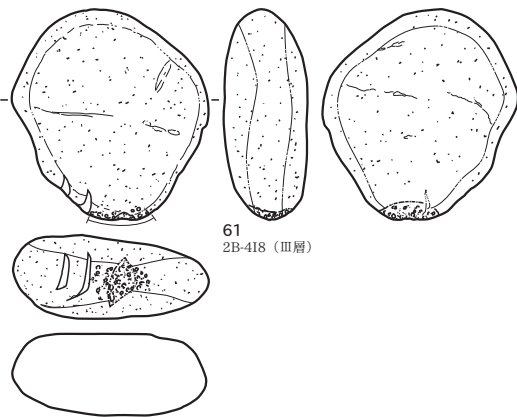
58  
2B-4I14 (III層)



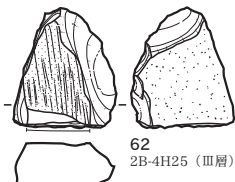
59  
2B-4I10 (III層)



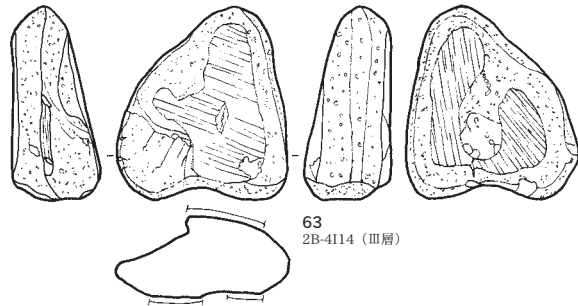
60  
2B-4I17 (III層)



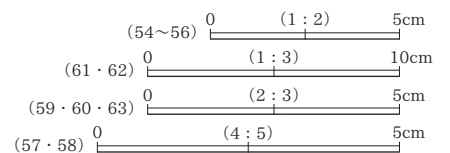
61  
2B-4I8 (III層)



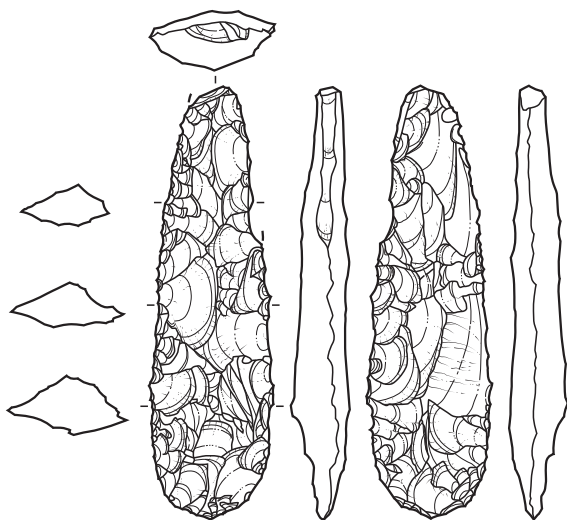
62  
2B-4H25 (III層)



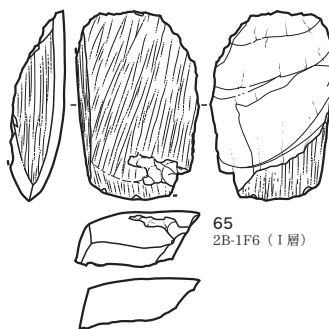
63  
2B-4I14 (III層)



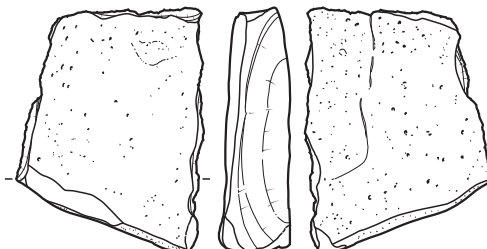
谷外出土 (64~66)



64  
1B-10E4 (II層)

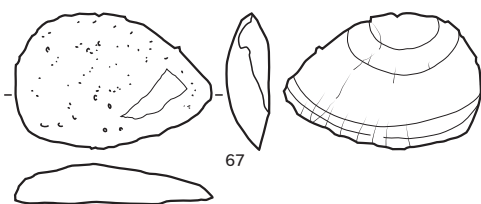


65  
2B-1F6 (I層)

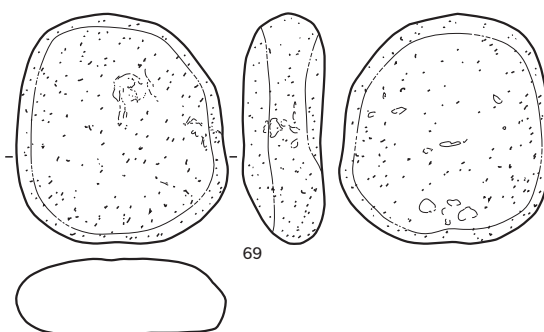


66  
1B-10E24 (III層)

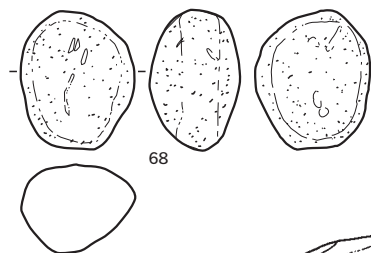
出土地点不明 (67~70)



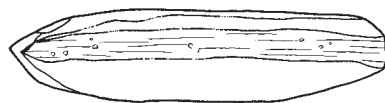
67



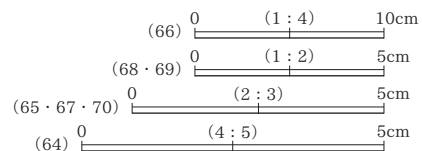
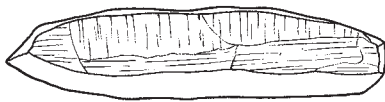
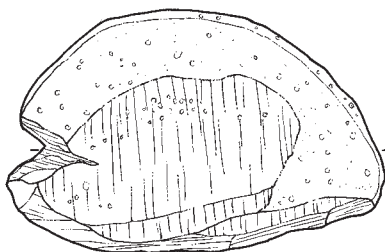
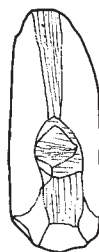
69



68

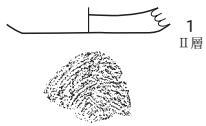


70

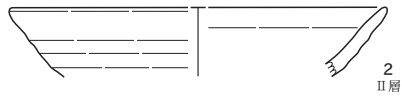


古代

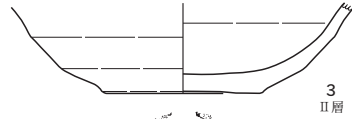
2B-1H20 (1)



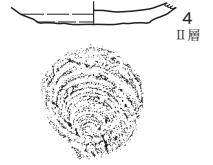
2B-1I6 (2)



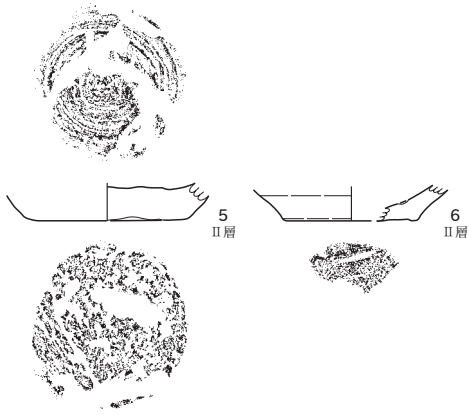
2B-1I12 (3)



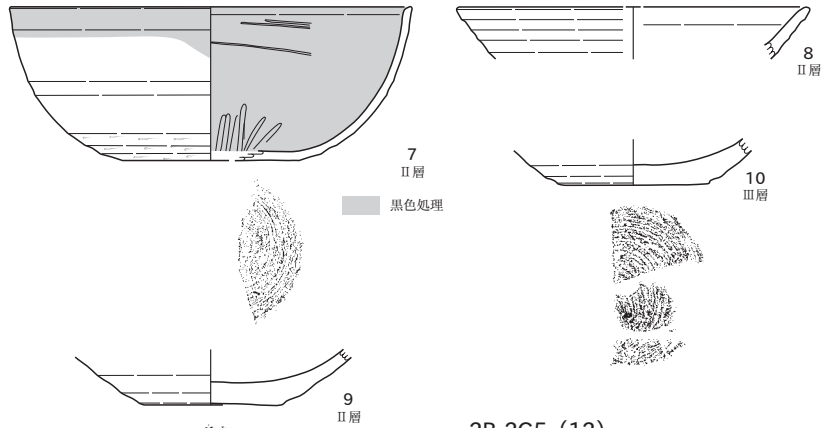
2B-1I16 (4)



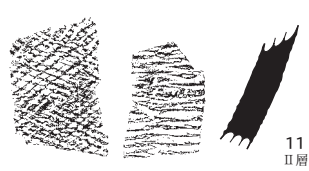
2B-1I21 (5・6)



2B-1I22 (7~10)



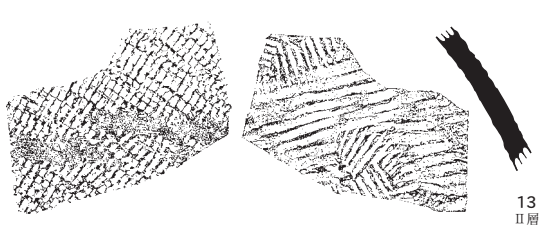
2B-1I23 (11)



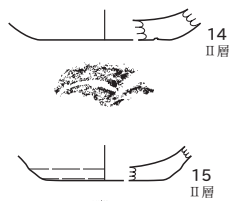
2B-2G5 (12)



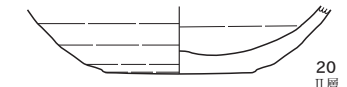
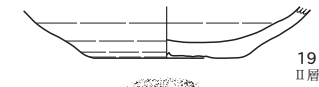
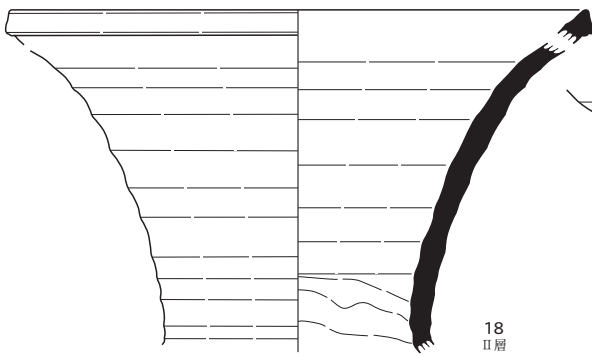
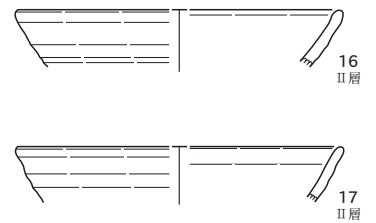
2B-2H15 (13)



2B-2I2 (14・15)



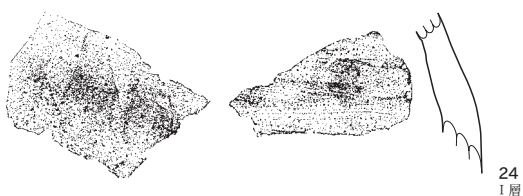
2B-2I6 (16~23)



0 (1:3) 10cm

中世

2B-1I17 (24)



2B-1I19 (25)

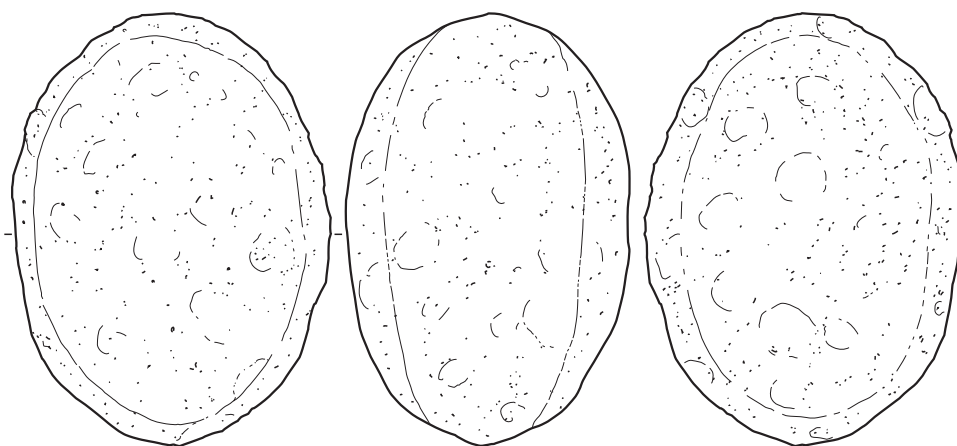


土製品

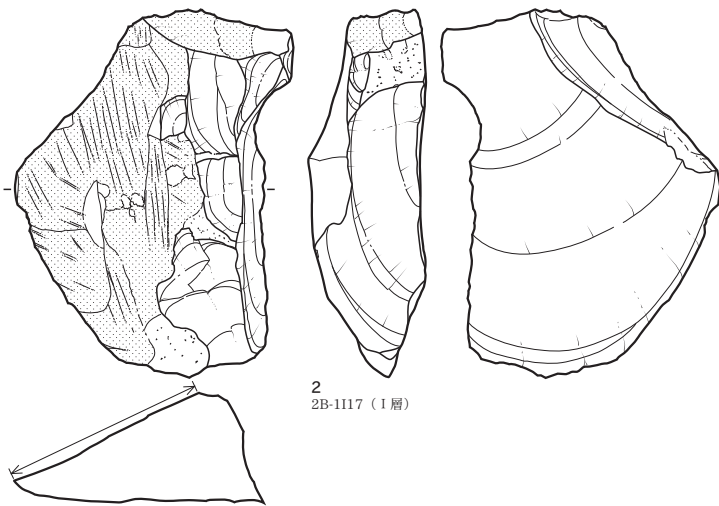
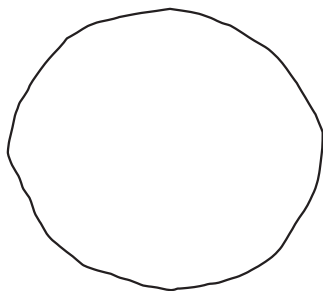




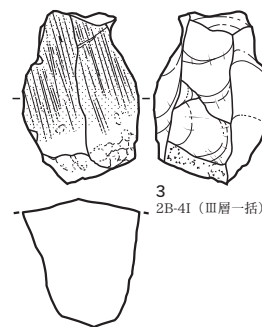
古代以降石製品 (1~3)



1  
SK26 (2層)

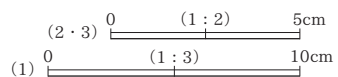


2  
2B-1117 (1層)



3  
2B-41 (III層一括)

■ 砥面



SK2 (1)

包含層 (2~21)





峰岡城山遺跡周辺空中写真

米軍撮影 昭和 22 (1947) 年 9 月 24 日



新津丘陵

峰岡城山遺跡周辺遠景（角田山麓から）（北西→南西）



弥彦山

峰岡城山遺跡全景空中写真 1（北→南）



峰岡城山遺跡全景空中写真 2 (北→南)



峰岡城山遺跡全景空中写真 3 (上が北)



3 トレンチ層序 (セクション 15) 1 (北東→南西)



3 トレンチ層序 (セクション 15) 2 (北→南)



4 トレンチ層序 (セクション 14) 1 (北→南)



4 トレンチ層序谷 1 沢跡付近 (セクション 14) 2 (北→南)



2 トレンチ層序谷 1 沢跡付近 (セクション 13) 1 (北→南)



谷 3 完掘全景空中写真（上が東）



谷 1・2 完掘全景空中写真（上が北東）



調査区西側完掘空中写真（上が北）



谷1・2・3完掘全景空中写真（南西→北東）





谷 1・2 斜面下部完掘全景 (東→西)



谷 1・2 斜面上部完掘全景 (西→東)



2 トレンチ層序 (セクション 13) 2 (北西→南東)



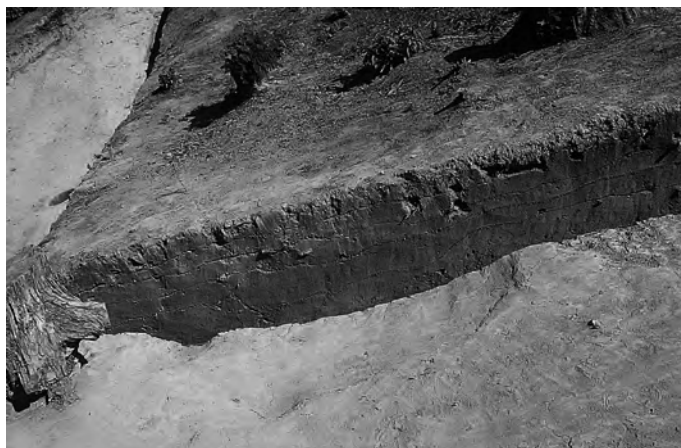
2 トレンチ層序 (セクション 13) 3 (北西→南東)



2 トレンチ層序 (セクション 13) 4 (西→東)



2 トレンチ層序 (セクション 12) 1 (北→南)



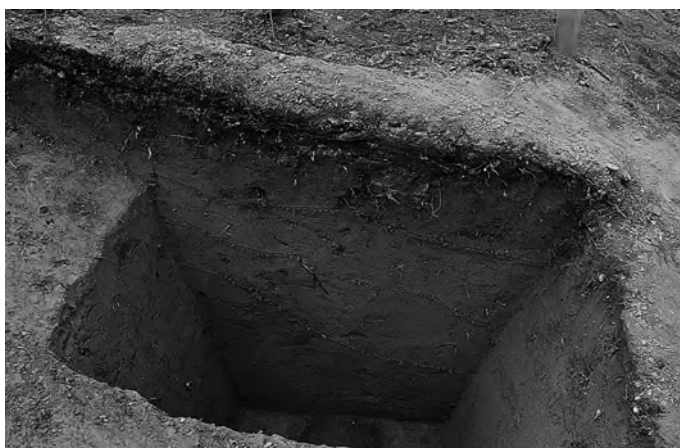
2 トレンチ層序 (セクション 12) 2 (北西→南東)



2 トレンチ層序 (セクション 12) 3 (北西→南東)



9 トレンチ層序 (セクション 1) (東→西)



9 トレンチ層序 (セクション 2) (東→西)



7 トレンチ層序 (セクション 3) (東→西)



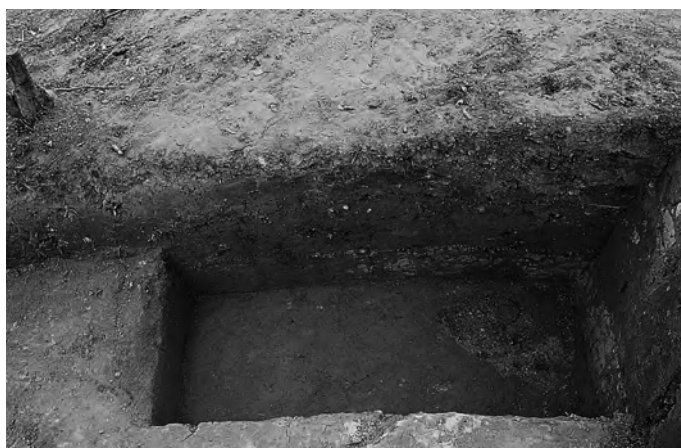
5 トレンチ層序 (セクション 4) (西→東)



6 トレンチ層序 (セクション 5) (北→南)



4 トレンチ層序 (セクション 6) (北→南)



1 トレンチ層序 (セクション 17) (北西→南東)



1 トレンチ層序 (セクション 18) (北西→南東)



11 トレンチ層序 (セクション 21) (北→南)



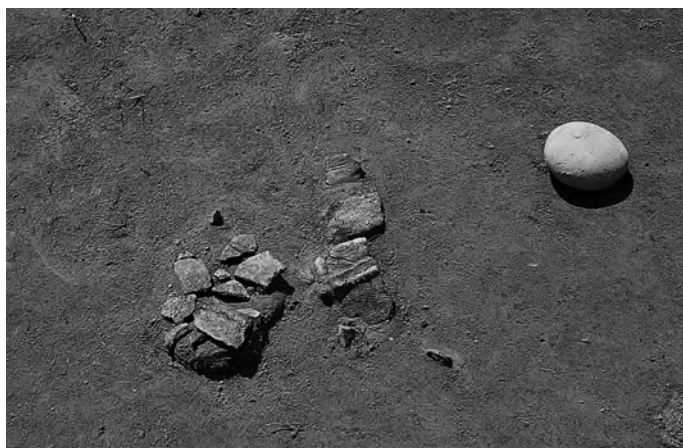
11 トレンチ層序 (セクション 22) (西→東)



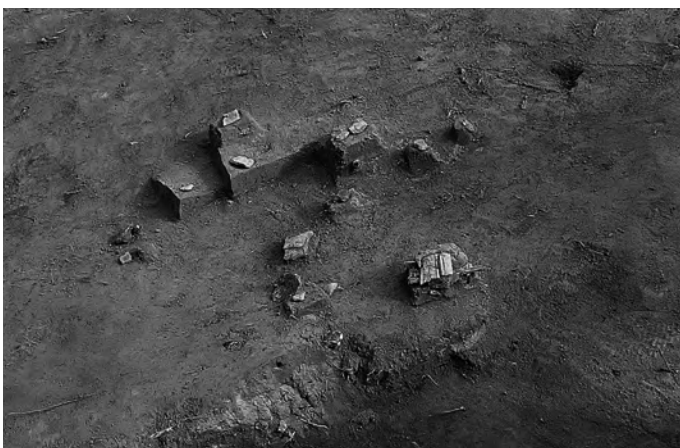
谷 2 (2B-2I) III・IV層遺物出土状況 (東→西)



尖頭器 (64) 出土状況 (谷外) (東→西)



谷 2 (2B-2H) III層遺物出土状況 2 (北西→南東)



谷 2 (2B-3H) III層遺物出土状況 (西→東)



谷 2 (2B-3H6) 磨製石斧未成品 (34) 出土状況 (東→西)



谷 2 (2B-3H7) 磨製石斧 (29) 出土状況 (北→南)



谷 3 (2B-4H25) 石鏃 (57) 出土状況 (西→東)



谷 3 (2B-4I17) 黒曜石 (60) 出土状況 (北→南)



Pit4 土層断面 (東→西)



Pit4 完掘 (西→東)



Pit5 土層断面 (西→東)



Pit5 完掘 (西→東)



Pit8 土層断面 (西→東)



Pit8 完掘 (西→東)



Pit9 土層断面 (東→西)



Pit9 完掘 (東→西)



Pit10 土層断面 (東→西)



Pit10 完掘 (東→西)



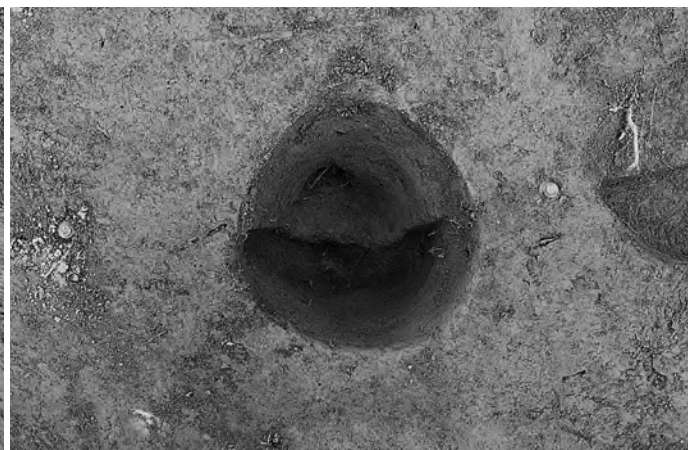
Pit11 土層断面 (西→東)



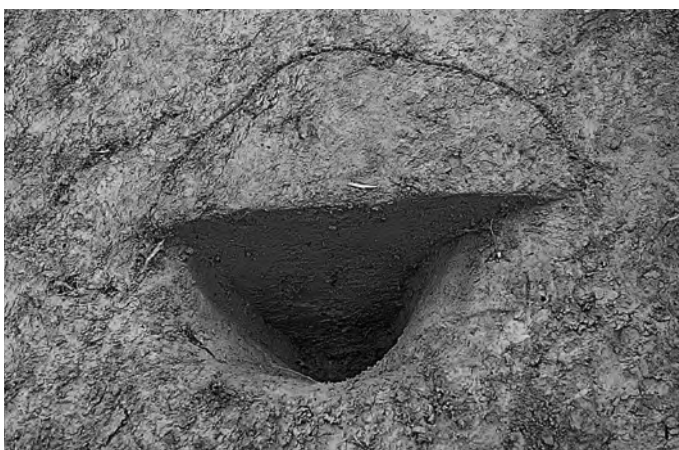
Pit11 完掘 (西→東)



Pit14 土層断面 (東→西)



Pit14 完掘 (東→西)



Pit15 土層断面 (西→東)



Pit15 完掘 (西→東)



Pit16 土層断面 (北→南)



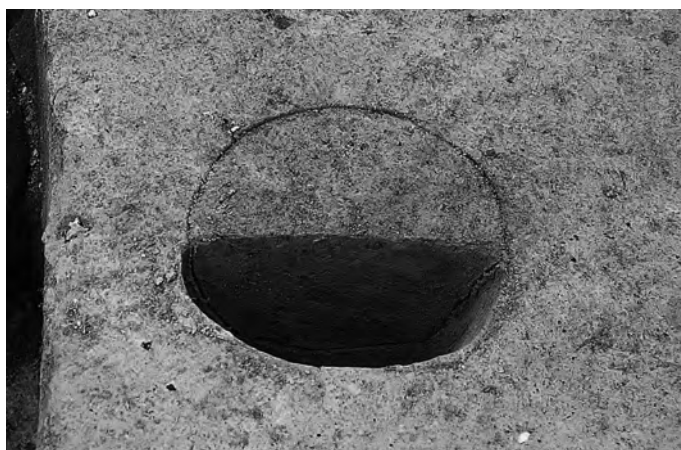
Pit16 完掘 (北→南)



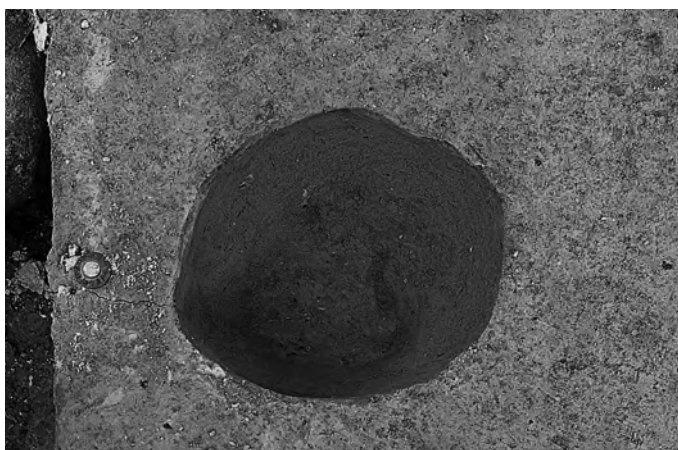
Pit18 土層断面 (北→南)



Pit18 完掘 (北→南)



Pit19 土層断面 (東→西)



Pit19 完掘 (東→西)



Pit20 完掘 (西→東)



Pit21 土層断面 (西→東)



Pit21 完掘 (西→東)



Pit23 土層断面 (北→南)



Pit23 完掘 (北→南)



Pit24 土層断面 (西→東)



Pit24 完掘 (北→南)



Pit28 土層断面 (南東→北西)



Pit28 完掘 (北西→南東)



SX17 土層断面 (南東→北西)





SX17 完掘 (南東→北西)



SX29 土層断面 1 (南東→北西)



SX29 土層断面 2 (北→南)



SX29 土層断面 3 (北西→南東)



SX29 土層断面 4 (南西→北東)



SX29 完掘 1 (北西→南東)



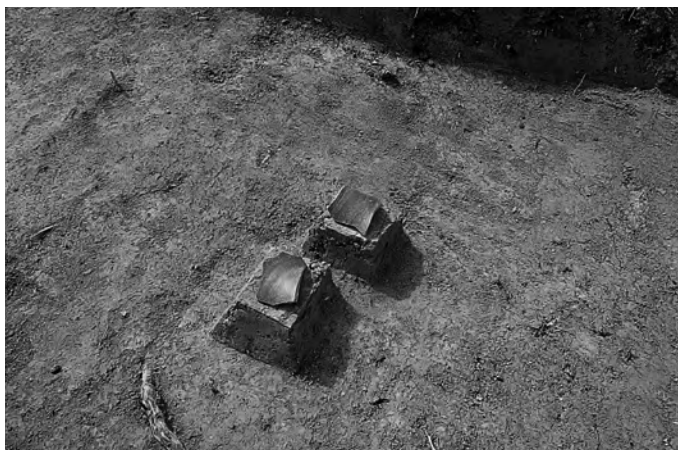
SX29 完掘 2 (南西→北東)



SX29 完掘 3 (北東→南西)



谷裾部Ⅱ層 (2B-1119・20) 上層遺物出土狀況 (北→南)



谷裾部Ⅱ層 (2B-116) 須惠器 (P18) 出土狀況 (東→西)



SK1 土層断面 (北東→南西)



SK1 炭化物・被熱壁面検出状況 (東→西)



SK2 炭化物・被熱壁面検出状況 (北西→南東)



SK2 完掘 (北西→南東)



SK3 土層断面 (西→東)



SK6 土層断面 (西→東)



SK6 炭化物・被熱壁面検出状況 (北→南)



SK7 土層断面 (南東→北西)



SK7 完掘 (南東→北西)



SK12 土層断面 (南→北)



SK12 完掘 (南西→北東)



SK13 土層断面 (南西→北東)



SK13 完掘 (南東→北西)



SK22 土層断面 (南東→北西)



SK22 炭化物・被熱壁面検出状況 (南東→北西)



SK22 被熱壁面検出状況 (東→西)



SK25 土層断面 (南東→北西)



SK25 被熱壁面検出状況 (東→西)



SK25 完掘 (南東→北西)



SK26 土層断面 (南東→北西)



SK26 被熱壁面検出状況 (北東→南西)



SK27 被熱壁面検出状況 (北東→南西)



峰岡城山遺跡縄文土器集合写真



縄文土器口縁部集合写真



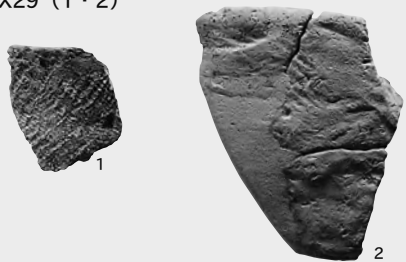
峰岡城山遺跡出土石器集合写真①



峰岡城山遺跡出土石器集合写真②

谷1出土土器 (1~31)

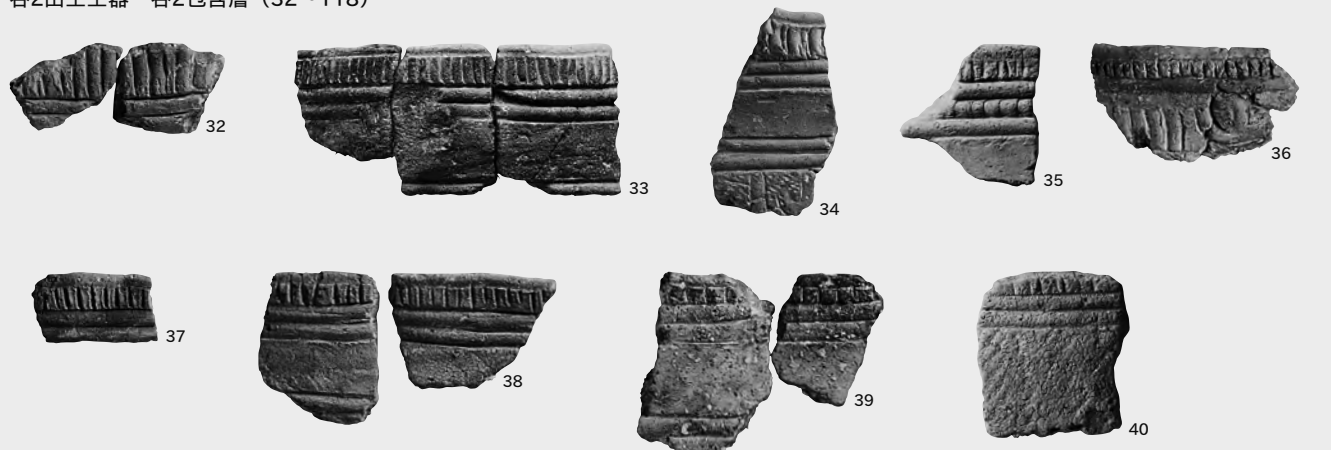
SX29 (1・2)



谷1包含層 (3~31)



谷2出土土器 谷2包含層 (32~118)



谷2包含層

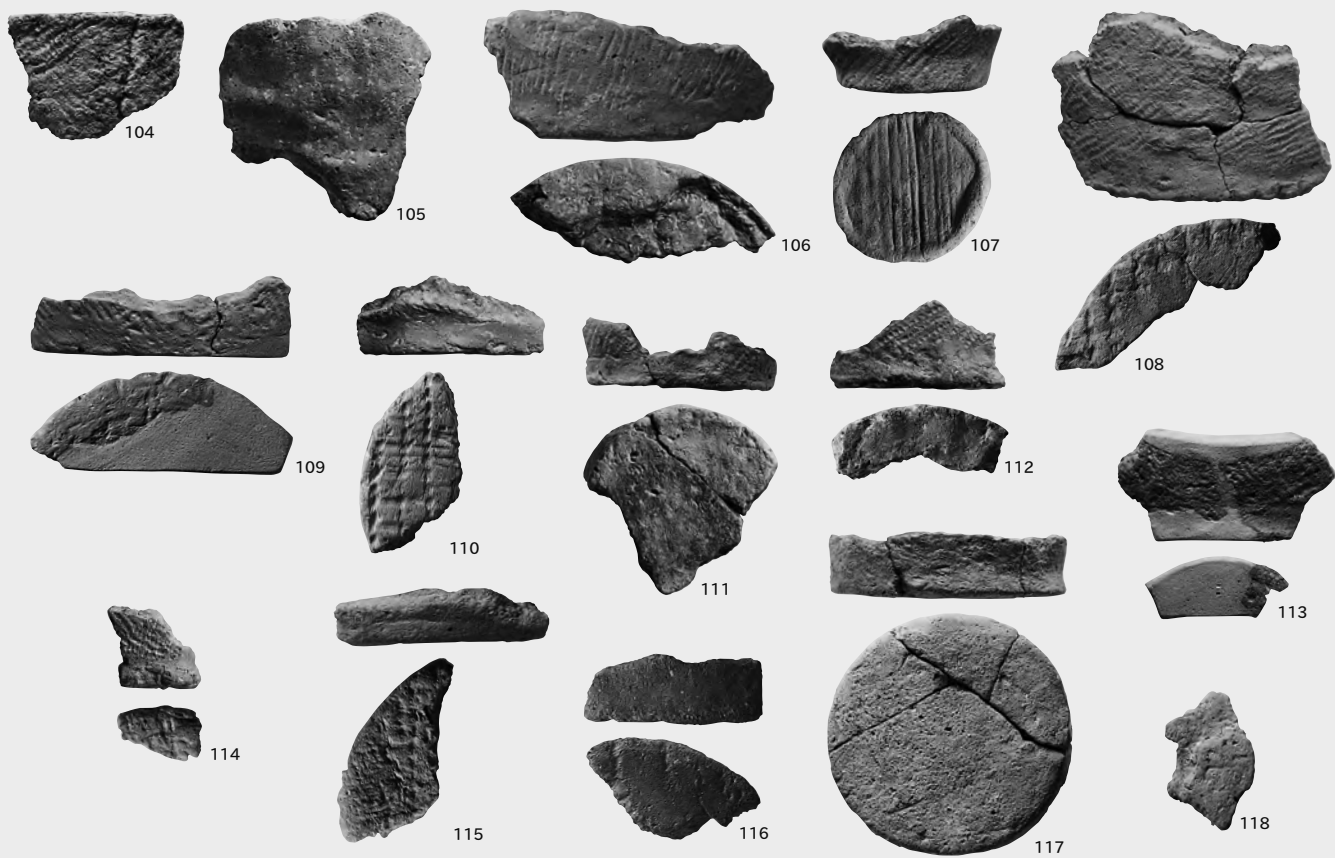




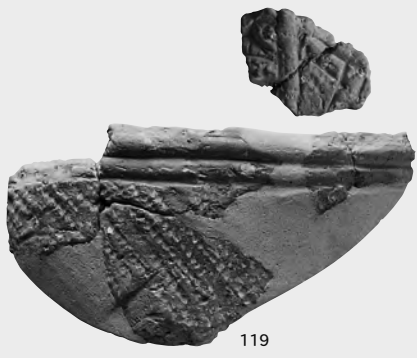
谷2包含層



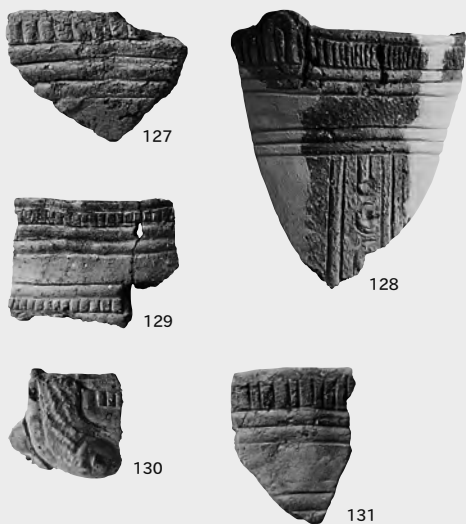
谷2包含層



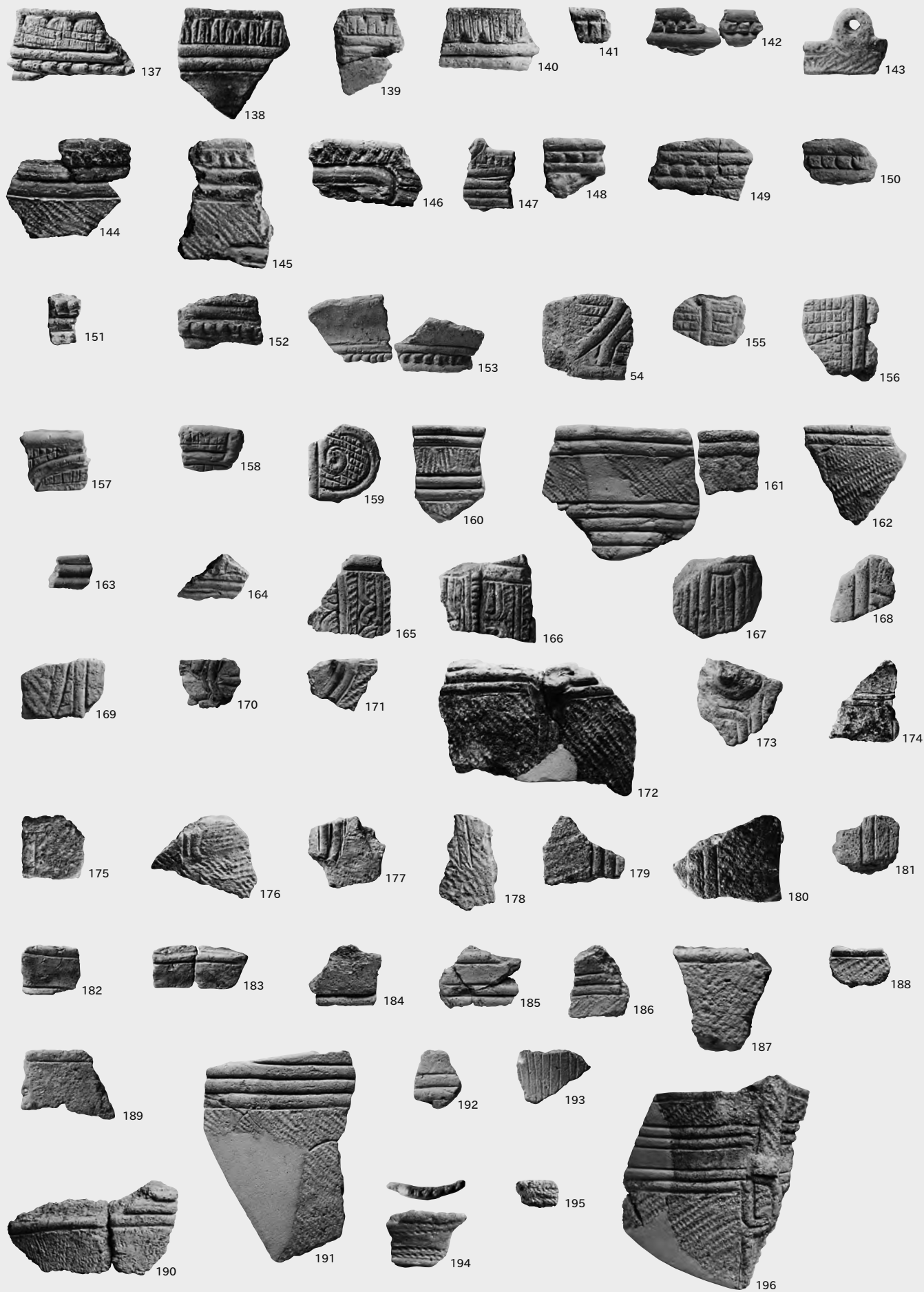
谷3出土土器 (119~220)  
SX17 (119~122)



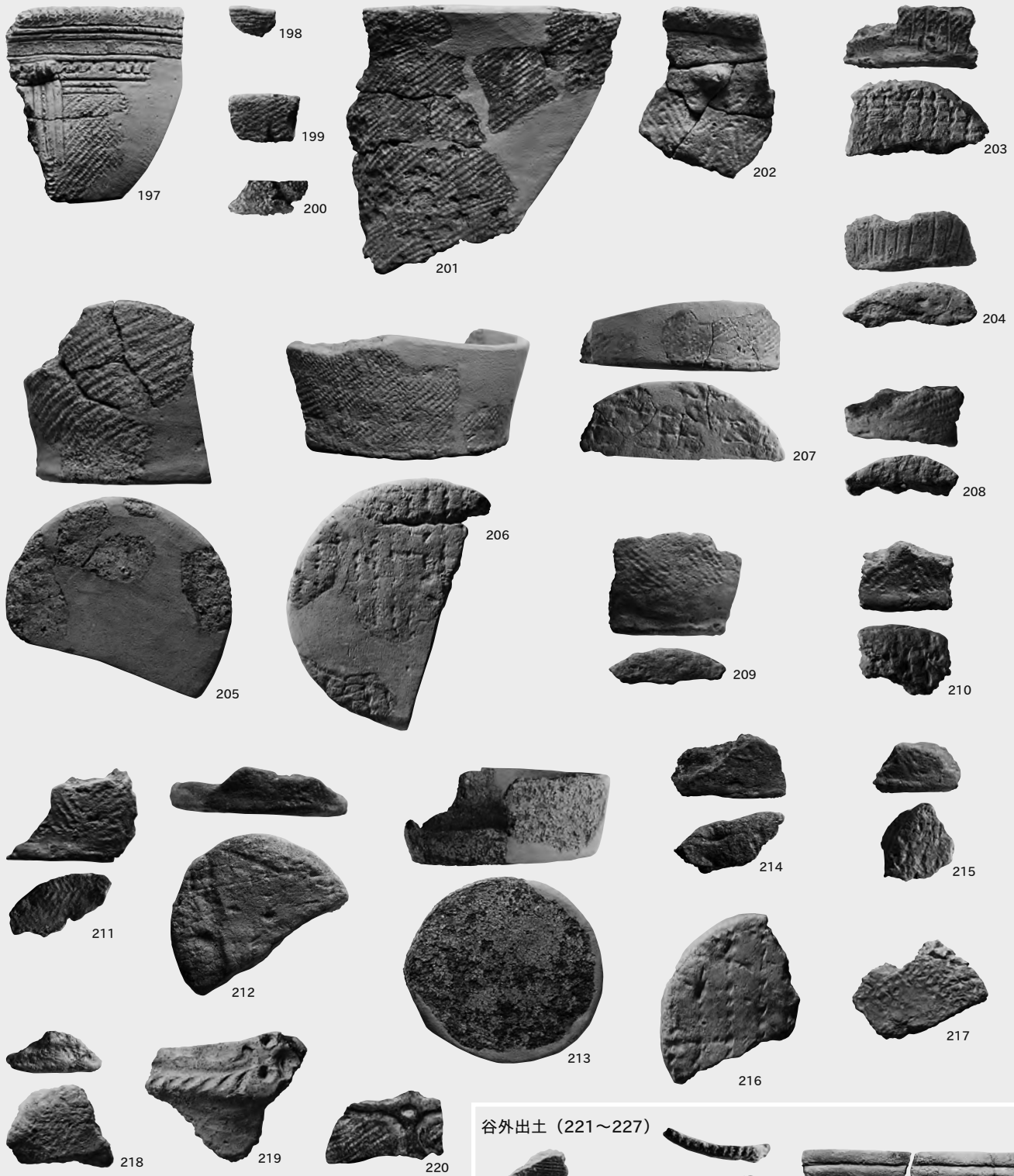
谷3包含層 (123~220)



谷3包含層



谷3包含層



谷外出土 (221~227)



土製品 (228・229)



谷1出土 SX29 (1・2)



1

谷1出土 包含層 (3~12)



2



3



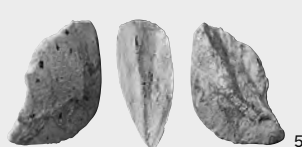
4



6



7



5



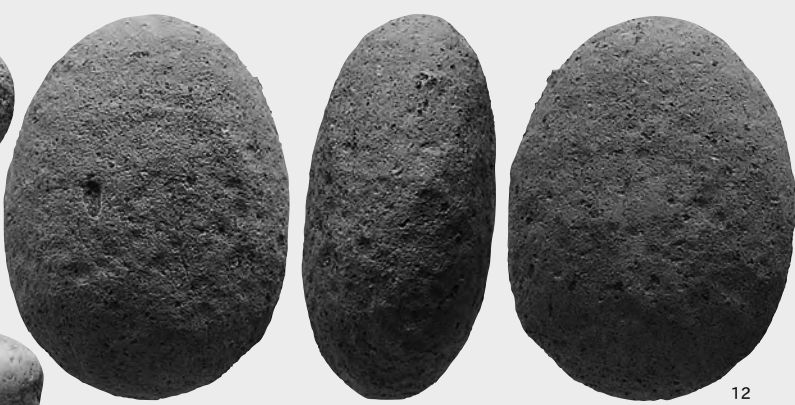
8



9



10



12



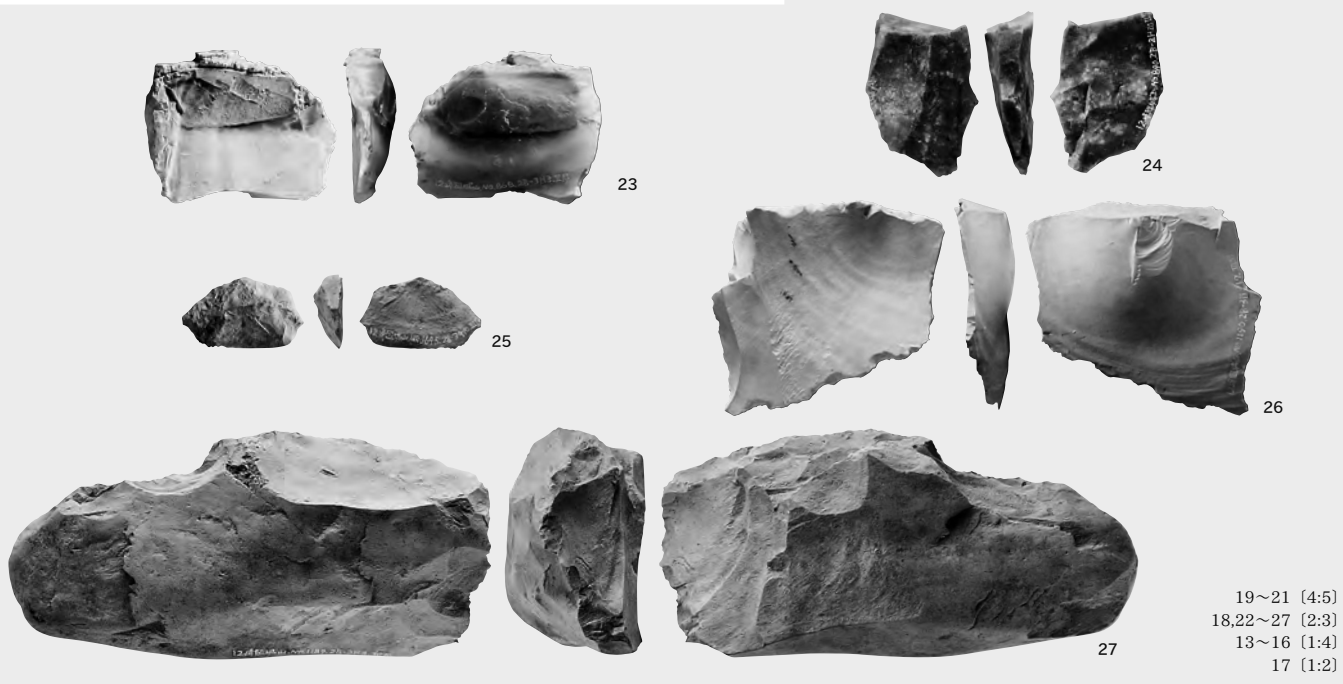
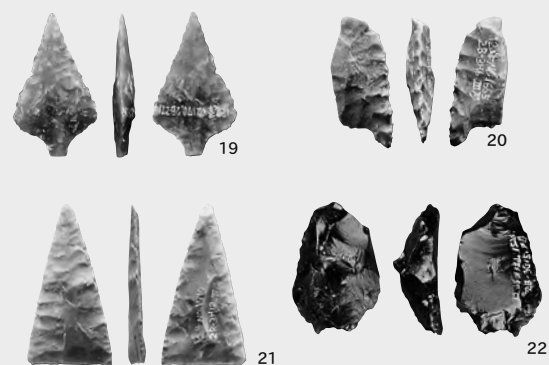
11

3~5 [2:3]  
2,6~11 [1:3]  
1,12 [1:4]

谷1出土 包含層 (13~18)



谷2出土 包含層 (19~27)

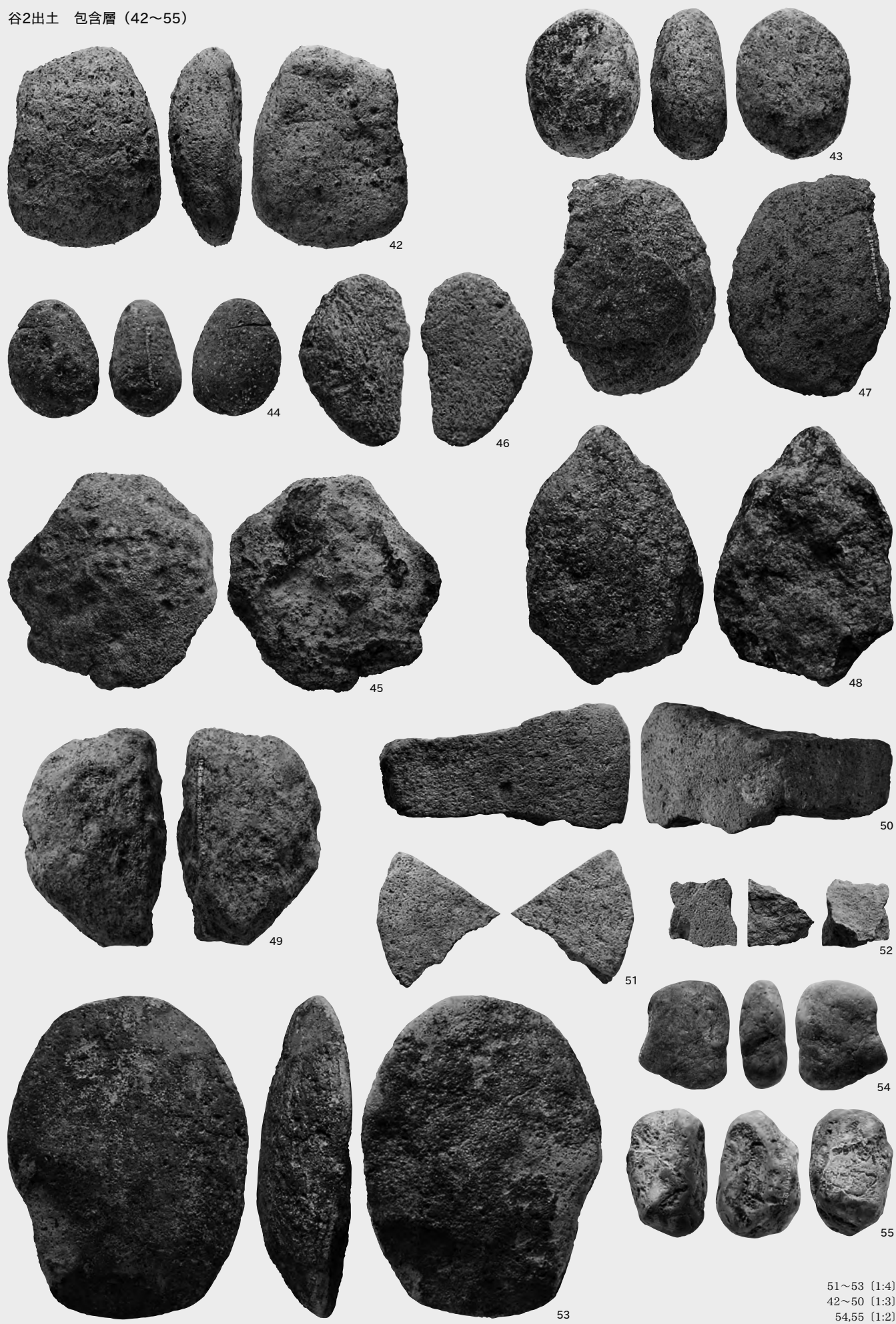


谷2出土 包含層 (28~41)



28~34 [2:3]  
35~41 [1:3]

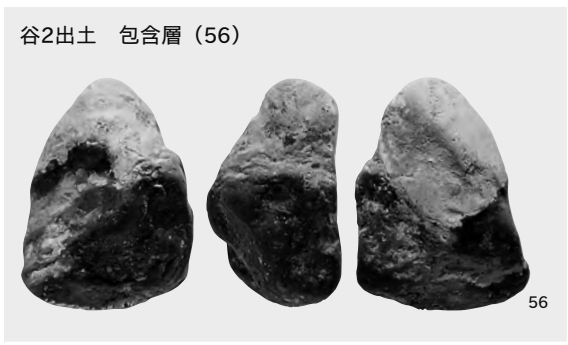
谷2出土 包含層 (42~55)



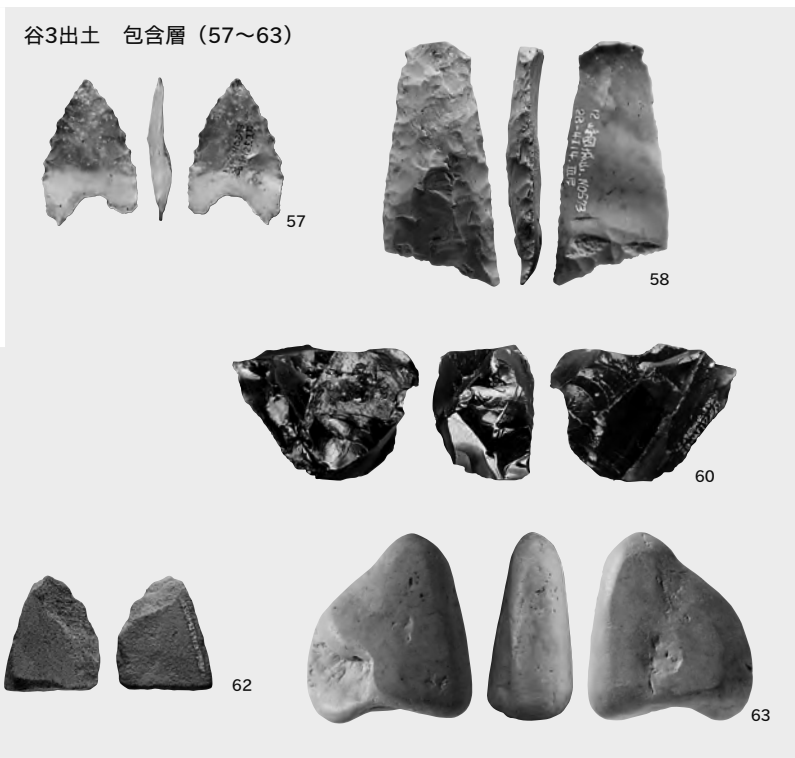
51~53 [1:4]  
42~50 [1:3]  
54,55 [1:2]



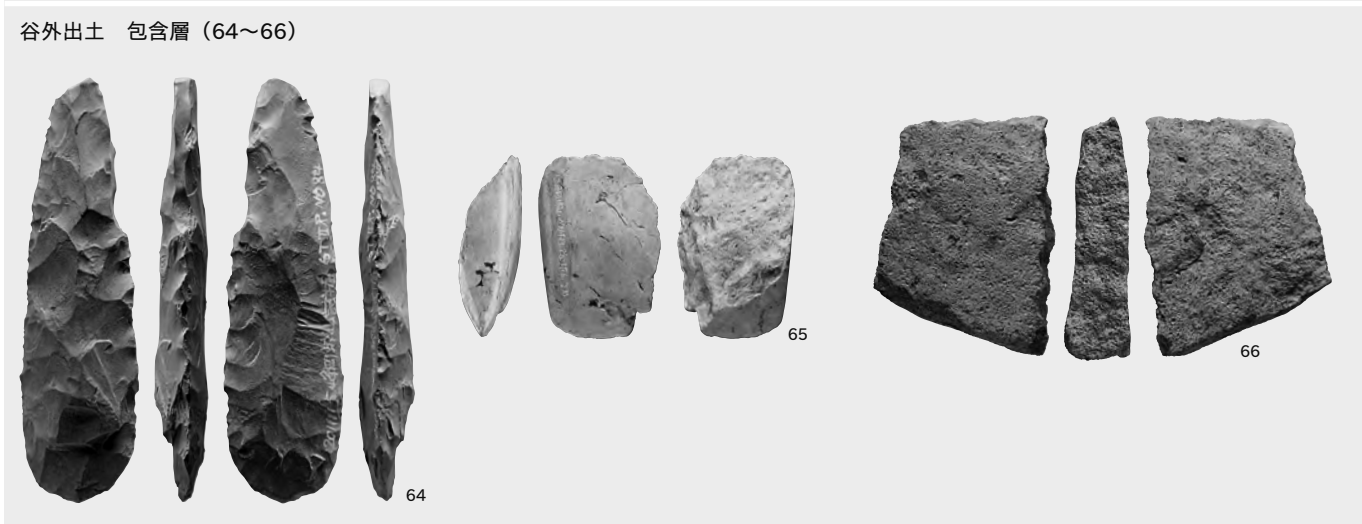
谷2出土 包含層 (56)



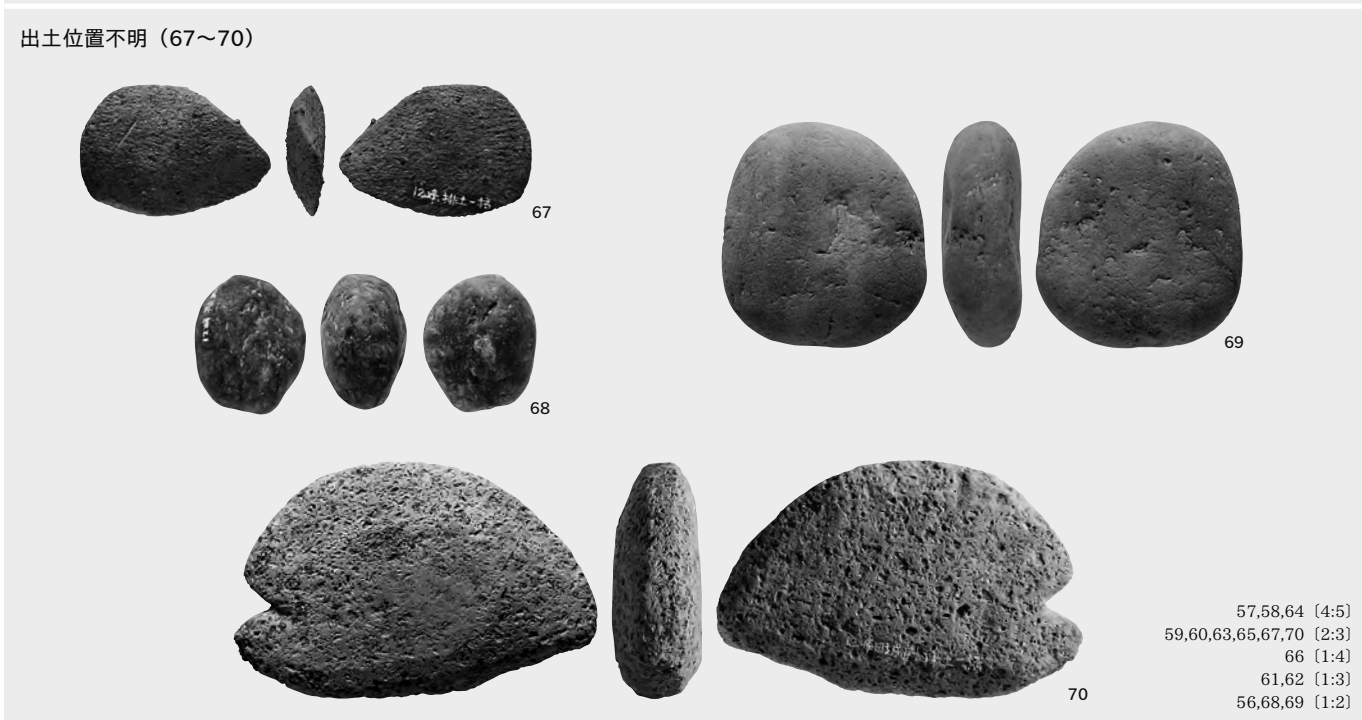
谷3出土 包含層 (57~63)



谷外出土 包含層 (64~66)

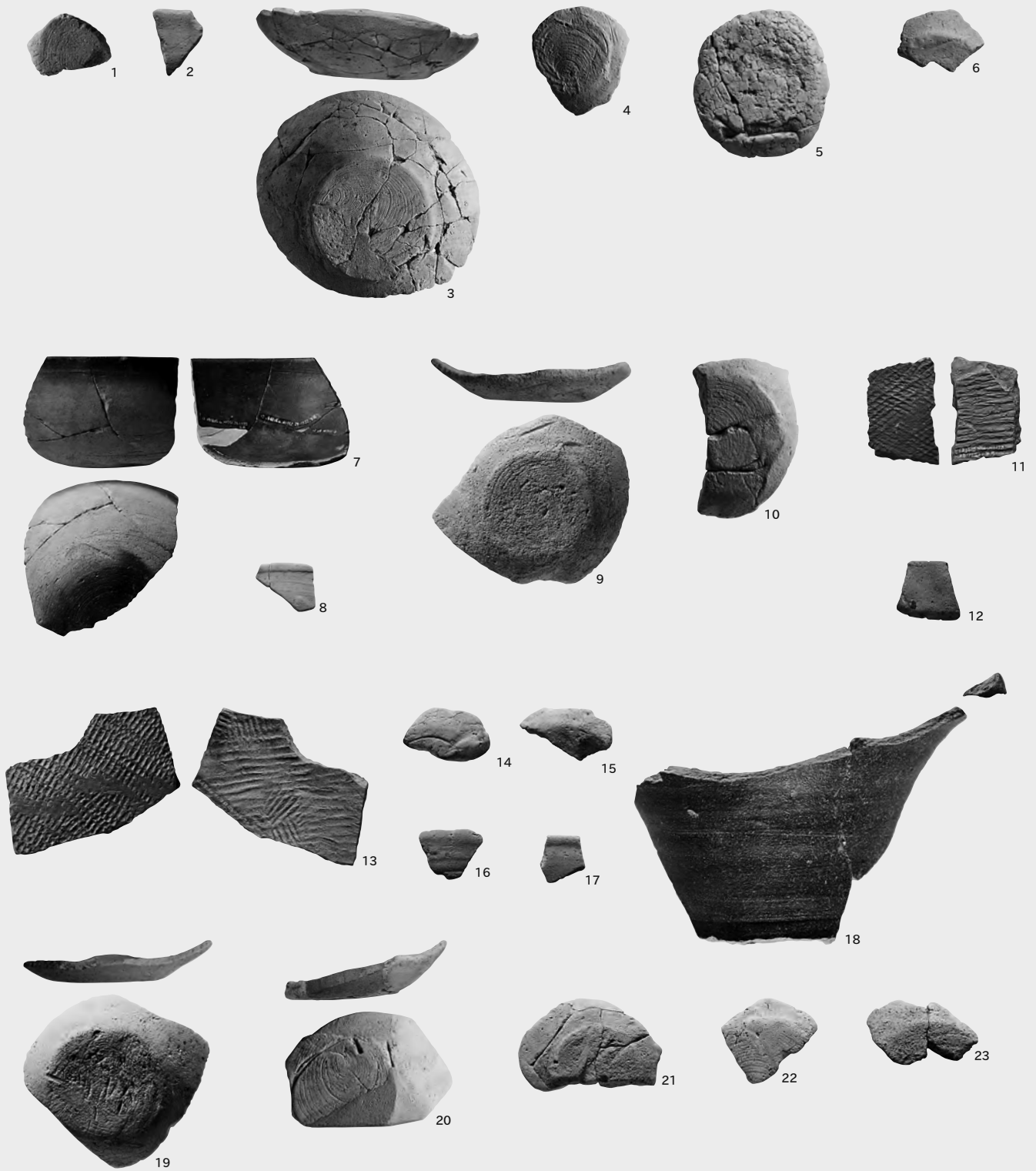


出土位置不明 (67~70)

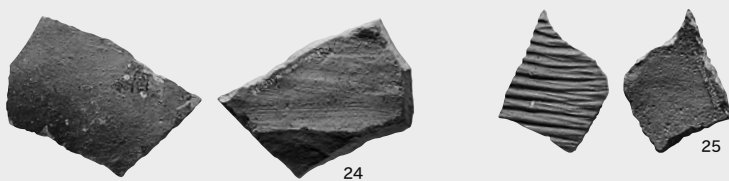


57,58,64 [4:5]  
 59,60,63,65,67,70 [2:3]  
 66 [1:4]  
 61,62 [1:3]  
 56,68,69 [1:2]

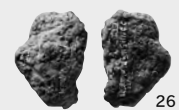
古代



中世



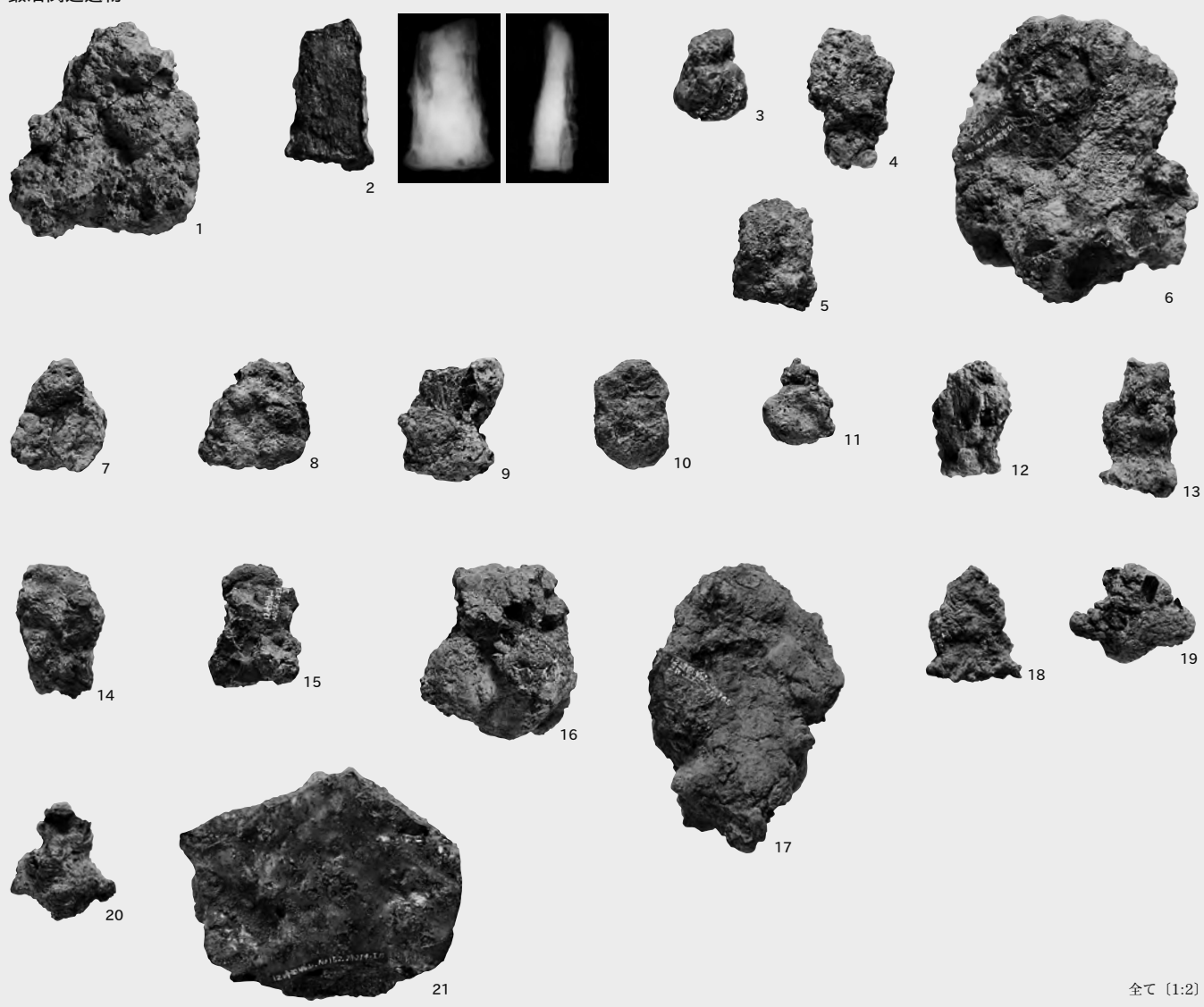
土製品



石製品



鍛冶関連遺物



# 報告書抄録

ふりがな	みねおかじょうやまいせき だいにじちょうさ							
書名	峰岡城山遺跡 第2次調査							
副書名	城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山遺跡第2次発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	立木宏明・伊比博和・藁科哲男・株式会社火山灰考古学研究所							
編集機関	新潟市文化観光・スポーツ部 新潟市文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟県新潟市西区木場 2748 番地 1 TEL 025-378-0480							
発行年月日	2013年6月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みねおかじょうやま 峰岡城山遺跡	にいがたけん 新潟県新潟市 にししかんく 西蒲区峰岡 611番地ほか	15108	749	37° 45' 53"	138° 51' 17"	20120521～ 20120820	2183.50	城山屋内体育施設 造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
峰岡城山遺跡	遺物包蔵地	古代(9世紀末～ 10世紀初頭)・中 世(15世紀)		焼土坑 10、土 坑 1		須恵器、土師器、珠洲焼、越 前焼、石製品(砥石ほか)、鍛 冶関連遺物(炉壁・鉄滓ほか)		
		縄文時代(中期前 葉前半主体、ほか 草創期・前期後半・ 後期前半)		ピット 16、性 格不明遺構(簡 易水場)		縄文土器、土製品、石器(尖 頭器(草創期)石鏃・楔形石器・ 石核・磨製石斧・敲石・台石・ 磨石・凹石・玉未成品ほか)		
要約	<p>峰岡城山遺跡は角田山麓から東西に延びる標高7～23mの丘陵上に位置する縄文時代中期前葉集落の遺物廃棄場である。丘陵北側斜面の谷部から多量の縄文土器・石器が出土した。縄文土器は北陸地方・東北地方北部や中部・関東地方の影響を受けたものが出土し、当地における人々の交流を窺う上で重要な資料群である。石器は石鏃・磨製石斧・磨石・台石等のほかに、玉未成品、信州産の黒曜石などの貴重品も出土した。その他には、草創期の尖頭器、前期後半・後期前半の土器が散見された。上層からは少量であるが古代・中世の土師器・須恵器・珠洲焼・越前焼・石製品・鍛冶関連遺物が出土し、炭焼きに係る遺構と考えられる焼土坑を10基検出した。</p>							

## 峰岡城山遺跡 第2次調査

—城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山遺跡第2次発掘調査報告書—

2013年6月27日印刷  
2013年6月28日発行

編集 新潟市文化財センター

〒950-1122 新潟市西区木場 2748 番地 1  
TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会

〒951-8550 新潟市中央区学校町通一番町 602 番地 1  
TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフィック

〒950-2022 新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号  
TEL 025 (233) 0321